

食と伝統が息づくまち－氷見の人々が紡ぐもの－

地域社会の文化人類学的調査 33



2024

富山大学人文学部文化人類学研究室

はじめに

富山大学文化人類学研究室（富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野）では、1979年の研究室創設以来、教育の一環として、北陸の一地域を選んで調査実習を行い、その成果を報告書『地域社会の文化人類学的調査』にまとめてきました。「文化人類学実習」という授業名で長く行ってきましたが、少し前に「文化人類学フィールド演習」という名称に変更されました。それでも2年間（4半期）かけて積み上げ式に行っていく、その授業の基本はかわっていません。報告書はその成果であり、本報告書で第33巻になります。

この報告書では県北西部に位置する氷見市を取り上げました。10年前に発行した第23巻（『人と地域が織りなす文化：富山県氷見市の調査記録』）以来となります。ご存じのとおり、本年元旦に発生した地震（令和6年能登半島地震）では、氷見市も震度5強を観測し、建物の全壊が100棟以上発生するなど甚大な被害に見舞われました。学生たちの調査は昨秋に終了し、原稿執筆もほぼ終わっており、これからいよいよ編集という段階でした。そのため本報告書には、この度の地震のことを実質的に取り上げられておりませんが、一同たいへん心を痛めており、心よりお悔やみ申し上げる次第です。

すでに述べましたが、この授業は2年間かけて行っていくものです。学生たちが文化人類学分野に進み、この授業が始まったのは、彼らが2年生となった2022年の春でした。まだコロナ禍が続くなかでした。それでも感染対策をしながら学外で調査候補地訪問を実施し、訪れた候補地のなかから調査地域を10月に氷見市と決めていました。その後、各人の調査テーマを探しに年内に何回か訪れました。

2023年度となり、4月に市役所へ挨拶に伺った後、学生たちもいよいよ本格的なテーマを定めて調査を行っていきました。また9月には調査の総仕上げとして一週間の夏合宿も、コロナ禍前と同様に実施することができました。昨年度に引き続き、今年度も大学コンソーシアム富山より「学生による地域フィールドワーク研究助成」を得ることができ、その調査も並行して進めながらになりましたが、しっかり対応してやってくれました。

取り上げたテーマは様々ですが、いずれも学生たちがフィールドワークの中から見出したものです。学生たちは調査地で現地の方々と出会い話を聞くことで、教室での授業のものとはまた別の驚きやインスピレーションを得つつ問いを育てていきます。今回も、学生たちがそうした本来の学びをする過程に伴走することができました。これはフィールドワーク教育の醍醐味といえるでしょう。またこれまでレポート数枚しか書いたことがなかった学生たちが自身の関心に従い調べたことをしっかりした報告文にまとめてくれました。指導に際して教員は何度も学生の原稿に目を通し、不明瞭な文章などないかチェックして

きました。1月に学生たちはお世話になった地元の方に原稿を見ていただき、間違いがないか確認していただきました。つたない点はまだ多々あるかと思いますが、寛大に見ていただけると幸甚です。なお、不十分な点については指導する私たちに責任があることをあらかじめお伝えいたします。忌憚のないご批判・ご助言をお寄せいただければと思います。

本報告書は各章のタイトルはもちろん、報告書のタイトルや章立て、表紙など、いずれも学生たちが話し合っただけで決めたものです。教員は議論を聞きながら意見を述べることはあっても、学生たちが判断して決定していきました。そうした意味で本報告書は学生たちの手作りのものといえます。彼らにとって学生時代のいい思い出になることはたしかでしょう。また本報告書がそれに加えて地域の記録をまとめた資料的な価値をもつとすれば、研究室のスタッフとしてそれ以上の喜びはありません。

最後になりましたが、このたびの調査は、氷見市立博物館館長の小谷超様、夏合宿の宿泊先を提供いただいた萬葉の杜福祉会理事長の松谷三和様をはじめ、数多くの地元の方々のご助力があってはじめて実現したものです。個々の学生がお世話になった方々のお名前は各章末の謝辞に記してありますが、この報告書は皆様の多大なご協力があったのもので、誠にありがとうございました。

2024年2月

富山大学人文学部 藤本 武 (主担当)

野澤豊一 (副担当)

追記

紙媒体の報告書は発行部数・頒布先ともに限られていますが、ここ15年の実習報告書は富山大学学術情報リポジトリより閲覧可能です。関心のある方は「地域社会の文化人類学的調査」でご検索ください。

目次

はじめに(藤本武・野澤豊一)

地域の概要・・・1

第1部 「暮らし」を紡ぐ

第1章 中央町商店街で起こる人々の交流と商店街の在り方(橋爪乙葉)・・・・・・・・・・17

第2章 氷見市庁舎の歴史と市民とのつながり(大関宏弥)・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

第3章 小学校廃校に伴う地域コミュニティの変遷—氷見市仏生寺地区の歩み—
(井原唯花)・・65

第2部 「食」を紡ぐ

第4章 魚と人々のつながり—暮らしの中にある魚食—(北朋乃実)・・・・・・・・・・91

第5章 氷見市の果樹と果樹園発展の背景(田持友太郎)・・・・・・・・・・・・・・・・・・113

第3部 「伝統」を紡ぐ

第6章 氷見獅子の運営現状—小久米獅子舞保存会の事例から—(森谷紗英)・・・・・・・・133

第7章 幸せを願う女性たちの祭り—まるまげ祭り—(籠橋蒔乃)・・・・・・・・・・149

第8章 藤箕製作技術を支える人々とその繋がり—論田・熊無地区を事例に—
(高村将斗)・・177

地域の概要

1.氷見の自然

1-1.氷見の地形

氷見市は富山県北西部に位置し、高岡市、石川県と隣接している（図1）。面積は230.45 km²、東西 18.25 km、南北 21.65 kmの形状をしている。また、氷見沖は富山湾の中でも大陸棚が発達しており、良い漁場となっている（図2）。



図1 氷見市の位置（国土地理院地図より作成） 図2 氷見市の全体図（国土地理院地図より作成）

(1) 丘陵

氷見の丘陵は北部丘陵と南部丘陵に分かれている。

北部丘陵は石動山（せきどうざん）の北側を東西に走る断層と、阿尾（あお）・熊無（くまなし）を結ぶ線の間にある丘陵である。主稜線には多くの山があり、主稜線に近いところは、丘陵の地形というよりもほとんど山地地形で起伏量が大きい。

南部丘陵は宝達山（ほうだつさん）の北側を東西に走る宝達山北縁断層と阿尾・熊無を結ぶ線の間にある丘陵である。宝達山は周囲の丘陵から突出しており、ここから東に高度を下げていく。氷見南部丘陵は北部丘陵に比べ高度が低く開発が進んでいる。

(2) 河川

氷見の河川は規模が小さく、水源は起伏の小さい丘陵地にあるため、大河川のように典型的な河川地形の発達はほとんど見られない。

上流域は起伏量の小さい丘陵地で、谷は浅く急流は少ない。大部分が杉林・水田などで覆われているため、降水時でも川の流量は少ない。地すべり跡地の緩斜面が広い面積を占めて水源近くまで棚田が分布し、棚田を涵養（かんよう）するための溜め池が多い。

中流域では川は谷平野の中を縫って流れる。谷平野は上流から流されてきた土砂が堆積して出来た平野で氷見の川では幅 500m 以下である。江戸時代以降改修が繰り返され、蛇行していた川が現在見られるような直線状の川になった。

下流域の低地帯は、かつては海域や潟であったところで、川によって三角州が作られ次第に堆積されていった。大雨によって冠水することが多かったが、最近では河川改修が進み、被害が少なくなった。

(3) 平野

氷見地域の平野の占める割合は小さいが、氷見南部丘陵・台地と海岸との間にまとまった低地があり、氷見平野と呼ばれている。氷見平野の海岸に沿って幅 500m～1km ほどの砂丘地帯がある。砂丘地帯と丘陵・台地の間は低湿地である。

(4) 海岸

氷見市の海岸は岩石海岸と言われ、基盤岩石が露出している海岸で一般的には磯と呼ばれている。岩石海岸に特徴的な地形は海食崖¹と波食棚²である。

また海成段丘と呼ばれる過去の海面に関連してできた地形も見られる。これは過去の海面が不連続的に離水して、海岸線に沿って階段状に分布している地形である。

1-2.氷見の気候

日本海側気候に属し、冬季の降雪に特徴がある。西高東低の冬型の気圧配置に伴う寒冷な北西季節風が時に大雪をもたらす。だが、降雪の深さの合計(1986~1995)を県内各地で比較すると、氷見は最も少ない地域に入る。県内の降雪は県東部の山岳地帯が最も多く、次いで南西部で多い。気温については年間の平均気温が約 14℃である。海沿いを暖流である対馬海流が流れるため、冬季の気温は福光などの内陸部に比べ、比較的温暖となっている(図3)。

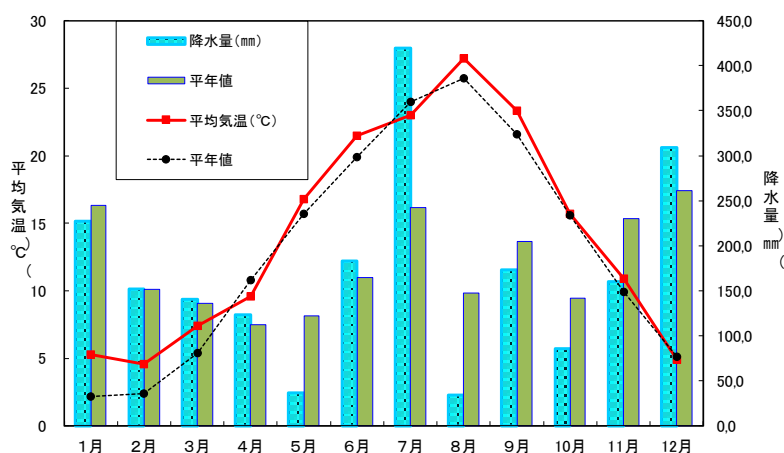


図3 氷見市の気候
(令和3年氷見市の統計より引用)

¹ 海に面した山地や台地の前面で主に波食作用によってできた崖。

² 主として湖間帯にある平滑な岩床面をいう。

1-3.氷見の災害

以下、氷見市史を参照しながら氷見市における大規模な災害について抜粋する（表1）。

表1 氷見市における大規模災害

発生年	名称	被害の概要
昭和13年(1938)	氷見町大火	9月6日氷見町下伊勢町から出火した。同町3400戸のうち、18町延べ1500戸に渡って消失した。出火当時台風が日本海を通過したため南の烈風であったが4時ごろ突然西風になり、漁民街に延焼した。この火災による死者5名、重傷者10名、軽症者248名であった。焼失面積は11万8000坪に及び、民家だけでなく神社や仏閣、船舶などの多方面に甚大な被害をもたらした。
昭和39年(1964)	胡桃地すべり	国内でも屈指の地滑り。長さ1500メートル、幅500メートルに渡る巨大地滑りで、胡桃(くるみ)集落87戸のうち61戸の家屋が壊滅的な被害を受けた。集落の地形は一変し、胡桃集落は数戸を残して氷見市内各地、石川県などに移住した。胡桃地区は氷見市街から北西に約15km離れた、標高200メートルの中山間地域に位置する。
令和6年(2024)	能登半島地震	(1-4 参照)

氷見地域は県内で最も地滑りが多い。氷見丘陵の大部分が風化しやすく、崩れやすい新第三紀の軟岩である泥岩からできているためである。近年の対策工事により大規模な地滑り被害はなくなった。胡桃の他に、国見、五十谷(いかだん)といった地滑りが有名である。

その他、主な河川に南から、仏生寺川(万尾川)、上庄川、余川川、阿尾川、宇波川、下田川を持ち、大雨の際の土砂災害や洪水被害にたびたび見舞われた。現在は河川改修の護岸工事が行われ、土砂災害予防のための設備が整えられるなどして対策が施されている。

1-4.令和6年能登半島地震による被害

令和6年(2024)1月1日16時10分に石川県能登地方を震源とする最大震度7、マグニチュード7.6とする地震が発生した。石川県内では震度7を志賀町、震度6強を七尾市、輪島市、珠洲市、穴水町、震度6弱を中能登町、能登町で観測した。能登半島の付け根に位置する氷見市においても震度5強の強い揺れに見舞われた。1922年の観測開始以来、県内で震

度5強を観測したのは初めてであった。

1 日夕には津波警報が発令され、市ふれあいスポーツセンター、氷見高校体育館など 21 か所の避難所に一時 2000 世帯、3000 人が身を寄せた。氷見市中心部の朝日山公園周辺では高台に逃げる人たちの車で渋滞が起きた。氷見市における人的・住家被害は以下のとおりである（表2）。

表2 氷見市における人的・住家被害

人的・住家被害等	
軽傷	9 人
全壊	110 棟
半壊	181 棟
一部損壊	1343 棟

(令和6年2月6日 富山県防災危機管理課公表分)

全壊は110棟に達し、射水市の9棟、小矢部市の8棟などに比べ突出して被害が大きかった。半壊は181棟で高岡市の103棟が続く。一部損壊は1343棟で高岡市の1884棟、射水市の1498棟に次ぐ数値となった。

埋め立て地の「ひみ番屋街」をはじめ、中央町や比見町、北大町など中心部の海沿いで土砂があふれ、液状化現象が発生した。液状化は地震の揺れによりかみ合っていた地盤の砂粒が外れて、液体のように流動化する現象。緩い砂質で地下水が浅いところで起こりやすく、海岸や湖沼の埋め立て地、河川敷、川沿いの低地で生じやすい。

その他、氷見市全域にあたる約14000戸の断水が発生した。上田子浄水場がある市南部から漏水箇所の特定制と修繕を繰り返し、3日には宮田、窪地区の約4000戸が復旧。21日に脇、中波地区など北部の世帯で断水が解消され、市全域での復旧となった。市内の水道管の破損は約190か所に上り、水道管の耐震化の必要性が認識された。

一般県道仏生寺太田線 堀田・仏生寺地内の万尾～十二町の2か所で段差や護岸倒壊が生じ全面通行止めとなった。その他多くの市道で地割れが起こるなどした。農業用水や灌漑施設の破損被害、漁港における定置網の流出、市内宿泊施設のキャンセルが相次ぐなど、暮らしや産業に甚大な被害をもたらした。

2.氷見の歴史

氷見市の地名の由来にはいくつかの説がある。「古代、蝦夷防備の狼煙を監視する場所で、狼煙の火を見るところだから火見と言った」という説や「海をへだてて、立山連峰の万年雪が見えるところだから氷見と言った」という説など、様々である。氷見市は海に面した地であることから、海に由来してつけられた地名であるという説が多い傾向にみられる（氷見市ホームページ参照）。

『氷見市史』によると、氷見の歴史は古代にまで遡る。縄文時代、弥生時代には中国・朝鮮との交流が活発に行われた。農耕活動が重視されるようになり、その活動を主導して収穫物を収受する有力な人々も生まれた。彼らは威信財で身辺を飾ったり、王墓を築いたりして一般の人々との差別化をはかっていた。氷見の弥生社会が農耕社会として成長したのか、海民集団として営みを充実させたのかは、はっきりとはわかっていない。

古墳時代になると、弥生時代の王墓と同じように、地域の有力者の権威を高めるために古墳が作られるようになる。これらの古墳は仏生寺川下流、中流域、上庄川下流、中流域、余川川・阿尾川下流域、灘浦地区の4カ所に分布の集中が見られる。富山県内にある古墳のうち、4割近くが氷見に集中しており、このことは漁業、交易、外向などを含む海を舞台とする営みが深く関わっていたことが示唆している。

奈良時代には大伴家持が越中国守に任命された。大伴家持は東大寺や中央貴族の墾田地の占定（うらさだめ）³に対しても、政治力を発揮し、この時期に成立した東大寺領の荘園は射水郡4カ所、砺波郡1カ所、新川郡2カ所の7荘である。

平安時代の氷見の様子をうかがえる資料は非常に少ない。奈良時代に設定された7荘の東大寺領荘園の行方を辿ると、これらの荘園は10世紀半ばまでに荒廃してしまったとされている。

中世に入り、室町時代の氷見地域は政治・経済上、足利将軍家や荘園領主層の都市京都と密接に交流した地域であった。この時期の氷見は上庄川流域の阿努荘（あぬそう）が湊、宿、市として成長した。その他の地域から運び込まれた諸産物も商われ、賑わっていた。また、中世後期には灘浦の北部地域では網漁が営まれていた。

近世には、加賀藩領内であった越中国の廻船も北国の遠隔地の輸送に従事していた。また、氷見は越中の中でも伏見城建築用の材木輸送に関わる有力な廻船業者を出した町であった。加賀藩が幕府に提出した国絵図にも氷見は記載されており、氷見は越中の代表的な湊町であった。安永7年（1778年）には漁民所持の漁船36艘、四十物⁴（あいもの）商所持の舟71艘、渡海船62艘があった。複数の廻船をもつ者もいたとされる。

現在、氷見の特産品となっている寒ブリの漁は近世には既に始まっていたとされている。近世前期には既に定置網の漁場が定められており、そこで鰯や鮪、鰯などの回遊魚の漁が行われていた。氷見地域の鰯漁に関する史料として、文禄4年（1595年）に出された「京都より前田利家の御用につき塩鰯差出状」がある。この書状により、宇波村または宇波浦では近世から鰯漁が行われていたことが推測される。

明治維新以降、地域は管轄する県が何度も変化し、それに合わせて活動を行ってきた。

明治2（1869）年の版籍奉還では、藩領を引き継いで管轄区域とした。旧加賀藩領であった氷見は、金沢藩の管轄になった。

³ 占いで物事を決定すること。

⁴ 生魚と干物の間のもの。

明治4（1871）年に、明治政府は廃藩置県を断行した。金沢藩を廃止、その管轄を引き継いだ金沢県を置いた。さらに明治政府は県の統合と分割を行い、あらたな県を創設した。この整理事業によって、金沢県が廃止され、あらたに管轄区域を設定された金沢県が設けられた（さらにこの金沢県は明治5年に「石川県」に名称変更された）。一方で七尾県と新川県が新設され、氷見は七尾県の管轄となった。明治5（1872）年、七尾県が廃止され、氷見は新川県の管轄となった。

明治9（1876）年、新川県が廃止され、その管轄区域は石川県に合併された。このときの石川県は、同年に廃止された敦賀県の諸地域も合併され、旧加賀藩よりも広大な地域を管轄した。この時期は、氷見も石川県に属した。

明治14（1881）年に福井県が設置され、旧越前国の諸地域の管轄が移された。さらに明治16（1883）年に、富山県が設置され、石川県の管轄下にあった旧越中国全体を管理する富山県と、富山県に属する氷見地域という体制が続いている。（氷見市史編さん委員会 2006:4-7）。

氷見地域の行政の形として、氷見郡が置かれた時代があった。氷見郡は、氷見郡成立以前から設置されていた射水郡を分割する形で明治29（1896）年に設置された。氷見郡の中には、氷見町や仏生寺村、熊無村など1町20か村が含まれていた。しかし、氷見郡の存続は叶わず、大正12（1923）年に廃止された。一方で、氷見郡という行政の形がなくなったものの、氷見郡という地域の名称は引き続き用いられるところとなった。

近現代の氷見の歴史において、氷見町大火は重大な出来事である。昭和13(1938)年9月6日深夜に発生したこの火事は、同日に接近していた台風の強風で広範囲に飛び火した。この火事によって氷見町では南北に火が広がり、また、氷見町役場、氷見警察署、氷見郵便局などの施設が焼失した。

この火事ののち、都市計画によって氷見町は復興された。換地を行い、計画的な整理を行ったものの、戦争や戦後復興による資材不足で、復興の取り組みはたびたび延期された。事業全体の完了は昭和27(1952)年度であった（氷見市史編さん委員会 2006:431-451）。

戦時下の行政では、県や市町村の税制はひっ迫し、富山県では協力に農村漁村経済更生運動が展開された。昭和7年、

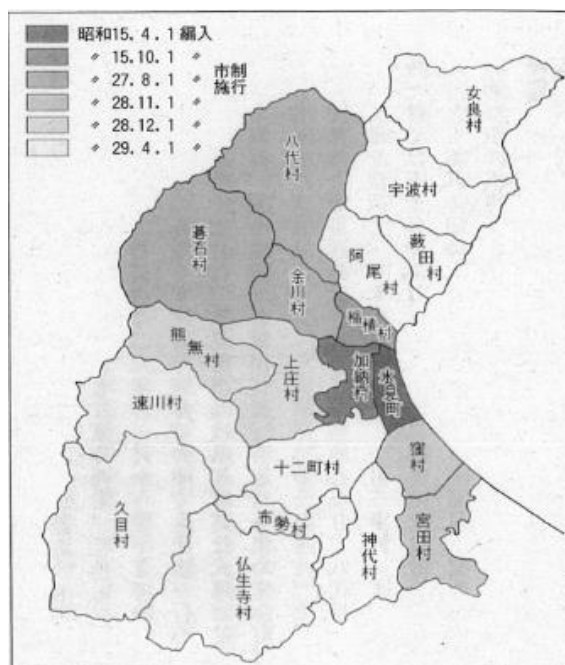


図4 氷見市の合併
（『氷見市史 2 通史編二 近・現代』より引用）

氷見町では「氷見町振興委員会会則」が制定され、農林漁業等すべての産業を統制する計画をめざした。村部では、林道の開通、河川改修工事や道路工事が計画された。国家総動員の機運が高まってから、行財政の効率を向上させるために、氷見地域内の町村合併の動きが活発化した。氷見町の大火からの復興などの影響もあり合併の計画が遅れ、合意には至ったものの氷見郡地域の大規模な合併は戦後に持ち越された（氷見市史編さん委員会 2006:456-466）。

昭和 20（1945）年に終戦を迎え、昭和天皇が富山県へ巡幸した際には、氷見町で奉迎した。氷見の人々のうち 8500 人が昭和天皇の氷見訪問に参列し、「万歳の声と日の丸の小旗」があがった。

戦後には氷見郡から氷見市への移行を目指す動きもあった。昭和 15 年に氷見町に加納村、稲積村が編入し、1 町 18 か村となった氷見郡で、当時構想されていたのは「一町一八か村による一郡一市」である。氷見市制の第一歩として、昭和 27（1952）年に八代村、余川村、碁石村が氷見町に編入合併し、「一町三か村による第一次の市制が実現した」。昭和 28（1953）年の 11 月には宮田村と窪村、12 月には上庄村と熊無村が氷見市に編入された。最終的に、高岡市に編入合併した太田村を除く氷見郡の一郡一市が実現した。この合併によって当時の氷見市の人口は 7 万人を超えた（氷見市史編さん委員会:616-624）。

3.氷見の人口

令和 5（2023）年 12 月 1 日時点での氷見市全体の人口は 43,296 人で、男性が 20,795 人、女性が 22,501 人である。世帯数は 17,455 世帯である。昭和 50（1975）年から令和 2（2020）年までの人口推移（5 年ごとの国勢調査に基づく）（図 5）を以下に示す。

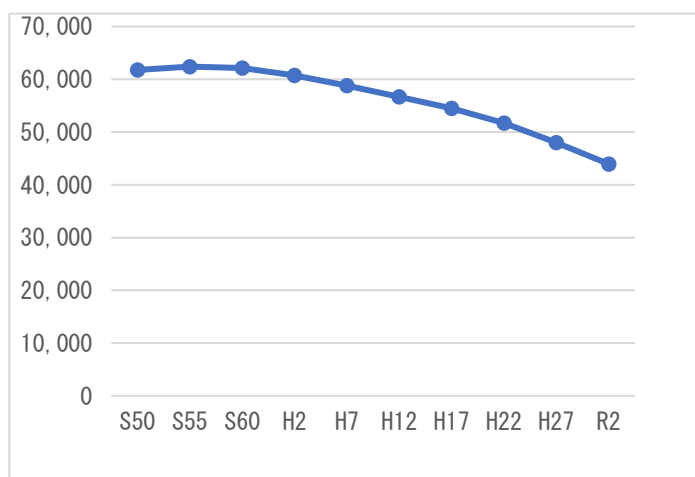


図 5 氷見市の人口推移（「令和 4 年の富山県の人口市町村別人口及び世帯数の推移」より作成）

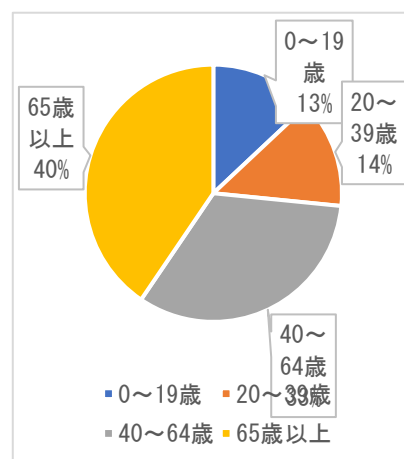


図 6 令和 4（2022）年氷見市の年齢別人口割合（「令和 4 年富山県の人口市町村別、年齢(各歳)別、男女別人口より作成」）

図5を見ると、昭和50(1975)年から昭和55(1980)年にかけて人口は少し増加していたが、その後、令和2(2020)年にかけて人口は減少している。減少幅も年々大きくなる傾向にある。昭和55(1980)年から令和2(2020)年までの40年間で18,463人減少している。

次に令和4(2022)年の年齢別人口割合(図6)を示す。図6の年齢別人口割合を見ると、令和4(2022)年時点では65歳以上が占める割合が40%となっており、0~39歳の人口(27%)よりも65歳以上の高齢者が多いということが分かる。これはWHOや国連が定める超高齢社会の基準である21%を大きく超えており、氷見市は超高齢社会と言える。

次に平成11(1999)年から令和2(2020)年における氷見市の転入・転出者数を表したグラフを示す(図7)。転入者数と転出者数ともに増減を繰り返している。転入者数と転出者数の差が一番小さいのは平成15年であるが、平成11年から令和3年の間で転入者数が転出者数を超えた年はない。

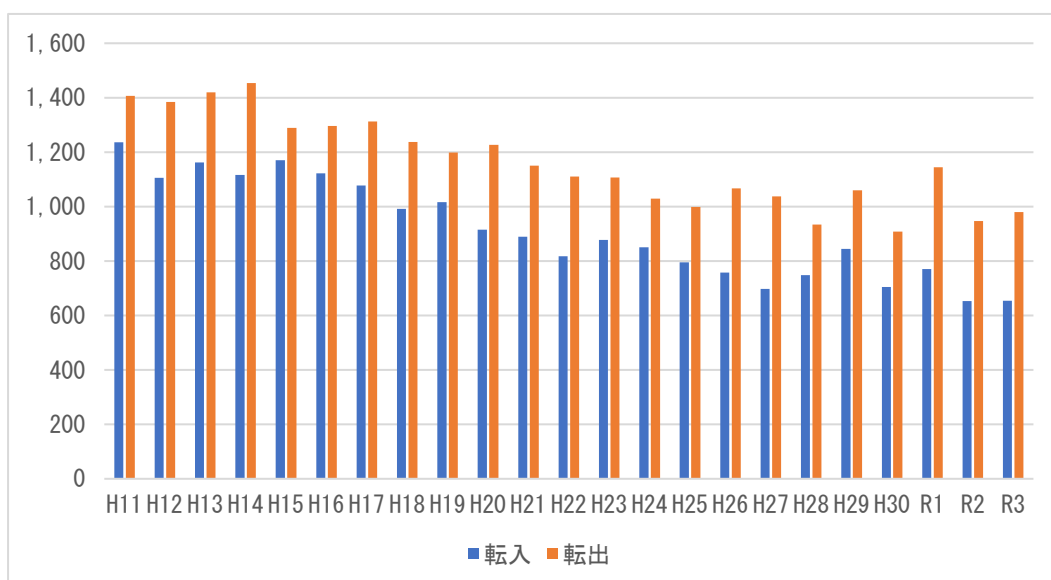


図7 氷見市転入・転出者数(富山県の人口(平成11年から令和3年分)市町村別人口動態を元に作成)

4.氷見の産業

次に氷見市の産業について見ていく。令和4年度(2022)の統計資料から直近の2015年の時点での氷見市の産業従事者総数は23,738人で、そのうち第一次産業は1,030人、第二次産業は8,060人、第三次産業は14,094人である(図8)。この産業別就業者数を割合で示したのが図8である。これを見ると第三次産業に従事する人が5割以上を占めており、そのなかで卸売・小売業に従事する人が3,370人と最も多く、次いで医療・福祉、飲食店・宿泊業、サービス業、運輸業・郵便業となっている。第二次産業では、製造業に従事する人が6,192人と最も多く、次いで建設業が1,859人、鉱業が9人となっている。図9は、

富山県全体の産業別就業者数の割合である。細かな数値の違いはあるが、概ね同様の割合となる。図 1 から分かるように氷見での第三次産業の占める割合が高い背景には、市が観光面に力を注いだ街づくりを行っていることが挙げられる。観光客がアクセスしやすい沿岸地域では観光客が足を止めて楽しむことができる場所が多く存在する。現在の氷見市では比見町商店街を中心に藤子不二雄 A 氏の作品のキャラクターのモニュメントや関連施設が立ち並び、周辺一帯が「藤子不二雄 A まんがわーど」として観光地化されている。また豊富な海産物や地元特産品を使用した料理を提供する飲食店や、それらを購入できる土産物店のほか、民宿や温泉施設なども多く点在している。

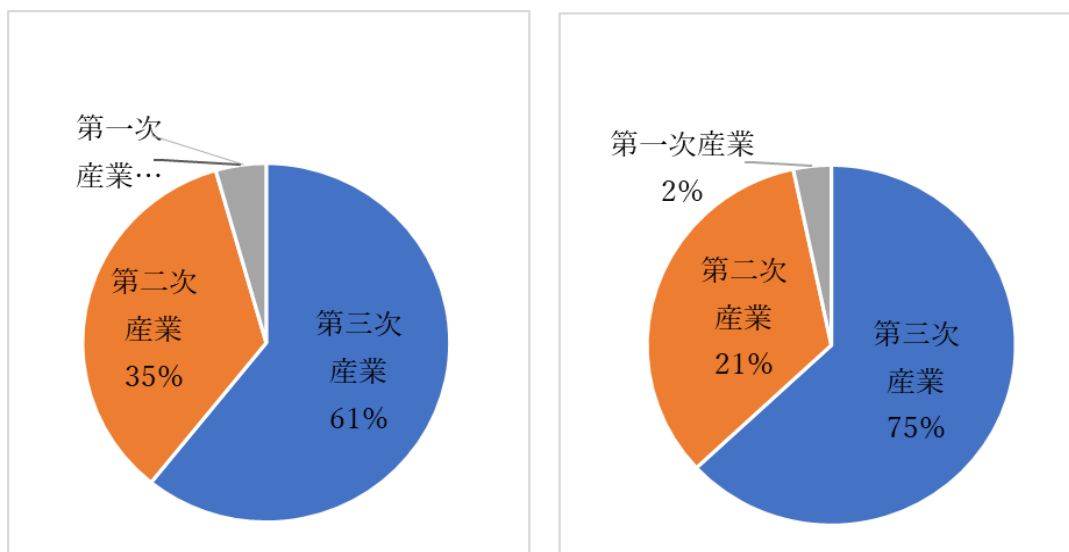


図 8(左上) 氷見市の産業別就業者数(氷見市 HP『氷見市の統計 (2022 年度版) 29(国勢調査)』を参照し作成)

図 9(右上) 富山県の産業別就業者数(国勢調査(平成 27 年度)『就業状態等基本集計』を参照し作成)

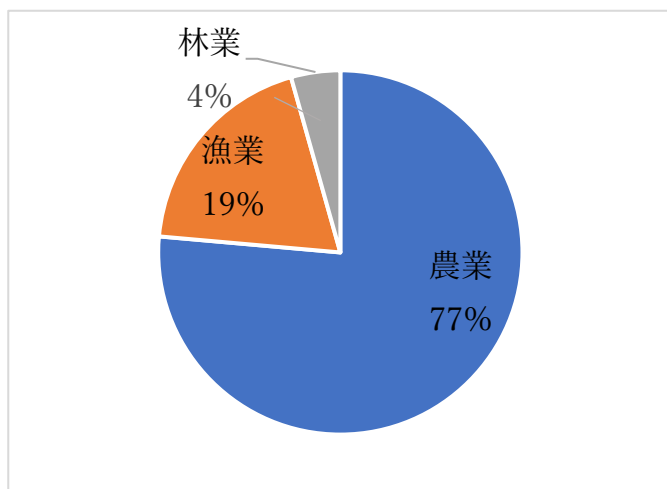


図 10 氷見市の第一次産業の内訳 (出典は図 8 に同じ)



写真 1 仏生寺地区細越で栽培されるハトムギ(井原提供)

図 10 には第一次産業従事者数の内訳と割合を示した。農業従事者が 7 割を占め、次いで漁業、林業となっている。氷見市は漁業が有名であるが、従事者数では農業が漁業を上回る。

氷見市で生産される農作物には、稲積梅、速川のサツマイモ、久米柿、久米栗、長坂の棚田米などがあり、仏生寺、稲積、阿尾地区ではハトムギ栽培(写真 1)が盛んである(HP「JA 氷見市」参照)。

また氷見は古くから漁業が盛んな地域である。1 年を通して豊富な魚種が来遊し、なかでも春のイワシ、夏のマグロ、秋のカマス、冬の寒ブリといった魚は季節の訪れを告げる代表的な存在である。市内の主な漁港は氷見、女良(めら)、大境(おおざかい)、宇波(うなみ)、藪田、泊、阿尾と沿岸部の広範囲に点在しており(図 11)、現在も行われている主な漁法には定置網、八艘張網、刺網がある。

氷見には「灘浦」という名称があり、富山湾北西部の海域で富山県七尾市の観音崎から富山県氷見市阿尾までの約 30km の沿岸部を指す。灘浦は古くから漁村が存在し定置網漁が営まれてきた地域である。定置網の歴史は 400 年以上の歴史があるとされる。定置網という言葉は明治時代に入り用いられるようになる言葉で、江戸時代までは「台網」(だいあみ)と呼ばれていた。氷見地域の台網の起源は、慶長 19 年(1614)に灘浦宇波村の漁場にクロマグロを獲る夏網を卸した記録が有力であることから、氷見市は定置網漁発祥地のひとつに数えられている。



図 11 氷見の主要漁港(国土地理院地図を加工)

5.氷見の祭り・イベント

氷見市で年間を通して行われている祭り、イベントについて、下の表にまとめる(表 3)。

表 3 氷見の年中行事

開催日	名称
2 月 11 日	起舟祭
4 月 17 日	まるまげ祭り
4 月 17 日・18 日	ごんごん祭り
5 月 3 日	唐島祭

5月20日	えびす講
7月13日・14日	祇園祭り
8月上旬	コンゴウ参り
8月上旬	ひみまつり
11月20日	えびす講

「起舟」とは一般にはキシユウ、あるいはキッシュユウとよび、元来は「舟起し」とも称される舟霊サマの祭りだった。2月11日の漁業の事始めの日に際して、大漁を予祝し、豊漁と安全を祈る舟祝いの日でもあった。そのため、現在も起舟祭当日には各漁港に繫留される漁船に大漁旗を立て、祝意を表している。商家では、この日を記帳始めの日として、大福帳の上書きなどをした。また、起舟当日は「水主揃(かこぞろ)いの祝い」を兼ねて、氷見浦では昭和10年代頃まで秋網(鰯網)・春網(鰯網)・夏網(鮪網)など、三季網の船元ごとに各々の網に従事する水主連中を招いて、盛大な祝宴が開かれた。水主とは船乗りのことである。当日夕方から催される祝宴の献立はたいそう豪勢で、タラの子付けやイカの刺身のほか、シイタケ・クルマ麩・人参・レンコン・昆布などの入ったモチ椀、人参と大根に焼いたブリの頭の身をほぐし入れたナマス、黒豆の煮豆、茹でたメジマグロの身をほぐし入れた豆腐のアンカケに、この頃が旬のタラのオツケ(味噌汁)などを肴に、招かれた10人から20人余りの水主等は盛大に呑んでいた。近年は、前日のえびす講の翌日に、予め希望者を募って近隣の民宿で祝宴のみが行われている。

毎年4月17日はまるまげ祭り、4月17日、18日はごんごん祭りが開催される。まるまげ祭りの詳細は第7章にて紹介する。

「ごんごん祭り」は朝日山の上日寺で行われる祭礼で、「早鐘まつり」ともいわれる。この祭りの始まりは江戸時代に遡るとされる。江戸時代初期に氷見一帯が大早魃に見舞われた際、百姓たちが上日寺の観音に雨乞いをしたところ、祈祷の甲斐あって慈雨が降りそそぎ、人々は上日寺の鐘を打ち鳴らして狂喜乱舞した。以来、毎年4月17日、18日の観音縁日に報恩と厄よけの祭りが行われるようになった。現在では、ゴンゴン鐘つき大会というイベントも開催されている。50kgの松の丸太を担いで鐘をつき、1分間についた鐘の回数や音色の良さを競うもので、県内外の力自慢が集う。

毎年5月3日は、「唐島祭」が行われる。これは、氷見漁港の東約300mの海上にある「唐島」に祀られている弁天様に、海上安全と大漁を祈願する



写真2 唐島祭りの獅子舞(森谷撮影)

海の祭りである。氷見市内の光禅寺⁵にて読経をあげた後、各町内の太鼓台や神輿が町内を巡行し、獅子舞を競演する。その後唐島の弁天堂で大般若経があげられる。

「えびす講」とは毎年5月20日と11月20日の年2回行われる春秋の魚取祭例祭、5月3日の唐島祭りに併せて斎行される例大祭のことを指す。氷見浦から灘浦の海岸部には、えびす神を祀るえびす堂や魚取社(なとりしゃ)が点在する。元来は、漁猟に従事する人や、漁を生業とする漁民等に大漁をもたらしたり、海上安全の守り神であったものが、後には漁家だけでなく商家や農家にも受入れられ、また「えびす大黒」と並称されて商いや交易、農作物の生育を見守る生業全体の守り神や福德神として農山村や都市部へも浸透していった。氷見地域では、おもに幕末の文化・文政期頃に、漁猟の守り神として勧請されている。旧氷見町の今町(現・中央町)、浜町(現・比美町)、湊町(現・比美町)の浦方3町では、各々の町内に魚取社が鎮座しており、漁師や町内の人たちは、通常魚取祭とはいわずにえびす講といっている。祭礼日には、神前に町内地先の各網から季節の魚としてアカダイ(真鯛)やクロダイ・ガンド(小型のブリ)などのほか、町内の蒲鉾店から昆布巻きや赤巻きカマボコなどが供えられる。祭典終了後、社殿で神職と参列者らにより直会が行われ、御神酒のほかお下がりとしてカマボコが切られて振舞われる。

毎年7月13日、14日は「祇園祭り」が開催される。氷見市中心部のうち、南十町は日吉神社、北六町は日宮神社に祀られている祇園の祭りで、それぞれの地域の住民が神輿や太鼓台を引き連れ巡行する。言い伝えによると、江戸時代のはじめ氷見に悪病が流行したため、京都の八坂神社から祇園の神霊を勧請し平癒祈願を行ったところ、悪病神が退散した。これ以来祇園祭りが行われている。現在のように南北の町々がわかれて祭礼を行うようになったのは、江戸時代中期のことである。

「コンゴウ参り」は、氷見では8月1日または8月7日に行われることが多い仏事である。「コンゴウ」に充てる漢字は「魂迎会」「魂供会」「魂向会」「魂合会」「金剛会」などがあり、各寺院によって異なる。コンゴウには、檀家の他に孫門徒もお参りする習わしとされている。

「ひみまつり」とは毎年8月第1週目の土曜日に比美乃江公園で行われる祭りである。氷見市の繁華街を含む約1,500戸が焼失した昭和13(1938)年の「氷見大火」からの復興を期して行われた「氷見産業祭」を前身とし、昭和48(1973)年に氷見青年会議所が主体となって初めて開催された。近年では、魚提灯山車の展示や市内外の獅子舞が一堂に会する「獅子舞フェスティバル」など多彩なイベントが行われる。まつりのフィナーレとして県内最大級の豪華な「花火大会」が氷見の夜空に輝き、来場者を楽しませている。

最後に「獅子舞」を紹介する。獅子舞とは春と秋に開催される行事で、春はその年の農作物の豊作を祈念して、秋は五穀豊穰に感謝して獅子舞を神様に奉納する。富山県は獅子舞が各地で盛んで、氷見市で行われる獅子舞のことを「氷見獅子」と言い、獅子の胴部分に5、

⁵ 曹洞宗の寺院であり、漫画家藤子不二雄[Ⓐ]の生家としても知られる。

6名が入るため「百足獅子」と呼ばれる。またスピード感のある早いテンポのお囃子で勇壮に舞われる。詳しい氷見獅子の説明は第6章にある。

参考文献

富山大学人文学部文化人類学研究室編『2013年度 地域社会の文化人類学的研究 23 人と地域が織りなす文化：富山県氷見市の調査記録』、富山大学人文学部文化人類学研究室、2014。

氷見市史編さん委員会『氷見市史9 資料編七 自然環境』、氷見市、1999年。

北日本新聞朝刊 2024年1月3日

富山新聞朝刊 2024年1月3日

氷見市史編さん委員会『氷見市史2 通史編二 近・現代』、氷見市、2006年。

氷見市史編修委員会編『氷見市史』、氷見市役所、1963年。

氷見市立博物館『特別展 氷見の祭りと年中行事』、氷見市立博物館、1996年。

参考にしたウェブサイト

国土交通省国土地理院「5. 海的作用による地形」

<https://www.gsi.go.jp/kikaku/tenkei_umi.html> (最終閲覧日 2024年1月14日)

首相官邸「令和6年能登半島地震について」

<<https://www.kantei.go.jp/jp/headline/earthquake20240101/index.html>> (最終閲覧日 2024年1月23日)

氷見市「【被災・復旧状況】令和6年能登半島地震に伴う氷見市の被災・復旧状況について」

<<https://www.city.himi.toyama.jp/emergency/9273.html>> (最終閲覧日 2024年2月11日)

富山県「令和6年能登半島地震に係る県内被害状況（人的被害・住家被害等）」

<[higai31.pdf \(pref.toyama.jp\)](https://www.pref.toyama.jp/higai31.pdf)> (最終閲覧日 2024年2月11日)

とやま統計ワールド「人口移動調査」

<<https://www.pref.toyama.jp/sections/1015/lib/jinko/index.html>> (最終閲覧日 2024年1月14日)

氷見市役所「氷見市 HP 氷見市の統計(2022年度版) 29(国勢調査)」

<<https://www.city.himi.toyama.jp/gyosei/shisei/tokei/2/8019.html>> (最終閲覧日 2024年1月8日)

e-Stat 政府統計の総合窓口「平成27年国勢調査」

<<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?tclass=000001088598&cycle=0>> (最終閲覧日 2024年1月11日)

一般社団法人氷見市観光協会「氷見周辺のおすすめ観光スポット10選！自然と海の魅力が満喫できる北陸の人気エリア」、きときとひみどっとこむ

<<https://www.info-toyama.com/stories/himi-kanko>> (最終閲覧日 2024年1月8日)

氷見市農業協同組合「JA 氷見市」

<<https://himi.ja-toyama.jp/>> (最終閲覧日 2024 年 1 月 8 日)

一般社団法人氷見市観光協会「氷見市の年間スケジュール」、きときとひみどっとこむ

<<https://www.kitokitohimi.com/site/taiken/himi-event.html>> (最終閲覧日 2024 年 1 月 12 日)

氷見市役所「氷見市 HP 未来に残したい漁業漁村の歴史文化財百選」

<<https://www.city.himi.toyama.jp/gyosei/soshiki/suisan/1/2177.html>> (最終閲覧日 2024 年 1 月 12 日)

一般社団法人氷見市観光協会「祇園祭り」、きときとひみどっとこむ

<<https://www.kitokitohimi.com/site/taiken/gion.html>> (最終閲覧日 2024 年 1 月 4 日)

一般社団法人氷見市観光協会「ごんごん祭り」、きときとひみどっとこむ

<<https://www.kitokitohimi.com/site/taiken/463.html>> (最終閲覧日 2024 年 1 月 4 日)

一般社団法人氷見市観光協会「唐島祭」、きときとひみどっとこむ

<<https://www.kitokitohimi.com/site/taiken/karashima.html>> (最終閲覧日 2024 年 1 月 4 日)

第1部

「暮らし」を紡ぐ

第1章 中央町商店街で起こる人々の交流と商店街の在り方

橋爪 乙葉

はじめに

氷見市でフィールド調査を始めたばかりの2022年11月に、インタビューした方から「氷見はレトロな街だ」という声を聞いた。このことをきっかけに、私は氷見市の町の様子に注目するようになった。氷見市内中心地には氷見駅から伊勢大町、本町、南大町、比美町、中央町、北大町の順に商店街が並ぶ。町の光景を見ながら歩いている中で、中央町商店街のビル群が一番印象に残った。中央町には道の両側に3階建ての防災共同ビルが連続して並んでいる。人通りが少なく、シャッターが閉まっている箇所も多い。初めてビルを見た時に、レトロな建物だという印象を受けるとともに、この商店街で店を営んでいる人や住んでいる人は建物に対してどのような思いを抱いているのか気になった。また中央町では2、3年前から新規出店が相次いでいる。変化が起こっている中央町商店街で、新たな店が作り出す流れや、中央町商店街で発生する客と店の交流に注目し、商店街が人々にとってどのような場所なのか調査したいと思った。

今回は、主に中央町商店街を中心にフィールドワークを行い、現在店を構える店主の方々に聞き取り調査をお願いした。本章では、聞き取り調査や観察をもとに、中央町商店街に対する人々の思いと商店街で起こる交流を記述していく。

第1節では調査地である中央町商店街の概要と防災共同ビルが設立された経緯および当時の様子を記述する。第2節では商店街の店主の方々からの聞き取り調査に基づき、各店舗で起こる交流や商店街への思いについて述べる。第3節では店舗以外で起こる交流について紹介する。第4節では中央町の人々の商店街や防災共同ビルに関する課題を述べる。第5節では聞き取り調査で得られた意見から、商店街で起こる交流や商店街の価値について筆者の考えを述べる。

1.中央町商店街について

1-1.中央町について

中央町は富山県氷見市の中心市街地にあり、氷見駅から徒歩15分ぐらいの距離にある。2023年12月時点で468人、224世帯が暮らす。⁶「プロゴルファー猿ポケットパーク」⁷がある

⁶ 氷見市行政区別人口世帯数統計表より

⁷ 氷見市出身の藤子不二雄Aの作品の「プロゴルファー猿」の世界観をモチーフに壁面に立山連峰などが描かれ、「プロゴルファー猿」の等身大の立体像が配置されている。

中央町交差点付近から上庄川に架かる北の橋まで続く商店街が中心にある町だ(図2 参照)。北の橋には藤子不二雄 A の作品のキャラクターの像がある。氷見市健康課、氷見市地域子育てセンター、氷見市児童館などが複合している氷見市いきいき元気館(図2 参照)もある。また「氷見漁港」や道の駅である「ひみ番屋街」からも近く、観光客も訪れやすい町である。中央町の旧町名は今町、新町(1960年住宅地図に表記)であり、昭和43(1968)年に合併した。海沿いには漁業を商いとするとする人が多く住んでおり、⁸近くの入船町(現丸の内)には遊郭があった(図1 参照)。

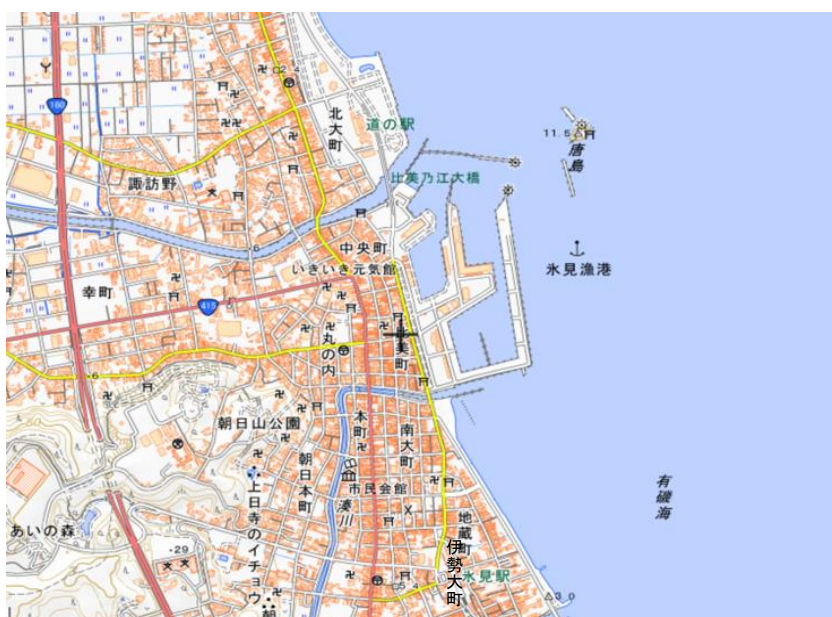


図1 氷見市中心部(地理院地図を加工して作成)



図2 中央町地図(国土地理院地図を加工して作成)

⁸ イッツコム公式サイト「富山県の古い町並み」参照

1-2.防災共同ビルとは

防災共同ビルは防災建築ビルともいい、そのビル群を防災建築街区と呼ぶ。本稿では防災共同ビルと記述する。防災建築街区は今から 60 年ほど前の 1961 年施行の防災建築街区造成法（衆議院 HP 法律第百十号より）に基づき実施された市街地の再開発事業である。都市における火災または津波などの災害の防止を図り、あわせて土地の合理的利用の増進及び整備改善を目的としてビルである。全国で 300 以上を超える数の街区⁹が整備され、氷見市中央町もその一つである。中央町商店街は県道 373 号線に沿って両側に並ぶように形成されている。

1-3.防災共同ビル設立の経緯

氷見市中央町で防災共同ビルが設立された経緯を述べる。今回の調査では防災共同ビル設立に携わった人にインタビューできなかつたため、平成 30 年専修大学『ヒアリング記録：氷見市中心部における防火建築帯の実態』と、防災街区設立に携わった方へのインタビューをした記事である「ぶらり第 1 話～防災街区誕生秘話編～」を参照して述べる。氷見市中央町で防災共同ビルが建設されたのは、1968 年である。1963 年に豪雪¹⁰があり、道が狭くて雪で埋まってしまう大変だったので、道路を拡張する話が出た。道路拡張に伴い、防災街区建設の話が市役所から提案された。北陸で第 1 号となる石川県金沢市の片町の防災街区へ視察に行き、中央町でもつくることになった。そして防災建築街区を作ることに賛成した人によって防災街区造成組合ができた。道路の拡張に対する国からの補助金と住宅金融公庫の借入れを合わせて建設した。当時は店が 60 軒ほどあり、その全てを説得するのは難しく、反対する人もいた。防災共同ビル設立に最後まで反対していた人の箇所は抜かして建設した。今もその名残として、防災共同ビルの横に木造の建物が残っており、当時反対した人の場所だという。元々あった店を取り壊して建設したため、違う場所に間借りして営業した店もあった。

防災共同ビル設立に携わった人に話を聞いた「考えるパン KOPPE」（後述）の竹添英文さんの話を参考にして記述する。道路側（店の正面側）は揃えて建てられたが、建物の奥側は個々の経済力に応じて建てられたため、建物によって奥行きに差がある。また、道路に沿って建てられており、道路のカーブに合わせて北の橋方面にかけてカーブしている（写真 1）。その影響で建物入り口は正面を向いているが、内部は奥に行くにつれて斜めになっており、平行四辺形のような形をとっているという（写真 2）。

⁹ 住総研「防災建築街区の再生にみる都市空間更新の条件と可能性—中部地方における取り組みの事例を通して—」参照

¹⁰ 昭和 38 年 1 月に起こり、三八豪雪ともいう。氷見市周辺では積雪量 360 センチメートルまで積もったとされる。（『氷見市史 5 資料編三 近・現代』参照）



写真 1 北の橋付近から撮影した中央町商店街（筆者撮影）



写真 2 右奥にかけて斜めになっている様子（竹添さん提供）

1-4. 中央町商店街の昔の様子

「喫茶モリカワ」（後述）の森川博之さん（69 歳）に話を聞いた。森川さんが中学生のころに共同ビルが建設された。元々店があり、その場所に建ったビルに入る形になった。設立当初、店をやっている人は若く、建設されてから 20 年ほどは繁盛していたという。商店街には食堂が多く、うどん屋が 2 軒ほどあった。ビル建設当時があった店でも、菓子屋は中央町の狭い場所ではなく、もっと広い場所に工場を移すために出て行った店もあるという。菓子屋だけでなく、銭湯やレストランも商店街から出て行った。中央町の店舗は敷地だけでなく、道路や駐車場は狭い。客を多く入れ、事業を拡大するには、中央町は向いていないので出て行ったのではないかと語る。

中央町出身の「呑多喰」（どんたく）（後述）の磯辺美紀さん（59 歳）に幼少期の頃の商店街での過ごし方について伺う。物心がついた時からビルがあり、小さい時にみやざわ美容院にあったエレベーターで遊んでいて怒られた記憶があるという。日の出湯という銭湯でお風呂に入って、いとや食堂でうどんを食べて家に帰るのが決まったルートだった（図 3 参照）。磯辺さんの母は商店街の食料品店で買い物することが多かった。商店街で生活が成り立った。北の橋付近に派出所があり、落とし物を届けたことがある。派出所は 30～40 年ぐらい前までは交番として機能していたが、町の共通の倉庫になった。北の橋の工事とともに取り壊され、現在はない。磯辺さんは、店の移り変わりについては店主の代替わりのときに後継ぎがおらず、店がなくなることが多かったと感じている。

商店街は 30～40 年ほど前までは大変賑わっており、商店街がある道路はメインの道路だったが、国道 160 号線の方がメインになってしまい、客が減ったという声を調査中に聞いた。1970、1980 年代が一番栄えた時期で、その後大型店の増加や道路開通に伴い、商店街

への客足が減ったと考えられる。

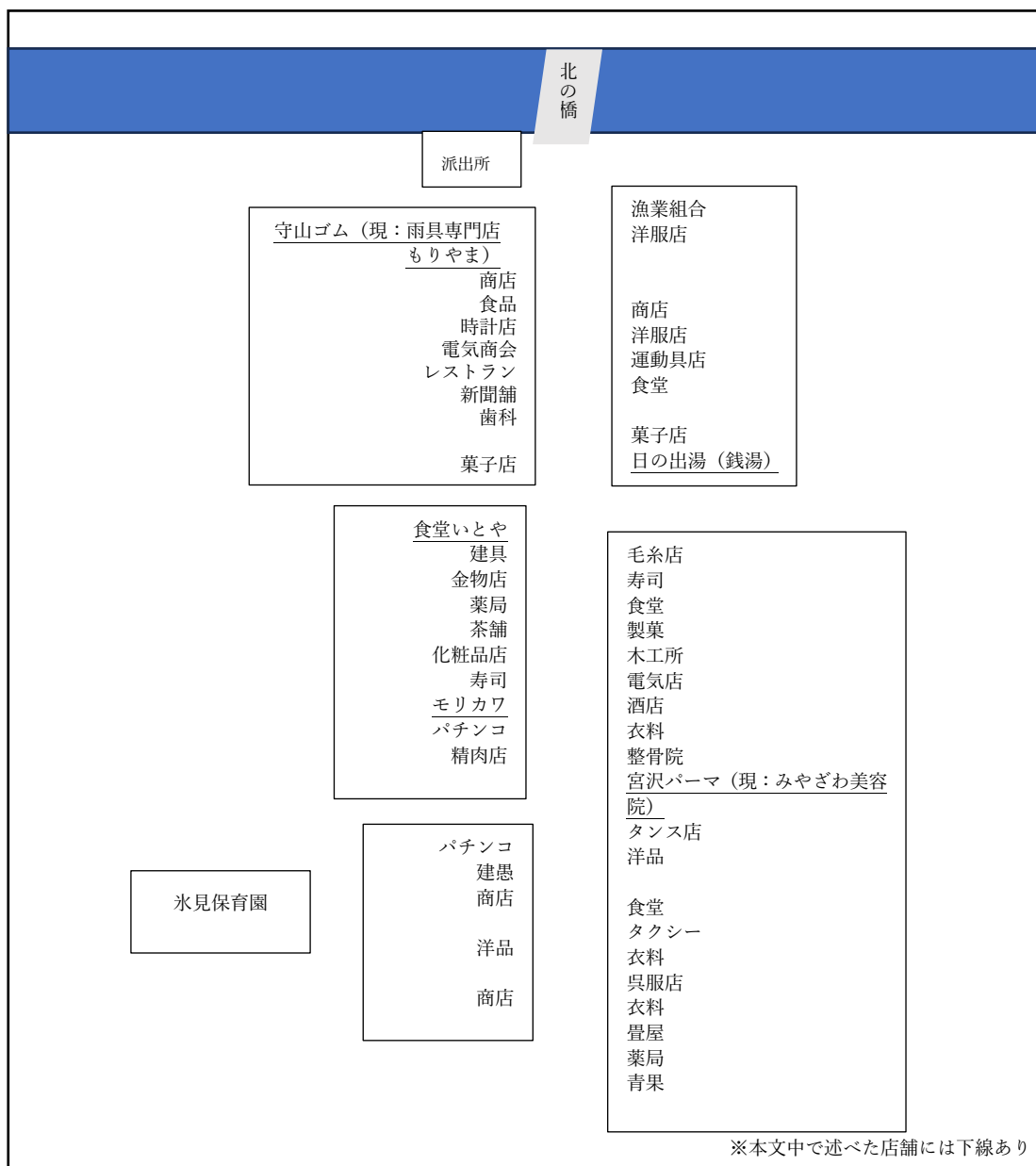


図3 1960年代の中央町商店街の地図（中央出版社『1966 最新氷見市住宅明細図』参照）

2.現在の中央町商店街の様子

現在の中央町商店街は所どころシャッターが閉まっており、玄関を改修して住居となっている所もあるが、事務所を含めると27の店舗がある。中央町では2017年から2020年にかけて開催されたイベントである「うみのアパルトマルシェ」をきっかけに、ここ数年で新

しく開店した店舗が増えている。本節では「うみのアパートマルシェ」が与えた影響について述べた後、話を詳しくお聞きすることができた「もりやま雨具」「喫茶モリカワ」「呑多喰」「考えるパン KOPPE」「Himi Brico Labo」について主に記述する。また、中央町商店街から少し離れたところにある「FCTRY」についても記述する。各店舗では主に店の特徴、客層、客との交流、商店街の他の店との交流、商店街についてどう思うかなどについて聞き取った。

6店舗の紹介の前に現在の商店街について簡単に説明しておく。現在、中央町商店街には飲食店が10店舗ほどあり、そのほかには美容院、化粧品店、畳店、木材店、接骨院、塾などが並んでいる。2020年以降新しくできた店舗は5つある。それぞれパン屋、ジェラート屋兼古着屋、木材店、スープ屋、懐石料理屋であり、なかには移住してきた方が経営している店舗もある。新しくできた店舗の店主の年齢は比較的若いですが、商店の店主の年齢層は70代～80代の方が一番多く、古くから営業している商店の店主の高齢化が窺える。

商店街は「防災共同ビル」と呼ばれる独特の作りが特徴的だが、もうひとつの特徴はアーケードがあることだ（写真3）。アーケードには閉業したと思われる店の看板も残っていたり、違う商店になっても昔のままであったりする。アーケードがあることで雨の日でも傘をさすことなく、商店街を歩くことができる。



写真3 「考えるパン KOPPE」屋上から撮影した中央町商店街の様子（筆者撮影）

2-1. 「うみのアパートマルシェ」が与えた影響

中央町商店街に新しい出店者を呼び込むための取り組みとして、「うみのアパートマルシェ」というイベントが行われた。当時マルシェの開催に携わっていた「氷見市 IJU 応援

センター・みらいエンジン」¹¹（図2①）の藤田智彦さん（36歳）に話を伺った。「うみのアパートマルシェ」は2017年から2020年にかけて行ったイベントである。多くの人がマルシェに訪れた。レトロでおしゃれといったイメージを作るために商店街の店舗だけでなく、外からのお店を募集した。アートクラフトや雑貨やフードなどの店舗が出店した。新しいイメージを打ち出すためには、有名な店舗が出店する必要があると考えた。しかし有名な店舗はすでに店を構えており、マルシェに出店しても中央町に店を構える可能性は低い。そこで有名な店舗もマルシェには出店してもらいが、店舗を構えていない出店者にも参加してもらい、その中から中央町に出店したい人を見つけることを目的とした。

「うみのアパートマルシェ」は現在開催されていない。前に開催していたときは北の橋が工事中だったので、歩行者天国にして開催していた。工事中はバスが通ってなかったが、現在は工事が終了し、バスの路線となっている。竹添さんによると、前に開催していた時のようにするにはバス会社との調整や許可を取ることが必要になってしまい、労力がかかり難しいという。また、マルシェを開催しなくても新しく出店したいという人は見つかるので、マルシェを開催していない。これらの理由から現在は開催されていないが、「うみのアパートマルシェ」をきっかけに中央町商店街へ注目が高まったという変化があった。



写真4、5 2017年開催時の様子（氷見市IJU応援センター・みらいエンジン提供）

2-2.雨具専門店もりやま

「雨具専門店もりやま」（図2②）の店主の守山昌弘さん（70歳）にお話を伺った。昭和元年創業の店で約100年の歴史がある。主に長靴、漁業用カッパや漁業用のつなぎを取り扱っている。正月とお盆以外は毎日営業している。店主の守山さんは3代目で、2代目だった父親が48歳で亡くなったのを期にお店を継いでから、40年ぐらいたつという。客層はほぼ地元の方で、農業をやっている方や漁師の方が来る。漁師用カッパの修理を依頼する客もいる。氷見市以外にも、石川県七尾市からも客が訪れる。

¹¹ 中央町商店街にオフィスを構え、氷見市と連携し、移住希望者の支援を行っている。



写真 6 雨具専門店もりやまの外観 (筆者撮影)



写真 7 雨具専門店もりやまの店内 (筆者撮影)

守山さんに商店街の活気についてお聞きした。商店街は人の流れが少なくなり、交通量も減っており、商店街のお店が閉店していくのは仕方ないと感じている。閉業していく原因としては後継者がいないことが一番大きいのではないかと語る。守山さん自身もあと 3 年で創業 100 周年であるため、そのタイミングで辞めようと思っている。商店街でイベントが行われることについてもお聞きした。商店街でイベントが行われる際に車両通行止めになると、客が少なくなってしまう。そのために客が増えるといった効果はないと語った。商店街がこれから回復することはないという気持ちが表れているように思われた。

次に建物についてお聞きした。雨漏り対策として、屋上の防水工事を行ったことがあるそうだが、屋上が傾斜している構造のため、工事をしていない隣の屋上から雨水が流れてきたことがあるそうだ。また、雨漏り対策の工事をしたが、今度はそのために室内が結露するようになってしまった。

商店街内や近所との交流にお聞きした。「雨具専門店もりやま」の向かいに位置している「呑多喰」(後述) やステーキ屋にはよく訪れるという。また、「FCTRY」(後述) の方に「雨具専門店もりやま」の看板のグラフィックを使った T シャツを作ってもらおうという関わりはあった。

2-3. 喫茶モリカワ

「喫茶モリカワ」(図 2③) では、店主の森川博之さん(69 歳)に話を伺った。約 70 年前から創業しているモリカワは、昔ながらの喫茶店でレトロな雰囲気を味わえるお店である。外観と内観どちらからも昭和感が感じられる。



写真8 喫茶モリカワ外観（筆者撮影）



写真9 喫茶モリカワ店内の様子（筆者撮影）

森川さんによると、氷見で3番目ぐらいにできた喫茶店ではないかという。テーブル席が4つとカウンター席が4つほどある。手書きで書かれたメニューはほぼ50～60年前から変わらない。特にオムライスとミルクケーキとホットケーキが人気である。ホットケーキはホットケーキミックスを使わずに小麦粉で作っており、コンロもチャッカマンで火をつけている。

森川さんは大学進学を機に氷見をいったん離れ、新潟県に出て、その後石川県で就職し、スーパーで5年ほど働いていたが、母親が病気になったことをきっかけに、28歳で氷見に戻った。母、父、森川さんの兄に続いて、4代目の店主となった。森川さんの奥さんが手伝うこともあるが、ほぼ一人で営業している。6、7年前までは朝9時から23時まで営業していたが、大変だと感じ、現在は20時までの営業になった。現在は行っていないが、開店当初から商店街の他の店の客にも注文があれば出前を行っていた。出前の範囲は町内とその周辺で、主に店や事務所に届けていた。サンドイッチやポットに入れたコーヒーなど運びやすいものが中心で、歩いていける町内ならばパフェも運んでいた。10年ぐらい前に人手不足で出前は辞めたが、現在はテイクアウト販売を行っている。

客層は、近所や氷見市内に住んでいる常連客が徒歩や車で訪れることが多い。コロナ禍前の5～6年前は、レトロな喫茶店を求める若い人がSNSを見て、氷見市外や石川県から来る人も多く、その時が一番忙しかった。今もSNSを見て若い人は訪れる。ランチの時間帯も忙しく、私が訪れた日は平日であったが、14時を過ぎてからも席が埋まるくらいお客さんが入っていた。また魚を常連さんからもらって、その魚をランチで提供したり、畑をやっている人から野菜をもらったりするという。

また、店の2階は囲碁ができるスペースになっており、囲碁クラブの会員が囲碁をしに訪れる。2つの部屋があり、昼食を食べた後、囲碁をするために集まってくる。創業当初は囲碁好きだった森川さんの父がせいぜい2人ぐらいの知人と対局する程度であったが、

徐々に人が増えていき、開店から10年ぐらい経つ頃には囲碁クラブが始まった。集まって競輪をみたり、将棋を行ったりしていたが、現在は囲碁だけ残った。囲碁クラブの会員は、一時期は30~40人ぐらいいたが、今は15,16人である。年齢は65歳から85歳までいる。同じ氷見市内でも違う町会から車で囲碁をしにくる。30~40年ほど前から通っている人が多く、ほぼ毎日やって来る人もいる。公民館でも囲碁を行っていたが、コロナで出来なくなったままだそうで、そのぶん喫茶モリカワに集まってくる。私が訪れた日(2023年4月20日)には、14時半の時点で6人が囲碁をしにきていた。その人たちは森川さんに軽く挨拶を済ますと、喫茶店で何かを注文することもなく2階に上がり、森川さんがコーヒーを運びに行く。

中央町商店街について森川さんにお聞きした。商店街の建物は勝手に取り壊すこともできなければ、高値でも売れないと語る。一度雨漏りの工事をしたが施工会社が3年で潰れてしまい、どこにも文句が言えないのでそのままになっている。そのため、40年間雨漏りしている箇所まである。北陸で暑い夏とジメジメした冬を繰り返すうちに、屋上にひび割れができてしまう。ある時、ひびに沿って生えていた苔をとったら、逆にそこから雨漏りするようになってしまったことがあったという。商店街については昔と比べてさびれたと感じている。森川さんは元気だったら73歳までやりたいと語り、その後店は住宅に改装しようか考えている。現在も売上を目的にした営業はしていないという。

2-4.呑多喰(どんたく)

「呑多喰」(図2④)の店主である礒辺美紀さん(59歳)に話を伺った。「呑多喰」は中央町商店街で18年前(2005年)から営業している飲食店だ。昼は11時半から14時、夜は18時から21時まで営業しており、礒辺さんが一人で経営している。



写真10 呑多喰外観(筆者撮影)



写真11 呑多喰店内の様子(筆者撮影)

カウンター席が6つほどとテーブル席が2つある。私は平日の(2023年9月28日)13時ごろに訪れたが、常連客とおぼしき4人と磯辺さんのあいだで会話が飛びかっていた。ランチが好評で、特に日替わりランチが人気メニューとなっている。中央町に出店する前に氷見市内の別の場所で4年間営業していたが、一度辞めて結婚式場でアルバイトをした後に中央町で再開した。

店の客層はほとんどが地元客で、歩いてくる客が多く、年齢層は60代、70代が多い。特に夜の営業時は近所に住む年配の常連客が多く訪れる。「呑多喰」は中央町の隣を流れる上庄川(地図2参照)にかかる北の橋の工事(2016年~2019年実施)に大きな影響を受けた。北の橋が工事中は通行できなかつたため、橋を渡ってきていた近所の客が来なくなってしまったのだ。工事期間中に亡くなってしまった常連客も多かったという。北の橋の工事が終わっても、コロナ期間で客足が戻らず厳しかった時期があった。

元々は夜のみの営業だったが、2020年頃からランチの営業を始めたことで、「ひみ番屋街」から観光客が歩いてきて、店に入ってくるが増えた。ランチ営業を始め、知らない人に知り合える機会が増えたという変化が起きた。最初は「夜の残り物をランチで出そう」くらいの気持ちで始めたランチ営業だったが、現在ではランチ営業の方が人気になった。

商店街の建物について伺った。磯辺さんは建物があと10年、15年持つかどうかかわからないと語る。壊すに壊せないし、壊すとしてもお金がかかってしまうため、どうするかは具体的には決めていない。磯辺さんは元々店がある建物の3階に住んでおり、2階には磯辺さんの息子家族が住んでいた。その方が家を出た後に、3階の天井が雨漏りで落ちてき始めたので、今は2階に居住している。また、アーケードが錆びてしまっており、店がある建物とアーケードの間から雨が滝のように落ちてくるのを見て、どうすればよいのか悩んでいる。

磯辺さんにいつまで営業する予定であるか尋ねた。65歳まで営業することは決めており、その後はできなくなるまで営業するつもりという。店を辞めたら1階を居住スペースにしようかと考えている。商店街については、可能ならば空き店舗に次々と店が入れば嬉しいと語る。

2-5.考えるパン KOPPE

「考えるパン KOPPE」(図2⑤)の竹添英文さん(37歳)に話を伺った。英文さんの妻、竹添あゆみさんが2020年の3月に開店し、毎週水曜日と土曜日に営業しており、店には手作りのベーグルやカンパーニュなどのハード系のパンを始めとする様々なパンが並ぶ。月末の水曜日には黒部市の菓子屋のスイーツの販売も行っている。「おいしいとき、考えるときを、共に」をコンセプトに活動している。パン屋だが、書店のコーナーや岸田木材(後述)のひみ里山杉¹²を店の前で無人販売している。商店街のイベントである「うみのアパートマ

¹² 2012年、氷見木材組合、富山県西部森林組合氷見支所、設計事務所、工務店等、氷見市などで「ひみ里山杉活用協議会」を発足し、ボカスギに「ひみ里山杉」と命名し、ブラ

ルシェ」に出店したことを契機に中央町商店街に店を構えた。パン屋は妻のあゆみさんが営業している。竹添さんは島根県出身で、大学進学とともに上京し、教師をしていた。高岡市出身のあゆみさんの父親が亡くなったことをきっかけに、2017年に東京から氷見市内に移住した。移住後は、南砺市の高校で教師をしていたが、現在は氷見市役所職員である。最初は氷見市のアパートに3年住んでいたが、パン屋の出店をきっかけに商店街の空き店舗に住むことにした。空き店舗をリノベーションして住んでいる。改装にはひみ里山杉が使われた。



写真12 考えるパン KOPPE 外観 (筆者撮影)



写真13 考えるパン KOPPE 店内 (筆者撮影)

客層は地元の方が多く、年齢層は幅広い。地元の人や顔見知りの人とは、会計を済ますまでの間に近況を報告し、世間話をする様子が見られる。東京から氷見へ移住してきた人には日本海側に住むときに気をつけるべき湿気対策を教える様子が見られた。

竹添さんには5歳になる娘さんがいるが、近所に住む人が子供に声をかけてくれることをきっかけに、大人同士で知り合いになることがあるという。また、商店街に住んでいることでお裾分けをもらうことや、地域のゴミ当番や神社の掃除で一緒になったときに話す機会があるという。交流目的で集まっているわけではないが、手持ち無沙汰になったときに話が生まれ、自然と交流する機会がある。竹添さん自身も歴史が好きで年配の方に話を好んで聞いていたこともつながりを持つことになったと感じている。商店街での暮らしは、子育て支援センターが近くにあることや近所の人との交流もあるため、子育てがしやすい環境だと感じており、勤務先も近くにあるため、車なしの生活ができていいという。竹添さんは中央町には必要なインフラが揃い、集約しているため、便利な町であると思っている。

「考えるパン KOPPE」では対話ができるイベントを開催している。イベントの一例とし

ンド化と活用促進されている。(農林水産省「ひみ里山杉の地域材利用に向けた取組み」参照)

て、ローカルジャーナリスト等を招き、トークイベントを開催し、それに併せ中央町を歩き、飲食店を訪れるという企画を行った。「ヒミー箱古本市」「もくもく市」(2-5 後述)にも参加している。また、「考えるパン KOPPE」オリジナルの冊子である『考えるパン KOPPE の考えたこと』を作成し、冊子には主に日々の暮らしや、移住後の暮らしの中で感じたことが書かれている。

竹添さんにこれからの商店街についてお聞きした。竹添さんは商店街が好きで、シャッターがしまっている雰囲気も好きであり、無理に変えたいとは思っていない。無理な計画を立てずに、偶然に合わせ、楽しみながらまちづくりをしていけば、持続可能になっていくと感じている。また、新しく出店する人はIターン層が比較的多かったが、地元がイベントや新規出店などで変化し、面白いことをやっていると知り、Uターンして戻ってくる人も見られるようになった。徐々にUターン層も増やしていければいいなと思うという。

2-6.Himi Brico Labo

「Himi Brico Labo」(図2⑥)の明松(かがり)洋介さん(26歳)に話を伺った。「Himi Brico Labo」は氷見市十二町にある140年続く製材所「岸田木材」の直営店である。2021年7月にオープンした。「岸田木材」は「木を全て使いきる」という理念により活動している。丸い木から四角い木材を作るときにどうしても余分なものが生まれてしまうが、それらも副産物と捉えている。おが粉は畜産やキノコ農家へ、端材を砕いた木片チップは製紙会社やバイオマス発電所に行っている。また、木も全て同じではなく個性があるので、それらを適材適所で使っていくことが大切と思い仕事をしている。さらに、地域の取り組みとして、地産地消を進めている。地域材の発信として「ひみ里山杉」のブランディング活動や暮らしの中で使えるものを提示することで、地域の山に関心を持ってもらうことを目指している。

「Himi Brico Labo」では主にひみ里山杉を使った木製品や製材過程で発生した端材やアウトレット木材を販売している。店内にはひみ里山杉木工作キットや杉やヒノキなどのウッドボールが並ぶ。ウッドボールはマッサージボールやアロマディフューザー、ペットの遊び道具として需要がある。また、店前には無料で提供している端材が入ったボックスが置いて



写真14 Himi Brico Labo 外観(筆者撮影)
※「松屋会館」は前の店の看板である



写真15 工作キットとウッドボール(筆者撮影)

ある。

明松さんは大阪府出身で、新卒で入社したことをきっかけに氷見に3年前に移住した。建築、まちづくりに関心があったため、関われるような会社を全国的に探していた。氷見は漁業のまちで、船を作るときに木材が多く使われていた歴史がある。製材所からのまちづくりというストーリーが作りやすいということで氷見にした。

岸田木材が中央町に出店することになった経緯を述べる。木材を切るときに出た木の端や規格外品がもったいないと思い、「考えるパン KOPPE」(先述) 店舗前で端材などの無人販売を始めた。無人販売は評判がよく、人とまちと山が繋がる場所になればいいなと思い、集まった資金で商店街に出店することにした。出店時は竹添さん(先述) から空き店舗となっていたパチンコ屋を紹介してもらった。

元々パチンコ屋だったが、貸出時はイベント用の倉庫として使われていた。ドアの塗装や看板もパチンコ屋の時のままにしている。改装した主な点は、以前に工房が入っていたので、防音の関係から断熱材を入れたことと、電気が暗かったのでLEDに変えたことだ。

地元の人や富山市や石川県羽咋市から木に興味がある人が客として来る。コロナ禍で木材が高騰したときに、ホームセンターよりも安く買うことができるため、DIY や自分で手作りすることができる人に需要がある。インテリアショップで買うまでもないような椅子を作りたい人が買いにくる。また、薪の販売も行っているため、キャンプのときに利用したいという客がくる。薪は自分で好きな薪を選ぶことができ、指定の米袋に詰め放題で、1袋1000円で販売している。客から「こういう木が欲しい」「製品を作って欲しい」といった要望を受けることがあるが、製品を作るとなると人件費がかかってしまうので、現段階ではその要望に応えられていない。自分で作ることができない人には向いていない店だと語る。

「Himi Brico Labo」はワークショップも行っている。土日に県内のショッピングモールなどで行われるイベントに出店している。ワークショップの内容は箸作りやベンチ作りなどである。色鉛筆作りは杉の木で芯を挟み、ボンドで接着させて作るので、数分で作ることができる。小さな子供でも作ることができるような企画を行っている。ワークショップは好評で、参加した親子が夢中になって取り組んでいる様子が見られるという。イベント以外にも学童保育に出張することもある。同じキットを使っても、一人一人の仕上がりが違うということが楽しめる要因になっているという。都内近郊でイベントを行ったときも多くの人が参加した。県内で開催したときよりも、子供だけでなく親も積極的だと感じた。明松さんは都会の方が自然に触れる機会が少ないからなのではないかと考えている。

「Himi Brico Labo」は中央町でもイベントを開催している。「ヒミ一箱古本市」(第1回2021年11月3日、第2回2022年9月25日)というイベントでは本を詰める箱を作るものである。「うみのアパルトマルシェ」の延長のようなもので、「暇だからやってみよう」という気持ちで開催した。「考えるパン KOPPE」の客で本が好きな人が来てくれて、好評だった。他にも「もくもく市」(第1回2022年3月19日、第2回2022年7月9日)というイベントも開催した。ペレットストーブが用意され、ストーブを囲んだ食事やおしゃべりを

することができ、木工作家の作品販売もされた。人の熱気の「もくもく」とペレットストーブの煙の「モクモク」と木（もく）をかけ、「もくもく市」と名付けた。開催するにあたり、木工屋の工房や関連する木の会社やペレットストーブの店に呼びかけた。ホームページでも募集したが、あまり集まらず、店を集めるのは大変だったという。他の商店街の店も知ってもらうために、イベントに出店する店舗の配置を工夫した。出店店舗が一直線上に並ぶのではなく、わざと離して配置することで、イベントにきた人が商店街を歩かないと全て回るできないようにした。近所の年配の方からは昔の商店街の様子に近い雰囲気を味わえて良かったという声があった。



写真 16 第 2 回もくもく市の様子 (明松さん提供)



図 4 第 2 回もくもく市マップ (明松さん提供)

営業していて感じる中央町の特徴について聞くと、人がいないということを挙げた。特に平日は人が少なく、歩いている人もあまり見かけない。人がいないということはデメリットだが、逆に言えば人がくるだけの余白があると捉えることができるという。現在の中央町は新旧が混在しており、そこが魅力ではあるが、新規出店が相次いでいて、なかなかひとつになりきれていないところが残念だと感じている。ひとつひとつの店は個性に溢れ、自由に営業できることも商店街の特徴だと思っている。アーケードについては、雪や雨を凌げるという利点はあるが、アーケードがあることで暗くなってしまおうというデメリットもある。そのため、ウィンドウショッピングには向かず、新しくお店を出す人はアーケードを嫌う場合もあるという。

商店街の将来について聞いた。明松さんは地価をあげるために中央町のブランド化ができればいいと語る。そういった意識があれば一体感ができ、弾けやすくなると考えている。また関係人口¹³をもっと増やしていきたいという思いを持っている。頑張ってももつのは 20

¹³ 関係人口とは移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域

年ではないかといひ、もし防災共同ビルがなくなったとしても満足して商売を終われるかが重要だと語る。中央町商店街の人たちはいい意味で将来を考えないようにしており、今を生活している人が多いと感じるといふ。

明松さんも現在中央町の元々店があった場所に住んでいる。店舗に改修しようかと思つたが、出入り口がひとつしかないため、住居に入る時に店を経由しなくてはならなくなるので不便になってしまうといふ。なかなか改修に至ってはいないが、シェアキッチンのようなスペースにし、イベント時には調理し、路面で販売することが可能な形にすることで、これから店を持ちたい人や移住を考えている人のサポートになればと考えている。また他の案として、朝ご飯を食べる場所が漁港の海鮮丼ぐらいしかなく、これからゲストハウスが増えていくにあたって食事ができる場所が不足してくるようになり、朝ごはんの美味しい店を作るのもいいのではないかと考えているといふ。

2-7.FCTRY (ファクトリー)

「FCTRY」(図2⑦)は中央町商店街ではないが、防災共同ビルの中にあり、2020年6月にオープンした新しい店である。シルクスクリーンという技法を使ったオリジナルのTシャツを作ることができる店だ。シルクスクリーンとは細かい網の目のスクリーン版にインクを乗せて、押し出すことにより印刷する技法である。シャツやトートバックなどに好きなデザインを刷ることができる。自分で考えたデザインを持ち込むことも可能であり、人によって刷り方に違いが出るのが魅力だ。シルクスクリーンの体験が中心の店だが、缶バッジの制作もでき、自分の好きな画像を缶バッジにすることができる。また、セレクトした商品の販売も行っている。店主の萩原麻衣子さん(39歳)、田中祥恵さん(41歳)に話を伺った。



写真17 FCTRY 外観 (筆者撮影)

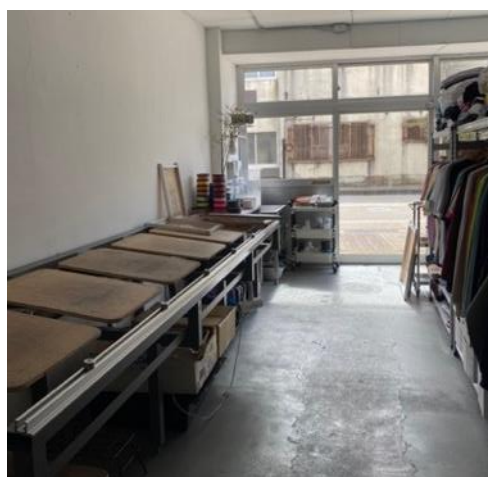


写真18 シルクスクリーンの台 (筆者撮影)

と多様に関わる人々を指す言葉である。

萩原さんは氷見市出身で、短期大学への進学で東京に2年間いたが、就職で氷見に戻った。田中さんも氷見市出身だ。2003年から氷見市の幼稚園で15年間保育士をしていた。同じ職場で二人とも洋服が好きということで意気投合し、店を出すことに決めた。保育士を辞めるときに抵抗はなかったとは言い切れないが、人生一度きりだから好きなことをしたいという気持ちが強く、保育士を辞めた。その後1年ほどは富山市でそれぞれ別のアパレルショップに勤めた。店を出すときにセレクトショップなど、どのような店をしたいかという話になったが、オンラインではできないことができる店舗にしたいという話になった。シルクスクリーンに出会い、体験できる店にした。2019年に氷見市商工会議所の創業塾¹⁴を受講し、2020年6月に中央町に店をオープンした。

店がある場所は、元々菓子屋が所有していたが、空き店舗になっていた。売り店舗ではなかったが、場所が気に入ったため、持ち主を探して直談判を行った。店があるのは1階の部分だけであり、現在2階と3階は使われていない。店のリノベーションは元々の空き店舗の作りを活かしつつ、改装した。店にはトイレがないが、近くにある「氷見市IJU応援センター・みらいエンジン」(2-1参照)のトイレを使用することで、トイレの問題を解決した。客層は学生やカップル、年配の方まで年齢層は幅広い。氷見市外だけでなく、富山県外からの客も多く、インスタグラムで「FCTRY」のことを知り、訪れる客もいるという。土日だけでなく、平日も客が訪れる。また、SNSなどで事前に店のことを知ってから訪れる人もいるが、観光客が店の近くを歩いていて、立ち寄る場合や、近くの宿泊施設の宿泊客が訪れる場合もある。年配の方で、孫の絵を記念に残したいという人や旅の記念品としてTシャツを作りたいといった観光客の人もいる。リピーター客も多く、その人が知り合いを連れて



写真19 スクリーン版 (筆者撮影)

くることで新たな客の輪が広がる。

シルクスクリーンを体験した人からは、自分で作ることが楽しいという声や、自分が描いたデザインが思ったよりも早く作ることができてよかったという声を聞くという。3歳ごろから体験を行うことができるので、幅広い客層が訪れる要因にもなっている。

「FCTRY」は受注もできるため、部活や飲食店でお揃いのものを

¹⁴ 氷見市商工会議所が開催し、座学による創業時に必要な知識などを身につけ、補助金や融資の資金調達の支援を行っている事業である。(中部経済産業局「富山県氷見市」参照)。

作りたいという方も利用する。中央町で新しく店を始めた若い方も記念の T シャツや看板を作りたいということで利用してくれたという。自分でデザインを作ることはハードルが高いという人でも、「FCTRY」ではあらかじめデザインされているスクリーン版が多く用意されているので、気軽な気持ちで T シャツ作りを体験できる。

客の中には、家族で T シャツ作りを体験し、普段会話することのない父と娘の会話を聞いて嬉しく感じたと話す母親もいたという。また、その場で客同士が T シャツ作りを通して、話が盛り上がり、つながることで、一緒に仕事をした話を聞いたことがあるという。販売だけの店舗には生まれにくいような会話が体験を通して生まれやすいといえる。また、老舗の店で記念のノベルティを作りたいが、ノベルティを作ったことがなく、オンラインなどでの注文は不慣れだという客がいた。そのような人でも「FCTRY」では店頭で一つずつ相談してデザインを決めることができる。相談しながらデザインを決めていく過程を楽しめる。自分でオリジナルのデザインを作れるので、好きなアーティストのコンサートにいった時に、そのアーティストの画像を使って目立つような T シャツを作ることができる。お気に入りのアイドルやキャラクターなどをさまざまな形で応援する活動である「推し活」にもピッタリな店である。

「FCTRY」は「PRINT HIMI」という企画を行った。第1弾を2022年3月12日から3月20日にかけて開催し、氷見市で見つけた看板のグラフィックを20点あまり採取して、T シャツやスウェットに印刷した。コロナ禍で気持ちが沈んでいるのを復活させる目的で行われた。「氷見は何もないところ」という声をしばしば聞くことがあるが、普段何気なく見過ごしている氷見の街並みの中に、氷見でしか見られない景色はたくさんあるかもしれない、街を見る視点が変われば、氷見の良さを再発見できるかもしれないという思いを込めた企画である。この企画では「雨具専門店もりやま」(2-2参照)の看板が使われた。また看板がある場所のマップを作り、観光客だけでなく、県内の人でも新たな店を発見することができるようにした(図5)。2023年7月29日から8月14日に第2弾を行った。第2弾では街中の「氷見」のフォントだけを採取し、「氷見」という文字に特化した企画を行った。

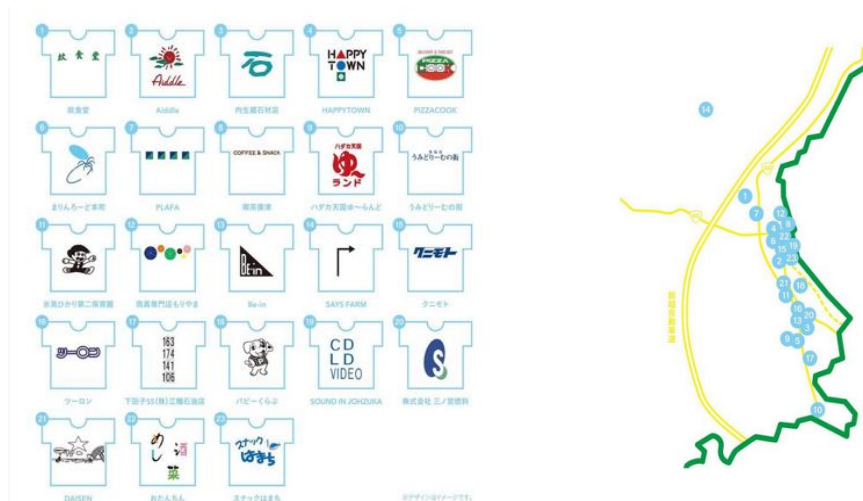


図5 第1弾「PRINT HIMI」のときのT シャツとマップ

お気に入りの氷見のフォントを見つけて、自由に構成してプリントすることができる。この企画は 100 人ぐらいの客が楽しんだという。

また、萩原さんと田中さんに中央町の他の店との交流について聞いたところ、近くの飲食店にご飯を食べにいった時に話をするぐらいだという。あまり深い関係になったとは感じてはいないが、「FACTRY」の客に中央町の他の店を紹介し、行ってもらうといったことはあるという。

3.店以外での交流

3-1.中央町商店街振興組合

中央町商店街振興組合について竹添さんに聞いた。1960 年代、防災街区造成組合が立ち上がったのと同時期に中央町商店街振興組合ができた。組合で商店街の管理や総会が行われている。現在組合の会員数は 50 名ほどである。アーケード費用を払うと会員になることができる。中央町に住んでいなくても、アーケード費用を負担すれば会員になれるが、組合の役員には住んでいる人が中心となって就いている。組合の理事だった方が最近多く亡くなり、新たに若い人が理事になった。徐々にバトンタッチしていくことが重要だという。

現在中央町の各物件のオーナーははっきりしており、持ち主が不明という問題は発生していない。各物件は個人所有であるため、管理も個人で行っている。しかし、アーケードは氷見市が所有している。アーケードは防災共同ビルができたときと同時期である昭和 46 (1971) 年にできた。氷見市が所有することで固定資産税がかからないといったメリットがある。ただ実際の管理は氷見市中央町商店街振興組合が行っている。現在、営業している店は 27 店舗だが、営業している、していないに関わらず、アーケードが家や店の前にあるところは組合の会員となっている。その会員からアーケードの維持管理費を集めている。集め方は、各物件の間口分を月に一度払うという方法だ。各物件の間口の広さによって違いはあるが、大体月 1000 円から 2000 円ほどである。年間で 130 万円ほど集まる。集めた管理費はアーケードの電気代などに充てられる。また、管理費や修繕費に使われるだけでなく、いつか取り壊す時のための積立金にも充てられるという。

2023 年 6 月に第 54 回通常総会が行われた。総会の出席者は 20 人いかないぐらいで、30～80 代の人が集まるが、中間層である 50 代は 1 人か 2 人ぐらいしかいなかったという。総会は前年度の収支決算報告や予算、「うみのアパートマルシェ」の開催やアーケードの補修工事が主な議題内容となっている。総会の雰囲気は年齢層が上の人は商店街で新しい取り組みを提案したときに、文句を言われることはあるが、最終的には納得してもらえることが多いという。年配の人だけだと、体力や元気がないことから、話が暗い雰囲気になってしまう。そこで暗くなりすぎないように若い人たちが新たな提案をしていくことが多いという。

総会では、住民から防災共同ビルの今後についての話もされた。「建てる時も市役所の

補助があったので、壊すのも市役所で補助を出して欲しい。」「経済的余裕がないので、市役所が費用を出して壊して欲しい。」といった氷見市に任せたいという住民も少なからずいる。しかし、現在氷見市では中央町商店街や防災共同ビルを今後どのようにするのかという方針は特にはない。そのため氷見市任せではなく、自分たちでどうにかしないといけないという思いを持つ人もいる。地区住民間でも防災共同ビルに対する考え方に差があるようだ。

3-2.組合以外の交流

商店街の組合とは別に、月に一度ほど、商店街の若い世代である竹添さんや明松さんを含む5人ほどで集まる機会がある。特に議題内容は決まっておらず、新しく出店したい人がいることや、空き場所があれば貸し出せるようにするために情報交換などを主に行っている。総会よりも堅苦しいものではなく、気軽に話し合いをすることができる。商店街の将来を担う若い世代の中で、コミュニティができている。

4. 防災共同ビルに対する課題

先述したが、中央町商店街は防災共同ビルで構成されている。初めてビルを見た時は、隣どうしが繋がっているため、騒音トラブルが発生しているのではないかと思っていた。しかし住民に話を聞くと、音漏れは特に気にならないという声が多かった。鉄筋コンクリート製であることが関係しているのではないかという。音漏れよりも問題点として挙がっていたのは、雨漏りしている箇所がある、勝手に取り壊すことができないなどという声だった。特に雨漏りに関する問題はインタビューした店舗で多く聞いた。「雨具専門店もりやま」の守山さんは、雨漏り対策として、屋上の防水工事を行ったことがあるが、傾斜している構造のため、工事をしていない隣の屋上から雨水が流れてきてしまったことがあるという。「喫茶モリカワ」の森川さんからは、一度雨漏りの工事をしたが、施工会社が潰れてしまい、どこにも文句が言えなくなってしまったという話を聞いた。他にも屋上にある水管から木が生えているが、抜いてしまうとそこから雨漏りしてしまうため抜けないという話も聞いた。雨漏りの問題は老朽化だけでなく、屋上も繋がっていることも大きく関係している。雨漏りの問題を解決するには、自分が住んでいる物件の屋上だけを工事しても意味がなく、全体的に工事をしなければいけない。しかし一斉に工事するには費用が多くかかってしまい、困難である。明松さんは、空き店舗に新規出店したいという時に、電気や水道の確保、耐震性が重要な条件に挙がるが、防災共同ビルで大きな条件になるのは雨漏りだと語った。また、磯辺さんはアーケードが錆びてしまい、建物とアーケードの間から雨が滝のように落ちてくることに悩んでいると言った。防災共同ビルに住む上で雨漏りは大きな問題であると言えるだろう。

勝手に取り壊すことができないという声もビルの構造から生じる問題ではあるが、商店街には店の後継者が少ないという問題も絡んでいる。店を自分の代で閉店し、取り壊したい

という人がいるが、一部分だけを取り壊すことはできないので、玄関だけを改装して住宅にしてしまうという。また、一斉に取り壊すとしても、雨漏り対策の工事と同様に莫大な費用がかかるという問題が発生する。

他にも防災共同ビルに住む上で不便な点として、階段の勾配が急であるということが挙げられた。森川さんは囲碁クラブの客にコーヒーを運ぶために、1階と2階を何度も往復するが、年々辛くなってきているという。急な階段は高齢者にとって上り下りが大変であり、危険である。今は健康にのぼれていても、将来的には大きな問題になるだろう。

老朽化などが問題点として挙げられる防災建築街区だが、もし街区全体が何らかの災害で倒壊してしまったときの対応として、現時点で氷見市からの具体的な策はない。ビルの所有者はそれぞれおり、個々に管理しているが、街区全体が崩壊するとなると、大きな範囲が被害に遭う。氷見市としても無視することはできないが、実際に被害がない段階ではどうなるかわからないという。

5.まとめと考察

5-1.防災共同ビルとともに変化する商店街

防災建築街区及び防災共同ビルが特徴的な中央町について述べてきた。防災共同ビルには老朽化が進む、雨漏りしている箇所がある、高齢者向けの建物ではないなど懸念される点がある。中央町に限ったことではないが、商店街の高齢化や後継ぎ不足といった問題があり、現在営業中の店舗でも、後継ぎがおらず、廃業し、空き家になるという問題が発生すると考えられる。全国的な問題と、防災共同ビルという構造から生じる課題が組み合わせり、数十年後どのような姿になっているかはわからない。中央町商店街はどちらの課題にも対応していく必要があると考えられる。防災共同ビルのネガティブな点を挙げたが、新規出店をした店舗の中には、防災共同ビルの作りを全て変えているという店舗は見られない。アーケードについている看板を昔のまま残している場所や、改装した店でも、前にあった店舗の名残が感じられる場所がいくつかある。防災共同ビルの全てを新しいものには変えてはいない。新しいものに作り変えることは金銭的な問題からできないという理由もあるが、ビルの構造や前の店舗の姿を残しながら、変化している。ビルを壊し、一から新しいものを作るという発想ではないとわかる。商店街の空き店舗に店が入り、その流れに乗り、新たな店が出店するという緩やかな変化をすることで、古い建物と新たな店が組み合わせあった独特な雰囲気を生み出していると感じている。

5-2.商店街で起こる交流

各店舗によって多少の違いはあるが、中央町商店街の客層は、車を使って訪れる氷見市内の地元客、常連客が多い。顔見知りであるため、会話は、買い物や飲食時の注文以外に世間話や、近況の話が中心である。最近、大型スーパーやコンビニエンスストアなどではセルフ

レジを多く見かけるようになってきた。飲食店でもタッチパネルで注文できる店舗は増えている。しかし商店街での買い物は、そのような会話の省略はなく、しっかりと対話をしているように感じた。また、観光客の場合でも何気ない会話から客がどこから来たのか、どのような経緯で訪れたのかを把握することができる。特にひとりで訪れる人は、カウンター席に座ると、自然と店主との距離が近くなるため、会話が生まれやすい。

また、中央町商店街には組合があり、アーケードの管理や、イベント開催の検討などが行われている。経営者の高齢化や、売り上げや会員数の減少の理由などから全国的に商店街の組合が解散することが起こっている。しかし、中央町商店街振興組合では、定期的な総会が開催され、役員世代交代も行われつつある。商店街でイベントの開催や建物に対して何かすることになった時に商店街全体の方針を決めるための必要なコミュニティであると考えられる。

さらに、店主としてだけでなく、中央町に住んでいる人は住民としてのつながりもある。ゴミ当番や神社の清掃で一緒になるときに会話したり、近所の人からお裾分けをもらったりする。そこで、知り合いになれる機会もある。また、現在、店を営業していなくても、かつて商店街に店を持っていた人も住民の中にいるので、話の共通点が見つかりやすい。

比較的前から営業している人から、「商店街に活気が戻るとは思えない」という意見や、「寂れる一方だ」という意見を聞いてきたが、中央町に新しい店が増えていることに対して、悪い意見は聞けなかった。呑多喰の磯辺さんが「新しい店ができたときに、歓迎できるような体制を作っていきたら良い」と語っていたように、昔の活気がある姿を知っている人にとって、新たに店ができることは嬉しいことなのではないかと思われる。

他の店とのつながりはあるかと店主の方に聞いたところ、「あまり深く繋がっているとは思えない」といった回答があった。しかし、話を聞いていく中で、互いの店を訪れる、客に他の店を紹介するといったつながりは見えてきた。深くは繋がってはいないかもしれないが、全く繋がっていないわけではない。店主どうしが知り合いになれる機会はいくつかあり、新規出店をしても、全く知らない人が営業しているというパターンが中央町商店街では起こりにくいかもしれない。中央町は、最初は知らなくても、営業または居住することで徐々にどういう人がやっている店なのか知っていくことができる場所である。新規出店者からすると、周りにどのような人がいるのか把握しやすく、溶け込みやすいといった利点になり、昔から営業している人にとってもどのような人が来たのか知ることができるという利点になる。商店街は、店舗、客、住民という立場の人々が会話を交わし、細かな情報交換の場として役立っているのだと考えられる。

5-3. 商店街の価値

聞き取り調査の中で、店主の方に中央町の魅力について聞いたら、「いいところなんてない」「何もないところだ」という回答があった。しかし、商店街の若い世代や外からきた人の中には、一般的には弱点とも思われる防災共同ビルに、レトロで雰囲気があるという価値

を見出している人がいることや、まちづくりに関心を持ち、中央町や氷見市にもっと目を向けてほしいという人もいることがわかった。私が中央町商店街を調査するきっかけになった「レトロな町だ」という声や、「喫茶モリカワ」のような昭和の雰囲気が満載な喫茶店を求めて訪れる人もその中に入るだろう。

商店街や防災共同ビルの外観だけに注目していると、古い建物で、シャッターが閉まった商店街という印象から、価値がないと思われるかもしれない。しかし、中央町商店街には、共通の趣味で人が集まる場や世間話をする場がある。そういった場所は人々にとって交流や会話ができ、気軽に訪れることができる場として価値があるのではないかと思う。また、特定の店を目当てに訪れなくとも、町を歩きながら気になった店に入ってみることや、雰囲気がある町並みに気づくということもできる。氷見駅から主な観光スポットであるひみ番屋街までの道のりで中央町を歩くきっかけを増やすことで、中央町に注目し、価値を見出す人も増えていくのではないかと思った。

おわりに

本章では、中央町商店街で起こる人々の交流に着目して見てきた。調査を始めたときは約60年前にできた建物である防災共同ビルに対して、不満を抱いている人が多いのではないかと思っていた。しかし、調査を進めていく中で、魅力はないという声を聞くことはあったが、中央町で店を営んでいる人で客との会話を楽しんでいる人や、商店街の雰囲気が好きだという人に多く出会ってきた。人それぞれ抱く思いに違いはあるが、中央町商店街という場所に何らかの愛着を持っていることが感じられた。

私は普段の買い物や飲食で、自ら店員や客と話すといったことはまずしない。しかし今回の調査では客と店の人との会話に入るといった機会が多くあり、戸惑うことも多かったが、自分の知らなかったことを知り、さまざまな人の会話を聞く楽しさを感じた。町の様子を観察も含めて、普段の生活では目を向けることのないことに気づくことができたのは、自分の中でも貴重な経験であったと思う。

謝辞

今回の調査を行うにあたり、非常に多くの方にご協力いただきましたことにお礼を申し上げます。拙い文章ではありますが、報告書をまとめることができたのは協力していただいた皆様のおかげです。度重なる訪問を快く受け入れてくださった竹添英文様、突然の訪問やお声がけに関わらず、ご協力して下さった中央町の皆様、本当にありがとうございました。

参考文献

氷見市史編さん委員会編『氷見市史5 資料編三 近・現代』、2003年。
中央出版社『最新氷見市住宅明細図』、1965年。

参考にしたウェブサイト

氷見市「行政区別人口世帯数統計表」

<<https://www.city.himi.toyama.jp/material/files/group/15/R0512inkouichiran.pdf>> (最終閲覧日 2024 年 1 月 4 日)

衆議院「法律第百十号（昭三六・六・一）」

<https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_housei.nsf/html/houritsu/03819610601110.htm> (最終閲覧日 2024 年 1 月 4 日)

イッツコム公式サイト「富山県の古い街並み」

<<http://home.h09.itscom.net/oh-net/toyamaken.html>> (最終閲覧日 2024 年 1 月 4 日)

専修大学「ヒアリング記録：氷見市中心部における防火建築帯の実態」

<<https://core.ac.uk/download/pdf/200211658.pdf>> (最終閲覧日 2024 年 1 月 4 日)

海風ブラザーズのぶらり商店街「ぶらり第 1 話～防災街区誕生秘話編～」

<<https://ubburari.mystrikingly.com/blog/6ce5d3d3f32>> (最終閲覧日 2024 年 1 月 4 日)

農林水産省「事例⑦ ひみ里山杉の地域材利用に向けた取組み」

<<https://www.maff.go.jp/j/shokusan/sanki/nosyoko/attach/pdf/index-82.pdf>> (最終閲覧日 2024 年 1 月 4 日)

中部経済産業省「富山県氷見市 FCTRY」

<<https://www.chubu.meti.go.jp/e45sogyo/zirei/zirei2/sogyosya/toyama/himi.pdf>> (最終閲覧日 2024 年 1 月 4 日)

第2章 氷見市庁舎の歴史と市民とのつながり

大関 宏弥

はじめに

氷見市庁舎を初めて見たとき、多くの人々はそれが市庁舎であると一目で理解することはできないであろう。「旧富山県立有磯高校」の校舎、体育館を再利用して開かれた現在の氷見市庁舎は、かつての用途の面影を色濃く残している。

氷見市庁舎は2014年に氷見市丸の内から氷見市鞍川（くらかわ）へ移転したが、現在の市庁舎は廃校になった高校の校舎・体育館が市庁舎に転用された日本初の例である。逼迫した地方財政と前氷見市庁舎が抱えた問題を一挙に解決し、なおかつ遊休施設を有効活用した案として、この取り組みは数々の賞を受賞した。しかし、現在の公開資料から移転前後の人々の意見を窺い知ることは容易ではない。

そこで、私は氷見市庁舎の移転について、その移転はどのような課題に基づいて行われ、氷見市に住む人々はどのような意見を持っているか興味を抱き、調査したいと考えた。

主な調査の方法は、氷見市でのフィールドワークである。氷見市を訪れて観察し、また、氷見市に暮らす人々や氷見市で勤務する人々へのインタビューを行うことによって情報を収集した。

第1節では、本稿の考察の対象の一つである現在の氷見市庁舎に関する情報を述べる。第2節では、氷見市制成立以降の氷見市庁舎の歴史について述べ、前の市庁舎から現在の市庁舎への移転の理由を氷見市に暮らす人々や氷見市職員の語りから考察する。第3節では、現在の市庁舎がある場所とかつて市庁舎があった場所のそれぞれ近くに暮らす人々、また、そのどちらでもない地域の人々の話から、氷見の人々の市庁舎移転に関する意見を記す。第4節では、これまでのフィールドワークで得られた市民、利用者の施設に対する要望や氷見市職員へのインタビューから、氷見市庁舎の移転はどのような意味を持ち、どのような意思がみられるかを考察する。

1.現在の氷見市庁舎の概要

1-1.氷見市庁舎の情報

現在の氷見市庁舎は氷見市鞍川に位置する「富山県立有磯高等学校」の校舎・体育館を再利用する形で移転された。外観にはそれほど手が加えられていないため、現在でも学校と見まがうようである。



写真1 現在の氷見市庁舎（筆者撮影）



写真2 裏から見た氷見市庁舎（筆者撮影）

市庁舎として大きな部分を占める A 棟と B 棟は、それぞれ旧有磯高校の第二体育館、第一体育館として利用されていた建物であり、いずれも 1 階にピロティを持つ二層構造だった。また、この体育館は第二体育館が平成 3 年、第一体育館が平成 8 年に竣工した建物で、市庁舎として利用するための耐震性や強度が基準を満たしたものであった。

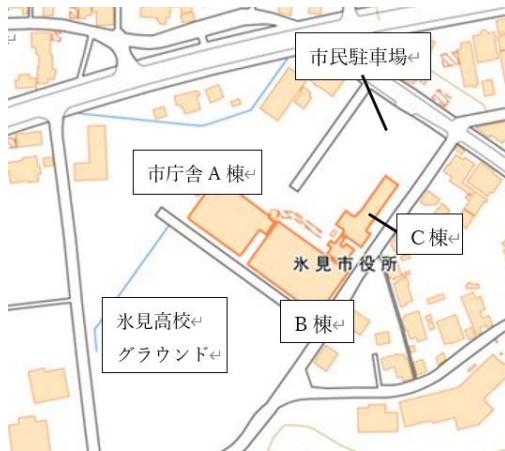


図1 現在の氷見市庁舎の配置
(地理院地図を基に作成)



図2 有磯高校の校舎の配置
(ゼンリン地図を基に作成)

現在では、A 棟は 1 階に地域協働スペースやサーバー室をそなえ、2 階は市議会が行われる議場が設けられている。B 棟は 1 階に市民課、福祉介護課、財務課などが置かれ、2 階には市長室と副市長室、財務課、地域創生推進課などが置かれている。

A 棟の地域協働スペースとは、3 つの部屋に分かれており、それぞれ「OCEAN」、「FOREST」、「DREAM」と名付けられている。市民が参加する会議の多くや期日前投票がここで行われ、大きさを変えることによって人数の増減にも対応できる仕組みを持つ。

A 棟

フロア	概要
1 階	教育委員会事務局、地域協働スペース サーバー室 など
2 階	議場、議長・副議長室 議会局、全員協議会室 など

B 棟

フロア	概要
1 階	市民課、福祉介護課 子育て支援課、監査委員事務局 など
2 階	市長室、商工振興課 財務課、総務課 など

C 棟

フロア	概要
1 階	農林畜産課、道路課 ふるさと整備局、農業委員会事務局 など
2 階	災害対策室、会議室 市政記者室 など
3 階	会議室 ロッカー室 など

農林畜産課や道路課など、一部の部署や会議室は、旧有機高校の校舎棟を用いた C 棟に置かれている。C 棟も高校校舎としての面影を残している。

校舎棟は 1966（昭和 41）年に竣工した建物であり、1968（昭和 43）年に竣工した前市庁舎からの移転では耐用年数に差がないと考えられ、市庁舎の主たる移転先には適さないとみなされた。しかしながら、A 棟、B 棟の面積の問題から、すべての部署、会議室を A 棟、B 棟に置くことはできず、C 棟が部分的に利用されるに至った。

氷見市職員の A さんによると、利用者の



写真 3 C 棟の廊下（筆者撮影）

高校のドア、黒板を仕切りや掲示板に再利用した。

大まかな傾向として、B棟1階を訪れるのは一般の人々、C棟1階を訪れるのは事業者というすみ分けがなされているという。



図3 市庁舎と氷見市芸術文化館(地理院地図を基に作成)

インタビューで「氷見市は車社会である」や「氷見市では車がなければ生活できない」といった意見が複数の回答者から述べられたように、氷見市は自家用車での移動に非常に強く依存した地域である。インタビューの際にも、どのような交通手段を用いて市庁舎に向かうかを問いかけたが、この質問に回答したほぼすべての回答者が「自家用車・公用車」を挙げた。自家用車による来庁の需要に応えるため、現庁舎には118台の自動車を収容可能な市民駐車場がある（この駐車場のほかに職員のための駐車場も用意されている）。Aさんによると、期日前投票の最も混雑する時間などの特異な状況を除けば、来庁者に不自由を与えない規模の駐車場が確保されている。

上記の需要に加え、氷見市庁舎が十分な広さの駐車場を手に入れたことにより、他の公共施設で行われるイベントのサテライト拠点としても活用できるようになった。具体例として、近年建設された「氷見市芸術文化館」が挙げられる。芸術文化館でのイベントで駐車場が不足したとき、氷見市庁舎に隣接する駐車場を提供した例がすでにあるという。

1-2.氷見市庁舎へのアクセス

氷見市での調査で「氷見は車社会である」と複数人から述べられたことから、現在の氷見市庁舎へのアクセスにおいて、氷見市民と氷見市職員にとって最も身近な交通手段は自家用車であると考えられる。現在の市庁舎の付近を走る幹線道路には、国道160号と国道415号（鞍川バイパス）があり、この道路は氷見市内からの自家用車でのアクセスを想定した際には、氷見市民にとって選択されやすい道路であると考えられる。

国道160号は、総延長が45.3キロメートルの国道であり、起点の石川県七尾市から終点の富山県高岡市を結んでいる。国道415号は、総延長が67.7キロメートルの国道であり、

起点の石川県羽咋市から終点の富山県富山市を結んでいる。このうち、国道 415 号は比美町商店街をはじめとした市街地を通る国道であるが、かつてはこの道が国道 160 号に制定されていた。「旧市街地の中心を通るため、道路の拡幅が困難であり、また、高度成長期の交通量の増加」に対応するため、「国道一六〇号氷見バイパス」が考えられ、1970（昭和 45）年に事業が開始された。1996（平成 8）年にバイパスの全線が開通したが、その後も道路拡張のための工事が続けられた（氷見市史編さん委員会 2006）。

上記の幹線道路以外にも、前氷見市庁舎が位置していた丸の内や比美町商店街からは、県道 312 号によるアクセスも可能である。また、能越自動車道を利用し、氷見 IC から国道 415 号線を経由して氷見市庁舎を訪れることも可能である。氷見市には氷見 IC、氷見北 IC、氷見南 IC の 3 つのインターチェンジが設置されており、また、この 3 つのインターチェンジを含む区間（高岡 IC から七尾 IC まで）は無料区間である。能越自動車道は氷見市庁舎を訪れる市民の利用のみならず、氷見市職員の通勤ルートを選択肢でもあるという。能越自動車道は「石川県輪島市を起点とし、富山県氷見市、高岡市を経由して、小矢部市に至る」高速道路である（富山県道路公社）。氷見市に設置されている 3 つのインターチェンジのうち、高岡北 IC から氷見 IC までの区間（氷見南 IC もここに含まれる）が 2007（平成 19）年、氷見 IC から氷見北 IC までの区間が 2009（平成 21）年にそれぞれ供用を開始した。

1-3.有磯高校について

前述のとおり、現在の氷見市庁舎は、旧有磯高校の校舎と体育館を再利用する形で開かれた。

『氷見市史 2 通史編二 近・現代』によると、氷見市では 1948（昭和 23）年の 4 月 1 日に「氷見高等学校」、「氷見女子高等学校」、「氷見農業水産高等学校」が誕生し、同年の 9 月 1 日にはこの 3 つの高校が併合され「氷見高等学校」が発足した。また、このとき発足した氷見高等学校のうち、農業科、水産科、農業女子科を設置した氷見高等学校の分校が生まれた。農業女子科の廃止と家庭科の設置ののち、農業科、水産科、家庭科が氷見高等学校から分離され、1951（昭和 26）年の 4 月 1 日に有磯高校が誕生した（氷見市史編さん委員会 2006）。

有磯高校は氷見高校との統合によって 2012（平成 24）年に閉校したが、新しい氷見高校には「農業科学科」、「海洋科学科」、「生活福祉科」といった、旧有磯高校の要素を受け継いだ学科が設置されている。

ところで、旧有磯高校の敷地のすべてを氷見市が取得した



写真 4 氷見市庁舎裏にある看板
(筆者撮影)

旧有磯高校の一部の土地、建物は氷見高校の授業、部活動に利用されている。

わけではない。旧有磯高校のグラウンドは氷見高校の生徒の部活動にて使用されており、また、同敷地内に氷見高校の農業実習棟が置かれている。

過去の氷見市議会では、氷見市発祥の定置網技術のタイ国への指導を行った際に、旧有磯高校の生徒と一緒に参加し、学習体験を行ったことや、旧有磯高校の生徒が加わった市の代表団がコスタリカに派遣され、定置網に関する指導を行ったことが紹介されており、特異な学習の機会が与えられていたことが読み取れる。また、市議会では「有磯高校は創校以来、市内地場産業を支える人材の育成を使命としてきた学校」という発言もなされていた。氷見市の人々は、進学志向の氷見高校に対し、有磯高校は氷見市の農業、水産業を支える技術・知識を持つ人材を育成する学校であるという期待を持っていたようである（氷見市）。

2.以前の市庁舎との相違点・問題点

本節では、以前の氷見市庁舎と現在の氷見市庁舎の相違点およびそれぞれの市庁舎の問題とされている点を述べる。

現在の氷見市庁舎は「三代目」の市庁舎であり、この市庁舎に至るまでに初代、二代目の市庁舎が利用されてきた。本節では、この市庁舎のうち、二代目の市庁舎と現在の市庁舎について重点的に述べる。本節で紹介する問題点は、氷見市でのフィールドワークで交流した氷見市の人々の意見と、氷見市庁舎でのインタビューに応じてくださった氷見市職員の A さん、B さん（いずれも男性）の意見、また、A さん、B さんが提供してくださった資料に基づくものである。

2-1.初代の氷見市庁舎について

初代氷見市庁舎（以下、本節では「旧氷見市庁舎」または「旧市庁舎」）は、もとは氷見町役場として利用されていた建物であった。氷見市の前身の氷見郡、その一部である氷見町は、1938（昭和 13）年 9 月に大火に襲われ、中町（現在の比美町）にあった氷見町役場も被害を受けた。大火の後に再建された氷見町役場が、氷見市制の施行の際に旧氷見市庁舎として転用された。旧市庁舎が手狭になり、別館が 1959（昭和 34）年に増設され、その後に旧市庁舎と西隣の氷見消防署跡地に、二代目の市庁舎の本館となる建物が 1968（昭和 43）年に築かれた（氷見市立博物館 2014）。

1963（昭和 38）年に発行された『氷見市史』では、旧氷見町は「旧氷見郡内における唯一の町」であり、「商業が盛んであ」ったとされ、商業に関係する、または公共の施設として、氷見商工会議所や氷見郵便局、氷見駅などがあった。交通についても「市の中心部であ」ったため「扇のかなめのようにバスの発着は極めてはげし」かった。「国道に沿うて店舗が並び」、またアーケードが設置されるなど、旧氷見町は、旧氷見郡の中でひとときわ栄えていた場所であると考えられ、市制が施行される際に市庁舎がおかれる場所に選ばれることは想像に難くない（氷見市史編修委員会 1963）。

バスの利用が現在よりも盛んであったとみられる『氷見市史』発行当時において、交通の都合上、公共施設が一つの地域に集中しているのは都合がよく、のちに自家用車の普及に伴い駐車場の不足が指摘されることになってしまおうとしても、旧氷見町が初代市庁舎の設置、また、二代目の市庁舎の建設に適し、時流に即した立地であったと考えられる。また、上記のように公共施設が旧氷見町に多数存在していた都合上、「氷見は車社会である」と表現されるほど自家用車が普及することを予期していたとしても、駐車場を確保できる郊外に氷見市庁舎を設置するのは、その当時には現実的ではなかったと推測される。

2-2.前氷見市庁舎について

二代目の氷見市庁舎（以下、本節では「前氷見市庁舎」または「前市庁舎」）は本館が1968（昭和43）年竣工、別館が1959（昭和34）年竣工の建造物だった。前市庁舎は氷見市丸の内に位置しており、比美町商店街から程近いところであった。

Aさん、Bさんの資料によると、前氷見市庁舎の主な問題点には①耐震性の低さ、②津波による被害の危険性、③市庁舎の老朽化、④窓口の分散、⑤駐車場の不足、⑥前氷見市庁舎の利用の障壁となる構造があった。また、資料では挙げられなかったものの、⑦前市庁舎の前を走る道路が狭かったこと、⑧来庁者が階をまたいで「たらいまわし」にされていたことも、問題点として明らかになった。

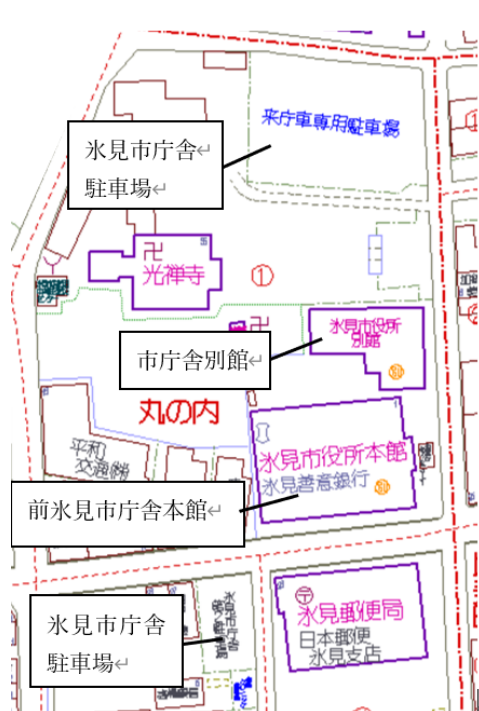


図4 前氷見市庁舎の配置
(ゼンリン地図を基に作成)

① 耐震性の低さ

② 津波による被害の可能性

氷見市の資料によると、震度6強クラスの地震で倒壊または崩壊の危険性が高く、人命に危機が及ぶ程度であったとされ、前市庁舎は耐震性の問題が指摘されていた。実際に前市庁舎で業務にあたったAさん、Bさんからも「前市庁舎は、地震が来るたびに命の危険を感じるような建物だった」や「目の前の道をトラックが通るだけでひどく揺れた」といった発言が出る状態であった。地震に付随する問題として、津波に関する問題も存在していた。前市庁舎は氷見漁港に近く、氷見市の人々から「前市庁舎は海拔0メートルの場所にあった」と指摘を受ける立地だった。また、前市庁舎は地上から階段を降りることによって1階、階段を上ることによって2階に入る構造であり、1階は半地下構造であった。このため、津波が発生した際には津波による被害の可能性もあった。

③ 市庁舎の老朽化

前氷見市庁舎の老朽化について、前述のとおり前市庁舎は本館が1968(昭和43)年竣工、別館が1959(昭和34)年竣工の建造物であった。市庁舎が移転した2014年には、本館は築45年、別館は築54年が経過していた。また、氷見市職員のAさんとBさんは「前市庁舎は少し傾いていた」と職務にあたるうえで不便を体感していた。

④ 窓口の分散

前氷見市庁舎はすべての部署が前市庁舎本館、別館内に置かれていたわけではなく、スペースの都合上、教育委員会、上下水道課、健康課などが別の庁舎に置かれていた。この窓口の分散について、氷見市の人々から言及されることはなかったものの、氷見市の複数ある拠点間のネットワークを管理する職務にあたったAさんは、多大なコストがかかる、複数拠点を結んだ管理について「無駄が多い管理だ」と感じていたという。

⑤ 駐車場の不足

前市庁舎の駐車場の不足は、市職員と氷見市民の両方から頻繁に指摘される問題点であった。前市庁舎は商店街や住宅などが付近に存在し、建物が密集した場所に位置していたため、大きな駐車場を設けることが難しかった。前市庁舎に隣接する光禅寺の駐車場の一部、道路を挟んだ向かいに位置する氷見郵便局の駐車場の一部を市が借り受け、計70台分の駐車場を確保したが、「利用者から駐車場が少ないと苦情を受けること」があり、「職員用(の駐車場)に関してはゼロだった」とA



写真5 光禅寺駐車場(筆者撮影)

さんは語っていた。また、これは通常時に用意される駐車場であり、降雪等の特別な事情があった際には、さらに駐車台数が制限される場合もあった。市職員と氷見市の人々の両方から「氷見市は車社会である」と述べられるほど自家用車が普及した氷見市において、Aさんは「車がないと生きていけないところなのに、駐車場がないのは死活問題だと感じた」という。市職員用の駐車場は市が斡旋する場合もあるものの、それでも賄えない場合は職員自身で駐車場を探す必要があった。来庁者の利用と市職員の通勤の2つの側面から、駐車場が不足していたことは、前市庁舎の使用感を大きく損なう点であったと考えられる。

⑥ 利用の障壁となる構造

前市庁舎の利用の障壁となる構造とは、具体的には前市庁舎の5階建てという構造、階段を利用しなければ前市庁舎に入れない構造、エレベーターが利用しにくい場所にある構造である。このうち、5階建てという構造は、氷見市職員と氷見市の人々の両方が「狭かつ

た」と言及した前市庁舎が建っていた土地で、より多くの部署や設備を収めるための工夫であったと考えられる。しかしながら、来庁者にとって、複数の階をまたいで移動することは容易ではなかったといえるだろう。階段を利用しなければ前市庁舎に入れない構造は、前述のとおり前市庁舎が地上から階段を降りることによって1階、階段を上ることによって2階に入る構造であることから、前市庁舎を利用するためにこの階段の利用は避けられないものであった。この構造は車いすの来庁者、高齢の来庁者にとって不都合なものであったと考えられる。エレベーターが利用しにくい場所にある構造についても、古い建物であったために、「来庁者の利用には無理のある個所に（エレベーターが）設置されていた」とAさんは感じていたという。前市庁舎の上記の構造はバリアフリーの観点から不利益が生じており、その反省は現在の氷見市庁舎に活かされている。

⑦ 前市庁舎の前の道路の狭さ

氷見市職員と氷見市の人々からたびたび述べられる「氷見市は車社会である」という主張は、氷見市が冬に積雪を観測する地域であるということで助長されていると思われる。積雪時に除雪された車道の雪は歩道に集められるため、「(前市庁舎の前を走る)道路が狭いことで、実質的に車線が減った状況になり、通勤に時間がかかった」という趣旨の主張がAさん、Bさんからなされた。

⑧ 「たらいまわし」の課題

階をまたいで「たらいまわし」にされる状況はAさん、Bさん以外の氷見市職員や、氷見市の人々へのインタビューからも述べられ、市職員、市民両方の共通認識であったと感じる。Aさんは現在の市庁舎を案内して下さった際に、設計の工夫に「ワンフロアでの完結」を挙げており、その構造による成果も実感していた。

2-3.現在の氷見市庁舎との比較

続いて、先に述べた前氷見市庁舎と現在の氷見市庁舎の課題点の比較を行う。

① 耐震性の低さ

② 津波による被害の可能性

前氷見市庁舎と比較した現在の氷見市庁舎の耐震性は、「1.現在の市庁舎の概要」で述べたように、氷見市庁舎のA棟、B棟として利用されているのは、それぞれ旧有磯高校の第二体育館、第一体育館である。第二体育館は1991(平成3)年、第一体育館が1996(平成8)年に竣工した建物であり、市庁舎として利用可能な耐震性、強度の基準を満たしている。氷見市職員のAさんとBさんは、「建物の揺れは改善され、地震が起こっても命の危険を感じるようなことはなくなった」と感じていた。津波の問題も、海から離れたことによって、リスクが軽減されたと認識していた。

③ 市庁舎の老朽化

「氷見市役所」の大部分が平成に建てられた A 棟と B 棟に移されたことにより、市庁舎の老朽化も改善されたという。前市庁舎で業務にあたっていた A さん、B さん自身も、前市庁舎の老朽化や建物の薄暗い雰囲気を実感していたため、それらが改善され、A 棟と B 棟について A さんは「(耐用年数の観点からは) この先の数十年、この市庁舎を利用することができるのではないか」とも述べていた。

④ 窓口の分散

現在の市庁舎への移転により、前市庁舎と比較して延べ床面積が大きくなったため、窓口の分散もおおむね改善された。主な変化として、以前は別の建物に置かれていた教育委員会事務局が、現在の市庁舎への移転後には A 棟 1 階に置かれた。

⑤ 駐車場の不足

駐車場の広さの課題は、118 台の自動車を収容可能な市民駐車場があり、このほかに職員のための駐車場も用意されている。前述のとおり、この規模の駐車場があれば、通常は駐車場が不足することはない。また、氷見市職員の B さんは「職員用の駐車場がなく、(前市庁舎から) 離れた場所にある駐車場を自分で除雪して駐車していた前市庁舎のころを知っているため、除雪がなされる駐車場が市庁舎の目の前にあることはありがたい」と、登庁する市職員としての視点から駐車場の充実を実感していた。

⑥ 利用の障壁となる構造

前市庁舎の利用の障壁になる構造として挙げられた項目のうち、前市庁舎の 5 階建てという構造は、2 階建てになることで階が減少し、解消された。階段を利用しなければ前市庁舎に入ることができない構造は、現市庁舎の正面エントランスの自動ドアを通過し、階段を利用せずすぐに A 棟、B 棟の 1 階に入ることができるようになり、解消された。エレベーターが利用しにくい場所にある構造は、正面エントランスを通過して真っ先に目に入る場所にエレベーターホールが置かれたことにより、解消された。障壁の具体例として挙げられた課題の 3 つが、新しい市庁舎の構造によって解決に向かったといえる。

⑦ 前市庁舎の前の道路の狭さ

現在、氷見市庁舎の付近を通っている道路(国道 160 号と国道 415 号)が以前と比べて幅が広くなり、除雪後に路肩に寄せられる雪の影響を受けにくくなったという。また、市庁舎の移転によって、能越自動車道の氷見イン



写真 6 B 棟2階と C 棟2階をつなぐ
段差解消機 (筆者撮影)

旧校舎と旧体育館に高さの差を
解消し、バリアフリーに貢献。

ターチェンジの利用も容易になった。Aさんは「広い氷見市で自家用車によるアクセスが容易になることは、市職員にとってよいことだし、市民にも同様によいことなのではないか」と推測していた。

⑧ 「たらいまわし」の課題

Aさんによると、現在の市庁舎の設計には「ワンフロアでの完結」という工夫がみられるという。具体的には、市民課や子育て支援課など、多くの来庁者の来庁の目的になるような部署がB棟1階に集中的に配置されている。この工夫により、「来庁者の9割がB棟1階で用事を済ませている」とAさんは語った。また、別の職員から、高い棚などの視線を遮るものを置かず、フロアを広く見渡せるようになったことも挙げられた。

この設計は、前氷見市庁舎での反省が生かされている。前市庁舎では、建物に入るために必ず階段を利用せねばならず、また、部署の分散によって来庁者が階をまたいで「たらいまわし」にされていた。こうした現象が、現在の市庁舎に移転した後はおおむね解消されたと複数の氷見市職員が認識していた。

2-4.現在の市庁舎に残された、また新たに生じた課題

本節では、氷見市庁舎の歴史や、前市庁舎が抱えていた課題をとらえた上での前市庁舎と現在の市庁舎の比較を紹介した。しかし、現在の市庁舎に移転したことにより、すべての課題が解決されたというわけではない。

氷見市職員のAさんは、「市庁舎の移転から10年ほどしか経っていないため、すぐに対応せねばならない課題は認められない」とした。一方、「旧有磯高校の体育館・校舎の『再利用』である現在の氷見市庁舎の長寿命化を見据えた取り組みを行う場合や、将来的には完全に解決することができなかった窓口の分散を解消する可能性がある」とも述べた。具体的には消防総務課や上下水道課が挙げられるだろうか。これらの課はそれぞれ消防署、環境浄化センター（下水処理等を行う施設）内に置かれているが、上記の施設に置くよりも、市庁舎の窓口の分散を解消するメリットが大きいと考えられた場合に、現市庁舎への移転が考えられる可能性がある。

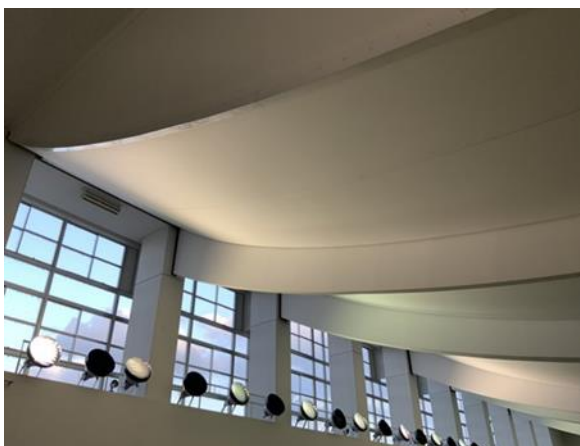


写真7 B棟2階の天井の様子（筆者撮影）

空調の無駄を減らし、窓をふさがないよう工夫されている。

再利用によって生じた課題に対する、現在の市庁舎の建築上の工夫のとして、照明と空調に関するものを紹介する。現在の市庁舎の、体育館を再利用したA棟、B棟のうち、体育館としての要素を色濃く残しているのはB棟であるが、このB棟に建築上の工夫がよく現れている。体育館を市庁舎と

して利用するにあたって、体育館にみられるような高い天井は必要ではない。また、空調の無駄が大きくなってしまふことから、その高い天井に手を付けずにそのまま利用することもできない。しかし、ただ上部の空間をふさぐだけでは、同じく体育館の上部についている多くの窓をふさぐことになり、日光を取り入れることができなくなる。

以上のような課題に対応するための工夫として、テント幕を利用した「船底型の天井」が採用された。窓をふさがないように、窓に近い部分では天井の高さを確保し、中央に向かうにしたがって、天井が低くなっている。また、この天井に照明器具を吊るすことができないため、間接照明というかたちをとっている。この課題、工夫のほかにも、旧有磯高校で使っていた照明器具を再利用していた箇所について、電気代の高騰を受けてLEDの照明器具への交換が完了したという。

フィールドワークで氷見市に住む人々と交流した際、現在の氷見市庁舎への意見として「(旧有磯高校の体育館を用い) 市庁舎の建設が安く済んだのは市の財政にとってメリットだったが、今後数十年使っていくとして、ランニングコストはどうか」や「安物買いの銭失いにならないか心配だった」という心配の声がみられた。この心配に対しては建設と市職員が当たる業務の双方から、もともと市庁舎としての利用が想定されていなかった建物という点を考慮した対策がなされていると感じた。

3.移転に関する人々の意見

本節では、氷見市庁舎の移転に関する氷見市民の意見を述べる。

フィールドワークを通して交流した氷見市の人々の大まかな分類としては、「現在の氷見市庁舎の近くに暮らし、または勤務している人のグループ」、「以前の氷見市庁舎の近くに暮らし、または勤務している人のグループ」、「そのどちらでもない地域に暮らし、または勤務している人のグループ」である。

この調査は、フィールドワークの対象にした地域で出会った、その地域に暮らしていたり、勤務したりしている人々の話を聞き、質問することによって行った。また、このフィールドワークは、2022年の10月から2023年の9月までの間に、氷見市を訪れた際に行った。ここで「現在の氷見市庁舎の近く」としたのは氷見市鞍川、「以前の氷見市庁舎の近く」としたのは比美町(ひみまち)商店街とその付近、「そのどちらでもない



図5 調査地域の地図
(地理院地図を基に作成)

地域」としたのは氷見市上泉（かみいずみ）から氷見市下田子（しもたこ）にかけての一部の地域である。聞き取りに応じてくれた人数は、現在の市庁舎の近くでは10人ほど、前市庁舎の近くでは15人ほど、そのどちらでもない地域では5人ほどである。

3-1.現在の氷見市庁舎の近くに暮らし、または勤務している人々のグループ

はじめに、「現在の氷見市庁舎の近くに暮らし、または勤務している人々のグループ」である。このグループに属する人々は、市庁舎の一利用者としての視点から、自宅または勤務地に市庁舎が近くなり、便利になったと感じている場合が多かった。また、以前の老朽化した氷見市庁舎を思い出し、市庁舎の移転の取り組み自体を肯定的にとらえている場合も多くみられた。

まず、便利さを感じている場合であるが、これは氷見市丸の内から氷見市鞍川に市庁舎が移転してきたことによって、自宅や勤務地などに市庁舎が近づくかたちになり、便利になったというとらえ方であると考えられる。このとらえ方は想像に難くない。この意見は鞍川で出会った人々の「地理的に近いから期日前投票に行きやすい（市庁舎の移転以前は今よりも離れた小学校に向かう必要があった）」という発言や、「（2008年に）市民病院が移転してきた、近いところで一つになって利用しやすい」という内容の発言から明らかになった。

次に、氷見市庁舎移転の取り組みを肯定的にとらえている場合である。氷見市庁舎の近くで飲食店を営むCさん（女性）からは「市庁舎を建て直すことの反対はなく、（市庁舎が市内の）どこに行くかでもめる、交通のことを考えると国道160号の近くが無難であった」という内容の発言がなされた。市庁舎の建て直しが必要であることは、住んでいる地域に限らず、氷見市の人々全員が共有していた認識であったという。以前の氷見市庁舎を思い出し、「駐車場が狭くて暗かった」、「今（市庁舎を）建て直すにはあの土地は狭かった」、「階段を上って入る必要があった」と列挙し、市庁舎の移転の理由をCさんの飲食店に来た客と一緒に考えてくれた。

実際に、上記の認識に近い考えは、現在の氷見市庁舎の近くに勤務している他の氷見市の人々にもみられた。市庁舎の移転を初めて聞いたとき、率直にどう感じたかを問いかけたとき、このグループでは「メリットを感じた」や「賛成であった」と述べられた場合が多かった。

しかしながら、氷見市庁舎の移転を肯定的にとらえている人々が多い「現在の氷見市庁舎の近くに暮らし、または勤務している人々のグループ」でも、市庁舎の内部の設計については意見が分かれた。市庁舎の内部について、「窓口が一つに統合され」、使い勝手が良くなったと述べられることもあり、「（高校の校舎を再利用したという点ではいいが）市庁舎の建物としては無駄がある」と述べられることもあった。

このグループでは、市庁舎が移転してきたことによる市民としてのメリットを認めた一方、商売上のメリットを認めていない人々も複数みられた。ある飲食店の店主のDさん（男性）は、市庁舎が近くなったことによる「商業上のメリットはあまり感じない」とし、「高

校があったときのほうが人通りやにぎやかさはあった」と振り返った。また、あるガソリンスタンドの職員は、行政用のサービスや市職員のガソリンスタンドの利用が増えたことを認めつつも、「忙しさに変化はない」と述べた。

似た例として、Dさんは、市庁舎が移転したとき、かつての氷見市庁舎の周囲にあった銀行はその場にとどまったため、「(道路拡張や市民病院の移転などとあわせて、氷見市の) 中心的な機能がこちら(鞍川)に来るかと思いきや、金融機関がない不便さがある」とも述べた。市庁舎を利用するのに便利になった一方、それを他の利便性や商業の利益に結びつけることは難しい。

「現在の氷見市庁舎の近くに暮らし、または勤務している人々のグループ」の特徴として、有磯高校に関連した情報を教えてくれた人がいた。有磯高校の水産課は遠洋漁業を行っていたことや、ウニ、マグロを獲って新聞などに載ることがあったことを思い出したり、「(通った高校が氷見市庁舎として)活用されるのはうれしいのではないか」と有磯高校の卒業生の気持ちに配慮したりしていた。これは、今回のフィールドワークによる市民の分類の中で、「現在の氷見市庁舎の近くに暮らし、または勤務している人々のグループ」の人々にのみみられたものである。廃校になる以前、以後の有磯高校の様子を日々目にし、高校として使われていたときと外見の変わらない氷見市庁舎を近くに感じながら生活している、このグループの人々の特徴であると感じた。

かつて氷見市庁舎があった場所の近くに暮らす人々や、かつての市庁舎の近くの商店街で商売を行っている人々に対しての配慮が口にされたことも、このグループに属する人々の特徴であった。Cさんは、商店街で食料品店を営む知人が、ひみ番屋街や国道160号沿いにばかりイベントが集中しているように感じるという不満を述べていたことを思い出し、「商店街の空き家を利用したサークル活動などがあればよいのではないか」として商店街の活性化の案を提示する配慮を見せた。また、Dさんは市庁舎の移転に関して、「中心的機能が(鞍川に)移り、『まち』の人々はいい思いをしていない」と感じたという。このような発言は、市庁舎が移転してしまった立場である「以前の氷見市庁舎の近くに暮らし、または勤務している人のグループ」では場所の特性上みられず、「そのどちらでもない地域に暮らし、または勤務している人のグループ」でもみられなかった。

3-2.以前の氷見市庁舎の近くに暮らし、または勤務している人のグループ

次に、「以前の氷見市庁舎の近くに暮らし、または勤務している人のグループ」である。

前述のとおり、氷見市庁舎は2014年に氷見市丸の内から氷見市鞍川へ移転した。移転から本報告書が発行される2024年まで、およそ10年経ったが、以前の氷見市庁舎の付近には、移転当時の様子や自身の感情を覚えている氷見市の人々が多く暮らしていた。このグループに属する人々は、市庁舎の移転に対して、仕方ないものにとらえている場合、肯定的にとらえている場合と否定的にとらえている場合があり、ほかのグループと比較してもっとも人々の間で幅広い意見がみられたグループであった。

まず、氷見市庁舎の移転を仕方ないものと捉えている場合では、前市庁舎の不都合な点を改善するという問題意識が感じられる場合が多かった。前述のとおり、前市庁舎は来庁者と職員のための駐車場が十分でなく、この点は市民、職員ともに広く知られているものであった。前市庁舎の移転は仕方ないと感じている場合、このグループでも複数人が駐車場の問題を改善するため、前市庁舎が移転したと推測していた。

比美町商店街の近くの花屋に勤務している E さん（女性）は、主に駐車場が不足していることから前市庁舎の移転は仕方ないと考えている一人であったが、そう感じた理由には、当時の駐車の様子があるという。E さんは「(市職員のものと思われる) 車が湊川沿いに停められていた。駐車場の問題があり、移転は仕方ない」と振り返った。前市庁舎があった土地が無料駐車場として利用されることについても、「車が停められないと観光地としての氷見も成り立たない、(氷見市庁舎が) 移転して駐車場になるのも仕方ない」と述べた。前市庁舎があったときから、移転の後に駐車場に作り替えられた現在まで、この場所には一貫して駐車場が求められていた。

防災の観点から氷見市庁舎の移転が仕方ないと思われる場合もある。氷見市出身で比美町商店街から少し離れたところで喫茶店を営んでいる F さん（女性）は、上で述べた駐車場の問題も含め、さまざまな点から氷見市庁舎の移転に対して「仕方ないものである」という感情を抱いていた。防災もそのうちの一つである。

前氷見市庁舎は海拔が低く、大規模な地震による津波が発生した際には津波によって機能しなくなる可能性があった。加えて、前市庁舎は耐震性に乏しく、津波が発生しなかった場合でも機能不全になりうる状態であった。F さんは、能登地方で起こった大規模な地震や東日本大震災などから、この状態は危険であり、「災害に強い町を作るのは大切である」と感じたという。

上記の語りに加えて、F さんはたびたび「『国破れて山河在り』という言葉もあるように」と詩を引用した。車社会といわれる氷見市において、国道 160 号とその近辺が氷見市の主要な道路になり、それと反対に車での出入りが大変な商店街が廃れてしまうこと、比美町に暮らしている若い人々が非常に少なくなっていることに触れ、「ここ(比美町)はむかし『まち』だった場所」、「若い世代のためにも」と述べていた。F さんは全体として、移転は時流に沿った、仕方ない取り組みと感じるに至ったさまざまな理由を語ってくれた。

市庁舎の移転を否定的にとらえていた場合では、人通りの減少について嘆く声があった。比美町商店街で喫茶店を営む G さん（女性）は、氷見市庁舎の移転が「個人事業主としてはマイナスでしかなかった」と述べ、市庁舎の移転に厳しい意見を投げかけた一人だった。

G さんは移転の前後の土地利用の観点から、市庁舎の移転について疑問を感じていた。空き家が増えている比美町において、そのような家屋を撤去して駐車場を確保する考えなどを提示してくれた。空き地になった前氷見市庁舎の土地も、ただ駐車場として利用するのではなく、人々を楽しませる施設を作ることができないかを考え、移転について議論が尽くされたかが疑問であると主張していた。

かつて氷見市庁舎があった土地の利用方法については、他の人々からも否定的な意見が述べられることがあった。クリーニング店に勤務するある方は、氷見市庁舎の移転について、「(前市庁舎の)跡地は図書館などの憩いの場になってほしかった、駐車場では味気ない」といったことを述べた。市庁舎の移転を全面的に批判することはなかったものの、人が勤め、または集う施設でなくなってしまったことを残念に感じているようであった。しかし、この方は新しい市庁舎には使い勝手の良さを認めていた。

氷見市庁舎の移転について否定的な主張をした前市庁舎の近くに暮らす人々は、市庁舎の移転の取り組みの全てに反対意見を抱いているのではなく、移転の前に議論が尽くされたか、「まちなかめぐり無料駐車場」として利用されている土地について、よりよい利用方法があると感じ、このような主張をしたと感じられた。



写真8 まちなかめぐり無料駐車場(筆者撮影)

以前氷見市庁舎があった土地は、「まちなかめぐり無料駐車場」として利用されている。



図6 海と前氷見市庁舎の地図
(地理院地図より引用)

市庁舎の移転の問題を肯定的にとらえている場合では、駐車に関する不都合が改善されたことを肯定的にとらえていた場合が多かった。

前市庁舎の付近の駐車場を備えた商店に勤務しているある人は、「前市庁舎に用があったときに行くには便利だったが、(前市庁舎が)街中であって、大きな駐車場を確保できなかったため、迷惑駐車をされることがあった。期日前投票が行われる日などは特にひどかった」とし、迷惑な無断駐車の被害が減ったことはよかったことだと付け加えた。この人は、新しい市庁舎に関しても、「あれだけの広い駐車場を持つ市庁舎を街中に置くのは無理だろう」と推測し、郊外への移転や駐車場の充実を高く評価していた。

また、駐車場の不足とあわせて、前市庁舎の老朽化と移転理由を紐づける場合も複数みられた。比美町商店街で薬局に勤務するある方は、「(前市庁舎は)老朽化していた、(同じ土地で)市庁舎を建て直すよりも、(旧有磯高校を)つくりかえる方が良い案だと思った」と述べた。

「以前の氷見市庁舎の近くに暮らし、または勤務している人のグループ」の特徴として、かつての比美町商店街と現在の比美町商店街を比較し、市庁舎の移転の前後にとどまらない商店街の様子の変化を感じ取っている人が複数いたことが挙げられる。本調査の主たる情報収集の方法は、氷見市を訪れて行うフィールドワークである。そして、このグループに属する人々に対する調査のため商店街を訪れる時間が平日の昼である都合上、比美町商店街やその付近で長い間生活しつつ、商店街とその周囲の飲食店、商店に勤めている経歴を持つ人々から情報を得る機会が多かった。そのため、上記のような変化を感じ取る人々に多く出会ったと考えられる。

氷見市民の H さん（男性）は、他の市町村から移り住み、現在では比美町商店街で店舗を経営して生活している。H さんは市庁舎と比美町商店街の関係性について、「市庁舎が移転したことにより、この辺りを通るバスを使う人が少なくなり、人通りも少なくなった」と考察していた。しかし、「比美町商店街では空き家が増えている」、「車社会といわれる氷見市で、車で利用することが難しい商店街はスーパーなどにとって代わられてしまう存在である」とも考えていた。市庁舎が移転してしまったことよりも、大きな駐車場を備えたスーパーマーケットが氷見市に多数出現したことが、比美町商店街の人通りに大きな影響を与えたという。「車を停めることができない商店街と駐車場を持つスーパーマーケットの利便性を比較し、人々がスーパーマーケットを利用するようになり、商店が減ることによってさらに人々にとって商店街が利用しづらくなってしまふ」という悪循環が生じていると感じていた。

上記の報告に登場した喫茶店を営む F さんも、商店街やその付近の道の人通りが少なくなっていることを感じ取っていたが、この理由について、自動車で移動した際の利用のしにくさに関係していると推測していた。氷見の山間部に暮らす人々をはじめとした車を使って買い物に行く人にとって、「車で訪れるのが難しい比美町よりも、むしろバイパスを通過して高岡に買い物に行く方が容易である」と述べた。

比美町商店街の周りでの聞き取りに応じてくれた人々では、この商店街に多くの人が暮らし、また、町内会や児童会といった集まりが現在よりも精力的に行われていた時代を経験した人が多くおり、人通りや住民の数などについて変化を感じている場合が多かった。しかし、それらの変化について、市庁舎の移転にすべての原因があると考える人はおらず、比美町だけに生じている力ではない「少子高齢化」や「核家族化」によるものであると考えたり、自動車の普及による変化であると感じていたりする場合の方がむしろ多かった。

3-3. どちらでもない地域に暮らし、または勤務している人のグループ

最後に「どちらでもない地域に暮らし、または勤務している人のグループ」である。

このグループに属する人々は、これまでに述べた「現在の氷見市庁舎の近くに暮らし、または勤務している人のグループ」、「以前の氷見市庁舎の近くに暮らし、または勤務している人のグループ」と割り当てた人々の地域と比べ、現在の氷見市庁舎との距離が開いた地域に

暮らししたり、勤務したりしている（上泉から下田子にかけての一部地域）。そして、このグループに属する人々は、氷見市庁舎の移転の取り組みを肯定的に見ていた場合が多く、そう考える理由には少しのばらつきがあった。

市庁舎の移転を肯定的に見ていた例として、飲食店に勤務する I さん（女性）がいた。I さんは「（新しい氷見市庁舎は）前よりも広くなったと感じる。駐車場もあるから、車で行きやすい」とし、市庁舎内の利便性についても「入り口で案内してくれるからわかりやすい」と市庁舎の内側、外側に好印象を抱いているようであった。I さん自身は市庁舎を利用する際は自家用車を利用するという話もあり、「（車で向かうためにも）街の中にあるよりはいい」と述べた。

別の飲食店に勤務する J さん（女性）も、旧有磯高校の校舎、体育館の利用を決定した点を含めて、市庁舎の移転を肯定的に評価している一人であった。J さんは新しい市庁舎について「（旧有磯高校の）跡地を利用したと聞いている、（前市庁舎があった土地に）新たに建てるよりはいい」とした。そのように考える理由については、「前市庁舎は建物が狭く、駐車場にも問題があった、いまは停め放題」や「（前市庁舎は）古かった、新しい庁舎は広く、明るいのが良い」、「中に入ってフロアを見渡せるため利用しやすい」などと述べた。旧有磯高校の土地を利用した駐車場の設置、体育館を利用した、広く見通しの良いフロアの両方を高く評価している意見である。

その一方、氷見市庁舎の移転そのものには肯定的な意見を持っているものの、移転先に選ばれた旧有磯高校の立地について不満を抱く人々もみられた。上泉で商店を営む K さん（男性）は、「（前市庁舎に）駐車場がなかったのは不便だったが、（新しい市庁舎になったことによって）解決した」や「役所としては駐車場がないと（成り立たない）」などの意見を述べ、氷見市庁舎の移転の取り組みそのものに理解を示していた。しかしながら、新しい市庁舎の立地について、比美町商店街の近くではなくなってしまったことを「繁華街から離れた」と表現し、市庁舎の立地として適切であったのか、かつての氷見市民病院、現在は氷見市芸術文化館が置かれている土地の方が適した候補地であったのではないかと疑問を述べた。疑問が挙げられたのは立地の側面のみではなく、別の住民からは「高校として利用されていた建物を市庁舎として利用することは取り組みとして新しい、珍しい視点を持っている」と評価された一方、当時は「『安物買いの銭失い』にならないか心配だった」との声が挙げられた。

「どちらでもない地域に暮らし、または勤務している人のグループ」とした上泉、下田子の一部地域の人々は、移転先の立地への疑問や旧有磯高校の校舎、体育館を市庁舎として再利用できるかという心配など、氷見市庁舎の移転の取り組みの一部に疑問を抱いていたものの、「前市庁舎は暗かった」、「前市庁舎は街の中にあり、狭かった」と、かつての氷見市庁舎を引き合いに出し、かつての市庁舎の問題点が解決されたと振り返る場合が多かった。

上泉、下田子の調査では、「氷見市庁舎に用事があって向かうときの交通手段には、何を用的のか」を質問項目に加えたが、この質問に回答した人々の全員が自家用車を想定して

いた。上泉、下田子は国道 160 号へのアクセスが容易であり、自家用車が想定されやすい可能性もあるが、氷見の人々の「氷見市は車社会である」という主張はここでも裏付けられた。

4. これからの施設利用に関する考察

本節では、これまでに述べた氷見市の人々の意見や氷見市職員の意見から、氷見市庁舎の移転がどのような課題に基づいて行われ、どのような意義を持っていたか考察する。

氷見市の人々と氷見市職員に対して行ったインタビューのうち、前氷見市庁舎が抱えていた課題と、現在の市庁舎による課題の解決について疑問を投げかけたが、氷見市の人々と市職員とで把握している課題が一致している部分と異なっている場面がみられた。インタビューに答えてくれた氷見市の人々から述べられた「前市庁舎は古かった」や「新しい市庁舎になって明るくなった」、「前市庁舎には駐車場がなく、不便だった」という意見は、視覚的な要素や、市庁舎を訪れたときに抱く第一印象に基づく比較によるものである。そのため、記憶に残りやすく、市庁舎の移転によって改善された課題として市民と市職員の意見が一致しやすい点であったと考えられる。

一方、市庁舎の内部の機能的な側面に関しては、一般的な市民が市庁舎を訪れる機会が少ないと考えられるため、一度の来庁では機能の利点を理解することが難しいと推測される。実際に、「2. 以前の市庁舎との相違点・問題点」で氷見市職員の A さんが触れていた、前市庁舎と比較した現在の市庁舎の階段の利用頻度、エレベーターの配置について、インタビューに応じてくれた氷見市の人々から言及されることはほとんどなかった。「たらいまわし」の解消や B 棟 1 階の「ワンフロアでの完結」は、来庁者が受ける恩恵以上に、来庁者を迎え入れる市職員への恩恵が大きく、また、市職員に強く意識される要素であると考えられる。しかし、入り口での案内や見通しの良い設計など、氷見市の人々が実感していた市庁舎の内部の機能の利点もあった。現在の市庁舎の機能的な側面の恩恵を受けているのは、市職員だけではない。

受益者であるはずの氷見市民が、市庁舎が移転したことによって生まれた利点を十分に理解していないことが問題であるかという点、そうであると言い切ることもできない。そもそも、前市庁舎から現在の市庁舎への移転の工事費は、市債や市債に対する国家からの補填によって賄われた部分が多い。補填を受けられる期間に市庁舎の移転のための工事を行うことは、市民の税金からの負担が少なくなることにつながった。また、富山県産の木材を使用した建築にあてられる補助

表 1 移転改修費用の財源
(提供資料から引用)

区分	金額 (千円)
国庫補助金	38882
県補助金	3905
市債 (うち70パーセントを交付税にて補填)	1614200
一般財源	262091
事業費合計	1919078

金を利用したことも、市民の税金による負担を抑えることにつながった。これらの補助金によって、「改装費は約 19 億円」と予定されたうち、氷見「市の実質負担は 8 億円にな」った（日本経済新聞:2014 年 6 月 16 日記事）。

富山県内の他市町村の庁舎の移転計画によると、氷見市と隣接する高岡市では、市庁舎整備にかかる初期投資額について、新築した場合は 175 億円、既存の建物に移転した場合は 186 億円、現庁舎に免震改修をほどこす場合には 165 億円が必要であるという試算が出されている（北日本新聞:2023 年 3 月 23 日記事）。また、砺波市では、市庁舎整備の想定額が約 63 億円と発表されている。市町村の規模によって必要とされる機能、面積が異なることは明らかであるが、市庁舎の整備という市の財政を大きく圧迫する取り組みにおいて、氷見市は富山県内の他の市町村の市庁舎整備の想定額を大きく下回る負担で市庁舎の移転を実現させた。

前市庁舎の老朽化や駐車場の不足など、前氷見市庁舎が抱えていた主要な課題は、氷見市民、氷見市職員ともに広く認知していたものであったことは、これまでの私の調査から明らかになっており、なんらかの方法によってこの課題を解決せねばならないという意識も、ある程度共有されていたものであると考えられる。そして、この補填を受けられる期間に市庁舎の移転を行うこと自体が、いずれ発生するかもしれない大きな地震での市庁舎倒壊のリスクや、補填期間外での移転による、より重大な氷見市の財政の圧迫を防ぎ、長期的には氷見市民全員の受益につながると考えられる。

このことから、前市庁舎から現在の市庁舎への移転は、氷見市の財政や社会状況に沿わなかった前氷見市庁舎から、コストカットと移転の目的を高いレベルで両立できる移転であるという意思のもとに行われたといえる。

一方で、前述のとおり、前市庁舎から現在の市庁舎への移転に伴い、氷見市丸の内には、前市庁舎が取り壊され、「まちなかめぐり無料駐車場」として利用されている土地がある。A さん、B さんによると、この土地は、利用方法のあらゆる模索が行われる前に移転事業が始まり、未舗装のまま空いた土地を引き継いで駐車場とされたという。この土地を含めた、土地利用の考慮によって、氷見市の施設の利用に対する、よりよい考察を行うことができると思われる。

私は、「まちなかめぐり無料駐車場」で見て取れる姿勢は、「今、作らなくてよい施設は作らない」というものであったと考える。氷見市職員の B さんによると、「まちなかめぐり無料駐車場」として利用されている土地には、利用方法の提案が複数の市民から寄せられたことがあった。また、私自身が氷見市の人々に聞き取りを行った際にも、「まちなかめぐり無料駐車場」の活用の案が挙げられたことがあった。そのような「まちなかめぐり無料駐車場」にむやみに施設を設けないことは、駐車場の不足という側面のほかにも、市政について議論を尽くすことができないまま移転してしまった過去を省み、より今後の展望や利用の可能性について敏感になっているからなのではないかと感じる。コスト削減と同様に、議論の可能性が、「まちなかめぐり無料駐車場」においては重視されているのではないだろうか。

この「まちなかめぐり無料駐車場」は前市庁舎跡地のほか、かつて氷見市民会館跡地にも置かれている。現在は氷見市立博物館や氷見市立図書館の利用者や、駐車場の周囲の商店の利用客に利用され、この駐車場が埋まっている様子もしばしば見受けられた。そして、今後の氷見市の計画では、氷見市民会館跡地を「ひみ発見館（仮称）¹⁵」として整備するという。「2024年度に実施設計、25年度以降に着工する」とされるこの「ひみ発見館（仮称）」は、「まちなかめぐり無料駐車場」として利用されていた土地を、さらに有意義に利用するための前例になる取り組みであると考えられる（中日新聞:2023年12月15日記事）。また、この決定は、前市庁舎跡地とは別の「まちなかめぐり無料駐車場」であるとはいえ、利用方法が明確になっていなかった土地についての議論において、氷見市が一步前進したといえるものであるだろう。

しかしながら、この「ひみ発見館（仮称）」の建設費について、どういった財源が利用されるのか、「まちなかめぐり無料駐車場」としての役割を持つ土地に施設を建てることによって生じる駐車場の不足に、どう対応するかといった疑問が残る。利用方法の模索が行われている土地や空き地について、氷見市の今後の対応を推測するためにも、「ひみ発見館（仮称）」の取り組みは注意深く見守る必要がある。

追記

本稿の作成中の1月1日に、石川県能登地方を中心に、最大震度7を観測する「令和6年能登半島地震」が発生した。富山県西部に位置する氷見市は、震度5強の揺れに見舞われ、建物の倒壊や断水など、地震によるさまざまな影響が報道によって伝えられた。

今回の地震の震度は5強であり、前氷見市庁舎が倒壊する可能性が高いとされた震度6強クラスの地震ではないものの、本地震の後も適切な指示系統を維持できているのは、現在の市庁舎への移転によるところも大きいと推測される。そして、災害の危険性を理解し、氷見市庁舎の移転を容認した氷見市の人々の先見の明に平伏するばかりである。

「令和6年能登半島地震」にて被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地域の一刻も早い復興をお祈り申し上げます。

謝辞

今回の調査に際し、氷見市鞍川、氷見町、上泉、下田子で生活している方々や、氷見市のご担当者様大変お世話になりました。ご協力くださいましたすべての方々に心よりお礼申し上げます。突然の訪問や、複数回のインタビューにもあたたかく迎え入れてくださる方、真剣に応じてくださる方が多く、氷見の人々のあたたかさを感じる場面も多くありました。

¹⁵ 氷見市民会館跡地に整備される予定の施設。中日新聞によると、氷見市の祇園祭り、獅子舞に関連する展示のほか、「こども図書ラウンジ、偉人紹介展示もするホール、カフェ」が設けられる。「駐車場は54台収容」（中日新聞:2023年12月15日記事）。

本当にありがとうございました。

参考文献

氷見市、「氷見市役所 Himi City Office」、(氷見市庁舎内配布印刷物)

氷見市総務部財務課、「氷見市庁舎の移転について」,(氷見市担当者様からご提供いただいた資料)

氷見市総務部財務課、「新庁舎の概要について」、(同上)

氷見百年史編修委員会編『氷見百年史』、氷見市役所、1972年。

氷見市史編修委員会『氷見市史』、氷見市役所、1963年。

氷見市史編さん委員会『氷見市史 2 通史編二 近・現代』、氷見市、2006年。

氷見市立博物館編『特別展 写真にみる氷見の昔と今 II ―うつりゆく人・もの・風景―』、氷見市立博物館、2014年。

北日本新聞社「庁舎新築 175 億円 セリオへ移転 186 億円」、2023年3月23日北日本新聞朝刊。

株式会社ゼンリン「ゼンリン電子住宅地図 デジタウン 富山県氷見市」、株式会社ゼンリン、2011年。

氷見市、「会議録/氷見市」

<<https://www.city.himi.toyama.jp/gyosei/shisei/shigikai/1/index.html>>(最終閲覧日 2024年2月14日最終閲覧)

富山県立氷見高等学校「沿革 | 氷見高校」、富山県立氷見高等学校、

<<https://www.himi-h.tym.ed.jp/about/%e5%ad%a6%e6%a0%a1%e3%81%ae%e6%b2%bf%e9%9d%a9/>>

(最終閲覧日 2024年2月14日)

国土地理院「地理院地図/GSI Maps」、

<<https://maps.gsi.go.jp/>>(最終閲覧日 2024年2月14日)

富山県道路公社「能越自動車道|富山県道路公社」

<<https://www.tym-rpc.or.jp/noetsu/>>(最終閲覧日 2024年2月14日)

富山県道路公社「[PDF] 能越自動車道の建設経緯と営業概要」

<<https://www.tym-rpc.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/06/6nouetugaiyou.pdf>>(最終閲覧日 2024年2月14日)

氷見市「広報ひみ 2014年5月号 No.727」

<<https://www.city.himi.toyama.jp/material/files/group/2/0120-140501-801.pdf>>(最終閲覧日 2024年2月14日)

株式会社山下設計「氷見市庁舎 | プロジェクト | 株式会社山下設計」、株式会社 山下設計-建築・都市・環境の未来を切り開くプロフェッショナル-

<https://www.yamashitasekai.co.jp/project/post_19/>(最終閲覧日 2024年2月14日)

日本経済新聞社「廃校体育館が市役所に 富山・氷見市」2014年6月16日日本経済新聞、
<https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG15004_W4A610C1CR0000/> (最終閲覧日
2024年2月14日)

中日新聞社「氷見の祇園祭り 映像で体験 市教委が「ひみ発見館」基本設計」2023年12
月15日中日新聞

<<https://www.chunichi.co.jp/article/822302>> (最終閲覧日 2024年2月14日)

日本郵便株式会社「郵便番号データダウンロード」-日本郵便-Japan Post

<<https://www.post.japanpost.jp/zipcode/download.html>> (最終閲覧日 2024年2月14日)

国土交通省「道路：道路統計年報 2022 道路の現況」

<<https://www.mlit.go.jp/road/ir/ir-data/tokei-nen/2022/nenpo02.html>> (最終閲覧日
2024年2月14日)

デジタル庁「一般国道の路線を指定する政令（昭和四十年政令第五十八号）」、e-Gov 法令検
索

<<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=340CO0000000058>> (最終閲覧日 2024年2
月14日)

気象庁「『令和6年能登半島地震』について(第5報)」、気象庁 Japan Meteorological Agency、

<<https://www.jma.go.jp/jma/press/2401/02c/202401021015.htm>> (最終閲覧日 2024年2
月14日)

第3章 小学校廃校に伴う地域コミュニティの変遷

一氷見市^{ひやしゅう}仏生寺地区の歩み一

井原 唯花

はじめに

高校まで市街地で過ごし、現在大学近くの学生街で下宿している私にとって、農村での暮らしは体験したことのない生活である。ニュースで見聞きする、農村部の過疎化や高齢化という言葉に対して漠然と関心を抱いていた。そうした中で出会った地が氷見市南西部の仏生寺地区である。氷見市で第一号となる地域づくり協議会(3-1参照)が設立されるなど、地域づくりに対して活動が盛んに行われていることを知り、興味を持った。

仏生寺地区の地域コミュニティを調査するにあたり、浮上したのが小学校の存在であった。平成23年(2011)3月、氷見市立仏生寺小学校が136年の歴史に幕を閉じる。本稿では、小学校が閉校になり、地域コミュニティの希薄化が憂慮された仏生寺地区が、どのような歩みを進めたのかについて焦点を当てる。第一節では仏生寺地区の概要を述べ、第二節では、小学校閉校までの地域と小学校の関りについて振り返る。第三節では閉校に伴って設立された地域づくり協議会、第四節では廃校を利用した氷見ラボ水族館についてまとめる。そして第五節では、同様に校舎を利用した学童保育の活動を記述する。

本稿の主題である地域コミュニティの変遷を調べると共に、子どもの存在が地域に与える影響や、廃校となっても校舎そのものが地域にどのように還元され得るものであるか、そして、人々がどのように地域社会の担い手となっているのかについてまとめた報告書になっている。

1. 仏生寺地区について

1-1. 概要

仏生寺地区とは氷見市における旧小学校区の名称である。以下、氷見市立仏生寺小学校130周年記念『仏生寺』(平成18年3月)より一部、加筆、修正を加えたもの。

仏生寺地区は氷見市の南西部、十三谷の最奥部に位置し、高岡市に隣接する。仏生寺川の上流部にあたり、そのほとんどが中山間地に位置する。大字は惣領、鞍骨(くらぼね)、仏生寺(ぶっしょうじ)からなり、集落は惣領、鞍骨、鉾根(ほこね)、大覚口(おがぐち)、大窪、

脇之谷内(わきのやち)、寺中¹⁶(じちゅう)、上中(かみなか)、上原(うわはら)、吉池、細越の11集落によって成り立っている。

仏生寺地区は氷見市中心市街地から南西約10kmに位置する。高岡市と仏生寺地区を隔てる標高264メートルの三千坊、東に三方峰、西にはかつて加賀藩の藩有林であった御林山などに囲まれる中山間地域である。平野が少ないことから、大正3年の記録によると、林業は氷見郡で最も盛んに行われ、杉、松の伐採や植林が進められたと記されている。そして現在、平野に広がる水田のほとんどが高齢化のため営農組合に委託され、維持、管理が行われている。稲作の他に、南部の細越地区ではハトムギ栽培が盛んである。ハトムギ栽培に留まらず、「はとむぎせんべい」などという加工商品も生産しており、六次産業化が成り立っている。

旧仏生寺小学校(氷見ラボ水族館)は高岡市と氷見市を結ぶ県道64号沿いに位置する。

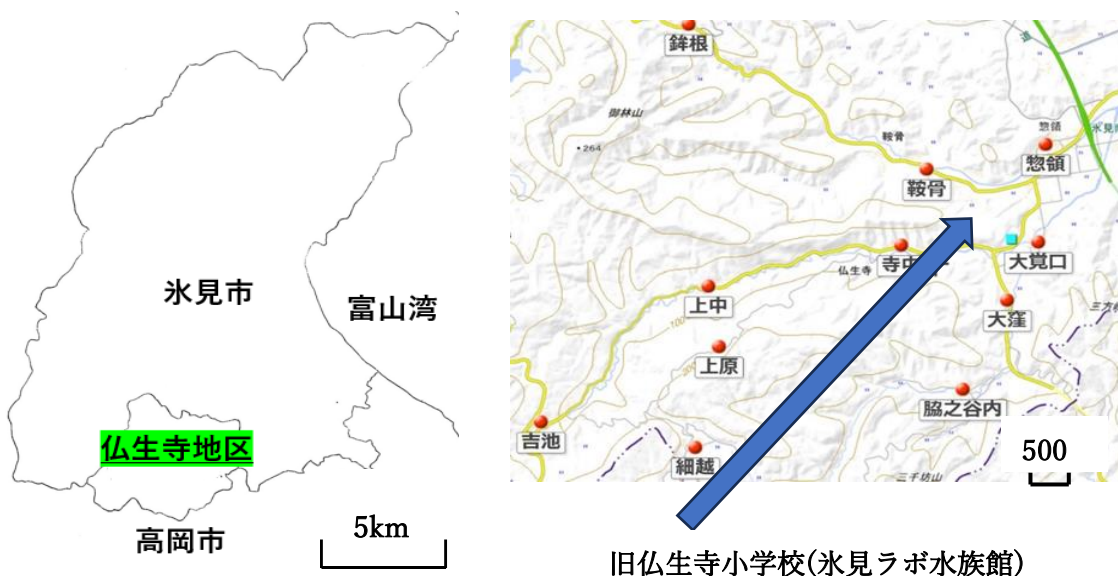


図1 氷見市における仏生寺地区の位置(左)

図2 仏生寺地区の集落と旧仏生寺小学校(氷見ラボ水族館)の位置

(国土地理院地図を加工)

1-2.人口推移

令和5年度(2023)時点における世帯数は、計320世帯である。内訳は、惣領56、鞍骨65、鉾根21、大覚口18、大窪14、脇之谷内45、寺中41、上中31、吉池11、細越15、上原3

¹⁶ 地元の人は寺中(じちゅう)と発音するが、市の表記では寺中(じちゅう)となっている。

である。人口は令和 2 年度時点で 917 人¹⁷。平成 28 年度(2016)の高齢化率¹⁸は 41.4%に上り、23 地区を有する氷見市内の旧小学校区において 9 番目の高水準となっている¹⁹。

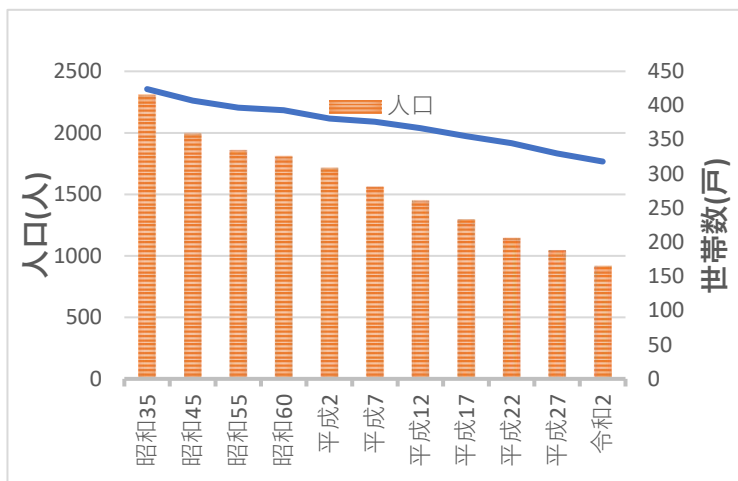


図 3 仏生寺地区の世帯数と人口の推移（仏生寺地域づくり協議会 HP 資料より作成）

図 3 より、昭和 35 年(1960)には 2000 人余りいた人口が令和 2 年(2020)には 900 人台まで落ち込み、ここ 60 年のうちに、人口が半減していることが分かる。ただ、世帯数については人口ほど大幅な変化は見られず、60 年余りで 100 世帯ほどの減少に留まっている。このことから、核家族化が進行し、家庭の構成人数が減少していることが窺える。

2.小学校と地域

この節では、かつての仏生寺小学校の記憶に触れながら、地域と小学校がどのような関りを持って歩んできたのかということ振り返る。

2-1.仏生寺小学校の概要

表 1 仏生寺小学校の主な沿革

明治 8 年	櫟小学校として開校
明治 14 年	一栄小学校と改名
明治 25 年	佛仏寺尋常小学校と改名
大正 5 年	佛生寺尋常小学校と鞍骨尋常小学校が統合し、佛生寺尋常小学校となる
大正 14 年	佛生寺尋常小学校と改名
昭和 16 年	氷見郡佛生寺村立佛生寺国民学校と改称

¹⁷ 仏生寺地域づくり協議会 HP より引用

¹⁸ 人口に占める 65 歳以上の割合

¹⁹ 氷見市社会福祉協議会 HP より参照

昭和 29 年	氷見市立仏生寺小学校と改称 2 階建て木造校舎の建築
平成元年	細越分校が休校となる
平成 4 年	新校舎改築工事
平成 6 年	新校舎改築に伴い、吉池分校、鉾根分校が閉校となり、統合した
平成 23 年	児童数の減少により、136 年の歴史に幕を閉じる。湖南小に統合される。

(『閉校記念集 仏生寺』より作成)

仏生寺小学校は、政府によって学制が公布された明治 8 年に櫟いちい小学校として開校した。昭和 29 年(1954)に仏生寺村が氷見市に編入され、氷見市立仏生寺小学校と改名する。平成 4 年(1992)に、木造校舎から現在の校舎に建て替えが行われ、平成 6 年、吉池分校、鉾根分校を統合した。平成 23 年(2011)、児童数の減少により閉校する。仏生寺地区の児童たちは近隣の湖南小学校へ通学することとなる。

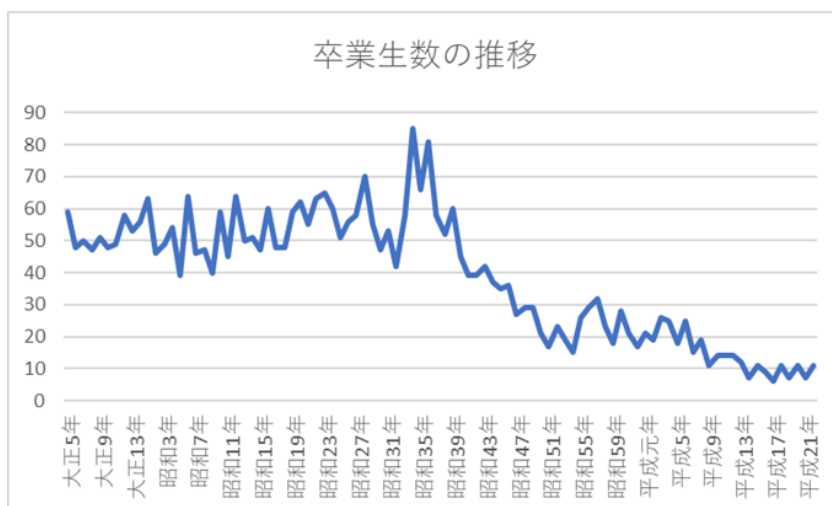


図 4 卒業生数の推移 (『閉校記念集 仏生寺』掲載数値より作成)

仏生寺小学校の卒業生数は、昭和 30 年(1955)まで 40 人から 70 人の辺りを一定に推移し、最盛期は昭和 34 年(1959)に 84 人に達した。昭和 20 年(1945)、終戦の後、戦地から男性たちが農村に戻り、第一次ベビーブームが起こる。日本社会で広く見られた現象であり、仏生寺地区も例外ではなかった。その後、卒業生数の数は急下降する。高度経済成長が関係しており、農村部から都市部に出稼ぎに行く人々の増加が要因として挙げられるだろう。卒業生数は昭和 30 年代後半から 50 年代にかけて急下降していることに対し、表 1 で上げた人口の推移では傾きが緩やかなことから、若い子供を持つ現役世代の都市部への流出が見られたのではないかと考えた。その後、平成に入ると卒業生数は 20 人台から 10 人台まで落ち込み、閉校した平成 22 年度には 11 人となる。

2-2.地域行事について

以下、仏生寺地区の地区行事について、旧仏生寺小学校近くで明治期から創業し、現在高田商店を営んでいる高田夫妻の語りを中心とし、住民の方々の語りや仏生寺公民館(クラブハウス)に保管されていた資料を基に記述していく。

2-2-1.地域行事の移り変わり

仏生寺地区では、集落対抗で競う地区住民運動会が昭和40年代から小学校が閉校になる前までの毎年、仏生寺小学校で行われていた。ただ平成に入り、子どもの減少が顕著となり、独立して行われていた小学校の運動会と地区の運動会を午前と午後に分け、同じ日に実施するようになる。平成23年に湖南小学校に統合されてからの2年間は、湖南小学校で開催された。相撲大会や野球大会、のど自慢大会も40年ほど前までは行われていた。地区住民運動会の他に、平成5年から平成23年までビーチボール大会、平成6年から平成21年までソフトボール大会があった。閉校後の平成23年からはカローリング²⁰大会、平成24年からペタンク大会が行われるようになる。

ビーチボールやソフトボールは、体を激しく動かし、ケガがつきものであるから高齢者が参加することは難しい。少子高齢化という時代の変化によって、小学校閉校後はカローリングやペタンクという、老若男女が参加できるスポーツへと地域行事が変化していった。

地区住民運動会について、前出の高田夫妻によると、かけっこ、ばんりき(たわらに泥を詰めて持ち上げる)、重量上げ、走高跳、幅跳び、砲丸投げ、綱引きなど競技は多岐に渡ったという。高田新司さん(76)は24,5歳のとき、仏生寺を離れて住んでいたが、運動会のために車で帰省し、そのまま



写真1 昭和61年(1986)9月7日

木造校舎と運動会の様子(高田商店からの提供)

²⁰ オフィスや体育館で行われる屋内競技。1チーム三人で行い、ジェットローラーと呼ばれる円盤を直径90センチのポイントゾーンに向けて転がす。一人2投、相手チームと交互に投球をし、最終的にポイントゾーン中心に最も近くジェットローラーがあったチームの勝利。勝ったチームは負けたチームのジェットローラー内側にあるジェットローラーを得点として数え、6イニングの合計得点を競う。これを相手チームを変えてもう一度行う。ジェットローラーは軽い力で転がすことができ、体力関係なく老若男女が参加できることに加え、チームワークが求められるため地域交流スポーツとして注目を集めている。

運動会に参加したことがある。集落対抗で参加し、力が入ったと話す。妻の三枝子さんが「お父さんは期待の星だったね。と笑った。一人で何種目も参加したと言い、「物が無くても楽しめる、子どもがたくさんおったからね。」と語った。

上述したような閉校前に行われていた行事は、人が少なくなっていくことで継続が困難となっていた。当時の子どもは青年団で獅子舞や虫送りなどの地域行事にも参加した。もう少し年をとると壮年会に加入した。しかし、時代と共にそのような繋がりも薄れ、青年団の存続も難しくなった。今は老人会の会員が一番多いが、昔はそれほど盛んな活動ではなかったという。令和5年(2023)、寺中では小学生の子どもが獅子舞を舞ったというが、3,4年前くらいからやっていないのが常となっている。

2-2-2.地域と学校の連携

先述した地域の行事は神社や寺という場所に加え、学校の校庭や体育館を使用するなど、学校が中心となって行われることも多かった。学校の先生が公民館行事のプログラムを作るなど、地域行事に協力していた。そのため、学校で行われる行事について学校がやっているのか、公民館が主催しているのか分からなかったという声も聞いた。その他、宿直があり、校長や教頭などが学校に泊り、行事が終わった後に地域の役員と酒を酌み交わすこともあったという。地域と学校が密接な協力関係を築き、学区内に居住する先生の割合が高かったこともあり、先生も地域に溶け込んでいたことが窺える。

2-3.氷見市における公民館の変遷 「学校併設公民館」について

地域と学校が密接な関係にあったことを先述した。そして、新たに「公民館」という言葉が語りの中に登場した。仏生寺地区では独立した地区公民館を持つことはなく、公民館活動の大半は学校や農協という場所を使って行われている。そこで本節では、学校を使用しての公民館活動が進められてきた背景について『氷見市社会教育の歩み』(平成6年発行)を参照しながら述べていく。

戦後、昭和21年(1946)に文部省が発した「公民館の設置運営について」では、民衆の要望に基づいて民主的に必要な施設を作ることが説かれた。当時の氷見郡内ではこうした要旨が示されてもすぐに公民館設置の動きには繋がらなかった。

昭和24年(1949)には「社会教育法」が制定され、県内にも郡市単位に「公民館設置促進懇談会」が設けられ、公民館設置の必要性が訴えられた。それでも公民館の建設には至らず、村役場に「公民館」の看板を立て、村長または助役を館長として置いた。仏生寺ではかつて、学校の隣に村役場が設置されていたため、そこに公民館の看板が掲げられた。活動は役場の一室や学校の一教室を使って行われた。昭和25年(1950)ころの氷見郡では名目上の公民館ばかりで看板公民館と揶揄されるほどであった。

その後、市町村の合併により、昭和29年(1954)には仏生寺村も氷見市に編入され、一群一市が実現された。これに伴い、旧村役場は廃止され、芽生えかけていた公民館活動も頓挫

した。危機感を感じた県や、公民館活動に意義や必要性を見出す人々により、氷見町には3館、他の村部には一館ずつ公民館を設置するという方向性が示される。

そこで登場したのが「学校併設公民館」である。公民館はもともと地区の小学校校区ごとに設置するのが望ましいとされており、小学校に看板を移し、青年団や婦人会などの社会教育団体の拠り所とした。そのことについて、住民たちからの異論の声はなく、地域と学校は一体のものという意識があったと記述されている。学校側も地域のために奉仕するという考えがあり、青年団や婦人会担当の職員を校務分掌の中に位置づけた。館長は元村長や校下の有識者とし、主事は校長が当たった。氷見市においては、このような学校併設の公民館がほとんどであり、昭和40年代には、地区民運動会や盆踊り大会を校下文化活動の中心的存在として位置づけていた。

しかし、学校併設公民館には学校教育の障害になるという指摘がなされたり、時間的、場所的な制約が問題となり、農協に活動の場や事務局を移す地区も現れた。昭和34年(1959)に「氷見市公民館設置条例」が定められ、40年代には県内の各市町村で独立公民館が設置された一方で、併設公民館がほとんどを占め、仏生寺のように独立公民館の設置が進まなかったのは氷見市の特徴といえる。

3. 仏生寺地域づくり協議会の活動～地域コミュニティの再構築～

本節では、閉校に伴い地域づくり協議会の立ち上げに尽力し、現在、協議会の顧問として活動している屋敷宗一さん(72)の語りやフィールドワークを踏まえながら記していく。

3-1. 仏生寺地域づくり協議会設立の経緯

仏生寺地区では平成23年(2011)3月の仏生寺小学校廃校による地域コミュニティの希薄化が懸念されたことにより、氷見市より仏生寺自治振興委員会²¹に「地域づくり協議会」設立の働きかけがあった。これを受けて、自治振興委員会、公民館、民生委員児童委員協議会、健康づくりボランティア、社会体育推進協議会、長寿会、青年団、消防分団、交通安全協会支部、防犯組合、自主防災会の11団体で、平成25年(2013)に氷見市では第一号となる地域づくり協議会が設立されることとなった。平成27年(2015)に地域の総合計画である「地域づくり計画」²²が策定された。

氷見市における「地域づくり協議会」は、次のように位置づけられている。

²¹ 各集落の自治会長が集まってできる組織を指す。

²² 人とひととがつながり生き活きとした「支え合う仏生寺」をキャッチフレーズに、4つの基本目標(「住みやすい環境・歴史文化を守る地域づくり」「健康で長生きできる地域づくり」「住民が集い、絆を深める地域づくり」「安心して暮らせる地域づくり」)が掲げられている。

福祉健康部会	<ul style="list-style-type: none"> ・民生児童委員協議会 ・健康づくりボランティア 	<ul style="list-style-type: none"> ・いのちのバトン²⁴、避難支援シート、福祉マップの作成、見直し。 ・ハトムギワゴン²⁵の運行 ・令和5年度はeスポーツ大会も開催した。
防災・防犯部会	<ul style="list-style-type: none"> ・消防分団 ・交通安全協会支部 ・防犯組合 ・自主防災会 	<ul style="list-style-type: none"> ・年に一度開催される防災訓練²⁶の主催 ・防災、防犯、交通安全に取り組む活動を行う。

(平成27年『仏生寺地域づくり計画書』参照)

仏生寺地域づくり協議会の設立に伴い、平成26年(2014)に仏生寺地区の将来の総合計画の作成の取り組みが行われた。現在と20年後の未来を比較し、担い手不足により重複した役員が多いことや、参加者が少ないのに慣例的に行われている行事や会議の存在という地域が抱える課題や、参加したくなるような行事、住みやすい地域づくりなどの将来の展望を各部会(各種団体)や全体会で話し合いが行われ、平成27年(2015)5月に「仏生寺地域づくり計画書」が作成された。

3-4.既存組織の連合体として果たす役割

仏生寺地区における地域づくり協議会とは、既存組織の連合体といえる。小学校で地区運動会を主催していた社会体育推進協議会や、祭りを担っていた青年団などが含まれている。これまで個々の組織として活動してきた団体を包括的に一つの組織として編成した点に、

²⁴ いのちのバトンとは、単身世帯の高齢者などを対象にし、救急時にかかりつけ医や緊急連絡先が分かるように指定の紙に情報を記し、プラスチック製のバトンに入れて冷蔵庫に入れておくものである。仏生寺地区ではこのいのちのバトンを災害時においても活用するため、高齢世帯に限らず、住民の安否確認などにも用いる。個人情報の取扱いに賛同を得た住民を対象として「いのちのバトン・避難支援シート」として活用している。シートは4部複写で一枚目は各家庭の冷蔵庫にバトンに入れて保管し、2枚目は各集落の区長、3枚目は民生委員、4枚目は市社会福祉協議会が保管している。

令和3年度の仏生寺におけるシートの利用率は95%に上り、区長や社会福祉協議会などの住民への丁寧な説明が個人情報保護の風潮が強まる中での普及率の高さに繋がった。

²⁵ ハトムギワゴンとは平成26年から行われている、高齢者の外出支援、買い物支援の乗り合いワゴン。

²⁶ 地区を挙げての避難・炊き出し訓練。仏生寺小学校体育館を避難所とし、令和5年度は各世帯から一人以上の参加が呼びかけられ、住民約250人が参加した。

地域づくり協議会としての意義がある。「横のつながりが無いから地域の話し合いの窓口を一本化しましょうということで地域づくり協議会を作った」と屋敷さんは話された。地域づくり協議会に既存の組織のリーダーが集められ、また各集落の自治会長が役員として参加している。

残念ながら、仏生寺地区では青年団の減少により祭りの担い手がいなくなり、どの集落でも獅子舞が行われなくなったという現状がある。そのように地域の担い手がいなくなる中で、防災訓練などの地域活動を維持するためにも、地域づくり協議会が果たす役割は大きい。例えば、今まで消防団が中心として行っていた防災訓練も、地域づくり協議会の名のもとに計画・実施することで、地区全体が協力して開催することができる。また、各集落の自治会長から、各世帯に周知が行きわたり、広く参加を呼び掛けることができるというメリットもある。この点は避難情報の共有という意味を持つ。また、年に二回開催されるカラーリング大会は地域づくり協議会が主催し、イベントに即し該当組織に指示を出し、共催者であるスポーツ委員会が審判や司会の人員を出し、運営の中心を担う。地域づくり協議会が介入することにより、防災訓練同様、広く住民に PR が行きわたる。

3-5.財政面について

この節では地域づくり協議会の財政面について述べていく。地域組織と行政との関りの中で一番大きなものは助成金の支援である。地域づくり協議会では運営に必要なほとんどの歳入が市からの補助金で占められている。図 5 では、令和 5 年度の仏生寺地域づくり協議会の予算書を参照し、収入の内訳を記入した。

歳入の内訳は、おらっちゃ創生事業²⁷が 100 万円、持続可能な地域づくり支援事業²⁸が 50 万円、人権費補助金²⁹が 18 万円である。その他、1 世帯 300 円の会費を 290 戸分集金し、8 万 7 千円の収入としている。

仏生寺地区で申請している、おらっちゃ創生支援事業は小規模多機能の街づくり事業に区分され、地域づくり協議会が地域づくり計画に基づく事業を行うことで支援されるものである。屋敷さんは、地域づくり協議会の運営にはお金がかかると言い、それを地元で負担することは無理だと話す。そのため、地域組織の運営には市の補助金が不可欠である。

先述したように、おらっちゃ創生事業の補助金は地域づくり計画を策定している地区が

²⁷ 氷見市における地方創生の実現に向けて、豊かで住みよい個性あるふるさとづくりを推進するための補助金制度。補助限度額は 5 万円から 100 万円であり、事業費の大きさや事業の内容によって区分される。

²⁸ 旧町村の枠組みによる「地域づくり協議会」の組織づくりを促進し、自治の力を高める総合的な支援を行うものとし、地域づくり計画を策定済みの協議会の運営に対して上額 50 万円を補助金とする制度。

²⁹ 持続可能な地域づくり支援事業の一貫としての補助制度。

対象であり、市の制度にのっとり運用していくことが求められる。その他、一戸 300 円の会費を収入としている。それは「みなさんの意識づくりのため」だという。0 円でも良いが、住民一人一人が地域づく

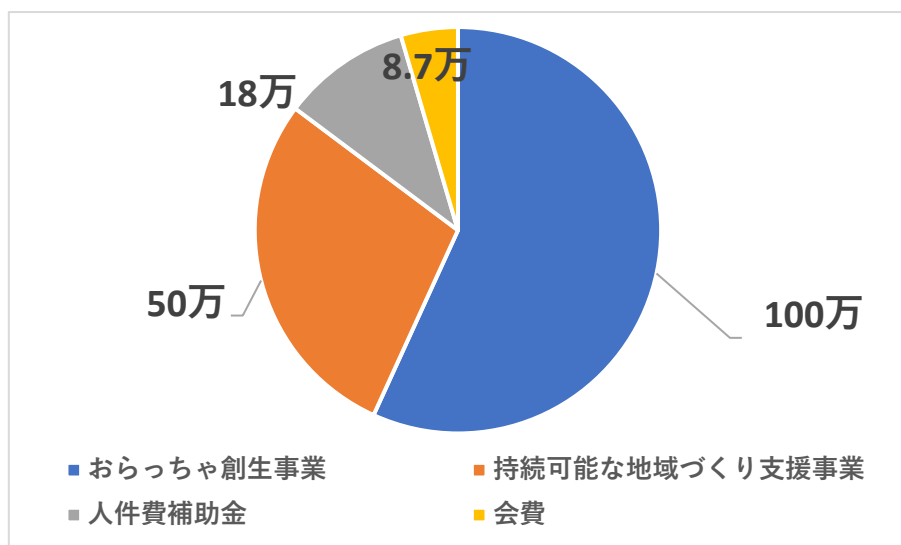


図5 令和5年度 仏生寺地域づくり協議会における歳入の内訳

りに参加しているといった、意識を持ってもらうという狙いがある。

歳出について地域づくり協議会では、防災備品を揃えたり、カラーリングをするために体育館の整備などに充てられている。その他、事務作業の方 1 人に対して人件費が支払われている。一方で、地域づくり協議会の役員をはじめ、運営、活動を担っている人々のほとんどが無償で活動しており、屋敷さんは「自分がもらうと他にも頑張っている方がいるのにおかしいという意識になる。」と話す。地域の担い手は高齢化、人手不足が深刻化する中で、ご厚意を持った人々の手によって支えられている。

3-6. カラーリング大会

3-6-1. 大会概要

カラーリング大会とは、地域づくり協議会が発足とともに、地域づくり協議会が中心となって行われるようになった行事である。旧仏生寺小学校の体育館に住民が集まり、6月と10月の年二回行われる。6月の大会の昼食には炊き出し訓練を兼ねた炊き込みご飯や豚汁が振舞われる。調査を行った2023年は11集落130名ほどの住民たちが参加した。カラーリングとは1チーム3人で行われる競技であり、地区ごとでチーム編成が生まれ、全30チームが参加した。今年は9回目の開催となる。

3-6-2. カラーリング大会開催に至るまで

「小学校」という組織に付随する行事や交流の機会を失った地域が、再びどのように人の輪を生み出したのか。この節ではカラーリング大会を開催することに至った経緯について述べていく。

屋敷さんによると、カラーリングを最初は誰も知らなかったという。地域づくり協議会を立ち上げたとき、カラーリングの道具を買ってもらえないかと、カラーリング愛好者の知人

から声かけられた。その知人にカローリングを体験してみないかと誘われ、やってみたら楽しさを実感したという。この出来事がカローリング大会を開催するきっかけとなる。協議会が設立された平成 25 年(2013)に、自治会長と役員等 30 名程で、試験的なカローリング大会を実施した。参加者のほとんどが楽しいと好評だったため、次年度以降正式な大会として開催することに至る。「楽しくないと出てこんけ？みなさん楽しいを実感すれば良いが」と屋敷さんは話し、「運動会も何もなかったから、これはいけると思ったらウケた」と笑みをこぼした。

カローリング大会は、その後定着するようになるが、その理由は、道具を買ってくれないかと言ったカローリング愛好者の存在が大きいという。大会、練習会を問わず、実技指導に必ず出席し、用具の管理も行ってくれている。現在、カローリング競技はどの地域でも広がりを見せている。だが、道具を買っただけで有効活用されているところが少ないという。その差は、道具はあってもお世話をする人がいない、リーダーシップを発揮できる人がいないなど、人的な要因が関係しているのではと話した。

運動会に代わる行事として発案され、仏生寺地区ではカローリング大会は見事に定着した。「みんなで楽しいことすることが大事。」と再度念を込めた。年齢や性別に関係なく誰でもプレーできるということが最大のメリットである。また、全国的にも珍しいカローリング常設コートとカローリング用具を揃えた。旧仏生寺小学校体育館には、氷見市カローリング協会の定期練習会や正式な大会をはじめ、氷見市一円から、各種の団体等カローリング愛好者が集う。スポーツを通じた地域活性化という面において、カローリングにかける期待は大きい。

3-6-3.カローリング大会におけるフィールドワーク

調査を行った 2023 年はコロナ禍を経て 4 年ぶりに大会が開かれ、実際にその様子を見ることができた。カローリング大会は、例年 6 月と 10 月の年 2 回開催される。そのうち 6 月の大会は、旧仏生寺小学校のランチスペースを借りての炊き出し訓練も行うため、特に多くの住民たちが集まるイベントとなっている。以下の節では 6 月のカローリング大会におけるフィールドワークで得られた知見について記述していく。

会場につくと、ざわざわとした人の熱気に包まれた。普段小学校周辺を歩いていても滅多に人に遭わないため、約 130 人の住民が一堂に会した光景は驚くばかりであった。特別に感じられたのは、人の多さのためだけでない。小学校のグラウンド全体



写真 2 車がグラウンドの大部分を占めて駐車されている様子(10月のカローリング大会で撮影)

を埋め尽くすように、駐車された車の存在感である。仏生寺地区は兼業農家世帯が多いということで、軽トラックの台数がかかなり多い。細越や上原など、山の中にある集落をはじめとして、歩いて来られる距離の集落は限られている。グラウンドが車で埋め尽くされた様子は、旧小学校区という学区が非常に広範囲にわたるということを暗喩的に表していた。

8時半ごろに会場に着くと、既に開会式が終わり、大会が始まっていた。入り口付近に仏生寺スポーツ交流委員会の机が用意されており、数人の委員が席について各試合の得点をまとめたり、試合がスムーズに行われるようにアナウンス業務を行っていた。壁にはパソコンの画面が投影されていて、各チームの点数とその時点での順位がリアルタイムで打ち込まれていた。

カローリングのレーンは6レーン用意され、奥のステージ側から投球するようだ。カローリングは1チーム3人で行うため、1レーンで6人がプレーする。そのため、入り口付近のスペースには試合の出番を待つ人などが団らんでできるように莫塵が引かれていた。缶コーヒーやジュース、ハトムギ茶、お菓子などが振舞われ、参加者は自由に雑談を楽しんでいた。同級生と一緒に9回目の参加という男性(40代ほど)に話を聞いた。共に仏生寺小学校を卒業した仲間に参加しているという。プレーをしている様子を拝見すると、「けんちゃんここら辺どんと当ててみようや」先ほどの男性が仲間にもう呼ばれる。「あててくれとりあえず」と仲間にも懇願される。「あー」ローラーが思わぬ方向に飛んでいく。「まさかそんなあれがあると思わなんだもん。」けんちゃんと呼ばれた男性が感嘆の声を漏らす。そして同じレーンでプレーする人々で笑い合う。先ほどの男性はじめ、親し気な名前を呼びあい、楽し気なやりとりがなされていた。どこのレーンでも1プレーごとにプレーする人以外やその他の周りの人から歓声や落胆の声、アドイスが飛び交う。人のことでも自分のことのように一喜一憂しながら試合をする様子があった。カローリングにはチームプレーが求められる。誰もが密なコミュニケーションを取り交わし、和気あいあいとした交流が生まれているようであった。



写真3 カローリングを楽しむ参加者たち（筆者撮影）

閉会式は13時ごろ執り行われ、各役員の挨拶や上位チームの表彰や景品の授与があり、参加者は解散という形になった。カローリング大会の様子を見ていると、130人ほどが参加していたが、誰もが顔見知りのような状況で、話を聞いていても、通りがかった知り合いが「お一元気か？」などと言って合流する様子が見られた。小さな子供を連れた家族の姿もあり、カローリングをする大人たちの横で、体育館を縦横無尽に走り回る子供たちがいた。子供たちと、それを微笑ましく見守る人々の姿が印象的だった。

炊き出し訓練

仏生寺地区では例年、カローリング大会の昼食は災害時の炊き出し訓練を兼ねて、アルファ米と豚汁が参加者全員に振舞われている。

体育館でカローリング大会が行われている中、渡り廊下を挟んだ校舎(氷見ラボ水族館)の角部屋の教室のベランダでは、7人の住民がてきぱきと参加者の昼食となる豚汁とアルファ米の炊き込みご飯を作っていた。その角部屋はかつての小学校のランチルームに当たるところであり、40人ほどが昼食を取れる席が用意されていた。炊き出しに当たった7人の内訳は、スポーツ交流委員会の役員及び消防団長の2名(防災士)を中心とし、仏生寺自主防災会の炊き出し班が輪番制で担当している。今回は鞍骨から3人、大覚口2人であった。使用する米はお湯を入れて炊くことのできる備蓄用のアルファ米である。一箱で50食分であり、それを3箱使用し、全部で150食ほど作った。

アルファ米の消費期限は2025年となっていた。5年の消費期限があるもので、令和2年(2020)に購入し、他の防災用品と共に十三中学校体育館横で普段から備蓄しているものを使用した。炊き出しの大鍋セットは仏生寺消防車庫横倉庫に保管されているものを使用している。その一方で、野菜は保存が効かず備蓄できない。燃料はガスを使用しているが、普段は保管していないため今後の課題となっているという。

8時半ごろから始め、11時ごろに炊き出しが完了した。大会の司会を務めるスポーツ運営委員からの放送が入り、試合がひと段落着いた人から昼食をとるよう促された。参加者は各自気が向いたときに体育館と水族館を繋ぐ渡り廊下を通り、角部屋のランチルームに向かう。その際、「小学校がこんな風になっているんだ」と感想を漏らす人がいた。聞くと、選挙のときくらいしか小学校には来ないため、久しぶりに訪れたのだという。他の方にも話を聞くと、仏生寺地区は広く選挙の投票も別の学校で行う集落もあるので、カローリング大会くらいしか小学校に



写真4 炊き出し作業にあたる人々
(筆者撮影)



写真5 豚汁が振舞われる様子
(筆者撮影)



写真6 参加者に振舞われた豚汁と炊き込みご飯
(筆者撮影)

くる機会が無い人も多らしいということが分かった。なお、併設されている氷見ラボ水族館側は管理者が富山大学であり、地域の組織が管理していない。そのため通常営業が行われており、いつものように子ども連れの姿が目立った。地域の方のご厚意で、炊き出し訓練の昼食を頂くことができた。豚汁には肉、ごぼう、じゃがいもや人参などが入り具沢山で温まった。アルファ米の炊き込みご飯は、普段食べるごはんより少々パサつくものであった。



写真7 ランチルームで豚汁と炊き込みご飯を食べる参加者の様子（筆者撮影）

参加者は向かい合って座り、近くの席の人と会話して食べる様子が見られた。カラーリング大会が終わり、運営委員の人々が、片づけ作業をしていると、アルファ米の炊き込みご飯が余ったということで、水族館に遊びに来ていた複数の家族連れに「晩ごはんにいりませんか？」、「たくさんもらってください！」と話しかけて、手渡していた。余ったものを無駄にしないという精神と、誰にでも分け与えるという農村ならではの良さを感じた。また、普段見ることができない、地域の人と水族館の来訪者に交流が生まれた瞬間であった。

4.今もなお息が吹き込まれる校舎－氷見ラボ水族館としての校舎利用－

第三節で述べたように、廃校となった小学校の体育館は地域の人が顔を合わす場所として活用されている。一方で、日常的に小学校の校舎を訪れる地元の人は少ないということが分かった。この節では現在、氷見ラボ水族館として運営される校舎利用にスポットを当て、現在の小学校と地域の内外との関りを考える。

4-1.氷見ラボ水族館の概要

旧仏生寺小学校の校舎は平成24年(2012)から氷見ラボ水族館として活用されている。氷見ラボ水族館では氷見で見ることができる、天然記念物のイタセンパラ³⁰をはじめとした、地域の淡水魚が常時30種類ほど展示されている。その他にも、うさぎや豚といった動物と触れ合うことができたり、小さな子供が遊べるスペースが充実しているなど、体験型の水族館として親しまれている。休日は約200人、年間約1万人が来場する施設である。

³⁰ 日本固有のコイ科の淡水魚で、体長約6cm。氷見市と大阪府の淀川水系、濃尾平野の木曾川のみで確認されており、環境省は嚴重な保護対策が必要な絶滅危惧IA類に指定している。

またこの水族館は、水族館として活用されるだけでなく、富山大学理学部の氷見市連携研究室として、淡水魚の普及啓発活動や、氷見の里山の動植物の調査・研究を行う施設でもある。研究室として使用されているため、一般の人の立ち入りができない教室が一室あったり、「ご自由にお取りください」と一言添えられた論文が置かれるなど、普通的水族館とは一味違う特徴を持つ。

4-2. 設立の経緯

以下、小学校から氷見ラボ水族館となった経緯について、氷見市役所職員であり、水族館の主任学芸員を務める西尾正輝さんのインタビューより記述する。

西尾さんは大阪府出身で、大阪の大学院でイタセンパラの研究をしていたところ、富山県のイタセンパラ保護事業が開始され、その人材として氷見市に移り住んだ。

廃校になった当初、老人ホームなどの福祉施設にしようという案が浮上していたが、住民たちから、賑わいがなくなると懸念の声が上がった。代案として示されたのが氷見市に一つも存在しない、大学の研究施設を作るという案であった。ここでキーパーソンとなったのが西尾さんである。西尾さんは市の委託を受けてイタセンパラの研究³¹をする中で、富山大学理学部の教授とも連携しており、繋がりがあった。しかし、ただ研究施設にすると、賑わいがなくなってしまうという懸念点が払拭できないため、研究施設を兼ねた水族館にしてはどうかという案を提案した。その後、市との住民説明会が何度か開かれ、廃校が氷見ラボ水族館として運用されることが決定した。

4-3. 水族館の管理・運営

水族館の入場料は無料である。Bio クラブという水族館の管理運営のために設立されたNPO 法人が市から委託を受け、その委託金で運営をしている。他の水族館のように別の業者に魚の捕獲依頼をするのではなく、先述した西尾さんはじめ、Bio クラブのメンバーが地域の川に出向き、展示する魚を採取しに出かけている。

もともと廃校になったときから校舎を壊すという方針はなく、小学校が建て替えられた当初から老人ホームとして改装できるような作りとしていた。そのため、



写真8 氷見ラボ水族館(旧仏生寺小学校)の外観
(筆者撮影)

³¹ 西尾さんは氷見市内の万尾川でイタセンパラの生息環境を調べ、産卵に住民の水田管理が重要な役割を果たしていることを確認した。富山大学の教授らと共同で調査をし、保護池を整備するなど、イタセンパラ保護のための活動を進めている。

できるだけバリアフリーで、教室と教室の段差がなかったりしている。氷見市の場合、市街地の例にもあるように、小学校などは廃校になったとしても費用がかかるため取り壊すということはしていない。

4-4.誰にも開かれた水族館

11 月の中旬に、氷見ラボ水族館を訪れた際の一日の様子を以下に記述する。あいにくの雨であったが、休日のお昼時に何うと親子連れが 4,5 組訪れていた。代わる代わる来館者が



写真 9 氷見ラボ水族館の内観（筆者撮影）

訪れ、絶えることがない。温かな光が天窓から差し込む広い廊下を子どもが駆けていく。ぬ

くもりと懐かしさを感じる木目調の廊下の上で、仲睦まじい親子の会話が聞こえてくる。

射水市から、10 歳と 6 歳のお子さん連れて来館した女性に話を聞いた。子育てをする友人からお勧めされたことや、インスタグラムの子育て向けアカウントで紹介されていたものを見て、今回初めて

訪れたという。一番の目当ては子どもたちに希望された、ザリガニ釣り体験だという。普段、釣りがしたくても簡単にはできないため、簡易な釣り堀に魅力を感じたと話す。ザリガニ釣り体験は 1 日一回までと決まっており、さっそく子供は「もう一回やりたい」と熱望している。他にも、わたあめを作るコーナーがあり、少し苦戦した、と話してくれた。

お母さんに聞き取りをする目の前で、子どもがチラッと大きなクマのぬいぐるみから、無邪気に顔を覗かせる。氷見ラボ水族館は展示を行う水族館でもあるが、一つの教室を利用した遊ぶスペースも充実している。スリッパを脱いで上がるマットの上には乗り物の玩具やぬいぐるみ、バランスボールなどの遊具があり、子供たちはそのスペースで遊ぶことで夢中だ。そのことについて尋ねると、「うちの子どもたちは特にそういうの(魚の展示)よりもこういうの(体を動かして遊ぶ)の方が好きかも」と笑って答えてくれた。

仏生寺に来たのは初めてと言いき、水族館と聞いて、海の方を想像していたが、ナビに山の方に案内されて驚いた。子どもの授業参観に行くと薄型のテレビが置いてあるが、ブラウン管のテレビに懐かしさを感じているという。小学校は当時の造りがほぼそのまま残されている。山を背後にし、水田を見渡す高台に、ポツリと小学校が立っていることに触れ、「みんなここまで登校してきてたんですね。」と感想を漏らしていた。ここに来ると当時、そこにあった生活に自然と思いをさせる人も多いのかもしれない。

他にも何名かの来館者にインタビューを行うことができた。高岡市から 7 歳と 11 ヶ月のお子さんを連れて来た方にも話を伺った。まだ歩くことのできない、11 ヶ月の赤ちゃんは

施設の中を時にハイハイで移動する。好奇心のままに、足と手を器用に動かす。歩くことができない子供でも、段差が無く、自由に動き回れる点に魅力を感じているという。先述のように体験型のスペースもあり、7歳の上の子と二人それぞれの楽しみ方ができる点も良いと話してくれた。

訪問数は 4,5 回とリピートしている人も多い一方で、初めてという人もおり、様々であった。初めてという



写真10 利用者が自由に遊べるスペースの様子
(筆者撮影)

人々からも、また是非訪れたいという前向きな感想が多く寄せられた。十二町という近場から来る人もいたが、氷見市に限らず、富山県内の各市町村や石川県からの来館者もいた。

次に、氷見ラボ水族館のパートとして働く藤田さんの語りをもとに記す。意外に感じられたのは、来場者は親子連れだけではないということだ。氷見や高岡、富山の老人ホームからの団体客もデイサービスの帰りがけや、休日を利用して訪れることがあるという。そのような高齢者は「昔、こういう魚がいたよね」という感想や、特に仏生寺にゆかりのある方にとっては、「昔ここ学校だったよね」という感想を持ち、過去を回顧する場所となっているのだ。施設には段差がなく、車椅子でも入ることができることもそのようなことに繋が



写真11 販売される「やすらぎ」の入所者作品
(筆者撮影)

っている要因だろうか。また、施設内には氷見の障害者支援施設「やすらぎ」の入所者の方が作った手作り作品が販売されており、そこでの収益はすべて「やすらぎ」に寄付をするという活動をしている。そのようなこともあってか、施設には障害を持った方も訪れるという。

藤田さんは、団体の子どもや障害を持つ方が来ることに触れ、「はじめは、子ども連れて帰った。今は、団体で来られる。」とリピートする来館者について話した。明るく、見通しが良く広い水族館は、誰かが騒いでも誰も文句をいう人はいない。「子どもが、ギャーゆうても誰も何も言わない。少し様子を見てみると、帰りたくないと言っている」という。子どもでもお年寄りでも、障害を持っていても、誰もが安心して来られる、お金を持たなくても来られる、それがこの施設の魅力だと語っていた。

5. 「地域の子は地域で育てる」 仏生寺学童保育の活動

現在、旧仏生寺小学校の体育館に付属するクラブハウス(公民館)を利用して、仏生寺学童保育という活動がなされている。仏生寺学童保育の前身である、仏生寺っこ広場の立ち上げに尽力し、仏生寺学童保育運営協議会主事の小谷暁さんの語りを中心に以下を記していく。

5-1. 仏生寺学童保育の概要

仏生寺学童保育には湖南小学校に通う、仏生寺地区の児童 24 人全員が登録されており、保護者の都合や、習い事の都合に合わせて、必要なときに児童が放課後の時間を過ごせるような施設となっている。³²

5-2. 設立の経緯

平成 17 年に当時の県知事の「さんさん広場」という子育て支援事業が開始された。規模の小さい学童保育であっても 100 万円ほどの補助金をもらえることになった。それを受けて、市の社会福祉協議会から民生委員の小谷さんへ仏生寺学童保育の前身である、「仏生寺っこ広場」設立の委託がなされ、開設することになる。「仏生寺っこ広場」は小学校のランチルームとして使用されていたところで行われていた。その後、平成 23 年(2011)4 月に仏生寺小学校が閉校し、平成 23 年から平成 28 年(2016)にかけては湖南小学校の学童保育に仏生寺地域の子どもを預けていた。

しかし、共働き世帯の増加などにより、学童保育の需要が増えて、湖南小学校の方では、他地域の子どもは受け入れられないとされる。また、仏生寺小学校があった際に盛んに行われていた女子のハンドボールクラブ³³や男子の野球クラブが、閉校に伴い消失したことも学童の需要が増えた要因である³⁴。仏生寺小学校が存続していた時は、放課後にクラブのある曜日は顧問の先生が子どもたちを見ており、保護者が夕方に迎えに行くということが習慣化されていた。そのため、学童の必要性があまりなかったのだという。以上のように、子どもを取り巻く社会の変化、環境の変化により平成 28 年(2016)に仏生寺学童保育を設立した。閉校後は物置として使用され、協議会が設立された現在は、公民館として使用されている部屋を主に利用している。

³² 平日は 15 時から 18 時まで。第 2 及び、第 4 土曜日、夏休みなどの長期休みは 8 時から 18 時まで運営している。会費はおやつ代などを含み、1 か月 1500 円、保険料は年間 800 円となっている。

³³ 仏生寺小学校のハンドボールクラブは平成元年(1989)から平成 22 年(2010)の間に、全国大会で優勝 2 回、準優勝 7 回、ベストエイト 8 回の記録を誇り、盛んに活動が行われていた。

³⁴ 現在の湖南小学校にはハンドボールクラブも野球部も設立されている。

子どもの登録人数を仏生寺っ子広場であったときの十数人から、仏生寺地区の子どもたち二十数人、全員にすることにより、広場から仏生寺学童保育に格上げして、補助金の額を増額させた。それにより、地域の子どもは、地域で見守る体制が整えられる。また、仏生寺地域づくり協議会と協力して、地域での運営体制を構築した。

5-3.現在の学童保育について

学童保育には先述したように、地域の子ども全員を登録しているが、全員が毎日来るわけではない。ときには2人、多いときで登録人数の半数、12人が利用する。習い事や家庭の用事などで曜日ごとに利用する児童の人数は異なっている。



写真12 体育館でドッジボールする児童たち（筆者撮影）

他の学童保育は家に同居家族がいれば預かってもらえないが、仏生寺学童保育では祖母が家にいても預かるということをしている。また、5,6年生という高学年の児童の預かりも行う。放課後支援員や民生委員が保母となっている。保母の方たちは、仏生寺学童保育について、子どもたちの待遇は恵まれていると話している。体育館や校庭もあり、広い運動場で遊び回れる。本来、旧仏生寺小学校の体育館は地域の内外に開かれているものであり、予約制で各種の団体が利用しているが、予約が無い日は学童の子どもたちが自由に利用できる。体育館では子どもたちが目いっぱい走り回ることや、一輪車やバドミントン、テニスやバスケットボールもできる。

5-4.課題

県や国から年間400万円近く補助金が交付されているが、そのほとんどが人件費となる。そのため、どこの学童にも見られるように夏休みなどの一日中子どもを預かる際には、児童にはお弁当を持参してもらい、昼食を出す余裕がないという。

また、学童の支援員や運営の人手が足りていないことも現在の課題である。平日は午後3時から6時までの2時間か3時間の夕方の短時間勤務であり、支援員の確保が難しい。以

前、地域だけでは人材の確保が難しかったために、社会福祉協議会からも職員が手伝いに来てくれた。だが他の仕事があったり、他の地域の学童保育に行ってしまったという。現在は、民生委員のメンバーを中心とし、放課後支援員の研修を受けて、資格を取って学童保育を支えている。それでも十分な人手にはなっていない。長期休みの際は、午前と午後で支援員が3人ずつ必



写真 13 公民館(クラブハウス)での学童保育の様子
(筆者撮影)

要となるが、人が足りない時は、小谷さんが一日中勤務することもあるという。

現在、学童保育の代表を務める小谷さんは80代と高齢であり、補助金の申請や運営を一人で行っているため、「あの人が潰れたら終わりや。」と周りの人は話す。「だんだんと定年が延びておかしな時代になっている。もっと繋いでいければもっと立派なものになると思うんだけど」と小谷さんはいう。高齢化に伴い、会社を定年で退職しても、人材を引き留めるといふ時代において、地域の学童を担う、次の人が現れないことに危機感を募らせる。続けて、「ものすごい厳しいとき。私みたいな八十幾つものじいじが出てこんなことになる。」「でももう少し頑張ってくださいということになって、そのうちに命尽きていかんなんから。引継ぎも何もできていない。」と地域のため尽力してきたゆえの、切実な想いを吐露した。

地域の担い手が高齢化する中で、パソコンを用い、行政と書類のやり取りをすることができ人は限られている。地域社会の持続性を探る中で、人材の後継者問題は早急に考えなければならない課題として横たわっている。

6.まとめと考察

仏生寺地区の地域コミュニティを調査するにあたり、本稿では浮上した小学校の存在を軸に記述した。

子どもたちが多かった時代は、運動会や相撲大会など、様々な行事が執り行われ、小学校の周りには自然と人の輪ができていた。獅子舞や虫送りなど、子どもがいたからこそ行われていた行事もあり、子どもの存在が地域に与えていた影響は計り知れない。また、氷見市においては学校併設型の地区公民館が多く、小学校と地域の関係が強固であった。昭和40年代には、学校が地区民運動会や盆踊り大会を校下文化活動の中心的存在として位置づけ、率先して地域活動を担っていた。これらのことより、小学校が廃校となり、地域コミュニティ

の希薄化が懸念されるという理由について、子どもの減少に伴い、従来の地域行事の存続が難しくなり起り得るものだということが分かった。

少子高齢化の折、消失していく行事はどこ地域でも見られる。ただ、そのような過去を顧みて嘆くのではなく、時代に合わせて地域コミュニティを構築し直すという試みが、仏生寺地区では行われている。青年団や公民館という、ほぼ活動がなされていない団体を一つの組織にまとめ上げ、編成し直した。小学校が無くなり、地域の人同士で顔を合わせる機会を失ってしまわないよう、再び人の輪を創出するための協力体制を作り上げた。これら一連の出来事から、地域の必要性に応じて、組織づくりが進められてきたといえるだろう。

また、小学校が廃校になっても地域コミュニティが消失したわけではなかった。旧仏生寺小学校は、廃校を利用した氷見ラボ水族館にリメイクされ、地域の内外から絶えず人が訪れる施設となっている。校舎だけでなく、体育館は社会開放され、地域の内外の人が使うことができる。また、カローリング大会や防災訓練で多くの人が顔を見合わせる場所として活用され続けている。学童保育で使われているクラブハウス(公民館)もそのまま残され、子供たちの居場所となり、地域住民に親しまれている。たとえ、廃校となっても校舎そのものが地域に還元される可能性は大きい。

先述してきたような地域コミュニティを維持し、再構築する活動は、多くの方の思いがあって実現されてきた。地域づくり協議会会長の屋敷さんは、地域が一つになれることを探して地域づくり協議会を立ち上げた。氷見ラボ水族館の西尾さんは「賑わいがなくなる」とい住民の懸念を払しょくするため手を挙げた。学童保育主事の小谷さんは、地域の子は地域で育てるという意識を持って、学童保育を開設した。行政からの助成金は、そのような活動に分配されるが、それらを担っていく人がいないと成り立たない。お金や道具だけでは、地域組織の維持はできない。思いを持つ人々やリーダーがいて成り立つのである。今回の調査を通じて、人的資本の価値を強く実感した。地域でリーダーシップを発揮できる人、住民と協力体制が取れるか、ということは地域コミュニティを維持するために必要不可欠な要素であると考えた。

ただ、特定の人に頼って地域コミュニティが成り立つことは危ういと感じる。持続可能な地域づくりを進めるためには、世代交代が円滑に行われることが望まれる。現状では、地域の担い手はほとんどが高齢者であり、働き盛りの現役世代が地域づくりに積極的に参入することは難しい状況となっている。お話を伺った方々が共通して持っていたものは自発性である。今後、自発性を触発するような仕組みが地域社会に浸透していくことが必要なのではないだろうか。

謝辞

調査を始めた当初、なんとなくテーマは決めてみたものの、さっぱり何を調査して良いか分かりませんでした。しかし、人に会って話を聞くのがフィールドワークの醍醐味であり、仏生寺の方々のお話を聞く内に、調査の関心が定まっていき、本稿が完成した次第でありま

す。仏生寺の方々が紡ぐ言葉があり、そこから私が感じた新鮮さや驚きを報告書に詰め込んだつもりです。

このような報告書を形にすることができたのは調査に快く協力して下さった仏生寺地区の方々のお陰です。報告書に名前を載せていただき、個別にお時間を頂いて聞き取りに応じてくださった方々はじめ、多くの方にご協力を賜りました。特に、カローリング大会の際には、富山市から来た私を温かく迎え入れて下さり、質問に対して「あの人なら知っているかも」「ここに資料があったかも」と親身になって対応をしていただいたことを覚えています。

私の未熟さ、至らなさゆえにお手間をお掛けしたこともあったかと思えます。調査にお付き合いいただいた、全ての方々に心より感謝申し上げます。

学童保育主事の小谷暁さんが2023年12月5日に永眠されました。

執筆中の出来事であり、一報を伺ったときはとても信じがたく、言葉を失いました。同時に、地域の皆様から頂いた言葉の重みを改めて噛みしめた所存です。調査に気さくに応じていただき、親しみを感じるとともに、地域のため、子どもたちのために尽力される姿に、大きな刺激と学びをいただきました。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

令和5年度1月1日の能登半島地震により被災された方々にお見舞い申し上げます。仏生寺地区においても断水が発生し、仏生寺小学校体育館の照明の半数が割れてガラスが散乱したという被害をお聞きしました。大津波警報により避難してきた方々、約100名を校舎のランチルーム、体育館に併設されているクラブハウスに受け入れ、地域づくり協議会の方で購入していたキャンピングマット、毛布があったことで暖を取ることができたと伺いました。

この度の地震で自主防災組織の重要性を改めて認識しました。氷見市においても被害の全容が未だ把握されず不安は尽きないと存じますが、一日も早い復旧、復興をお祈り申し上げます。

参考文献

氷見市立仏生寺小学校『閉校記念集 仏生寺』、2011年。

氷見市立仏生寺小学校『氷見市立仏生寺小学校130周年記念 仏生寺』、2006年。

小谷超『氷見市立博物館年報-第24号-』、2005年。

仏生寺地域づくり協議会『仏生寺地域づくり計画書』、2015年。

氷見市教育委員会・富山大学理学部(山崎研究室)『氷見ラボ』、2017年。

富山新聞朝刊25面『万尾川 水田から餌流入 国天然記念物 イタセンバラに好環境』、2017年8月19日。

富山新聞朝刊19面『防災功労で総理大臣表彰 氷見・仏生寺地域協が報告』、2017年8月19日。

参考にしたウェブサイト

仏生寺地域づくり協議会 HP

<<https://bussyouji.net/introduction/bussyouji/>> (最終閲覧日 2023 年 12 月 11 日)

社会福祉法人氷見市社会福祉協議会「地区社会福祉協議会活動」

<<regwel-suishin-district-activity.pdf> (himi-shakyo.jp)> (最終閲覧日 2023 年 11 月 14 日)

氷見市「地域づくり協議会について」

<<https://www.city.himi.toyama.jp/gyosei/bunka/komyu/4/2682.html>> (最終閲覧日 2023 年 12 月 11 日)

日本カローリング協会「ルール」

<<http://www.curolling.com/contact.html>> (最終閲覧日 2024 年 1 月 16 日)

第2部

「食」を紡ぐ

第4章 魚と人々のつながり—暮らしの中にある魚食—

北 朋乃実

はじめに

私の生まれ育った故郷は少し歩くと海があり、冬はカニがよく獲れることで有名な港がすぐそばにある、いわば港町という所である。幼い頃から魚との接点は多く、小学生の頃には隣町のおばあさんが移動販売で軽トラックの上にその日獲れた鮮魚を載せ、移動販売でお得意の家を回り、私の祖父母の家にもよく訪れていた様子を朧げに記憶している。しかし、私は幼少期の頃は自ら進んで魚を食べることは少なかった。大学進学を機に富山県で一人暮らしを始めて数か月経った頃、寿司屋に行く機会があり、そこで初めて鮮魚の美味しさに気づくことになった。

氷見市において春のイワシ、冬の寒ブリは氷見の代表魚として県内外問わず名高い。調査地が決まり何度も訪れる中で、上記のような氷見市の観光資源における魚、ひいては魚食の重要性を知るとともに、観光資源ではない部分で、地域の中でどのような形で魚食が受け入れられて浸透しているのかという所に関心を持った。

また調査では「魚離れ」という言葉に注目する。戦前まで盛んに消費されていた魚だが、近年の日本人の食生活は欧米化の傾向が強まり、安価な食肉がスーパーで流通するようになった。現在は、一人当たり消費量は肉類が魚介類を上回る(図1)。

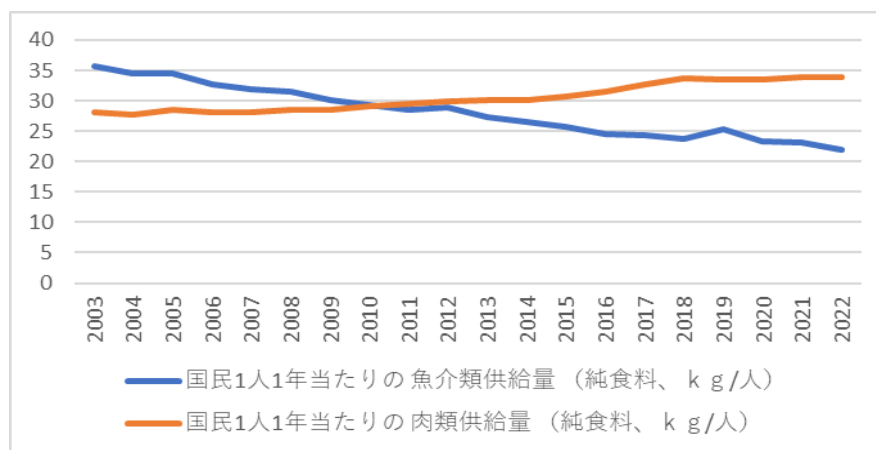


図1 2003年(平成15年)から2022年(令和4年)までの魚介類及び肉類の1人当たりの年間消費量(「農林水産省 食料需給表」に基づき作成)

年齢層も若年化するほど魚離れが深刻になる。この背景には、人々の食の嗜好の変化のほか、調理の面倒さ、骨が沢山あり食べづらい事、戦前から高度経済成長期に至る専業主婦の

時代から共働きの時代に移り、台所に立つ人々が家庭での調理時間に手間をかけられなくなったことなどが挙げられる。また魚の種類によって消費量が変化していないものと、極端に食べられなくなったものがある。特にサンマ、イワシなどの青魚は鮮魚、加工食共に現在は消費量が大幅に落ちたとされている。

この現象は氷見市でも例外でない。調査では、この現状を改善しようと氷見から魚食文化を広めていこうとする人々と出会う機会に恵まれた。報告書では、約半年間の調査での水産加工会社、鮮魚店、ビジネスサポートの訪問、市主催のイベント参加などから、過去から現在に至る魚食に関する人々を取り巻く環境の変化を記述し、将来どのような形で魚食が残り続けるのかという考察を最後に記述する。

1.越田商店

水産加工を営む越田商店では、氷見漁港を拠点に水産加工品を無添加で製造、販売している。調査では専務の越田喜一郎さんに話を伺うことができた。

はじめに越田さんの経歴を簡単に紹介する。氷見市出身の越田さんは、大学進学を機にいったん地元を離れ、その後横浜の中央卸売市場で魚の冷凍商品を扱う会社のバイヤーとして14年間働いた。2011年に長女の小学校進学を機に地元に戻り、現在は氷見で家業を継いでいる。

越田さんからはブリやイワシなど氷見の魚の基本的な知識や近年の動向を教えて頂き、また自社工場ではアジのみりん干しを製造する工程を見学する貴重な機会を提供いただいた。本節では越田さんからの聞き取りと、みりん干し工場の見学の様子を中心に記述する。

1-1.扱う商品について

店頭には並ぶのは一夜干し、みりん干し、丸干しの干物商品を中心に、刺身、燻製、こんか漬³⁵、味噌や塩麴で味付けされた切り身など幅広い。

主な卸売先には東京、大阪、名古屋など中央卸売市場の他、市内の小売商店、ひみ番屋街、越田さんが横浜時代に付き合いがあった横浜の懐石料理屋などがある。



写真1 越田商店の販売商品の一部（筆者撮影）

³⁵ 塩漬けにした魚を米麴や米糠などで漬け込み発酵させた北陸の郷土料理。「こんか」は「米糠」を指す。

原材料の魚の仕入れは時期によって量や大きさが不十分な場合があり、供給する商品の全てを氷見産でまかなうのは難しい。そのため近隣の石川県や福井県、遠くは関西、山陰地方まで買い付けの幅を広げている。しかし、イワシ、ホタルイカ、ブリなどは可能な限り県内産でまかなうように努めている。これは県内外でも地物食材として名高い魚のブランド力を生かした商品作りに繋げていくためだという。実際にホタルイカや白エビの刺身、ブリの燻製の商品の売れ行きは良く需要も高い。地元目線では馴染みのある魚でも観光客にとっては目新しさがあり、ネームバリューが上手く作用して観光客の購買意欲を高めている。逆にアジやイワシなどのみりん干しやサバやイワシのこんか漬けなどは、どちらかという

と地元の方に嗜好される傾向が強く、親族や知り合いへの贈呈用として購入する人が多い。ホタルイカや白エビなど一部の冷凍商品には仕入れた直後に瞬間冷凍を行うことで高い鮮度を保ちながら販売する手法がとられている。これを可能にするのが「凍眠」という急速冷凍機械である。仕入れた鮮魚を小分けにして真空パックにした後、機械の中に入れマイナス30度のアルコールの液体で一気に瞬間冷凍する。越田商店では5年前からこの機械を取り入れ、冷凍販売商品の種類や販路を以前より拡大させた。越田さんによると、この瞬間冷凍を施すことで魚の細胞を壊すことなく旨みが凝縮して冷凍され、解凍して食べる際にドロップ³⁶が出ない鮮度の高い美味しさを提供できるという。

1-2.イワシ商品と水揚げ量の関係

越田商店にはマイワシを用いた商品として丸干し、みりん干し、こんか漬けがある。生産割合は順に1割、7割、2割とみりん干しが一番大きい。イワシには大きさによって小羽、中羽、大羽と区別があり、大きさによって加工の用途に向き不向きが生じる。そのため越田商店では年間約1万5000匹に上るマイワシを大きさごとに手作業で選別している。氷見漁港でのマイワシの漁獲時期は初冬から春にかけてで、次第に魚体が大きくなり脂がのり始める。冬の時期に揚がるイワシは小羽で脂が乗り切っていないため水分が飛ばしやすく、そのため丸干し加工に適する。油ののった中羽はみりん干し、中羽から大羽はこんか漬けに用いる。イワシのこんか漬けは、定置網漁で中羽から大羽サイズのイワシがよく獲れる時期に合わせて毎年2月に製造を開始する。唐辛子、米糠、塩を揉みこんだものを樽で約半年ほど寝かせ、6月から7月にかけて完成させる。

近年の氷見漁港におけるイワシは約10年周期で豊漁と不漁を繰り返している。氷見で水揚げされるイワシはマイワシ（真鰯）、カタクチイワシ（片口鰯）、ウルメイワシ（潤目鰯）と大きく3種類である。水揚げ量の大半を占めるのはマイワシで、比較的魚体の小さいカタクチイワシやウルメイワシは現在の氷見では水揚げが少なくなっている。

氷見では古くから「干鰯（ひいわし）」と称する干物が存在し、塩水につけた後に野外で天日干しにしたイワシの加工品の製造が行われてきた。伝統的にカタクチイワシや油の少

³⁶ 魚肉などを解凍した際に内部のタンパク質細胞が破壊されて出る組織液のこと。

ない小羽のマイワシは上記の「干鰯（現在の丸干し）」や「みりん干し」に、「こんか漬け」には比較的大型のマイワシが用いられた。また、煮干しの原料におけるイワシは種類ではなく大きさが重要視された。昭和30年代は回遊周期によるマイワシの豊漁期でマイワシの小羽が多く用いられていた。しかしカタクチイワシやウルメイワシの小型のものが好まれるのは変わらず、現在もその傾向にある。先述したように近年は不漁による影響によって、現在流通している氷見産の煮干しは極めて少なく、市内で煮干しを製造販売する業者も減少したと越田さんは話す。越田商店では15年前まで煮干しを製造していたが、現在は行っていない。

1-3.みりん干しの製造工程の見学

店舗に隣接している自社工場では、年間を通してみりん干しの製造が行われている。アジ、シシャモ、イワシの三種類の原材料は、販売量の一年分を見越した量を冷凍保存している。

まず解凍した魚の内臓と頭をとり、身を開いていく。越田商店ではこれを全て手作業で行っている。非常に労力がかかる作業のため、調査時は7名のパートの方が作業する様子が見られた（写真2）。



写真2 頭と内臓をとる作業（筆者撮影）

次に、砂糖、塩、みりんを入れた調味だれに2晩漬け、中まで味を浸透させる。その後、「オリ」と呼ばれる風通しの良い箱に並べて乾燥機で干す作業に移る。乾燥時間の目安は例えばイワシで10時間、アジで8時間だが身の大きさや、製造する季節で水分の飛び方に差が出るため製造する都度に微調整が必要となる。約40年前から氷見でも各地で干物専用の乾燥機が普及したが越田さんが幼い頃はまだ天日干しが主流だった。しかし、時間がかかる



写真3 二度目の乾燥を終えたみりん干し（筆者撮影）



写真4 完成した商品（筆者撮影）

こと、広範囲の干す場所が必要なこと、鳥の糞害など衛生面の問題で厳しくなったので、現在は水産加工業の現場では自動乾燥機での乾燥が主流である。

次に乾燥させたものに、艶出しのためのでんぷんをつけ、彩りと風味づけにゴマを振る。4時間から5時間かけて再度乾燥させ（写真3）、その後包装して完成となる（写真4）。

1-4.ブリ商品の展開とニーズの変化

越田商店では約10年前からブリの商品も置くようになった。これは「氷見寒ブリ」が商標登録され、市を挙げた「氷見寒ブリ」のブランド化が進み始めた時期と重なる。越田さん曰く、今から約12年前までは氷見市内ではブリの加工商品はほとんど見られず、ブリ商品の台頭はここ11、2年間の急速な変化だという。越田商店でのラインナップには、生ぶりカマ、切身、西京漬、酒粕漬け、ぶりジャーキー（写真4）、ブリしゃぶ、炙りブリなど豊富である。既存の技術を用いて加工、調理して上記のようなブリ商品を、他の商品に組み込んでいく形で販売している。主力商品である干物商品と掛け合わせた海産物セットは、カタログギフトやオンラインでの販売を始め、贈答用としての需要は県内外問わず非常に高く評判も良い。



写真5 ぶりジャーキー
（筆者撮影）

贈答品、土産品にまつわる氷見ブリの商品はここ10年間で知名度、需要の高さともに上昇している。一過性の流行ではなく氷見にブリが定着しつつある現在、「お客さんのニーズに合わせて商品展開に少しずつ変化を加えていかなければならないことは会社にとっても必須な事である」と越田さんは話す。

2.市内の鮮魚店の調査

2023年4月から市内の複数の鮮魚店を巡り調査を行った。本節では前半に氷見漁港近くの沿岸側の2軒、後半に山間部寄りの鮮魚店2軒を取り上げ、実際に訪れて聞き取った内容を中心に記述する。

2-1.マルイ三浦鮮魚店

7月初め、鮮魚店の調査を始めて間もない頃、比美町商店街を抜け氷見駅周辺を散策していたところ、視界に「三浦鮮魚店」と書かれた看板が目に入った。中に入り、店主の三浦一明さんと奥さんに話を伺った。道沿いに開かれた入口のショーケースには氷見産、地物と大きく書かれた値札と共にカワハギ、トビウオ、タコなどの切り身や刺身が並ぶ。また夏限定

でウナギのかば焼きが販売されていた。お昼時に来る近所の常連客が沢山購入していくため売上は好調だという。

店頭に並ぶ魚は競りに参加する権利である買参権をもつ氷見漁港と高岡漁港の2つで仕入れる事がほとんどだという。そのほか、金沢の魚問屋に出入りする知り合いの業者に頼んで魚を仕入れることもある。夏の時期、かば焼きとして出すウナギに関しては高岡市の中央卸売市場に発注をかけ、配達してもら



写真6 店内ショーケースの一部 (筆者撮影)

っている。店に来る客は地物にこだわっている方が多く、常連客には珍しい魚が入った時には電話で連絡することもある。近隣の鮮魚屋とは、昔からの付き合いがあり顔見知りだが、最近足跡継ぎがないため閉めてしまうお店も少なくないと話す。約40年前は上条川以南の商店街付近の海側の魚屋だけでも30軒以上あったというが年々閉業する店が相次ぎ、現

在店を稼働しているのは10軒程だという。

後日、1968年(昭和43年)の中央町、比美町周辺の住宅地図を参照して件数を調べ、現在まで存続している場所(丸)とそうでない場所(三角)を下部

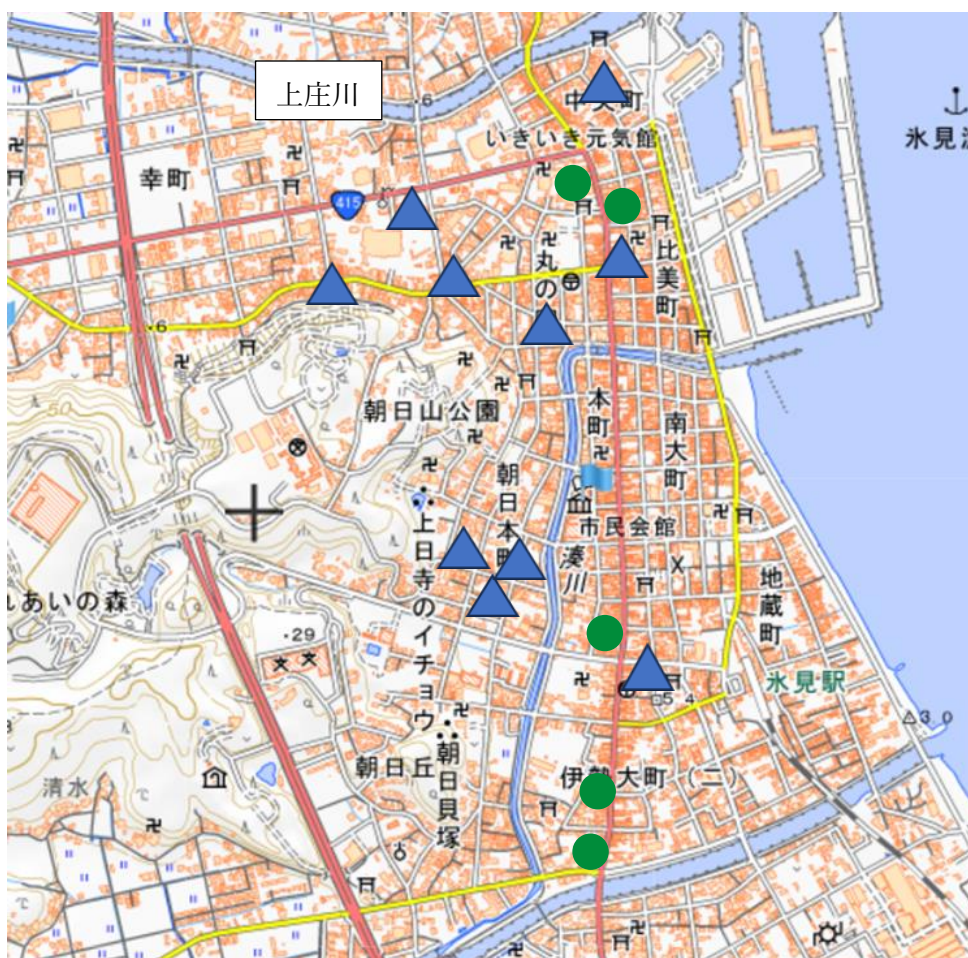


図2 1968年(昭和43年)当時の鮮魚店の所在地 (国土地理院地図を加工)

に示した(図2)。建物名称に「鮮魚店」「魚屋」「魚問屋」という名前がつく場所は15軒確認できたが、現在まで継続する鮮魚店は5軒のみだった。聞き取りでは表向きは「魚屋」の看板を立てていないが近隣の魚問屋から仕入れ販売していた場所や、店舗を持たない行商も多く存在していたという話も聞かれたことから、氷見市沿岸部地域では鮮魚を入手する場所は現在より遥かに多かったと予測できる。

三浦鮮魚店は店主の三浦一明さんの祖父の頃から始まり、創業は100年余り経つ。現在三代目である三浦さんは約50年前に父親から鮮魚屋を継ぎ今に至る。鮮魚を扱うようになったのは戦後からで、戦前は訪れた客にちょっとした酒や手料理を振舞う商いを営んでいた。当時の店の中には囲炉裏があり、山間部から馬車で降りてきた人や通りすがりの人を中に招き入れ、囲炉裏を囲み人々が談笑する様子が日常の風景の中にあった。

三浦さん夫妻には3人の娘がいる。現在は3人とも結婚して市外で生活している。店の今後の経営に三浦さん自身は「娘たちにわざわざ戻ってこさせて継がせることはない、年齢も年齢なので自分たちの代までで、お店を継続したい意思はあまりない」と話す。

12月中旬、再び訪れると、ショーケースには丸々と太ったブリが横たわっていた。冬の時期、三浦鮮魚店では一日に10本前後のブリを卸す。三浦さんには重さが10kg以上のもの以外卸さないというブリに対するこだわりがある。この時期は店に来る客は勿論、県内外からの電話注文も止むことはない。客の要望に合わせて切り身、たたき、刺身にする。市内の常連の女性客は、「毎年ブリ買うときは三浦さんって決めている」と話す。訪れた理由は「丁度帰省している娘家族のために刺身やブリ大根にして振舞いたいから」とのことだそう。この女性は事前に頼み、取り置きしていたブリの切り身と刺身を3パックずつ購入すると笑顔で帰路に着いた。



写真7 ショーケース内のブリ(筆者撮影)

理由は「丁度帰省している娘家族のために刺身やブリ大根にして振舞いたいから」とのことだそう。この女性は事前に頼み、取り置きしていたブリの切り身と刺身を3パックずつ購入すると笑顔で帰路に着いた。

2-2.能浦鮮魚店

能浦鮮魚店は、氷見駅から歩いて約5分の所にある鮮魚店である。店に看板は無く、午前10時頃、少し緊張した面持ちでお店に入ると、第一声で「いらっしゃいませー」ととても元気のある女性の声で迎えられた。能浦さんである。ショーケースにはその日仕入れたばかりの生き生きとした鮮魚が所狭しに並んでいた。店は、能浦さんと能浦さんの娘2人の3人で経営している。母親が奥で仕入れた鮮魚を捌き、妹の方が接客をしている様子であった。店頭で並ぶ魚はアカダイ、チダイ、ブリ、シマダイ、メバルという小から中程のサイズのも

のから、あんかん、ヒラマサ、フクラギなどスーパーではあまり見られないような立派な大きさのものも丸々一本並べられていた。ここまで、多種多様な魚を販売している事に関して伺うと、毎朝氷見漁港に揚がる魚を、基本的に一種類ずつ卸してきているのだという。しかし、これだけの種類を揃えているでも能浦さん曰く、一年を通して9月は揚がる魚の種類が一番少ないのだという。9月（調査時期）は20種類程度に留まるが、これ以降冬に向けて魚の種類も増えサイズも大振りになっていくという。

聞き取りをする間も客足が止むことはなかった。丁度買い物に来ていた方に話を伺った。近所から来た女性（70代）は常連だそうで週に1度、もしくは気になる魚が入ったときによく店を覗きにくるという。普段から家庭でよく魚を捌いているかという質問をすると、「よくする。近所でこの鮮魚店に来られて魚を買う人(自分も含め)、皆能浦さん（母親）から直々に教わっとるんじゃないか」という答えが返ってきた。



写真8 店内全体の様子（筆者撮影）



写真9 ショーケースの様子（筆者撮影）

能浦さんは「店に来るお客さんの8割が魚を捌けない」と話す。家庭用として丸々一匹買う人は少なく、刺身や切り身、焼きにして提供することがほとんどだという。最近は煮魚、焼き魚に留まらず、海外の魚料理を家庭で調理する機会も増えた影響か、「アヒージョやカルパッチョなどの料理に使える魚はないか」と希望する客も多いという。

2-3.宮下鮮魚店

9月下旬、氷見市万尾（もお）地区に位置する宮下鮮魚店に伺った。店の創業は現在の店主の宮下さんの父親の代から始まり、50年近く経つ。店の経営は宮下さん一人で行っている。店内に入ると、まず一つの大きなショーケースが目に入った。



写真 10 店内ショーケースの商品 (筆者撮影)



写真 11 自家製のフクラギの煮つけ (筆者撮影)

9月下旬に訪れたこともあり、氷見では夏に旬を迎える魚であるフクラギが並ぶ。横にはアオリイカ、生サバ、それら全てにエビ、イカを加えた刺身のセットが並ぶ。鮮魚のほか、フクラギの煮つけ、ウナギのかば焼きなども販売している。

2-3-1.鮮魚を保管する際の工夫について

訪れたのは午後2時頃で、天候も悪く客足が少ない時間帯だった。そんな中でも訪れた際は、「いらっしやませー」という張りのある声で迎えてくださったのは店主の宮下誠さんだった。店内を見渡すとまず大きな冷凍保管庫が目に入った。それをしばらく眺めていると、様子を見かねて宮下さんの方から店内での魚の保存方法について話して下さった。宮下鮮魚店での魚の販売方法は基本的に捌いた状態の刺身や切り身が多いが、大体の鮮魚は丸々一本で冷凍保存している。しかし刺身に関しては冷蔵の場合が多いという。これは冷凍の場合、解凍する時点で身から水分が出るため舌触りが水っぽくなり、風味が薄まるという理由からだそうだ。カジキマグロはこれが特に味に顕著に表れるという。他にもフクラギの場合、冷凍してしまうと身の色が変色し濁ってしまうため、冷蔵保存を行っているという。店で刺身を販売し始めて約30年経つというが、数日前に仕入れた魚の鮮度を保ちつつ美味しさも維持して日を空けて販売することや、販売時期まで店での長期保管が容易になったのも、この冷凍保管の恩恵が大きいという。

2-3-2.商品について

先述した通り宮下鮮魚店では鮮魚の切り身や刺身が商品の中心で、その他煮つけ、ウナギのかば焼きなど一般的に総菜と呼ばれる商品も店頭に並んでいる。店の経営は以前まで母親と宮下さん二人で行っていたといい、母親が存命だった頃は自家製の様々なフライや天ぷらなどが並び、現在よりも並ぶ総菜の種類や量は豊富だったという。しかし宮下さんが一人で切り盛りするようになってからは揚げ物の販売は終了し、宮下さん自家製の煮つけ、焼き魚、しめ鯖やタコの酢の物などのラインナップになっているという。

これまで調査を続ける中で地域の方から、「昔は各家庭でこんか漬けやととぼち³⁷などの加工食を家庭で消費する分だけ作っていた」という話を何度か耳にする機会があった。店頭には家庭的な総菜という形の調理済み商品はあったものの、氷見の伝統的な加工食として名前の挙がる商品は見当たらなかった。仕入れた魚で加工食は作っているのか興味本位で宮下さんに伺うと、こんか漬けはやっておらず、ととぼちに関して現在は取り扱っていないが過去に近所の魚屋と仕入れ先として付き合いがあった頃に販売していた時期があったと話して下さった。その魚屋はすり身が主力商品で有名な所だったそうで、長年のよしみで宮下さん自身も製造技術や加工方法を学び、自分の店でも販売することを一度は考えたという。しかし、「すり身屋」と「鮮魚屋」という付き合いの体裁を考えた時に鮮魚屋ですり身を販売する行為に宮下さん自身が少なからず抵抗を覚えたため、その後現在まで販売することは無いという。

2-3-3.過去から現在の変化

宮下さんの幼少期から現在に至るまで、魚の販売方法も変化している。50年前は鮮魚も捌くことなく仕入れたままの姿で販売していた。出刃包丁や刺身包丁を所持する家庭が現在よりも多く、家庭内でも日常的に自己流で捌く人が多かった時代だからである。山間部という立地の問題もあり鮮魚の流通も現在より安易ではなかったが、それでも幼少期、店に立ち生きのいい声で商売する父親の姿と訪れる客のやり取りが大層賑やかだった様子を宮下さんは今でも記憶に鮮明に留めているという。父親から店を継いで宮下さんが店を営むようになってからは近隣にスーパーが台頭し、自然と販売方法も大半の魚を切り身や刺身にして売るように変化したという。

また、宮下さんが興味深く話して下さったのが客層についてである。以前遠方から訪れた方に、「頭を獲っていない魚（丸ごとの）はありますか？」と尋ねられたことがあった。理由を聞くと、「Youtubeに魚を捌く動画がありその様子がとても面白く興味をひかれまして。それをきっかけに自分も休日や時間がある時に魚を捌くようになったんです」と話したという。この出来事を振り返った宮下さんは、「年齢も若く積極的に魚を捌く意識を持つ方が買いに来たことは新鮮だった。わざわざ店に足を運んでくれたことが純粋に嬉しかった。」と当時を振り返った。

2020年、突如として発生したコロナウイルスによる経営やサービスの影響もあった。「コロナ自粛」という言葉があったように、鮮魚店の方も営業時間の短縮を余儀なくされた。またコロナ以前まで宮下鮮魚店では仕出し料理のサービスを行っていたが、コロナ禍を機に全面取りやめが決定した。

SNSは今や既存の文化の魅力の再発見から新しい文化の創造に至るまで、幅広い世代に

³⁷ 魚のすり身を丸めたもの。主にイワシが用いられる。揚げたり、汁物に入れたりして食べられることが多い。

影響力を及ぼしている。動画を足掛かりにそれを観た人の中に「魚を捌いてみたい」という志向が芽生えつつある。その意識の変化を宮下鮮魚店での聞き取り調査の中で少しでも感じられた事は調査の中でも興味深く大変有意義なものとなった。

2-4. 齋勝鮮魚店

齋勝鮮魚店は、氷見市小窪(おくぼ)にあり、私たちが合宿で宿泊した施設の近隣に位置する鮮魚店である。合宿期間中、幾度となく通り過ぎていた道沿いにあるが、大きな看板はなく初めは見過ぎていた。先生に施設の近辺に鮮魚店があると教えていただき、その夜、地図アプリで検索し、齋勝鮮魚店がヒットしたことが訪れる経緯となった。

正午ごろ店に着き、話を伺うこととなった。店の戸を開けると右手側のショーケースには主に鮮魚の切り身や刺身を詰め合わせたパック、そして反対側の台にはフライや野菜の天ぷらといった総菜が並んでいた。これまでの調査で訪れた鮮魚店でも群を抜いて品数が多く、調査中であった私も食欲をそそられ、目移りしてしまう程であった。店主の齋勝巖さんが奥から出てこられた時に話を伺おうとすると「何か商品を買ってくれな話はせんよ」と言われてしまった。そのため丁度お昼時だったこともあり宿泊施設で持ち帰る昼食用として幾つかの総菜を購入した後、お話を伺った。



写真 12 店内ショーケースの商品 (筆者撮影)

2-4-1. 店内の様子

店内はアジ、フクラギ、メジナ、アオリイカ、カツオの刺身、総菜にはカツオのたたき、アジの南蛮漬け、フクラギの味噌漬け、ウナギのかば焼き、ポテトサラダ、カンパチやカマスのフライが並ぶ、まさに多種多様な商品展開だった。商品の価格設定にも驚きである。ポテトサラダとフクラギの4匹詰め合わせが200円という破格の値段設定で並んでいた。その他の商品を見ても、多くが500円以内で購入でき、総菜と刺身が同価格帯で販売されている事に衝撃を受けた。ここまで商品を安く販売する理由は何なのか、可能にしている要因は何なのか疑問に思い齋勝さんに尋ねると「大量に揚がった時に大量に仕入れる」とそれ以上話して下さることは無かった。しかし実情はかなりの赤字であるという。



写真 13 天ぷらとフライ (筆者撮影)

齋勝鮮魚店では、刺身を始めとする鮮魚は全て頭と骨を処理して販売している。買う人が少しでも食べやすいようにという気遣いである。加えて齋勝さんは「身は勿論、昔は頭や骨までおつゆの具材に入れて食べられとったが、今は頭も骨もめっきり使われなくなった」と話す。昔は頭や骨の処理を必要とせず余すことなく料理の具材に利用されていた。時代が流れ、そのような食文化自体の廃れがある背景も現在の処理方法になった理由に存在するという。

2-4-2.ライフスタイルの変化

鮮魚店に訪れる人々の顔ぶれは時代と生活スタイルによって変化している。齋勝鮮魚店は地図で見ての通り山間部寄りに位置している。今から約50年前の1970年代、齋勝鮮魚店には畑仕事や農作業帰りの年配層、特に女性が多く出入りしていたという。昔はよく鉢を各々の客が持参し、そこに魚屋で買ったその日食べる分の魚を入れて自宅に持ち帰って捌いて食べたという。時代は流れ鮮魚店周辺にも公共バスが開通し、更に時代が進み1990年代に入ると車が普及し始め、男性と同様に働きに出る女性が増加した。

長くこの土地で鮮魚店を経営してきた齋勝さんだが「平成7、8年頃を境に客の取り巻く状況が変化したのではないか」と感じるという。齋勝さんによると1970年代までは比較的年配の女性が鮮魚店を訪れ丸々一本魚を買って帰ったのがありふれた光景だったという。しかし時代が移り、交通手段の多様化に伴い、女性の社会進出が進むと外に働きに出る女性が増加した。1990年代を境に台所に立つ主婦層がその様な社会状況で生きる女性へと世代交代し始める。仕事帰りの女性がお昼や夕飯用に調理済みの魚や捌く手間を省いた商品を買って帰路に着く光景が増えたという。このように鮮魚店に訪れる客層の中でも世代交代があり、求められる商品の形が変化してきたのである。共働きの生活スタイルが標準になりつつある近年において、家で簡単に調理できる事、手間をかけずに食卓に出すことのできる総菜の販売が齋勝鮮魚店の商品の大部分を占めているのも頷ける。

以上のような生活スタイルの変化と関係して、聞き取りの中では人々の中での「刺身」に対する価値観の変化も起きていた。約50年前まで山間部の仕事は農作業が主であった。そのため、それ以前の時代では現金収入を得ることが難しく、齋勝さん曰く、山間部の多くの人々にとって鮮度が命の刺身は貴重でめったに食べられない贅沢品だったという。交通網の拡大と発展により運搬時間が短縮され、生鮮食品が山間部でも流通する時代になるまで、山間部の家庭において鮮魚の食文化はほとんど無く、代わりにこんか漬けなどの加工食が現在より盛んに作られ、消費されていたという。

3.幼児食セット「totokito」

水産加工会社や鮮魚店は古くから店を構え、地域に根差した魚食文化形成の場が存続している一方で、そこに携わる人々や地域の人々の聞き取りの中の会話では「魚離れ」という言

葉を何度も耳にした。そうした魚離れに関する取り組みを調べていた頃、ビジネスの面での橋渡し役として氷見ビジネスサポートセンター（通称 Himi-Biz）が関わる幾つかの事例を SNS で知る事となった。

2023 年で設立から 4 年目となる氷見ビジネスサポートセンター（通称 Himi-Biz）では創業支援という形で新商品や新サービスの開拓を始めとするビジネスプランの作成、HP・チラシの作成、Web マーケティング、氷見市創業支援事業補助金の申請サポート、セミナーなど、事業者の創業までの足掛かりになるものに対して幅広い分野で支援活動を行っている。氷見市では事業主の高齢化や後継者不足による廃業で、今後 10 年以内には中心市街地の 5 割以上が空き店舗となる予測がされている。そのような背景から既存事業主への支援、創業支援を拡充し、売り上げ向上、事業拡大を促進させることで空き店舗対策を進め、雇用増加と新しい仕事の創出を図ることが設立の経緯にある。

調査では関心を持った Himi-Biz 支援事例の「幼児食セット totokito」について、Himi-Biz のセンター長である岡田弘毅さんと、商品開発者である高柳沙織さんの 2 名への聞き取りを行った。本節では高柳さんへの聞き取り内容を中心に記述するが、岡田さんへの聞き取り内容と照らし合わせた内容となる。

3-1. 相談の背景

商品開発の発端は約 2 年前に遡る。2021 年の夏、「株式会社半七」の高柳さんが Himi-Biz に相談に訪れた。半七は 1913 年（大正 2 年）に創業し、氷見市地蔵町で水産加工と鮮魚卸業を営んでいる。売り上げは歳暮、中元のギフト商品が中心で、主力商品である干物商品には、創業以降 100 年以上にわたり継ぎ足されてきた調味液や製造技術などの伝統的製法が引き継がれている。

高柳さんは看護系の高校を卒業後、進学を機に京都に移り、向こうで就職、結婚をし、約 18 年間で京都で過ごした。そして上の子ども 2 人の進学と入園のタイミングで 10 年前、氷見に U ターンした。これは京都では仕事で帰宅が遅く子供の学童や保育園への送迎が困難だったことや、高柳さん自身もどこかのタイミングで実家のある氷見に戻り、子育てのしやすい環境に身を置きたい気持ちが以前からあったためである。高柳さんが氷見に戻った当初、家族経営の会社は法人化されて以前より従業員も事業規模も拡大していた。氷見で看護師として働くこともできたが、高柳さん自身が子育てをしながら今後のキャリアを積む事に限界を感じたこと、戻るタイミングで看護師人生を一つのキャリアの区切りにできる良いタイミングだったことから現在の家業を継ぐ形に至った。

京都での生活には氷見で幼少期から魚に馴染んできた高柳さんにとっては衝撃を受ける出来事があった。まず、病院食に使用される魚がどれも臭みが強く驚いたことである。これを同僚に尋ねると「これが普通で何も感じない」と返されたという。また京都で食べられる刺身はどれも水っぽく、従来のコリっとした弾力が感じられないものばかりで、美味しい刺身に出会える機会が少なかったという。そんなカルチャーショックと魚に対する不安から、

高柳さんが食卓で出す魚は基本的に実家から送られた氷見産の魚にしていた。また、子育て中の高柳さんにとって離乳食に用いる魚を市販のもので賄うことは心許なかった。そのため実家から簡単な味付けをした煮つけを送ってもらうことも多々あった。周囲のママ友からは「どんな魚を買えばいいのかわからない」「捌き方がわからない」「育児や家事で忙しく、時間がとれない」という悩みを聞く機会も多くあった。そんな日々を過ごす中で高柳さんは魚屋の娘としてジレンマが次第に大きくなっていった。親がそうであるならば、子供の魚離れが進むのは必然と痛感した高柳さんは、子育て世帯が魚を手に取りやすいサービスで子供向けの魚の幼児食を開発できないかと考えるようになった。以上の高柳さんの過去の経験が今回の幼児食商品開発の相談を当センターに持ちかけた背景にあった。

3-2.土肥さんとの出会いと販売に至るまで

幼児食の商品開発で最初にぶつかった壁はレシピ考案だった。高柳さん自身、総菜調理免許やレシピ開発のノウハウがなく、仮に魚屋の娘である自分がレシピを作っても魚屋の娘の素人料理になり、実際に販売する商品に見合う価値が付けられるか不安を抱いていた。そこでHimi-Biz側からレシピの開発に関しては幼児向けの加工食品開発に協力してもらえる事業者を探すことで、スピーディーに商品開発を進めていけるのではないかとアドバイスを受け、協力してくれる事業者を探すこととなった。当時のHimi-Bizには別の相談として栄養士の資格を活かし、滑川市で料理宅配サービスや料理教室などを展開する「Mama-no」の事業者の土肥薫さんが訪れていた。土肥さんは過去に幼児食を手掛けた経験があったため、Himi-Biz側で両者のビジネスマッチングを提案することになった。土肥さんも高柳さんも子供を持つ母親同士で、実際に会うと土肥さんは地元のを活かそうとする高柳さんの思いに共感し、意気投合してすぐに試作品づくりに取り掛かることになった。

商品の販路は土肥さんが展開する料理宅配サービスを活かし、県外や都心の共働き世帯に向けて販売することになった。また商品開発段階で、高めの価格設定になる事が見込まれた。そのため、共働きで収入格差が少ない、ワーキングマザー率と食に対する意識が共に地方より高い事が予想される都市圏の主婦に向けた商品づくりを行った。販売方法は土肥さんの調理労力や加工手間賃などを考慮してネットのみで行い、毎月末に注文を締め切り、氷見で下処理をした魚を土肥さんの住む滑川市の工場へ輸送し、そこで調理加工して梱包した商品を翌月発送する体制をとった。商品は土肥さん監修の氷見の季節の旬の魚を使用し



写真14 幼児食セット
「totokito」(Himi-Biz ウェブ
サイトより引用)

た商品セットを用意し、全てにチルド加工³⁸を施した。これも仕事と子育てをしながら子どもに魚を食べさせるハードルの高さを感じた高柳さんの思いを反映しており、温めるだけの簡単調理で食卓に魚を並べられるという商品の大きな魅力に繋がっている。メニューには「さわらの竜田揚げ」「ふくらぎバーグのきのこあん」「黒鯛の甘酢ケチャップ和え」など5品セットを用意し、販売価格は1セット6480円(税込)とした。商品内容は月替わりで変化し、季節折々の氷見の旬が味わえるものとなっている(写真1)。

2021年9月に氷見ビズ2階で行われた新商品発表会では、地元新聞社や地元ケーブルテレビに大きく取り上げられメディアでも話題となった。発表会後には、ターゲット層であった都市部の主婦から注文が続々と入り、初回の注文は県外から9割、その内7割が東京からであった。

現在、幼児食セットの販売は一時休止している。これまで主に商品の生産過程を土肥さんに委託し、氷見市と滑川市の2拠点を経由して商品生産を行っていたが、「今後はOEM³⁹で商品を自社製造できるようにしたい」と高柳さんは話す。その一歩として2023年、半七の店舗に隣接した新工場が建てられた。工場内は土肥さんとの話し合いの元で決められたガスコンロやスチームコンベクションなどの調理設備が整えられた。土肥さんなしでも作れる状況を当たり前にするというのが、高柳さんの目指す将来的な姿だ。加工方法に関しては従来のチルドから、鮮度維持や風味を良くする観点から急速冷凍加工に移行させることを考えている。また幼児食セットの中身も以前は決められた5品だったが、今後は購入時に幅広いメニューの中からお客さんが自由にセット内容をカスタマイズできる仕様にすることも、長期的な目標に掲げている。これを購入者のリピート率の増加や定期購入の促進に繋げていくサービスの一つとして視野に入れている。

3-3.高柳さんの考える未来

幼児食は食育の面ではあくまで期限付きのものである。高柳さんは「幼児食セット totokito」の続きとして食育の延長線となる商品づくりも計画していきたいと話す。具体的には、下処理済みの魚にレシピをつけて自宅で調理してもらうミールキットを構想している。この構想は取り分け離乳食⁴⁰という考えに基づいている。ミールキッドを通して面倒な下処理をせずに子供に食べさせられること、離乳食を手作りすることへの安心感を生ませたいと話す。

現在高柳さんは、氷見市内の小学生と親を対象に毎年11月、氷見市と水産加工協同組合が共同主催で行われる「親子さばき方教室」というイベントに講師で参加し、フクラギの三枚おろしや、カマスの一夜干しを作る開き方などを教えている。また、現在「食育インスト

³⁸ 味や品質を保つため、凍結しない程度の低温に冷却加工すること

³⁹ 委託者のブランドで製品を生産すること、または製品を生産するメーカー

⁴⁰ 大人用の調理中の食材から取り分けて作る離乳食のこと

ラクター」の資格取得を目指す高柳さんは、「このような親子参加型の教室を、今後は個人で開く事ができたら嬉しい」と話す。

4.春のお魚さばき方教室

「春のお魚さばき方教室」は氷見市水産振興課が主催となり次世代を担う子供達を中心に魚食文化の普及、食育の大切さを浸透させることを目的として行われている応募参加型の体験教室である。2007年から始まり、2019年までは秋のみの開催、2020年より春の開催も加わり、現在は年に2回開催されている。宣伝は、広報ひみ5月号、氷見市HP、氷見市公式ライン等で行われた。この宣伝方法に関しては、市の方から積極的な参加を促すもので、ターゲット層である18歳以上の方を対象に氷見市公式LINEを活用してプッシュ型⁴¹の応募を実施した。2023年度の春の体験教室の参加者は12名で、県内からは氷見市8名、高岡市1名、富山1名、県外からは中能登町1名、七尾市1名という内訳であった。

参加者は数人のグループになり、当イベントの講師である氷見鮮魚商組合員の方から丸々一本の状態の魚を一から三枚おろしにするまでの手ほどきを受ける。その後各自で実際に包丁を用いて魚を捌いていくというのが主な体験内容である。当イベントは現在、春と秋の年に2回開催されている。取り扱う魚は季節によって少し異なり、春はクロダイ、秋はフクラギが季節のメインの魚として取り上げられる。今回参加した体験教室では、クロダイ、フクラギ、アジ、サバの計4種の魚を捌いた。

近年は漁獲量の影響で魚全体の高騰化と食肉文化の定着で、魚を気軽に購入することをためらう人も少なくない。氷見は魚が古くから地域資源として重宝され、富山県のなかでもひと際人々が魚と密接な暮らしを営んできた場所である。そんな氷見市のホームページを見ていたある日、「お魚さばき方教室」というイベントが開催される事を知った。氷見市でこのような取り組みが市役所主催で行われている理由や、実際どのような人がどんな動機や意識を持って参加しているのか、魚と人々の関わり方の一つの形として自分の調査に活かせると感じた。また何より自分自身も人生で初めて魚の捌き方をプロから学ぶことができる良い機会だと思ったので、今回の参加を決意した。

4-1.富山県栽培漁業センターについて

2023年の「春のおさかなさばき方教室」の開催場所は氷見市姿地区の氷見栽培漁業センターである。当施設は2021年に発足し、2023年4月28日に教育・産業観光に対応した施設としてリニューアルオープンした。普段はクロダイを主に、ヒラメ、クルマエビ、貝類な

⁴¹利用者の能動的な操作や行動を伴わずに、提供する側から自動的に行われるタイプの技術やサービス

どの稚魚や稚貝を育て、富山湾内に放流する活動を行う施設である。また氷見市内から小学校の地域学習の一環に利用されるだけでなく遠方から観光客が訪れることもあり、栽培漁業に関する市内の学習施設であるとともに、一種の観光レジャー施設の機能も果たしている。施設内で一般開放されている「交流館」、「ふれあい館」の一部の見学・体験エリアでは、飼育されている稚魚の観察から放流されている稚魚に触れ合うことのできる空間が提供されており、栽培漁業の流れや放流前の稚魚の生態を実際に見て触れ合うことを通じて学習できる環境が整えられている。

4-2.当日の流れ

当日は14時から約2時間を予定したプログラムで進行した。14時前に受付を終え、部屋に入ると既に振り各テーブルに2、3人程の参加者が座って雑談を始めていた。同世代の参加者がいなかったのもあり、私は少し緊張した面持ちで振り分けられたテーブルに座った。しばらくすると市役所職員と鮮魚商組合の組合長の徳前康宏さんからの挨拶が行われた。その後簡単な注意事項の説明がされた後、鮮魚商組合の方による捌き方の実演が各テーブルで行われ、それを踏まえて実際に捌く実践というのが計4回繰り返された。

4-3.参加者の語り

ここでは体験教室の終了後、一緒に参加していた数名の方へ聞き取りを行った内容を記述していく。聞き取りは「この教室に参加した理由」、「普段家庭で魚を食べる頻度」、「このようなイベントを今後も続けてほしいと思うか」の大きく3つの質問を中心に行った。

初めに、同じグループで一緒に魚を捌いていた60代の女性2人に話を伺った。2人は友人同士で、今回のイベントは一方が誘って2人で参加を決めたという。石川県中能登町から参加した女性は、以前から魚の捌き方をプロから教わりたいという気持ちがあり、当初は石川県金沢市の近江町市場で同様の講座がある事を知り、そちらでの参加を考えていた。しかし費用の面と、今回一緒に参加した友人からの誘いを機に氷見の方での参加を決めた。魚を家庭で食べるのは、2週間に1回程で、焼き魚用、ムニエル用、など切り身で調理用途が明記されているものを買う事が多く、価格面での安さを重視している。アジ、サバなど比較的小さい



写真15 体験教室で捌いた魚(左からフクラギ、クロダイ、アジ、右上にサバ) (筆者撮影)

魚が丸々一本安く売られていても、さばく手間、生ゴミ処理の面倒くささが頭をよぎってしまい買う手が伸びないこともある。今回のイベントに関しては、「今後も続けてほしい、家族や友人にもぜひイベントを知ってもらって参加を勧めたい」という。この方とご友人関係の七尾市の女性は、家庭でサバをよく食べていて、自己流で捌いていたが、このイベントで正しい捌き方を直接レクチャーしてもらい学べる事に魅力を感じて、友人を誘って参加した。家庭での魚の消費頻度はかなり多い。旦那様がサバの煮つけが好きな影響で家庭内では魚料理をよく作ることや、その方自身が「旬の魚を美味しく食べたい」という気持ちが大きいものもある。購入場所はスーパーで買うときと行きつけの鮮魚店で買う時と半々である。体験教室に関しても、「今後も続けてほしい」と前向きな感想を持っていた。

家庭での魚の消費頻度は異なるが、2名とも正しい捌き方を学ぶ機会を求め体験教室に参加した動機は共通していた。イベントに関しても継続してほしいという気持ちが見られた。プログラム内容の充実度と、プロの講師から捌き方を直接教わり、得た学びに概ね満足している様子であった。2名ともこの学びを実生活でも活かし、家庭で魚食を取り入れていきたいという意欲が以前よりも増した面持ちで聞き取りに応じてくださったのが印象的だった。

最後に地元から参加した70代の女性にも聞き取りを行った。去年その女性の息子が同イベントに参加された話を聞き、興味を持ち参加した。また息子が釣り好きで家に時々持ってくる魚は自己流で捌いていたが正しい捌き方を一度学びたいと思った事も、今回の参加を決めた理由である。普段は一人暮らしで手間をかけたくないため缶詰や鮭フレークなど味付けされた加工品を食べることが多い。体験教室は今後も続けてほしいとのことだったが、「もう少し大々的に宣伝してもよいのではないか」という広報面での主催側への不満も語られていた。

4-4.その他の魚食邁進活動

聞き取りでは今イベントのほか過去に市が主導で魚を人々に親しんでもらう事を目的に行ってきた様々な企画を知る機会になった。まず氷見市水産振興課主催の「氷見の魚を知ろう事業」というものがある。市職員と氷見鮮魚商組合の方が市内の小学校に出向き、「ひみ寒ブリ」に関する出張授業を行うイベントになっており、「ひみ寒ブリ」が商標登録された2011年より開始されている。開催場所の小学校の選定は毎年市の公聴会で決められ、「ひみ寒ブリ」の出荷シーズンに合わせ、例年12月頃から約1か月間で市内の6、7の小学校を巡る。生徒自ら魚を捌く実践型の内容ではないものの、定置網漁の仕組み、生態、船上での鮮度の保ち方などの説明を座学で学び、講師の方による解体見学をした後、捌いた刺身を味わうというプログラムになっている。

他にも「氷見のおさかな給食邁進事業」というものがある。その一環に「ひみのクロダイday」というイベントが市内の小学校で実施されている。氷見市では同事業で2014年からブリを、2020年からはクロダイを給食に提供している。2023年は6月13日、氷見市上庄小学校で開催された。この13日から22日の9日間で、クロダイを使った献立が市内の保

育園や小中学校で振舞われた。このような催しを通して市内の子どもたちにとって身近な給食で氷見の魚を提供し、氷見の魚に対する好奇心や味覚を形成し、魚離れの改善、ブランドとしての魚価の向上、健康の邁進が図られている。

実際に体験の中で一番感じたことは、包丁の刃先と根元の使い分けの難しさである。逆に言えばこの使い分けが上手い人は上達が早く、筆者も様々な大きさや形態の魚を捌く過程で少しずつ感覚的に掴めてくる感じがした。サバは捌いた4匹の中で一番小さかったが、魚体が小さくなるほど捌く時に細かい動作が必要となり、包丁を持つ手先の加減が難しくなり、筆者自身もかなり苦戦しながら捌いた。反対に大きな魚は、包丁を入れ込むときに力を込めて刺さなければならず、骨太であるため、力の弱い女性には一匹捌くのにもかなり労力を要する作業だと感じた。参加者は50代から70代の方が中心であったが、魚を捌くこと自体初めての方とそうでない方(自己流で捌いてきた方)という大きく2つのタイプの参加者が見られた。4匹ともかなり苦戦している方から、日常的に家庭で小魚など簡単に捌いており、魚の肉と骨の間に包丁を差し込む感覚や、包丁の動かし方や体の向きなどのコツを掴むのが早い方など、捌く進捗は様々であった。筆者は講師の方に手取り足取り教えていただいたが、比較的捌き方のコツを掴んだ人を中心に、同じグループ内の参加者同士でアドバイスをしあう瞬間も多く見られた。このように講師の方を介さずに、参加者の間で助け合い、学び得る空間も教室内では見られた。今イベントは、初心者向けという事で変な堅苦しきはなく、どの参加者も講師の方と打ち解けて和気あいあいとした雰囲気を作られており、魚を捌く学びの中にある楽しみを十分に引き出したイベントであった。

教室の様子や交わされた会話の中から、魚を普段から捌くことに慣れている方でも、魚を捌く事への苦手意識は多少なりともある様子が伺えた。参加者の中には、釣りが趣味で釣った魚を自分で美味しく捌けるようになりたいという理由で参加する男性の方も見られた。実際に体験すると、生魚を食べる上での心的ハードルに「捌くこと」が第一に挙げられることを強く感じた。捌く行為に付随する労力、ゴミ処理問題のほか、スーパーで刺身や切り身での販売が当たり前の光景になってきていることが、現代の我々が「魚を捌く技術」に必要性を感じなくなってきた要因の一つなのかもしれない。

5.考察とまとめ

以上の調査と、各節で記述できなかった聞き取り内容を含めて、氷見における過去から現在、そして将来に向けた魚食と人々の関係性についてまとめる。

始めに全体の考察を述べる。氷見における鮮魚の消費は戦後以降で、鮮度維持技術が乏しかった戦前は、沿岸部などの特定の地域を除き、市内での魚食の消費方法は長期保存が可能な加工食が主であったと考えられる。また山間部で鮮魚の安定した供給が行われるのは、冷蔵技術と交通網が整い始める高度経済成長期以降と考えられる。現在は冷蔵、冷凍技術は大幅に向上し、スーパーや鮮魚店で人々は思い思いに魚を入手することが可能になったが、ラ

ライフスタイルの変化や調理の手間、食の嗜好などから魚は敬遠されつつある。加工食は贈呈用に好まれ、沿岸部では約 20 前まで見られた行商の姿も現在はなくなった。かつての魚と人々の関係を残す風景は減少している。

加工食の現場では、干物商品全般に全自動乾燥機の導入が一般的になっている。しかし、以前の外での天日干し乾燥の光景が見られなくなった訳ではなく、規模は縮小したが現在も家庭の消費量単位の量では行っている家がいくつか存在している。みりん干しや一夜干しなど干物商品に関しては日常的に食べる文化は少なく、地元の方が贈答用として市内外に出す傾向が強い。こんな漬物は干物と比較して生産量は少ないと言えるものの、こんな漬物を求めて訪れる固定客が一定数いることから地元での需要が現在もあることが分かる。また 12 年前の「氷見寒ブリ」の商標登録は、ブランド食品の付加価値がついたブリの加工商品が観光消費、贈呈用として急速に広がりを見せる一つの契機となったと考えられる。既存の干物商品にブリ商品を入れ込んだギフトの需要は高く、現在では氷見番屋街や中央卸売市場など観光客の目に着きやすい所への卸売も進む。「ブリ」が名実ともに氷見の代名詞となりつつあるのである。また急速冷凍機の登場で、伝統的な加工技術に上乘せする形で加工商品に鮮度が担保されたことで、一部の刺身商品などが加工会社でも取り扱うことが可能になった。ブリ商品の台頭と急速冷凍技術という二つの変化が、加工業界における商品展開の幅の拡大、市外や県外での消費を見込んだ販路の拡大に大きく寄与していると考えられる。

現在の鮮魚店では、魚の販売形式が刺身や切り身が主流となっている。近隣のスーパーの台頭や、魚を買い求める層の世代の移り替わり、ライフスタイルの変化により自宅で調理時間が十分に取れないなどの理由から現在は自己流で捌く人々が珍しい世の中になった。鮮魚が丸ごと一匹並べられる光景は少なくなり、客のニーズに沿う形で需要の高まりを見せる出来合いの総菜は、現在では鮮魚の隣にフライや煮つけの形で並ぶ風景が日常となった。調査では「鮮魚屋に来る人は、ただ商品を買っとるんじゃない、店での会話を買っとんや、魚はただのおまけ」という能浦鮮魚店に訪れていた常連客の男性から聞いたこの言葉が忘れられないものとなった。鮮魚店は魚の捌き方、美味しい食べ方、旬、見分け方に至るまで地域の人々が最もアクセスしやすい魚の情報屋としての機能に加え、立ち寄った人々が他愛もない談笑をしていく憩いの場であったように思う。魚そのものの美味しさを求めて買いに来るのは勿論だが、人々は魚を通じた他愛のない会話や交流の中にこそ価値を見出しているのではないだろうか。氷見市のような昔から現在まで続く老舗の鮮魚店がある場所は貴重だ。以前は商店街に店を構えていた鮮魚店も集客を見込んで、番屋街内のテナントに移動したり、ショッピングセンターの近くに移転したりと、集客力がある場所へ場所を移した鮮魚店も存在する。人々の生活に合わせ形を変えながらも現在も魚屋として存続している裏側には、携わる人々による頑張りや販売手法の試行錯誤が存在する。後継者不足により今後は鮮魚店の姿が街から失われていくことが危惧されるが、人々の憩いの場としても今後も継承されてほしいと思う。

魚を調理して食べる上で大きなハードルとなる「捌く工程」への克服は、市や鮮魚商組合

が主催する体験イベントを通して氷見の魚の食育邁進の観点から改善が図られている。市内でこのような催しが企画される理由には、地元の人々の魚に対する関心が薄まってきている現状に危機感が持たれていることが背景に挙げられる。加えて SNS による若者を中心とした意識の変化も起きている。「魚を捌くこと」に対する人々の好奇心や意欲を刺激するために SNS を用いた正しい捌き方を発信することは効果的であり、市の広報活動において氷見の魚食の魅力発信を担う上でも有効な手段といえる。

子供が幼い内から魚に触れる機会を沢山設けていることは有意義である。「氷見の魚を知ろう事業」や「氷見のおさかな給食邁進事業」を通して、鮮度の良い魚の美味しさや魚の生態を知ることを始め、生産者と魚の繋がりが身をもって体感できる機会は中々ない。今後も食育邁進の事業が拡大すれば子供達の魚への苦手意識の軽減に繋がる可能性がある。「幼児食セット totokito」の今後の展開にも注目したい。報告書では「氷見の朝どれ鮮魚」という地域性と話題性を存分に活かした商品づくりの一端を記述できたように思う。原材料を仕入れ、加工し調理するまでの一連の作業を自社工場で実現させ、生産コストが最大限に抑える事が出来れば、市内、ひいては富山県内で流通し普及していく未来も遠くないと考える。

謝辞

今回の調査にあたり、ご協力いただいた全ての皆様にこの場を借りて感謝を述べさせていただきます。皆様のご厚意とお力添えのおかげで、拙い文章ではありますが、無事に報告書を書き終えることができました。度重なる聞き取りにご協力いただいた越田商店・越田喜一郎様、突然の訪問でもお忙しい中快く対応して下さった鮮魚店関係者の方々、氷見ビジネスセンター長・岡田弘毅さん、株式会社半七・高柳沙織さん、氷見市役所水産振興課の方々、その他聞き取りに応じて下さった地域の方々、本当にありがとうございました。

参考文献

日本住宅地図出版事業協同組合『地番地名入り ゼンリンの住宅地図 高岡市』(P96~p106 参照)、善隣出版社、1968 年。

氷見ビジネスサポートセンター『冊子 氷見市ビジネスサポートセンター活動報告レポート vol 3』氷見まちづくり協議会、2023 年。

参考にしたウェブサイト

農林水産省「農林水産省 食料需給表」(平成 16 年度から令和 3 年度の統計を参照)

<<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>> (2024 年 1 月 2 日閲覧)

氷見市「氷見市 HP」

<<https://www.city.himi.toyama.jp/gyosei/index.html>> (2023 年 10 月 30 日閲覧)

富山県公式ウェブサイト「富山県栽培漁業センター」

<<https://www.pref.toyama.jp/1691/kensei/kenseiunei/kensei/soshiki/16/1691.html>>

(2023年11月3日閲覧)

氷見ビジネスサポートセンター「サポート事例【株半七】魚問屋ママ×栄養士ママコラボ！
魚を使った幼児食開発「totokito」

<<https://himi-biz.net/2021/10/13/2468/>>(2023年11月25日閲覧)

第5章 氷見市の果樹と果樹園発展の背景

田持 友太郎

はじめに

氷見の食文化と聞いて何を想像するだろうか。私は氷見市でフィールド調査をする以前は寒ブリやいわし、あじ等を中心とした水産物を想像した。また、最近ブランド化された氷見牛も想像できた。しかし、実際に氷見に赴くと果樹栽培も多く行われていた。北陸地域で育つとは思っていなかった果物も多くあり、予想外であった。実際に『氷見市史』の記述では、漁業や野菜についての記載はあったが、果物については全く記載がなかった。近年増加したであろう果樹栽培は文献等では調べられず、実際に現地に行くことでしか知ることが出来ない。そんな果樹栽培について関心を持ったため、その実態や増加した要因について調べようと思った。

実際に現地へ赴き、農家の方や農園を所有している方にインタビューを通して調査を行った。専門農家から他の事業と兼業している会社等様々であった。また、氷見市の果樹園は耕作放棄地を転用している場所が多い傾向にあった。本稿では、農業で生計を立てている農園、他の事業と兼業している農園、6次産業化している農園、氷見市の果物を利用している販売店の順に記述していく。下図は本稿で記載する農園、販売店の大きな位置である(図1)。



図1 氷見市内の地図と各農園・店舗の位置(国土地理院地図より作成)

1.農業で生計を立てている農園

1-1.りんごを育てている農園



図2 扇浦農園周辺の地図（国土地理院地図より作成）

扇浦農園は、氷見市北部の指崎（さっさき）地域でりんごを育てている農園である。扇浦信一さん（73）にお話を伺った。氷見市出身の扇浦さんは、1998年（平成10年）から農園を始めた。これは、私が今回調査を行った農園の中では最も長く続いている農園である。地域に根ざした農園で、新聞やテレビといったメディアに出たり、地元の小中学校が摘果や収穫の体験に来たりする。長く続いている農園であるため、りんごの品種も多数ある。代表的な品種だとふじ、王林、シナノゴールドなどが育てられており、十数種類にも及ぶ品種のりんごがある。それら収穫されるりんごの7割はオーナー制度⁴²で売っている。オーナー制度を導入することによって、収穫する人件費、袋詰めするための包装費、売り場までの輸送費などがかからず、利益率が高い。その他に、JA 氷見のいきいき直売の会⁴³でも売っている。人件費削減を意識したオーナー制度であるが、多様な品種を育てている広大な農地のため、繁忙期には人手が必要である。基本的には家族で農園を管理しているが、摘果や収穫の時期にはアルバイトやパートを雇っている。

⁴² りんごの木1本の収穫権を売る制度。消費者が実際に農園まで収穫しに来る。シーズン内ではどのタイミングで収穫しに来てもよい。

⁴³ 2002年3月に設立された直売所。少量多品目を心がけ、新鮮・安心・安全をモットーに消費者に顔の見える販売方法で消費者ニーズに対応している。

多くの種類のりんごが育てられているが、そのほとんどは「丸葉台」と呼ばれる木で育てられている。りんごの木は2種類に分類でき、丸葉台とは、土台がない1本木である。丸葉台の木は実をつけるまで7年ほどかかるが、寿命は60年と長い。もう一方は「Y台」と呼ばれる台木の上に別の木を継ぐ木である。Y台の特徴としては、果実が実るまでが早く、およそ3年で実をつけ始める。しかし台木で土からの栄養を抑制しているため、木が枯れるまでは20年ほどと短い。一般的にりんご農園は、初期にY台から始め、次第に丸葉台へと移行をしていく。扇浦農園も農園を始めた当初はY台ばかりであったが、現在はほとんど丸葉台である。



写真1 丸葉台5年目のりんごの木（筆者撮影）

元々は水田だった土地だが、減反政策が行われ、水田を減らさなければならなくなってきた。その時に生じた空き地を活用するためにりんごを育て始めた農園であった。水田をすべてりんご農園にしたわけではなく、一部の水田では現在もお米を作っている。

1-2.キウイを育てている農園

氷見キウイランドは氷見市南西部の赤毛地域でキウイを育てている農園である。中国人の許斌さん（44）に話を伺った。元々中国で2010年～2017年までキウイを育てており、その後、家族の住む日本に移住し、2019年（令和元年）から氷見市でキウイを育て始めた。中国では50ヘクタール規模の非常に大きい農園を持っていたが、中国の農園は日本に移住するタイミングで手放した。現在はその1/10程の規模で行っている。

中国でキウイを育て始めたきっかけは、キウイはビタミンCや食物繊維を含み、体内環境をバランスよく保ってくれる健康に良いフルーツで、それを作ることで社会に貢献したいと思ったことである。日本に渡ってきても、キウイ栽培に対する未練が残っており、再び始めることにした。実際に許さんは、「一度の人生を充実させるため、やりたいことを前向きにやればいい。なんだかんだ結果が出ます。社会に何か出来ないか、残せないかを考える。」と社会貢献に対する熱い思いを語っていた。現在正規の従業員を2人雇っていたり、繁忙期には中国から両親が手伝いに来たりすることからも事業への本気度が伝わってきた。



図3 氷見キウイランド周辺の地図（国土地理院地図より作成）

ここはかつて運送業者の野菜農園だった場所であるが、経営が上手くいかず辞めてしまい耕作放棄地となっていた場所である。キウイは水気に弱いため、元々水田であった土地ではなく畑であった土地を使っている。放棄されてから時間が経っていたため、道が荒廃しており、水、電気も通っていなかった。そのため、1から整備をした。2019年から整地を始め、2020年に挿し木定植⁴⁴を完了した。水は2020年に通し、キウイ棚は2021年に整備した。

規模の大きさからわかるように、キウイの品種についても数多く育てている。ヒスイグリーン、ゴールドキウイといった想像しやすい緑や黄色のものから、レインボーレッドといった赤色のキウイもある。その他にも多くの種類のキウイが育てられている。昨年の収穫量は約2tであった。富山県のスーパーマーケットや直売所に卸売をして



写真2 翡翠グリーンキウイ（筆者撮影）

⁴⁴ キウイは肥料をまいた農場に挿し木を植えて育てる。形式としては、先述した扇浦農園の丸葉台と同じである。

おり、2023年～2024年には直売所も建てたいと考えている。まだ事業を始めて数年しか経っていないが、どんどん規模を拡大していく予定である。

今回インタビューに伺った農家で唯一の外国籍の方であった。しかし、規模は非常に大きく、キウイ栽培に対する熱い思いが伝わった。他にインタビューに訪れた農園の方々の間でも、農園を始めて数年にしては有名で、キウイランドは急速に規模を拡大している事業であることが分かった。

2.他の事業と兼業している農園

農園の経営だけでなく、別の事業も行っている農園を、ここでは取り上げる。なお、今回の調査ではどの農園経営も建設業との兼業で行われていた。

2-1.山葡萄を育てている建設会社の農園



図4 鎌仲建設周辺の地図（国土地理院地図より作成）

鎌仲建設は氷見市平野部の大野地域で山葡萄を育てている。社長の鎌仲和紀さん（46）に話を伺った。山葡萄の栽培は、和紀さんの父親にあたる前社長が2008年（平成20年）に興味で始めた。前社長は山登りや山菜採りなどのアウトドアに出かけることが趣味で、その最中に山葡萄を見つけた。しばらくは山葡萄を定期的に採りに行っていたが、水田だった土地を使い、自分で育て始めた。

ところが2013年（平成25年）、収穫直前の時期に父親が不慮の事故で亡くなり、跡を継ぐ形で現社長の鎌仲和紀さんが山葡萄を育てることとなった。当時は父が趣味で行っていたもので手伝うことはなかったため、育て方が全く分からず、農園自体をやめようと考えていた。しかし、父親の友人たちの「やめないでほしい」という声と協力のもと、続けることにした。県の農業指導員にアドバイスをもらったり、農業に関する文献を調べたりしながらノウハウを身につけた。また福井県にある白山ワイナリーなど実際に他の山葡萄農園にも訪れ、参考にした。建設業との兼業ということで、建設業で取り扱っているトラックや草刈機などを農園に使うことが出来、農業用に改めて道具を揃える費用をかけずにできた。

先述したように、元々は野生の品種であるため、酸味が強く、生で食べることには向いていない。そのため、加工して販売をしている（写真3）。最初は地域の小・中学校の給食に山

葡萄ゼリーとして出た。その後、ジャム、ジュース、飲む酢、ドレッシングと様々な商品に加工して販売している。加工は長野県にある業者に委託しており、山葡萄を採取したのち、自らそれを業者まで運び、加工してもらった商品を受け取り、富山に帰ってくる。実際に商品を頂いたが、ジュースは一般的な葡萄のジュースに比べてコクがあり深みのある味で大変美味しかった。



写真3 山葡萄を使った商品（筆者撮影）

現在商品のほとんどは、ひみ番屋街⁴⁵に卸している。毎年早くに売り切れてしまうほどの人気であるが、本業は建設業であるため、規模を拡大したり直売所を作ったりすることは考えていない。例年は1t程度収穫できるのだが、2023年は300kgしか取れない見込みで、9月に行う収穫を例外的に2回行った。このように自然を相手にすることの苦勞も語っていた。

年間を通したスケジュールは右表の通りである（表1）。剪定を除くと1年間を通した主な作業は草刈りや消毒が中心である。

⁴⁵ 氷見市北大町にあり、2000年に開駅した道の駅である。氷見漁港直送の魚を使った回転寿司、氷見うどん、氷見牛等地元でしか味わえない料理が味わえる飲食店のほか、地場でとれた食材や、手の込んだ加工食品に至るまで、多くの店舗が並ぶ商業施設。（ひみ番屋街ホームページより一部抜粋）

鎌仲建設が所有している農園は元々水田であった土地である。現在、農園は計3ヶ所ある。2つは鎌仲さんが個人で所有していた元水田で、もう1つは別の人が所有していた耕作放棄地を借りている。

表1 年間スケジュール

月	作業
1 2月	越冬剪定
3月	軽い剪定 草刈り、消毒（～9月）
6月	摘果
9月	収穫

2-2.イチゴを育てている建設会社の農園



図5 RK ナーセリー建装周辺の地図（国土地理院地図より作成）

RK ナーセリー建装は氷見市平野部の飯久保（いいくぼ）地域でイチゴを育てている建設会社である。取締役事務担当部長の江渕優美さん（61）にお話を伺った。事業の中でも、農園の運営に関することは江渕さんが全て管理している。ここは、富山県で唯一の夏秋（かしゅう）イチゴ⁴⁶農園である。建設業のみの1つの事業だけでは将来が不安定であり、事業全体を安定させるために、需要の高い夏秋イチゴ農園を始めた。したがって、建設会社を発足したのは2014年（平成26年）であるが、当初から園芸事業をすることも構想に入っていた。また、氷見市内の雇用を広げようというねらいもあった。会社発足2年後の2016年（平成28年）に耕作放棄地となっていた元水田にハウスを2つ建て、その2

⁴⁶ 夏と秋に収穫できるイチゴ。一般的なイチゴは冬から春に収穫されるため、夏秋に収穫できるイチゴは希少性が高く、需要も高い。

年後にはさらに4つ増設して、現在はハウス6つでイチゴを育てている。農園を始めるにあたり、富山には夏秋イチゴ専門の指導員がいないため、農協の営農指導員に指導してもらったり、苗の売り手に相談やアドバイスを貰ったりした。

ここでは、夏秋イチゴの中でも「すずあかね」という品種を育てている。冬春イチゴとは違い、毎年苗を買い換えなければいけない。そのため毎年収穫が終わると12月に株を抜かなければならず、それが力仕事で大変だと語っていた。また、主な作業（間引きや消毒、収穫等）が6月以降の夏場でハウス内の気温が40℃を超える日もあるため、暑さとの戦いでもある（表2）。

表2 年間スケジュール

月	作業
3月	植え付け
5月	一番花を取る
6月～	収穫、分別、配達、加工（～11月）
7月、8月	消毒
12月	株を抜く
1月	地中に残った根を抜く
2月	土の消毒

イチゴの栽培だけでなく、加工商品も作っており、ジャム、ドライイチゴ、イチゴ酢を作っている。これらはいずれも、試作を何度も繰り返し、商品化に至った。これらの商品は農協の直売所や通信販売で売るほか、氷見市や高岡市のケーキ店や富山市のスーパーマーケットにも卸している。夏秋イチゴは富山では数が少なく、ケーキ店等に「助かる」と言われることにやりがいを感じている。また、直売所を設けてほしいという声や、夜にイチゴ狩り体験を行って欲しいと言う声（昼は蜜蜂を受粉ように放し飼いでいるためイチゴ狩りができない）もあるが、従業員の確保ができないため、事業の拡大は困難である。

3.六次産業化

六次産業化とは一次産業としての農林漁業、二次産業としての製造業、三次産業としての小売業等の事業を一体化して行う産業である（総務省「農林漁業の6次産業化の推進に関する政策評価」（行政評価局調査）に関する報告より一部抜粋）。本調査でも六次産業化が見られる農園があった。

3-1.六次産業化しているブルーベリー農園

いなかふれさかは氷見市山間部の触坂地域でブルーベリーを育てている農園である。オーナーである上野達也さん（53）に話を伺った。上野さんはかつて旅行会社で働いており、全国の色々な地域を見てきた。しかし、観光で訪れることはその街の上澄みしか知ることが出来ない。その街の積み上げられてきた歴史を知り、自分自身がその一部になりたいという思いを持った。特定の場所に定住し、新しいことに挑戦をしたいという思いのもと、1999年から氷見市に戻り、ブルーベリー農園を始めた。氷見市へ戻ることも当初は考えていなかった

たが、地元の過疎化という課題を地域の再編などを通して解決したいという思いから戻ってきた。農園を始めるにあたって、石川県能登町（旧柳田村）で2年間の研修を受けてきた。



図6 いなかふれさか周辺の地図（国土地理院地図より作成）

研修を終えた後、1999年に新規就農し、2000年より摘み取り体験を開始した。そして2002年に「café風楽里」を開店した。ブルーベリーの収穫から、加工、そしてカフェで販売するまでを上野さんがオーナーとなり管理している。就農当時はまだ氷見市には果樹園が少なく、近年増加傾向が見られる氷見市の果樹園の先駆けのような存在であった。またカフェ営業に関して、開店当初は「六次産業化」という単語もなく、収穫から加工、販売をするという形態は競合相手がおらず大盛況であったと語っていた。

収穫、加工、販売の3業態を通じた経営ということで、経費面などメリットは多くある一方で、耕作面積を容易には増やせないため一定の収穫量を工夫して使わなければならない。また害虫による被害が多く、植え直し続けなければいけない時期もあったという。カフェ営業が盛況であったと先述したが、それ以前の直売と摘み取り体験を行っていた時期は集客に苦労した。3業態の経営であるため従業員も多くいる。農場は主に達也さん、加工は主に奥様の和枝さんが行っており、収穫と加工の2工程を通してアルバイトが7名程度いる。カフェのアルバイトは10名程度で、この事業は20名程度の従業員が関わっている。

現在の農園の規模は80a、生産量は年間約2tである。カフェの商品と摘み取り体験での販売のみを行っている。直売所やスーパーへの卸売も昔はしていたが手数料や送料で利益率が低く、カフェで使える材料も減ってしまう。カフェに来てくれる地域の常連の方を大切に

したい思いと利益率の面からも卸売をやめることにした。ブルーベリーの品質で 1 番は目指しておらず、アクティビティとして楽しめる摘み取り体験を、観光事業の一環として行っている。地域創生に強い思いがあることから、このように観光事業として展開し地域を盛り上げることを大事にしている。

ここも元々水田であった耕作放棄地を使った農園である。農園を始める際に農地整備や農道整備から始めた。この地域の土地は地形の影響で、1つあたりの面積が小さく、形もいびつなところが多いので水田に適していないと語っていた。耕作放棄地が増えた 1 つの要因として考えられることであるだろう。

3-2.加工・販売をしているイチジク農園

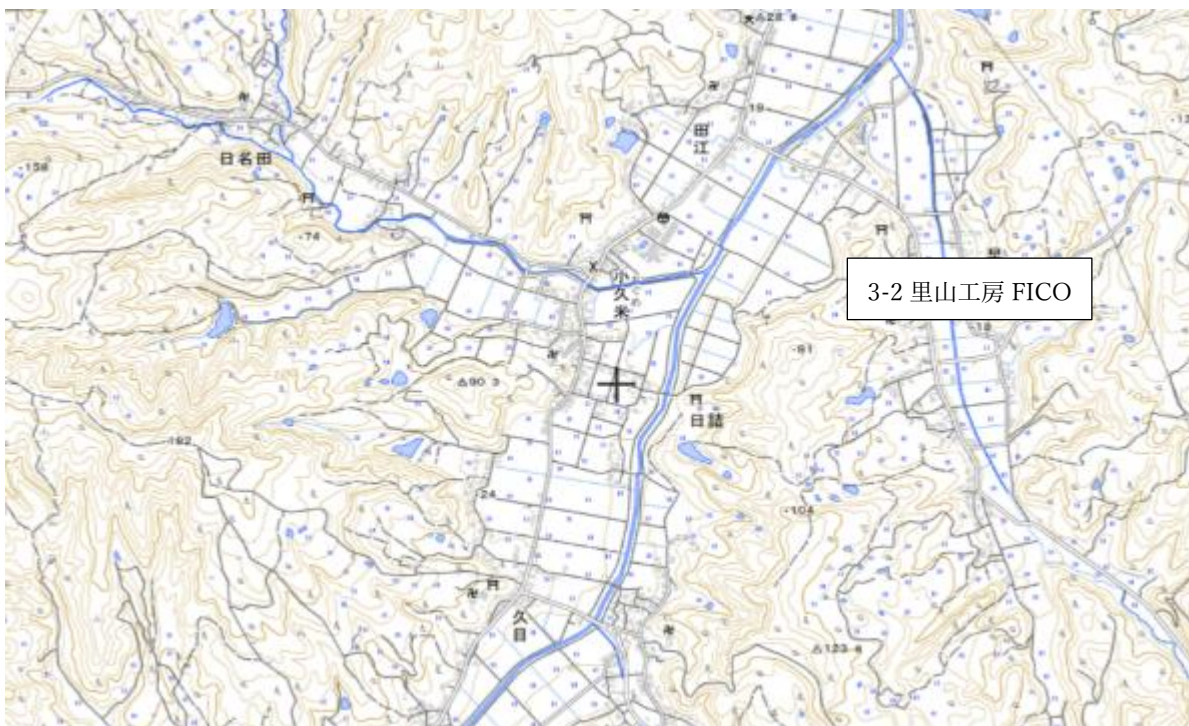


図7 里山工房 FICO 周辺地図 (国土地理院地図より作成)

里山工房 FICO は氷見市山間部の早借（はやかし）地域でイチジクの栽培、加工、販売を行っている農園である。店長の廣田秀美さん（62）に話を伺った。2019 年春頃からイチジク栽培を始め、同年 10 月に店舗を開店した。当初はさつまいもを育てており、干し芋やチップスに加工する際に出るさつまいもの切れ端を何かに使いたいと思い、チーズケーキなどのスイーツにしたことが店舗開店のきっかけである。2021 年に知り合いにイチジクを譲ってもらい同様にケーキやコンポートにした。後に栽培しているイチジクも同様のスイーツに加工して販売するようになった。

イチジク栽培を始めたきっかけは、夫が好きだったから、比較的簡単に作れると聞いたから、JA 氷見でイチジク農家の募集がかかっていたから等の理由を挙げていた。作り始めた時から店舗で使うつもりはなかったが、先述した知り合いからもらったイチジクをスイーツに加工したことと、店名に FICO（イタリア語で「イチジク」の意）と入っ

表3 年間スケジュール

月	作業
12月	枝をすべて落とし、ナイロンを巻く
2月	雪解けと同時にナイロンを外す
3月	肥料を巻く
4月	草刈り、消毒、コーティング
6月	芽かき
7月	枝の誘引
8月	害獣対策
9月～	収穫

いるのにイチジクを提供していないことに違和感を覚え、店舗でスイーツに加工して出すことにした。店舗開店とイチジク栽培のきっかけや目的は異なるところから始まったが、様々な要因が重なった結果、イチジクを店舗でも販売することになった。

イチジクを栽培するにあたっての詳細はおおよそ表の通りである(表3)。表にある12月のナイロンを巻く作業は乾燥を防ぐために行う。4月に行うコーティングはカミキリムシによる被害防止のために撒くものである。7月に行う枝の誘引は太陽の光が枝全体に当たるようにするためにする。陰となってしまう枝は折ってしまう。8月に行う害獣対策は農場全体にネットを張る。イチジクは果樹の中では比較的早く収穫でき、植え始めてから3年程で収穫可能である。

育てている品種は赤イチジクの「ドーフィン」、白イチジクの「バナーネ」、緑色に近く、7月に収穫できる「ザ・キング」、黒イチジクの「ピオレーソリエス」の4種類である。店頭で売ることはもちろん、氷見市の民宿やレストランにも売っている。ジャムやコンポートにも加工するため消費量が多い。先述した通り、農場規模を増やせない現状から卸す場所を増やす予定はない。

元々所有していた水田だった土地を、減反政策で潰さなくてはいけなくなりイチジク農園に転用した。現在、残っていた水田は営農組合に委託をしている。

4.販売店

ここでは視点を変えて、氷見産の果物を実際に取り扱い、商品として販売している店舗を紹介する。

4-1.氷見産の果物を加工販売している店舗

HIMIFRU は「チャレンジショップ」（後述）として、氷見市中央町でフルーツサンドを製造・販売している飲食店である。店長の吉田晶子さん（40）に話を伺った。HIMIFRU は2023年6月にオープンしたばかりの店舗で、フルーツサンドやパフェを提供している。ホームページにて、「氷見といえば魚はブリ、肉は氷見牛が有名ですが、実は氷見の果物も美味しいんです！」という記事を見かけた。私が氷見市の果樹に興味を持ち、調査しようと思ったきっかけと同じであったため、話を伺いたいと思った。

吉田さんは元々東京に住んでいた方で、芸能活動をしている夫の吉田サラダさんが氷見市地域おこし協力隊⁴⁷のリポーターに選ばれたため、2020年に氷見市に移住してきた。氷見市に住むうちに、氷見市を盛り上げたいという思いを持つようになり、知られていないけれども氷見市には美味しい果物がたくさんあるということが発見したことがきっかけで店舗を始



写真5 HIMIFRUの外観（筆者撮影）

めた。店舗を開くにあたっての知識は、夫のいところが経営している大阪のカフェを手伝い、そのカフェでパフェやフルーツサンドの作り方やアイデアを学んだ。現在も試行錯誤しながら様々なパフェやフルーツサンドを作っている。氷見産の果物を使うということで、氷見キウイランドや、氷見市にある農家からの仕入れを行っている。シーズンごとに様々な果物を使っており、りんごやイチジク、ネクタリンも使ったフルーツサンドの販売もしている。

また、店舗については「チャレンジショップ」という形態で運営している。チャレンジショップとは、氷見市が2年契約で安価で貸し出している期限付きのテナントである⁴⁸。

⁴⁷ 都市地域から条件不利地域に住民票を異動し、地域おこし支援や、農林水産業への従事、住民支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組（総務省ホームページより一部抜粋）

⁴⁸ 2021年3月末に始まり、現在開設3年目である。開設当初は3店舗出店しており、それらは2023年春に活動を終えた。そのうち2店舗はまちなかに出店し、もう1店舗も活

HIMIFRU で成功したら、チャレンジショップの2年間の後、氷見市街の方に移り、カフェを開きたいと吉田さんは語っていた。氷見市にはファミリーレストランやファストフードといった若者のための場所はあるが、子供連れの母親がゆっくり過ごせる場所が少ない。カフェをオープンする際には座敷や小上がり等のスペースやオムツを替える場所も用意し、母親がゆっくり出来るようなカフェにしたいという思いを持っている。

氷見市の果物に注目したきっかけが私と同じであり、実際に氷見市産の果物を多く使っている店舗であった。氷見市では果樹園で果物が育てられているだけでなく、こういった店舗で実際に使用されていることが分かった。



写真6 HIMIFRU の商品
(筆者撮影)

4-2. 宿泊施設と兼業している喫茶店

HOUSEHOLD は氷見市南大町にある宿泊施設と喫茶店を経営している店舗である。オーナーの笹倉奈津美さん(37)に話を伺った。「勝手口からの旅」をコンセプトに勝手口から台所にお邪魔するような感覚で街を楽しんでもらいたいという思いを持っている。8年前に東京から氷見に移住してきて、その時に見つけた廃ビルをリノベーションして店舗に改装し、2023年で5年目を迎える。先述したコンセプトを大切にしており、若者が集まるようなパフェやケーキのあるカフェではなく、常連客や地域の人、観光客が気軽に立ち寄れるような喫茶店として営業をしている。そのためメニューには氷見産果物のジュースやイトンメス⁴⁹などを提供している。店舗の内装も4人で座れるようなテーブル席は少なく、ほとんどの席がカウンター席で1人でも落ち着ける雰囲気であった。従業員もオーナーの笹倉さんご夫婦を含め4人で、実際に営業中に接客をしている人は1人~2人で、多数で働いているカフェに比べて圧迫感を感じなかった。実際に私が訪れた際も、旅行客2名、地域の常連客1名会話をしており、他のカフェとは違った雰囲気であった。

そんなHOUSEHOLDが氷見産の果物を使うのは、宿泊施設も兼業しているため、遠方から来る観光客に対して「せっかくならどこでも食べられるような食べ物ではなく、ここでしか食べられない地物を食べてもらいたい」という思いがあるからである。大々的に

動を継続している。新たに2店舗が出店しており、開設以降計5店舗が営業している。2年間の契約期間で顧客獲得や店舗運営の経験を積み、2年後にまちなかで出店することを目標にしている。

⁴⁹ メレンゲ、フルーツ、生クリームを合わせたイギリスの伝統的なデザート。

「氷見産の果物を使っています！」と掲げてはいないが、地域と人を繋ぐことを大切にしていることから氷見産の果物を使っている。また、氷見市の果物を使うことは、その果物を知ってもらうことやHOUSEHOLDの知名度上昇にも繋がる。若者が集まる賑やかな場所を目指し



写真7 HOUSEHOLDの内装（筆者撮影）

ているわけではないものの、経営のためにも観光客や地域の人々に知ってもらえるような知名度獲得は課題である。氷見市は富山県の端に位置することからなかなか立ち寄りづらい場所である。氷見産の果物を使った目新しい料理（イートンメス等）を作ることで、HOUSEHOLDと同時に「氷見市にはこんな果物があるんだ」と観光客や地域の人々に知ってもらえる。

氷見産の果物はあまり知られていないということがきっかけで調査を始めたが、このような形で知名度上昇に貢献する店舗もあることを知った。

5.果樹園が増加している要因

5-1.統計や政策から見る要因

4節までで様々な果樹園・農園を具体的に紹介した。これらの農園はどれも比較的近年出来たものである。1番長く経営している農園でも30年弱である。氷見市を調査するにあたり、『氷見市史』で氷見の食文化の歴史を調べた。氷見の食文化を代表する水産物、米や麦といった穀物、野菜等の記述は見つけられたが、果樹に関する記述はなかった。これらのことから氷見市における果樹栽培は近年増えてきたと考えられる。

では、なぜ氷見市の果樹栽培は近年増え始めたのだろうか。私は水田が関係しているのではないかと仮説を立てて考えてみた。『水田収益力強化ビジョン』⁵⁰には以下の記述がある。

⁵⁰ 地域の特徴のある魅力的な製品の産地を創造するために、地域の現状・課題を踏まえ、水田活用の方向性を示す県段階・地域段階で設定する取組方針である。

本市の農業は、水田率が約 9 割と高く、圃場が粘質土壌で湿田であることから畑作物に適しておらず、農業生産額のうち約 7 割を米で占めており、稲作に特化している。しかしながら、主食用米の需要が減少する中で、他の作物への転換を促進することで、水田面積の維持を図っていく必要がある。(2023 年度氷見市農業再生協議会水田収益力強化ビジョンより)

水稲の作付けが見込めない地域にはハトムギや果樹等の栽培を推進していく旨の記述がされている。このことから、氷見市では水稲の需要と供給が見合っておらず、供給過多であることが分かる。先述した通り、実際にインタビューに訪れた農園は耕作放棄地や元々所有していた水田を転用した土地が多かった。氷見市としても水田から他の作物を育てる土地への転用を推進していることが分かった。

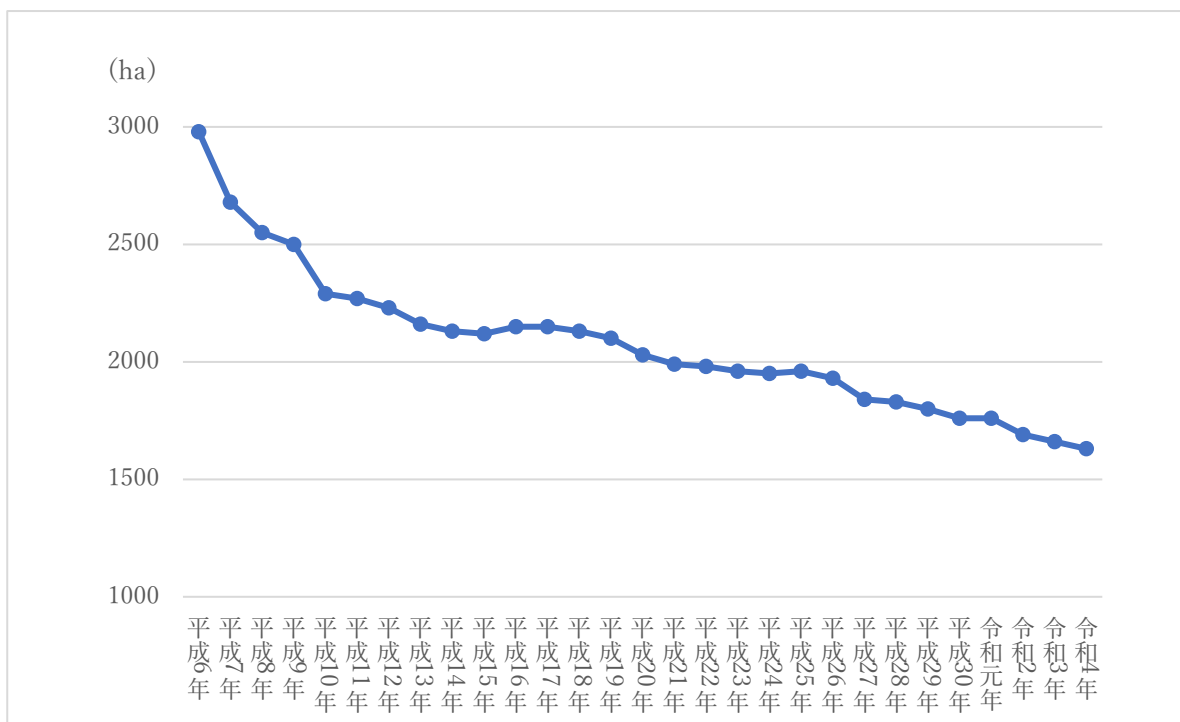


図 8 氷見市の水稲作付面積の推移（農林水産省作物統計調査より作成）

図 8 は氷見市の水稲作付面積の推移である。水稲の需要減少、また水田収益力強化ビジョンによる氷見市の取り組みもあってか、この 30 年で半分近くに減少している。

5-2.別に考えられる要因

氷見市の水田減少には他にも要因があると考えられる。図 6、図 7 を参照すると、氷見市には傾斜が急な地形で 1 区画あたりの水田の形が不定形な土地があることが分かる。機械を操作し、収穫を行うためには、広くて平らな土地が稲作には向いている。もちろん氷見市

の中にも平野部は存在するが、市全体を見た時に山と海岸の距離が非常に近く、傾斜が急な土地も多い。日本はかつて、土地改良事業が国からの補助金を得て全国的に進められた（「農林水産省 土地改良事業が果たしてきた役割等について」参照）。

その事業により、平野部の水田はどこも四角形で大きい面積のものが多い。しかし、それを実施するのが困難な山間部の水田は今も不定形なままになっている。山間部へ行くには時間もかかり、更には機械で入れないような形であるため、そのような地域では、管理面や人手不足などの要因から引退する農家が増えたのではないかと考えられる。また 5-1 で述べたように水稻の供給過多で、生産量に対して消費者の米の食べる量が減ったことも農家の方の引退に関係しているのではないかと考えられる。

他の要因としては消費者の志向の変化も考えられる。戦後日本ではお腹を満たすために、安価で腹持ちが良いものとして米が多く食べられていた。人々の生活が徐々に豊かになっていき、食べるものが変化して、食生活の中に果物が入ってくるようになった。その需要はだんだん増えていき、果物を好んで食べる人が増加した。このように人々の生活面での変化からも米の需要が減ったこと、また果物の需要が増えたことが考えられる。

米の需要低下と水田収益力強化ビジョンによる政策、氷見市の地形、水田整備事業、消費者の志向等様々な要因から、果樹栽培は増えたのではないかと考えられる。加えて、その空いた土地、もしくは耕作放棄地となってしまった他人の土地を活用するために近年果樹園の増加が見られるのではないかと結論に至った。

おわりに

約 1 年間の短い期間ではあったが、氷見市内にある様々な果樹園を調べた。調査前までの氷見市の印象は水産物に特化した地域であったが、果樹栽培も数多く行われており、自分の中の印象は大きく変わった。地域貢献や PR、雇用の拡大など様々な考えを聞いたが、多くは社会貢献に繋がる思いを持っていた。5-2 で述べたように食のニーズが移り変わっていることや、耕作放棄地の活用手段となることから、今後氷見市の果樹栽培はさらに盛り上がりを見せるのではないかと感じた。

謝辞

今回の調査にあたり、ご協力いただいたすべての皆様にお礼申し上げます。突然のご連絡にも関わらず、日程を調整して下さり、また質問に対しても丁寧にお答えいただき感謝の思いで一杯です。大変ご多忙な中、時間を割いて私の調査にご協力いただきありがとうございました。この場を借りまして、お礼申し上げます。

参考文献

氷見市史編さん委員会『氷見市史 6 資料編四 民族、神社・寺院』、氷見市、2002 年。

参考にしたウェブサイト

国土交通省国土地理院「地理院地図」 <

<https://maps.gsi.go.jp/#12/36.905486/136.997108/&base=pale&ls=pale&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1&d=m>> (最終閲覧日 2024 年 2 月 1 日)

ひみ番屋街 HP <<https://himi-banya.jp/>> (最終閲覧日 2024 年 2 月 1 日)

総務省「農林漁業の 6 次産業化の推進に関する政策評価」(行政評価局調査)に関する報告 <https://www.soumu.go.jp/main_content/000566468.pdf> (最終閲覧日 2024 年 2 月 1 日)

総務省「地域おこし協力隊」

<https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html> (最終閲覧日 2024 年 2 月 1 日)

農林水産省「2023 年度氷見市農業再生協議会水田収益力強化ビジョン」

<<https://www.maff.go.jp/hokuriku/seisan/attach/pdf/bizyon-156.pdf>> (最終閲覧日 2024 年 2 月 1 日)

農林水産省「作物統計調査」

<https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_kome/index.html#c> (最終閲覧日 2024 年 2 月 1 日)

農林水産省「農業農村振興整備部会」

<<https://www.maff.go.jp/j/council/seisaku/nousin/index.html>> (最終閲覧日 2024 年 2 月 1 日)

農林水産省「土地改良事業が果たしてきた役割等について」

<<https://www.maff.go.jp/j/council/seisaku/nousin/bukai/R0206/attach/pdf/siryou-8.pdf>> (最終閲覧日 2024 年 2 月 1 日)

第3部

「伝統」を紡ぐ

第6章 氷見獅子の運営現状 ―小久米獅子舞保存会の事例から―

森谷 紗英

はじめに

富山県では全域で獅子舞が盛んであり各地域で行われている。私にはその獅子舞が各地域ごとに特徴があり同じ獅子舞ではないことが衝撃だった。私がかつ知っている獅子舞は、各地域ごとに特徴があるとしてもあまり大きな差があるわけではなかった。富山県の獅子舞は勇壮で華やかに踊る地域もあれば、静かでゆったりとした舞を行う地域もあり、舞を行わず行列で歩くだけの獅子舞もある。

調査地が氷見市に決まり、何か祭礼を調査したいと思っていたところでこの獅子舞を知った。氷見市では地域ごとに獅子舞を行っており、何箇所かで獅子舞を見る機会があったが、驚いたことに氷見市の中でも地域ごとの特徴があった。爆竹や花火を使用し青年団で派手に行う地域もあれば、積極的に子どもを獅子舞に参加させる地域もある。氷見市の獅子舞は大体20代の男性が所属する青年団が主催するものだが、少子高齢化による若者の減少により、青年団以外が指揮をとるところも増えている。新型コロナの流行もあり、獅子舞の中止が2、3年ほど続いたことで経験者が減っている現状もある。そういった中で、氷見獅子と呼ばれるこの獅子舞がこういった形態でどのように開催されているのかについて興味を持った。

1. 調査地概要



図1 氷見市における位置 (国土地理院より引用)

私が調査を行ったのは、氷見市小久米、柳田上、堀田である。

氷見市は高岡市、石川県七尾市、羽咋市、羽咋郡宝達志水町、鹿島郡中能登町に隣接している。その中で、堀田と柳田は高岡市側、小久米は宝達志水町側に位置している。柳田は海岸に面しており、氷見市の中では都会である。堀田、小久米は山間部とまではいえないが、山沿いの地域である。堀田の方が都心部に近い地域ではある。

1-1.氷見獅子

ここから氷見市立博物館発行の小堺卓治著『氷見の獅子舞』 博物館年報第 18 号』から引用し、説明を行う。氷見市は獅子舞が盛んで昭和 60 年（1985）時点で約 140 組余り、近年は 110 組余りの獅子舞が演じられている。氷見獅子はカシラ人足、カヤ人足などの獅子方と天狗方の所作や芸態・演目の名称に加えて、太鼓や笛・鉦などからなる囃子方、山間部の幾つかの地域を除いてみられる太鼓を載せる太鼓台が付随する独特なスタイルである。富山県内は、「金蔵獅子」や「下新川獅子」などの「二人立ち獅子」が県東部に分布、「氷見獅子」に加え「加賀獅子」の影響を強く受けた「砺波獅子」や「射水獅子」など、カヤ（胴幕）の中に、5・6 人から多いところでは 9 人余りもカヤ人足が入る「百足獅子」が県西部に分布している。「村披露」と称して春秋の祭礼のいずれかに村内全戸を回る村マワシがなされる。平成 9 年時点では 120 組が伝承されているが、そのうち春季祭礼で獅子舞が出される地区が 64 ヶ所、秋季祭礼



写真1 ヨボス（小久米）（筆者撮影）



写真2 黒髪と金髪のズッカブソ（堀田）（筆者撮影）

で出される地域が 57 ヶ所とほぼ拮抗して行われている。

氷見獅子ではカヤ（胴幕）の中に、カシラ（頭）持ち以下、一番カヤなどのカヤ人足が入った獅子と天狗が対峙する。頭にはヨボシやヨボスとよばれる鳥兜状の被り物を戴く。また、氷見町やその南部に位置する地域など、隣接する守山（現・高岡市守山）や二上（現・高岡市二上）から獅子舞



写真3 太鼓台（小久米）（筆者撮影）

を習ったとされる地域では、ズッカブソやズッカウソ（赤熊 シャガン）と呼ぶ、頭頂部から周囲にザンバラ髪の垂れ下がった被り物を被る天狗も出る。氷見獅子の特徴といえる太鼓台は、太鼓と笛・鉦からなる囃子方のうち、太鼓を載せる屋台を指す。太鼓台には太鼓の他に左右両側に高欄、高欄の四角に擬宝珠、鳥居と2基の行灯、提灯を吊るした若松、幟旗を載せる。平野部では太鼓台に載せたまま敲くが、坂道が多く道幅が狭い山間部では移動時のみ太鼓が載せられ、敲く際には太鼓をおろし太鼓を据える四角形の台座に載せる。笛は基本豎笛で、横笛を吹くのは年輩の人で若者はまず吹かないといってもよい。豎笛を吹ける人も少なくなっており、笛なしの地区もある。

従来は参加していなかった小学校高学年から中学校の女兒や女生徒が囃子方として豎笛を担当する地区も見られる。

氷見では獅子舞の祝儀を「花」とよび、祝儀の御礼として演じられる獅子舞を花獅子舞と称している。どの地区も獅子舞に先立ち、大きな目録を広げ、口上とともに花を打ってくれる人の住所と名前を読み上げ、披露する。通常花（祝儀）に対して一振り（一回の演舞）だが、獅子舞の構成員が以前ほど多くない近年は二つ以上まとめて演じられることがある。祭礼の年に嫁や婿を迎えた家や嫁や婿を出した家では挨拶と披露を兼ねて、両家のご両親や大勢の親戚を招待して、獅子舞に高額の花（祝儀）が打たれる。これを「嫁花」あるいは「婿花」という。これに合わせて招待を受けた嫁や婿の父親の名前でも高額の花（祝儀）が出されるが、これを「親花」という。そのほか家を新築にしたり、子供が生まれたりすると通常より高額な花（祝儀）が打たれる。

従来の氷見獅子では、カヤ人足や天狗、囃子方などの割振りや手伝いの依頼、獅子舞の実際の取り仕切りと運営はその地区の青年団に委ねられているが、若年層の減少や地区外への転出など青年団だけの運営は難しくなり、近年青年団を上がった壮年会や中学・高校生を交えて獅子舞を出している地区は多い。



写真4 口上を読む様子（小久米）（筆者撮影）

1-2.小久米概要

氷見市の中心地からは少し離れた中山間地、速川地区小久米にある「Bed&Kitchen SORAIRO」の澤田典久さんにご紹介いただき、小久米の獅子舞について調査、研究を行った。小久米では2023年に獅子舞保存会を結成し、4年ぶりの獅子舞を保存会が主体で開催した。獅子舞の特徴だけでなく、保存会が主体で行うことによるこれまでとの違いなどを述べていく。



図2 速川地区（国土地理院より引用）

今回主に調査した小久米は、速川地区に分類される。明治22年（1889）に市町村制施行によって葛葉、床鍋、三尾、日名田、小久米、日詰、早借、田江、小窪の9集落が一つの自治行政区域にまとめられ、速川村が誕生した。昭和29年（1954）4月1日に速川村は氷見市に編入合併される。小久米には古くから官道が通り、小久米から氷見町まで二里三十町（11.13km）、高岡まで六里（23.57km）、白ヶ峰越えて石川県の子浦村まで三里半（13.79km）、金沢まで十八里（70.7km）といった位置にある村であった。後に「御上使往来⁵¹」として重視された取次場所であり馬五匹を常置する宿駅として栄えた。昔からこの周りの地域の要の村であり、明治8年（1875）には育成小学校、明治15年（1882）以降から派出所、郵便局、銀行、裁判所、電気営業所、産業組合などの諸施設ができ、速川の中心地であった。田江から日詰の県道筋にはほとんどの生活用品が調達できるほどの店が立ち並んでいた。速川村役場も小久米に置かれており、現在は速川児童館となっている。

2.小久米獅子舞保存会の運営

小久米では令和5（2023）年に「小久米獅子舞保存会」が発足した。構成員は高校生が1

⁵¹ 江戸幕府将軍の代替わりにあたって、各藩の政情・民情を視察するために幕府から御巡見上使が派遣されていた際の視察の行程の道筋のこと。（富山県立図書館HP 「古絵図・貴重書紹介」より参照）

人、中学生が3人、青年団所属の19歳から30歳が4人、壮年会所属32歳から41歳が7人、42歳から55歳が12人、老人会所属65歳から79歳が10人、総勢36人である。令和5(2023)年から女性も参加して良いことになり、女子中学生(14歳)が1人参加した。保存会会長は69歳、顧問は79歳と71歳、区長が会計を行っており69歳、監事が68歳と、老人会の方々が保存会をとりまとめている。従来、氷見一帯における獅子舞は青年団が主催し行うものであり、基本的には青年団以外は獅子舞に関わっていなかった。前回にあたる4年前の獅子舞では小久米でも青年団が主体で行っていた。しかし、氷見市全体で若者が減少しており青年団のみで行えなくなっている地区は多い。小久米でも青年団員の数が少なくなっただけでなく、今年獅子舞を行いたいかという青年団内でのアンケートを2月にLINEを通じて行った際、やりたいと声を上げたのは1人だった。そのため、青年団主体では獅子舞は行えないことが区長に報告されたが、それを受けて区長と同年代の方々が有志を集め、保存会の発足に至った。最終的には青年団から社会人4人、中学生3人が参加した。しかし、この保存会は正式なものではなく任意であるため、補助金の申請等は自治会が行っている。

2-1.役員会(7月開催)

令和5(2023)年7月22日に行われた小久米獅子舞保存会での役員会に参加した。役員会には保存会の主要メンバーが集まっており、10人ほどが参加していた。役員会では保存会の現状確認、支出、収入、巡行予定などが話し合われた。

支出は主に、烏帽子購入、人数分の法被、練習時の飲み物と本番の途中休憩での料理、獅子舞に参加する中高生と青年団への謝礼である。烏帽子は1つ約20万円、それを2つ新調した。謝礼は、青年団で行う場合には団員全員がもらうものであった。昔は「温泉に行ってい」などと言われ、一人当たり20,000円ほど渡されていたらしい。今年は青年団以下には1万円以下の謝礼、という振り分けになった。また、来年度の支出として、獅子頭、天狗の面、提灯の新調を行う。獅子頭が約530,000円、天狗の面が約77,000円、提灯が一個約17,000円である。これらの修理は、高岡市にある祭礼道具専門店である「大国屋」に依頼する。天狗の棒や太鼓台の松、御神灯などの作成・調達は自分達で行う。コミュニティ助成事業に申請することで氷見市から補助金がおける制度があり、小久米には上限50万円以下で補助が決定している。また、文化庁の地域文化総合活用推進事業(地域伝統行事・民俗芸能等継承振興事業)の補助が採択された。

収入は主に獅子舞の祝儀にあたる「花」である。花は主に、一般花と嫁花に分けられる。一般花というのは地域住民やその親戚知人、地域内にある事業所からのものである。小久米ではJA氷見市速川支所や、壮年会にあたる城友会、保存会会員などからの花があった。嫁花は、獅子舞で一番大きなイベントになる。その年に結婚した家庭から花をもらい、嫁花用の演目を披露する。今年は開催できなかった3年分を含め、3組の嫁花があった。

巡行についての話し合いでは、大まかな1日の流れを共有し、そこから全員の意見を聞

きつつ変更していた。久しぶりの獅子舞の開催であっただけでなく、保存会が指揮をとって行う初めてのものだったため、難しいものは入れずにできる範囲で演目選ばれた。

話し合いでは最初に、太鼓台を出すのかという論点が挙がっていた。太鼓台を出すとなれば、松の調達や御神灯の準備、太鼓台の修理も必要になる。また、この獅子舞に参加したことがない人たちにどのように参加してもらおうかという点も長く話し合われた。休止していた4年のあいだに引っ越してきた人や、青年団に所属したことも、獅子舞の経験もない人がいる。また中高生のなかにも獅子舞未経験者がいる。そういった人々にどういった形で参加してもらおうかの話し合いが行われていた。青年団から保存会へと主体が変わったことで参加する年齢層が広がり、獅子舞における役割も変わる。実際に演舞するのが青年団にあたる20代だけではなく、40～50代の方も演舞する側にまわる。

獅子舞を4年ぶりに行うにあたって、会合の参加者はしきりに「こんな大人数で獅子舞を



写真5 役員会の様子（筆者撮影）

できるのが嬉しい」と話していた。保存会となり青年団の枠を超えて地域全体で獅子舞を行うことへの期待が、久しぶりの獅子舞開催への不安を上回っていたようだった。また、保存会が大きな顔をしてはいけないということも話されていた。青年団主体であった歴史を変え、新しいことに挑戦する中で、地域住民の意見を聞き、尊重し、保存会の祭りではなく地域全体の祭りでなければならないと、強調されていた。

2-2.全体総会

令和5（2023）年8月8日に役員会が行われ、そこでは法被を40着発注したという報告と、地域住民の花（祝儀）についての話し合いが行われた。花は秋に住民から一律でいただいている。結果的に全世帯から花をいただいた。氷見の獅子舞は春と秋の両方がかつて行っていたが、現在はどちらか一方だけの開催がほとんどになっている。花（祝儀）は春の分は集めていないが、獅子舞開催には費用がかかるためどう補うかが問題となる。小久米が秋のみの開催になったのは、70年ほど前にもなる。

令和5（2023）年8月29日には小久米獅子舞保存会のメンバーが初めて全員集まり、総会が行われた。役員会で話し合われていた、巡行予定やこれからの練習日程などが共有された。また、実際に獅子舞を演舞するのは40代までであり、それ以上のメンバーはサポートや演奏（太鼓、鉦）に回る形になる。

この時、会長の小川久さんは、中高生にこれからも獅子舞に関心を持ち続けてもらうため、青年団主体で行っていたよりもさらに彼らの意志を尊重しなければならないと繰り返し述

べていた。お話を伺った際にも、これからの小久米の獅子舞のためには、若い人たちがやりたがるようであってほしいと仰っていた。意志の尊重というのは、やりたい役を自分たちで決めたりすることであり、何らかの役を無理やりやらせることはしない、というものだ。昔の獅子舞では、天狗は長男が行うなど役にも決まりがあったが、そういったことは今後は希望制にするという。そもそも、天狗は長男が行うという「しきたり」も、昔から言われてはいたものの、会長が現役の時ですら厳密に守られていたわけではなかったそうだ。この決まりは住民がたくさんいた、かなり昔の頃の話だ、と仰っていた。

3.小久米獅子舞の練習・本番

3-1.練習風景

9月14日に行われた小久米獅子舞の練習を見学した。小久米では9月1日から9月17日の本番まで毎日19時から21時まで獅子舞の練習を行っていた。練習は小久米公民館の外で行われた。

練習が始まる際には、実際に使われる太鼓を叩き、練習開始の合図を出す。「ドォン」と太鼓を最初はゆっくり叩き、どんどん速くする。それを何回か繰り返す。太鼓の叩き方にもこだわりがあり、ただ面を叩くのではなく、右手の棒で叩いている際には左手の棒で面に触れておく。響かせず



写真6 太鼓を叩いている様子（筆者撮影）

ぎることを抑えるのが獅子舞での太鼓の音のこだわりである。



写真7 鉦 真ん中の鉦を棒で鳴らす（筆者撮影）



写真8 太鼓の下に四角形の木製の板が敷かれている（筆者撮影）

小久米の獅子舞では、太鼓と鉦を使う。氷見で行われる獅子舞では、笛を使う。氷見で使用される地域もあるが小久米ではかなり前から笛は使用していない。祭りの本番では太鼓を「太鼓台」に載せて運ぶのが特徴の一つだが、氷見ではその太鼓台から下ろして叩く地域と太鼓台に載せたまま叩く地域がある。小久米では太鼓台から下ろし、四角形の木の板の上に置いて叩く。



写真9 獅子舞練習の様子（筆者撮影）

論田・熊無などの地域では女性が堅笛を吹いているという。小久米でも

今年から女性の笛を導入しようと試みたが、短期間での習得は難しく、諦めたようだ。獅子舞で使う堅笛は西洋音階と異なるだけでなく、楽譜にすることもなかなかできないという困難がある。これらの楽器を演奏する人たちのことを通常「囃子方」と呼ぶ。今年から小久米では女の子も獅子舞に参加しており、囃子方を練習している風景が見られた。太鼓を叩く男性は「獅子舞での太鼓の音を聞くとうずうずする。獅子舞をやっているな、と実感する。」と仰っており、獅子舞には囃子方が必要不可欠であることを感じさせられる。

3-2.小久米獅子舞当日

小久米の獅子舞は9月17日に行われた。



写真10 祈祷の様子（筆者撮影）



写真11 当日着ていた法被（筆者撮影）



写真12 神社から移動の様子（筆者撮影）

当日の予定は次のようなものであった。

16時に小久米神社にて「秋季大祭神事」を行う。



写真13 移動の様子（筆者撮影）

16時半、お祓い・神事が終わった後は、境内で獅子舞を披露する。保存会員は法被を着ており、獅子舞を演舞する人は黒ズボンに足袋を履いていた。

17時には小久米神社から歩いて移動し、地藏堂前での演舞を行う。太鼓台は綱を引いて移動する。地藏堂では「七五三」という演目を行ったが、二頭立てで演舞を行う。天狗も二人、獅子も二頭である。速川地区では、小久米特有の演舞だそう。

17時半から小久米公民館で武内さん宅の「嫁花」演舞を行った。18時に休憩ののち、18時40分から小久米公民館で矢谷さん宅の「嫁花」演舞を行った。「嫁花」は本来は全てその当

17時20分には小久米公民館に移動し、



写真14 地藏堂での二頭立て演舞（筆者撮影）

人の家で獅子舞を行うのだが、「嫁花」の当人の家庭の事情により公民館で演舞を行うこともある。休憩の際には公民館内でオードブルなどを食べるが、その間にも太鼓の音は途絶えさせてはいけないと交代で太鼓を叩いていた。



写真15 公民館での嫁花の様子（筆者撮影）



写真16 休憩の様子（筆者撮影）



写真17 区長宅での演舞（筆者撮影）



写真18 「よそぶり」の演舞（筆者撮影）

いたため、小久米の獅子舞に女子が参加しているのかと声をかけて下さった。その方は昔から獅子舞を見ていて、同級生の男子が獅子舞をしているのを見て羨ましかったとおっしゃった。女性も参加できるようになったんだね、となんとなく嬉しそうにされていた。

保存会顧問の小川明(79)さんによると、小久米の獅子舞には特徴が二つある。一つ目は、

19時20分には公民館から移動し、区長(大館義孝さん)宅で演舞を行った。20時から川口さん宅で「嫁花」の演舞を行った。この二つの家での獅子舞の演舞は特に盛り上がり見物している人も多く、演舞にも時間をかけていた。獅子舞のカヤの中にいつもは中学生が入っているが、盛り上がると30代ぐらいの男性たちが代わって演舞をしたりと迫力があつた。獅子頭と後ろのカヤの身長差もあるが、大人のやる演舞は獅子の体の動きで表す表現の幅が広く感じられた。

21時には入宮を行う。入宮とは獅子舞の一番最後のことで、本来はお宮に当たる神社で行うが、小久米神社が急勾配な階段の上にあるため、青年団長宅や公民館で行うことが多い。今回は公民館で行ったが、公民館で行うのは三回目だそう。小久米公民館にて「外花」および「一般花」に対する舞いをまとめて披露、演舞を行う。これらの花はその土地にある企業など、住民ではない方からの花(祝儀)を指す。

21時50分から最終演舞である「よそぶり」を披露した。小久米の「よそぶり」とは獅子舞全行程の最後でのみ行う特別な演舞である。獅子と天狗の睨み合いがあり、最後には獅子が天狗をのせて公民館の中に入っていき演舞は終わった。22時半には全行程が終了した。

小久米で育ち嫁に出た方が獅子舞を見に来ていた。その方は私が法被を着て

獅子「二頭立て」、すなわちひとつの演目で二頭の獅子が舞う点である。小久米の獅子はオスとメスの獅子とされており、「七五三」などの特別な演舞では二頭立てが行われる。二つ目の特徴は、「獅子殺し」という演目が他の地区とは少し異なっている点である。「獅子殺し」とは、祭りの最後に天狗が獅子を倒すという演目である。「獅子殺し」は、一説では元は氷見のものではなく、高岡から伝わってきたとも言われている。そのため、氷見市全域で行われているわけではない。「獅子殺し」は、獅子舞の中でも特に盛り上がる演目であり、観客の目を引く演舞である。小久米の場合、獅子を殺すのではなく、「ハンコロシ」を行っているようだ。「よそぶり」の演目の中に「ハンコロシ」の演舞が組み込まれている。獅子を倒すことはせず、来年もまたよろしく願いますという気持ちを込めて、「半殺し」で済ませるのだそうだ。いつからこの演目があったのか定かではないが、お話を伺った小川明さん（79）が現役だった頃にはすでにあっただろう。

3-3.保存会主体であることの困難

9月26日、獅子舞を終えた後に小久米獅子舞保存会顧問の小川明さん（79）、会長の小川久さん（69）に、2023年初めて保存会を結成し獅子舞を開催した感想を伺った。

青年団が主催の時と違い、幅広い年齢層で行うのが初めてで新鮮であり楽しかったという。青年団を卒業すると獅子舞はただ観るだけになってしまうため、40年以上前に退団された方々にとっては懐かしい獅子舞演舞の機会となったはずだ。人数に関しても青年団だけで行った際は20人ほどだったが、保存会で行なった際には30人を超えている。今回は喪中で参加できなかった方もいるため、来年にはもっと増えているだろう。ただ、今回の獅子舞では若者の参加は少なく、30歳以下の社会人が4人、中学生が3人であった。青年団で行うかといったアンケートを取った際には1人だけであったが、結局参加する際には増えていた理由として考えられるのは、青年団が主導でなければ、という思いからではないかという。自分たちで獅子舞の指揮を取りやるほどの熱意が若者にはないといえる。3年ほど獅子舞をやらない期間ができてしまったことで、楽しさを忘れてしまったのではないかと上の世代の方々は仰っていた。今回獅子舞の演舞を30代から50代の7、8名も行っており、獅子舞演舞の主導をしていたのは40代50代の方であった。演舞した方の最高齢は53歳であった。囃子方だと71歳、59歳の方が主に行っていた。

現在速川地区で獅子舞を行なっているのは日名田と小久米だけで日名田も青年団ではなく、同好会が母体になっている。獅子舞を存続することがどれだけ難しいかがわかる。これからの小久米の改善点として、若者の意欲をどう維持するかだと、会長たちに続いて保存会の役員となり精力的に参加していた小川徹さん（41）は仰っていた。現在保存会を引っ張っているのは60代以上だが、若者との価値観やそもそもの考えの違いは出てくる。昔とは違うとはよく言うが、昔のやり方では今の若者はついてこないと言う。保存会を作り幅広い年齢層になっても、幅広い年齢層の全員がほぼ同じ立場で獅子舞に同等に参加するのが理想である。そこで、小久米に婿入りしてきた方々の参加についても言及していた。その方々は獅

子舞の経験がなく、今回も獅子舞の演舞には参加せず、交通整理などに当たっていた。そういった方々にも獅子舞をすることの楽しさを知ってほしい、知ることによって参加率も上がり、継承も行うことができる。若者が少ないこの地域で獅子舞を存続させていくには、全員が獅子舞に触れ、獅子舞を行うことに全員が前向きになれるような雰囲気作りが大切なかもしれない。

4.他の地域の獅子舞運営母体

氷見市では各地で獅子舞が行われているが、それぞれの地域で運営母体が異なる。基本の運営母体は「青年団」だが、少子高齢化による若者の減少からか地域に青年団所属の若者が少ない場合がある。そういった際に、青年団以外の団体が獅子舞を主導することがある。私が見た、または話を伺った地域の獅子舞の運営母体を挙げていく。

4-1.柳田上の獅子舞：獅子方連中が母体となり、春と秋の両方行う地域



図3 氷見市柳田の地図（国土地理院より参照）

氷見市柳田は柳田上と柳田下に分かれている。柳田上は柳田神社を、柳田下は手向神社をお宮（氏神神社）として獅子舞を行っている。柳田上の獅子舞を主に主導してきた、辻賢太郎さん（46）と弓部貴弘さん（50）に話を伺った。このお二人は現役ではなく、実際に獅子舞を行う青年団の指導をする立場にある。体力的な面から天狗を行うこと

はないが、たまに衣装を着ずに飛び入り参加することはあるそうだ。柳田上では元々青年団が主体だったが、青年団だけで行えない年が何年かあり、青年団よりも幅広い年齢層で行うようになったため、「柳田上獅子方連中」が運営母体となっている。

柳田上は春の獅子舞は4月の第2土曜日に行うため2023年は4月15日、秋の獅子舞は9月の第3土曜日に行うため2023年は9月16日に行った。春の獅子舞は獅子方連中全員で行い、コロナ明けの2023年は団長宅や嫁花を打ったお宅だけであったが、本来は全戸回っている。他方で、秋の獅子舞は柳田神社の境内で全演目を行い、青年団よりも下の世代である小中高生が主に行っている。氷見市の獅子舞は大体の地域で春と秋のどちらかで獅子舞を行っているが、両方行っている地域は数少ない。そうした中で柳田上では3年程前から小中高生だけで獅子舞を秋に行っている。弓部さんが小学3年生頃までであったものを約40年

ぶりに復活させたそうだ。現在柳田上は人口が多く、春だけの獅子舞では全戸回りきれなくなっているため春と秋に分けて回すのはどうか、という案も出ているという。

柳田上獅子方連中の年齢層は40～50代が一番多く、次にその方達の息子世代に当たる10代が多い。その代わり、青年団に当てはまる18歳から27歳の人数が少ない状況である。獅子舞をやる人がいない、という世代が何年か毎に現れるのだと弓部さんは語っていた。柳田上では「獅子殺し」は行っておらず、昔は7、8個ほどしか演目がなかったが、弓部さんなどの世代の人達が主導となり、他の地域の獅子舞を見て模倣したりすることで演目を4、5個増やしたそうだ。柳田上では獅子方の年齢層が広いことから若者の意見を取り入れ、年長者の意見や主張を押し付けることはせず、獅子舞をしっかりと継続していくことに重点を置いている。獅子舞は地域コミュニティの原点だと強く仰っており、上下関係や社会のことを学ぶ場であるとし、獅子舞で全戸回ることによって住民との関係も築いているという。

4-2.堀田の獅子舞：青年団主導の地域

氷見市堀田は氷見市の中でも高岡市に近い南部地域にある。堀田は石武雄神社（いわたけ



図4 氷見市堀田の地図（国土地理院より参照）

おじんじゃ）をお宮（氏神神社）として獅子舞を行っている。堀田は9月の第4土曜日に行うため、2023年は9月23日に行った。青年団主導で獅子舞を行っており、青年団ならではの若々しく、活気のある演舞だった。演舞中は爆竹や花火が鳴り続け、夜は絶えることなく焚き火が焚かれていた。獅子、天狗の他に、黒

髪と金髪が混ざったズッカブソ、全頭金髪のズッカブソ（写真1）、ひよっこ（写真2）が演舞を行っている。全頭金髪のズッカブソは木の棒を振り回すが、この演舞はオリジナルだという。堀田では囃子方を男性と女性で行っており、女性は堅笛、男性は太鼓と鉦を担当していたが、男性が堅笛を吹くこともあった。



写真19 全頭金髪のズッカブソ（筆者撮影）



写真20 ひよっこ（筆者撮影）

堀田に住む山岸伸雄さん（69）にお話を伺った。堀田は人口が多く、山岸さんが現役の時から獅子舞で全戸回るのに苦労していたそうだ。朝9時から翌日の夕方まで不眠で行った。その際、巡行途中の家を「宿」とし、休憩をとりながら行っていた。現在は公民館を宿としている。昔は公民館がなく、獅子舞を行う際は新築の家からはじめ、新築の家で終わったそうだ。2023年の堀田の獅子舞はコロナ明けのため団長宅、嫁花や一般花を打ったお宅のみで行い、朝9時に始まり、20時過ぎに終えた。堀田の獅子舞は爆竹や新しい演舞などが目立つが、堀田では昔から主導である青年団に全てを任せるため、伝統という伝統はないかもしれないという。堀田の演目はその年主導をとる青年団次第で、演目も年によって変化することはあるそうだ。山岸さんは堀田の獅子舞は娯楽であり、大したものでもないとおっしゃるが、青年団が母体である地域は現在少なく、いわゆる伝統的な獅子舞に近い形で実は継続していると言えるのかもしれない。

4-3.人口の比較、氷見市の高齢化

今挙げた二つの地域と、先の小久米の人口を比較する（表1）。

表1 行政区別人口（氷見市HP「行政区別人口世帯数統計表」）

	柳田 (人口)	柳田 (世帯数)	堀田 (人口)	堀田 (世帯数)	小久米 (人口)	小久米 (世帯数)
2011年(4月)	3,934	1,276	616	179	214	63
2015年(11月)	3,946	1,352	588	191	217	80
2019年(11月)	3,825	1,380	542	179	191	65
2023年(11月)	3,724	1,458	512	187	167	62

柳田は獅子舞は上と下に別れているが、行政区分ではまとめて柳田で出されている。そのため、約半分の人口と考えていただきたい。柳田上、堀田、小久米ではそもそもの人口に大きな違いがあることがわかる。今から5、60年ほど前、私が主にお話を伺った現在60代の方々が現役だった頃は、氷見市のどこの地域でも青年団が主導で獅子舞が行なわれていた。

柳田上は人口が多いため、春の通常の獅子舞と秋は継承を目的とした獅子舞の両方ができる。しかし、柳田上は青年団では開催できず獅子方連中といった形をとっている。人口が多くいても青年団に当たる人達の実際の参加率が低い世代があるのだとみられる。堀田は人口だけ見るとそこまで多いわけではなく余裕があるようには見えないが、実際の参加率

は高い。この若者の参加率の違いは、地域が都市部かどうかに関係するのかもしれない。柳田上は国道 415 号線沿いに位置しており、氷見市の中では都会であるといえる。それに比べて堀田は山中にある。都市部から離れ、山の方であると人と人の繋がりが都市部よりも強く、参加するのが半ば当然のような状況があるのか、参加率が高く青年団で行えているのかもしれない。小久米は人口も少なく、また若者の参加率も低い。氷見市の他の地域ではそういった状況になり、獅子舞を断念した地域もあるため、保存会を結成し獅子舞を開催できたのは小久米の住民の方々の努力だといえる。しかし、これから保存会を下の世代に引き継いでいかなければならない。

氷見市の高齢化率を調べると、1980 年は 12.4%、2000 年は 24.7%、2010 年は 30.7%、2020 年は 38.8%、予測として 2040 年には 44.1%になるとされている（氷見市 HP 「氷見市の概要」参照）。

今後どこの地域でも高齢化は進み、これから青年団主導の地域はさらに減っていくだろう。そこで新しく主導となる団体を新しく作り、続けるという方法をとる。団体を新しく作る場合にはその地域にあった団体にすること、そして参加率を高めるため幅広い世代の意見を聞きながらやっていくことが重要といえる。

堀田の獅子舞は青年団に全てを任せ、時代に合った獅子舞を開催しているように見えた。若者が毎年の獅子舞を楽しみにする、獅子舞という祭りを純粋に楽しんでいる地域に思う。

柳田上では若者を育てることに重点を置き、獅子舞を開催することで地域の活性化を目指していた。また指揮を取る年長の方々は、これから入れ替わりずっと居続けるわけではない、という。小久米も保存会のメンバーはずっと一緒というわけではなく、下の世代に世代交代をしないといけない。青年団に戻すのが理想だが、若者は減るばかりで青年団の復活は難しいだろう。それでも少ないけれども小久米に残る若者をどれだけ獅子舞に参加してもらうかが保存会の課題になる。継承団体を堅苦しくし、決まりきった形をとってしまうとその形に囚われ、獅子舞を楽しむ、ということが難しくなってしまうと思われる。

おわりに

今回小久米、柳田上、堀田の 3 つの地域を取り上げたが、これらの地域だけでなくどこの地域も獅子舞の継承は問題となっているだろう。氷見市だけでなく富山県全体の問題である少子高齢化や若者の参加率の低さは、どこの地域も一様の解決方法ではないと感じた。若者が参加しないのは、その地域の土地柄や運営方法が大きく関係しているのではないかと考える。各地域にあった運営方法とは難しく、若者が減っていく中で住民が一丸となることが何より重要であるのかもしれない。

しかし、獅子舞と聞くと堅苦しく感じていた私が関係者の意見を聞き驚いたのが、昔のしきたりや形に囚われない姿だった。かくあるべきという獅子舞ではなく、ただ獅子舞を楽しみたいという一心から協力し合い獅子舞を開催しているのに心を打たれた。実際に氷見の

獅子舞を見て、皆さんの獅子舞に対する思いがただの祭りという認識ではなく、昔から続くこの芸能を心から大事に思っており、そこから獅子舞を通して地域の方々との仲が深まり、一つの地区の結束が強くなっているのだろうと感じた。祭りが形式化され、本来の形を失っていく現代で、地区毎というあまりにも小さな単位で市全体で行われる氷見獅子は、日本の祭礼文化が今でも残る珍しいものを感じた。柳田上の方は地域コミュニティの原点だと強く仰っていたが、地域を活性化させる1つの手段だと言えるだろう。

謝辞

今回の研究に際し、小久米獅子舞保存会の皆様、「Bed&Kitchen SORAIRO」の澤田典久様、柳田上獅子方連中の辻賢太郎様、弓部貴弘様、堀田の方々に大変お世話になりました。ご協力いただいた全ての方々に心よりお礼申し上げます。度重なる訪問や突然の訪問にも快く応じていただいただけでなく、優しくあたたかく迎え入れていただき、この報告書を執筆することができました。本当にありがとうございました。

参考文献

小堺卓治「氷見の獅子舞」『博物館年報第18号』、氷見市立博物館、2000年。
速川村史編集委員会『速川村史』、速川村史刊行委員会、1987年3月11日。

参考にしたウェブサイト

氷見市HP「2014年版氷見市要覧 資料編」

< <https://www.city.himi.toyama.jp/material/files/group/2/26siryouhen.pdf> > (最終閲覧日 2024年1月12日)

富山県立図書館HP「古絵図・貴重書紹介」

< <http://www.lib.pref.toyama.jp/gallery/collection/intro.aspx?isnmngcd=1:1182> > (最終閲覧日 2024年1月12日)

第7章 幸せを願う女性たちの祭り—まるまげ祭り—

籠橋 蒔乃

はじめに

私の中で氷見のイメージといえば、ブリ、藤子不二雄^①、新しくできたグランピング施設…。伝統的な行事や祭りがあるというイメージは、恥ずかしながら全然なかった。しかし氷見に通う中で、祇園祭り⁵²やごんごん祭り⁵³、唐島祭⁵⁴など、特徴的な行事が多くあることを知った。

私がかねてより伝統行事や祭りが現在の形になるまでの変遷に関心があったため、数ある氷見の祭りのうち一つをピックアップして調査することにした。せっかくならまだ誰も調べていない祭りを調べてみたい。そんな思いから氷見の祭りを検索していると、色鮮やかな写真が目飛び込んできた。髪を丸髷に結び、紫・水色・桃色の着物を身にまとった女性たち。「まるまげ祭り」の写真であった。もともと氷見の芸妓たちが幸せな結婚を願って参拝していたことに由来する祭りだと説明がある。氷見にかつて遊郭が存在していたことや、芸妓たちの願掛けに興味を持ち、まるまげ祭りについて文献を探してみた。しかし他の祭りに比べてあまりにも情報が少ない。ますます気になった。

そこでまるまげ祭りを調査することに決め、令和4年(2022)の冬から少しずつまるまげ祭りに関する調査を進めた。本章では、まるまげ祭りの歴史や関わる方々の思い、まるまげ祭りのこれからについて、聞き取り調査をもとに記述及び考察を行う。

1.まるまげ祭りの概要

1-1.まるまげ祭りとは

まるまげ祭りとは、氷見市の中心部で毎年4月17日に行われる祭りである。氷見市中心

⁵² 毎年7月13日、14日に氷見市中心部で行われる、悪病退散を祈願する祭り。京都の祇園祭に由来する。(きときとひみどっとこむより)

⁵³ 朝日本町にある上日寺・朝日観音の祭礼。毎年4月17日、18日に行われる。雨ごい行法が成就したことを、上日寺の鐘を打ち鳴らして祝ったのが由来とされている。(きときとひみどっとこむより)

⁵⁴ 氷見海上の小島の祠堂に祀られている弁天様に、海上安全と大漁を祈願するため行われる祭り。毎年5月3日に行われる。(きときとひみどっとこむより)

部（旧氷見町）は、かつて湊川を境に北六町⁵⁵と南十町⁵⁶にわかれていた（第6節の図4参照）。北六町で古くから行われていた祭りである観音大祭に、芸妓の巡行や千手寺参詣が付随して行われる祭りが、現在のまるまげ祭りである。

観音大祭では毎年北六町から祭礼当番町が決められ、千手観音像が休憩するとされる「御旅所（おたびじょ）」が設営される。観音像は一晩御旅所で休み、当日「本尊泰安御輿」に乗り町内を巡行し、千手寺へと帰る。なお北六町とは旧町の区分であり、現在の行政区分では使用されていないが、今も北六町が毎年順番に総代を務めている。

『氷見市史』によると、まるまげ祭りとは「江戸時代に芸者たちが、年に一度公休日を取り、身請けされて、妻となる願いをこめて千手寺の観音にお参りしたのが、はじまりといわれる」祭りである。

まるまげ祭りの詳しい由来及び歴史については、第7節で述べる。

1-2.千手寺とは

観音大祭（まるまげ祭り）の主な舞台となるのが、巡行の終着点となっている千手寺である（図1）。

金橋山千手寺は弘法大師が伝えた密教を基とする真言宗（高野山）の寺であり、氷見市では北六町の信仰が篤い。白鳳元年（662）に開かれた、越中最古の寺であると伝えられている。もともとは雨晴にあり伏木の国分寺にゆかりがあったようだ。桃山時代に、現在の朝日山麓に移ったとされている⁵⁷。

本尊は千手観音菩薩である。千手観音は人との結びつきが一番深く、仏の中でも最も多く



図1 千手寺の位置（「国土地理院」より作成）



写真1 千手寺（筆者撮影）

⁵⁵ 湊町（現比美町・丸の内）、本川町（現丸の内・幸町）、中町（現比美町・丸の内）、北新町（現中央町・比美町）・今町（現中央町・比美町）・濱町（現比美町）

⁵⁶ 南上町（現本町・南大町）、南中町（現本町）、南下町（現本町・南大町）、御座町（現本町・南大町）、下伊勢町（現伊勢大町）、上伊勢町（現伊勢大町）、河原町（現南大町）、仕切町（現地蔵町・南大町）、地蔵新町（現地蔵町・伊勢大町）、高町（現伊勢大町・南大町・本町・地蔵町）

⁵⁷ 『北陸の古刹 千手寺』（千手寺発行のパンフレット）より

の功德⁵⁸を持つ。良縁成就の他にも延命、滅罪の利益があるとされている。千手観音の「千」は無限という意味であり、その大いなる慈悲で人々の苦しみを救いとるために無数の手が備わっている。

千手寺には金比羅堂もあり、氷見は漁師町であるため、古くから金比羅大権現⁵⁹への参拝が行われている。

「特別寄稿・奇祭まるまげ祭⁶⁰」によると、千手寺は遊女⁶¹の信仰が篤い寺である。そのため、大正10年(1923)に遊女たちが観音堂前の手洗屋⁶²を寄進した。屋根裏の裏板には、多数の寄進した遊女の名が書いてある。

2.令和5年のまるまげ祭り

まるまげ祭りは、令和4年(2022)まで新型コロナウイルスの影響で巡行が中止され、関係者のみで、巡行を除いたすべての過程が行われた。令和5年(2023)は4年ぶりに参加者を募集して町内巡行が行われた。

令和5年のまるまげ祭りの募集要項は以下の通りであった(表1)。

表1 まるまげ祭りの募集要項

参加資格	18歳以上(高校生を除く)※一度参加した方は応募不可
募集定員	30名(応募多数の場合は抽選)
参加費	5000円(着物代、かつら代、着付代含む)

(きときとひみどっとこむ 令和5年まるまげ祭りを参考に作成)

使用する帯や小物は参加者が持参する。有料になるが貸し出しも行っている。

参加が決まると、3月下旬に美容室でかつら合わせを行う。その後4月上旬に千手寺にて事前説明会が行われる。

令和5年のまるまげ祭りの流れ及び巡行経路は以下の通りである(表2)(図2)。今年はまだコロナが明けたばかりということもあり、巡行距離は例年より短くなっている。巡行距

⁵⁸ 神仏のめぐみ(『角川国語辞典』より)

⁵⁹ 仏教の守護神の1つ。海上安全の神とされる。

⁶⁰ 『仕切自治会々報第三号 特集見直そう氷見』におけるまるまげ祭りに関する文章。筆者は橋本芳雄さん。

⁶¹ 「特別寄稿・奇祭まるまげ祭」における表記に則って「遊女」と記載しているが、芸娼妓と同義である。

⁶² 手水舎のこと。神社の境内にある、手や口を清めるための小さな施設。

離はまるまげさん⁶³は約 1.2 km、観音大祭の巡行を含めた全体は約 2.2 kmであった。

令和 5 年は、コロナ明けであったため、募集定員は例年の半数の 30 名であった。観光協会によると、令和 5 年は応募者数、参加者数ともに 27 名で、参加者の平均年齢は 26.7 歳であった。

表 2 まるまげ祭りの流れ

9:00	着付け開始
13:30	プリンス館集合
14:00	まるまげさん巡行開始
14:30 頃	千手寺到着 お勤め、護摩祈祷などを行う
17:00	終了



観音様の巡行（総代となった町の住民が観音様の御輿を担ぎ、稚児や太鼓台を伴って巡行する）は 13:00 に千手寺を出発し、プリンス館へ向かって練り歩く。（青色矢印）
まるまげさんはプリンス館で合流して巡行。（赤色矢印）

図 2 令和 5 年まるまげ祭りの巡行図

きときとひみどっとこむ 当日の巡行経路を参考に作成（「国土地理院」より作成）

<https://www.kitokitohimi.com/uploaded/attachment/1867.pdf>

⁶³ 現在一般公募によってまるまげ祭りに参加している女性のこと。ここでは、千手寺住職の松岡さんの呼び方に即してまるまげさんと記述する。

表3 参加者の居住地の内訳

氷見市内	8名	
県内	13名	高岡市、射水市、富山市、滑川市、南砺市
県外	6名	静岡県、神奈川県、東京都、岐阜県、愛知県

表3を見ると、遠方からの参加者が複数いることがわかる。ただ、今回インタビューをした県外出身者名の中には、氷見に縁もゆかりもない人はいなかった。実家が氷見市であったり、身内が氷見市出身であったり、何かしら氷見に縁がある人であった。

2-1.当日の流れ

2-1-1.着付け開始

9:00 からみやざわ美容院とビューティ・サロン比美の2つの美容院にわかれて、ヘアセット、着付けを開始する。

美容院の前では、カメラを持った人が多数待機していた。中にはアマチュアの方もおり、着付けの終わったまるまげさんたちの姿をカメラに収めていた。

美容院の雰囲気は明るく、和気あいあいとしていた。友達同士の参加者に加え、事前の説明会で仲良くなったという方もいた。

着付けは12:00頃には一段落する。着付け終了から13:30の集合までは自由時間となっている。

2-1-2.プリンス館集合



写真2 散花を撒く様子
(筆者撮影)

まるまげさんの巡行は観音大祭の総代を担当する町から出発するため、毎年出発点（御旅所）が変わる。しかし今年は御旅所が設置されなかったため、プリンス館からの出発となった。

プリンス館に集合すると、まずはまるまげさんの記念撮影を行う。その後太鼓台やお稚児さんを伴った観音様の巡行と合流する。

以下のまるまげ祭りで行われる儀の説明は、千手寺住職の松岡義浩さんの解釈に基づくものである。

僧侶が散花（さんげ）という御札をばら撒く（写真2）。これは、仏様とのご縁がありますよという意味がある。これもまた幸せのきっかけであり、拾わずともその場で接することに意味がある。散花は観音様の化身であり、心優しい人になりますよという願いが込められ

ている。なぜなら、心優しい人であれば一生を添い遂げたいと思ってもらえるからである。散花には、清浄（お清め）の意もある。

2-1-3.巡行

巡行は、身長順に並ぶ。始めは身長の高い人から順に並び、後に入れ替える。

巡行の際には、まるまげさんたちは蓮の花を持つ（写真3）。蓮の花は観音様の持ち物の一つであり、化仏⁶⁴（けぶつ）を開きいつまでも花の美しさのように清らかで、明るい人でありますようにとの思いがある。また、まるまげさんが持つ蓮の花はまだつぼみの状態であり、これにはこれから開運していくという意味がある。



写真3 蓮の花を持つまるまげさん
（筆者撮影）



写真4 巡行の様子（筆者撮影）

巡行には観音様も同行しており、みんなが幸せになる様子を見守っている。

なお、商店街では巡行が通ると家から住民の方が出てきて、見物していた。

2-1-4.千手寺到着

千手寺に無事到着したということは、みんなの人生も無事にまわっていくということである。

巡行の際に持っていた蓮の花は、功德水の入っ



写真5 花瓶に入った蓮の花
（筆者撮影）

⁶⁴ 人々を救済するために仏が別の姿で現れるその身。

た水瓶（すいびょう）に入れ、観音様にお返りする（写真 5）。功德水とは、病気を治したり願い事を叶えたりしてくれるありがたい水である。観音様に蓮の花をお返するということは、幸せな縁をいただき、幸せな人になったという意味を持つ。

その後まるまげさんたちは、お勤めを行う（写真 7、8）。お勤めは、一番観音様に近い状態である。まるまげさんたちはお香を粉にしたものを灰の中にくべる。そこから出る煙は、言わば観音様の食事のようなものである。こうしてまるまげさんたちは、観音様にお礼をしている。また、お勤めは昔の様子を再現しており、祭りの中で一番昔の様子が色濃く残っている部分である。写真 6 の左が灰で、右がお香を粉にしたものである。



写真 6 お香（筆者撮影）



写真 7、8 お勤めの様子（筆者撮影）

お勤め後、まるまげさんたちは洒水加持（しゃすいかじ）を受ける。まず、僧侶が錫杖（しゃくじょう）を振る。これは、周りの虫などがつかず、仏の力が移るように行う。その後、まるまげさんの頭 3 か所に水を振りかける。実際には、鐘の器に水を入れ、まるまげさんの頭 3 か所に触れている。なお、この水は、水に花が咲くほどきれいな水になる午前 2 時に酌まれたものである。これには清浄の意がある。

この間、外では柴燈⁶⁵（さいとう）護摩祈禱を行っている（写真 9）。柴燈護摩祈禱の本尊は不動明王であり、不動明王は仏の中で一番力があるとされている。護摩祈禱とは密教の秘法である。

⁶⁵ “柴”という字である理由は、山にある木や竹を使って焚くからである。昔、修験者が山に籠って焚いていた時も、木や竹を使っていた。

まるまげさんたちは洒水加持の後、外に出て護摩祈祷に参加する。まるまげさんたちは结界の中に入り、願いが天に届くようにと、願い事を書いた「そえ護摩木」を火の中に投げ込む（写真10）。この火は不動明王を表しており、そえ護摩木を火の中に投げ込むことは不動明王の口に



写真9 護摩祈祷の様子
(筆者撮影)



写真10 そえ護摩木を投げ込んだ火
(筆者撮影)

願い事を投じることを意味する。火を焚いている木の枠は段木という。火が高ければ高いほど願いが届くため、町ではなく、より高いところに位置する千手寺で行う。

柴燈護摩祈祷ではこのように、火中に供物(そえ護摩木)を投げ入れて御本尊(不動明王)を供養し、そのご加護を願っている。

そえ護摩木を投げ込んだ後は、まるまげさんは结界の外に出る。まるまげさんの参加はここまでである。

その後は自由行動になっており、写真を撮る人や人力車に乗る人など様々であった。17:00までに美容院で着替えを済ませ、終了となる。

3.まるまげ祭りの休憩所

令和5年のまるまげ祭りでは、まるまげさんのために休憩所が設けられた。光禅寺近くの元遊郭屋敷跡「無盡蔵(むじんぞう)」である。無盡蔵は、氷見市に拠点を持つ貸切バス・タクシー会社である平和交通が所有している。詳しくは後述する。

この日平和交通は、タクシーや平和交通が所有する人力車でまるまげさんたちを運んだ。タクシーや人力車は、主に美容院、休憩所、スタート地点であるプリンス館の間を走った。これは令和5年度から始められた新しい試みである。まるまげ祭りに少しでも参加したいという思いから、取締役社長である山田真功さんが観光協会に許可を取ったそうだ。

まるまげ祭り当日、正午過ぎに伺った際には、午前中はまるまげさん1組を人力車に乗せたと仰っていた。午後は何度か人力車に乗るまるまげさんを見かけた。また、人力車を使用して写真撮影も行っており、思い出作りに貢献しているようだ。

4.無盡蔵について

昭和 13 年（1938）の氷見大火によって免許地⁶⁶一帯が焼失した。現在無盡蔵がある場所には能登の呉服問屋が移築され、大瀆楼⁶⁷という名で再建された。それを昭和 36 年（1961）に平和交通が買収し、平成 12 年（2000）に本社を柳田に移すまで使用していた。令和 2 年（2020）1 月から 1 年間かけてリニューアルし、現在の姿となっている。

「無盡蔵」という名は、山田さんがリニューアル後につけた。書道家の山田さんの御父上書いた「無盡蔵」という作品が、偶然建物の玄関にぴったりとはまった。そこで、無盡蔵に「人と人の繋がりが尽きることがない」という意味を持たせ、建物の名前としたそうだ。

現在はレンタルスペースとしての貸し出しもしており、イベントや演奏会、会議などに使用することができる。



写真 11 無盡蔵と人力車（筆者撮影）

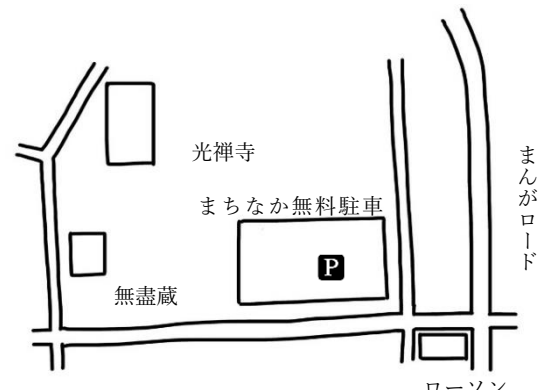


図 3 無盡蔵の位置

5.まるまげ祭りに携わる美容院

5-1.みやざわ美容院

話をお聞きした宮澤昭子さんは 2 代目で、店を継いでから 60 年ほど経つ。30 年ほど前に、吉野美容院からまるまげ祭りの仕事を受け継いだ。吉野美容院は丸の内にある美容院で、現在も営業している。受け継いだ時期は正確にはわからないが、既に一般公募で参加者を集めている時であったという。吉野さんの家のお嫁さんが美容院を継いだが、お嫁さんは着物に関することがわからなかったため、宮澤さんが受け継ぐことになった。

かつらは美容院の自前であったが、この祭りは流行るとふんで、かつらに何百万も投資したそうだ。

⁶⁶ 第 6 節にて説明。

⁶⁷ 遊郭屋敷。

5-2. ビューティ・サロン比美

ビューティ・サロン比美は、昭和47年（1972）3月に開業した美容院である。オーナーの中尾房美さんによると、開業当時芸妓は2、30人いた。中尾さんは芸妓にかつらをかぶせる仕事をしていた。4、5年続けていたが、繁盛して忙しくなったためやめた。

それ以来芸妓に関わる仕事はしていなかったが、まるまげ祭りをテレビやラジオで宣伝し参加者を多く集めた平成8年（1996）に、また手伝ってほしいと頼まれ、再び関わるようになった。その年は10名ほどを担当した。参加者が多く集まったため着物やかつらが足りず、美容院で準備する必要があった。当時かつらはひとつ28万円ほどしたため、友人に借りた。借りたかつらは文金高島田⁶⁸（ぶんきんたかしまだ）であるため、丸髷に結い変え、終わったらまた文金高島田に戻さなければならず、これがとても大変だったそうだ。人件費などもあったため、始めて10年ほどは赤字だった。今はかつらを購入し、丸髷に結ったまま保管している。

中尾さんは平成8、9年頃に国民文化祭⁶⁹に参加した際、ビューティ・サロン比美の粋として割り当てられたステージで丸髷のショーを行い、まるまげ祭りの宣伝に貢献したそうだ。

6. 氷見の遊郭の歴史と生活

6-1. 氷見の遊郭の歴史

6-1-1. 江戸時代から大正時代

この節では氷見の遊郭の歴史について記述する。江戸時代から大正時代については、主に『氷見百年史』及び氷見市立博物館学芸員の大野究さんのお話からまとめる。

大野さんによると、江戸時代は氷見に遊郭が認められていなかった。『憲令要略』によると、嘉永5年（1852）に「飯盛り女の名目で売婦をおいたり、他所の芸者をおいたりしている者は罰する」というお達しが出されており、そのようなことをしている店として下伊勢町（現伊勢大町）をはじめとする南十町の店が多く挙げられている。また、一軒のみ北六町の本川町の店も挙げられている。このように江戸時代は、遊女の存在は非合法であったため、その存在が表には出ることにはなかった。

明治初期の氷見の遊郭について、『氷見百年史』には、伊勢玉神社（下伊勢町）通りに妓楼や飲み屋が軒を並べていたという記述がある。この遊郭は、伊勢玉神社から御座町を通り、南上町まで続いており、俗称、宮町（宮前）といわれた。当時の民謡に、「行こか

⁶⁸ 江戸時代は未婚女性の代表的な髪型であった。現在は花嫁が白無垢や色打ち掛けを着る際の代表的な日本髪スタイルとして残っている。

⁶⁹ 観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策と有機的に連携しつつ、地域の文化資源等の特色を生かした文化の祭典。（文化庁ホームページより <https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/chiiki/kokubunsai/>）

宮町（宮前）、もどろか出町⁷⁰、ここが思案の仕切町」というものがあった。

『富山県史』によると、明治9年（1876）9月8日、石川県権令⁷¹が「娼妓并娼妓貸座敷⁷²営業免許地」を定めた。免許地とは貸座敷の営業を認められた区域のことである。この時、氷見の下伊勢町が免許地となった。

明治15年（1882）、氷見市南部で発生した火事により下伊勢町の遊郭が全焼した。大野さんによると、これによって遊郭⁷³は北側の本川町へ移転した。

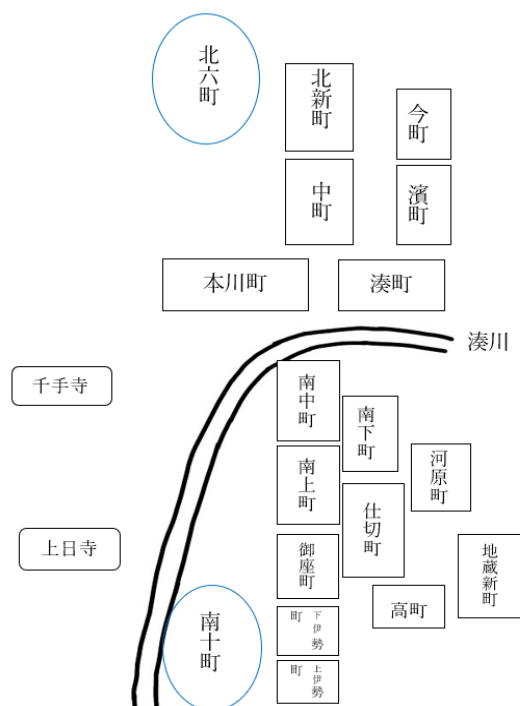


図4 旧町の区分

（氷見市史8資料編六絵図・地図

図19 氷見町絵図 文化13年 陸田家文書（部分）より作成）



図5 丸の内と伊勢大町の位置（現在）及び光禅寺、伊勢玉神社の位置（「国土地理院」より作成）

『氷見百年史』における記述によると、明治19年（1886）5月11日、富山県令⁷⁴国重正文が「貸座敷娼妓取締規則」を公布した。これによって貸座敷と娼妓の営業可能な場所が富

⁷⁰ 『氷見百年史』によると、南上町の裏の部分のこと。

⁷¹ このころ氷見は石川県であった（明治16年に富山県となる）。（『わたしたちの氷見市』より）

⁷² 貸座敷とは、遊女屋の公称。

⁷³ 貸座敷営業免許地と同義。

⁷⁴ 県令とは明治4年（1871）から19年（1886）まで置かれた県の長官のこと。知事の意。

山県内で13か所指定された。そのうちのひとつが氷見の本川町であった。指定された地は、本川町の裏通り、光禅寺の裏側にあった。

大野さんによると本川町に移転した遊郭は「有磯新地」と呼ばれた。また、『氷見百年史』によると、氷見では「免許地」がなまって「めんきょちょう」と言われた。

遊郭の移転について『氷見百年史』に、明治33年(1900)に遊郭が公認されたため(明治33年に内務省が「娼妓取締規則」を制定している)、光禅寺裏の沼沢地を埋め立て、そこに遊郭を移転したと書かれている。しかし、明治19年(1886)に本川町が免許地と認定されたことを踏まえると、その前に遊郭が移動していたとするのが妥当ではないかと考えられる。

『氷見百年史』によると、明治33年(1900)頃は貸座敷業者20軒、小料理屋15軒があり、芸妓11人、娼妓13人がいたようである。

大正12年(1923)、本川町にあった免許地が、入船町(現丸の内)という名で独立する。当時は貸座敷、料理店合わせて40戸、人口約500人の居住する地域であった。

6-1-2.昭和以降

元氷見市職員の矢方憲三(やのほけんそ)さんに、昭和の氷見の遊郭についてお話をお聞きした。矢方さんは、昭和24年(1949)から昭和50年(1975)まで氷見市内の料亭で育ち生活しておられ、その間の氷見の遊郭の様子を話していただいた。料亭では、客の出迎えや料理運び、芸妓との花札遊び、帳面の記載など、様々なことを行っていたそうだ。

矢方さんによると、氷見の遊郭は能登から来る商人の宿場代わりであった。また、矢方さんが料亭にいたころは富山市、金沢、七尾から来る人も宿場として利用していたようだ。

昭和13年(1938)に起こった氷見の大火によって、免許地一帯も消失した。

昭和31年(1956)に成立し、33年に施行された「売春防止法」により、赤線地帯⁷⁵が廃止となる。赤線廃止以前は娼妓も存在しており、氷見にも廓⁷⁶があったらしいと芸妓たちの間でも話題に上がっていたようである。赤線廃止によって娼妓は表向きにはいなくなり、芸妓のみになった。しかし実態は、売春行為をする者もいたそうだ。

元芸妓のたまきさん(後述)によると、昭和37年頃は芸妓が80名ほどいた。約20年後には、芸妓の減少を理由にまるまげ祭りの参加者は一般公募に切り替わっている。(第7節にて詳述)松岡さんによると芸妓が減少するスピードは速かった。

芸妓減少の背景には、芸妓の高齢化や仕事自体がなくなってしまったことが挙げられる。仕事がなくなった原因には不景気による客の減少がある。松岡さんによると「(客は)優雅なことはしていられなくなった」そうだ。仕立屋ラポージェの白石小百合さん(後述)は昭

⁷⁵ 昭和21年にGHQが公娼制度廃止を指令した後も、半ば公認で売春が行われていたエリア。

⁷⁶ たまきさんは、「娼妓が客と寝る家」の意で使用。

和 56 年（1981）頃から氷見では不漁が続いたと話し、これも衰退の原因だと推測する。不景気により漁師が優雅なことをしてられなくなったことが、客の大半が漁師であった氷見の遊郭に大きな打撃となったであろうことは容易に想像できる。また、たまきさんによると、衰退していくと若い芸妓たちは早々に出て行ってしまったそうで、これも芸妓の高齢化や減少を加速させたと考えられる。

6-2.昭和 27 年以降の氷見の芸妓の暮らし

氷見の芸妓の暮らしについて、昭和中期から後期に氷見で芸妓の仕事をしておられた、たまきさんとみほさんのおふたりにお話を伺った。

たまきさんは昭和 27 年頃（23、4 歳の頃）に大阪から氷見にやってきた。その後、昭和 27 年から 11 年間まるまげ祭りに参加した。置屋が廃業した後も料理屋から個人的に電話をもらっては仕事をする、というかたちで、芸妓の仕事は 60 代まで続けておられた。

みほさんは昭和 43 年頃に大阪から氷見にやってきて、16 歳から 25 歳までまるまげ祭りに参加された。

氷見は置屋⁷⁷、料理屋、宿泊施設ともに数が多く、県外からやってきた芸妓が多くいた。特に東北地方から来た人が多かったようである。一人が来ると友達を呼び寄せることも多く、ひとつの置屋に同じ県出身の人たちがかたまっていた。

芸妓になり 5 年経つと独り立ちができた。独り立ちして芸妓の集まる集合住宅に住む者も、それまでと同じように置屋で寝泊まりする者もいた。

芸妓は料理屋から置屋に電話がかかってくると出向く仕組みになっていた。午前 11 時に電話がかかってきて、それから 1 日中各料理屋をまわることもあったそうだ。そんな時は、置屋の女将さんがおにぎりを握って届けてくれた。

芸妓たちによる芸の稽古は、見番⁷⁸の二階で行われた。月に一週間程度の稽古期間に、踊り、三味線、太鼓などを習ったが、三味線の稽古に行く者は少なかった。おわら節の練習もあったそうだ。指導方法に不満が出たため半年ほどしか続かなかったが、ギターの稽古もあった。芸妓たちも見習いやベテランなど三段階に分かれており、一番下の見習いの芸妓たちは、朝一番早く稽古場に行き、掃除をしなくてはならなかった。また、ベテランの芸妓はあまり稽古に来なかった。

ただし、客の前で歌ったり踊ったりすることは段々と減っていった。「横に座って話してくれる方が楽しい」と言って、特に踊りを見たいという客も少なくなっていったためである。たまきさんが氷見にやってきた当初は、時給 120 円⁷⁹であった。金額はどんどん高くなって

⁷⁷ 芸者をやとっている家。料亭や茶屋といった芸者の仕事場に、芸者を差し向ける。

⁷⁸ 芸者の客席への出入りや芸者屋のとりしまりなどをする事務所。（『角川国語辞典』より）芸者屋は、置屋と同義。

⁷⁹ ものによって差はあるものの、昭和 30 年代の紙幣価値は今の 1/20 ほどであった。

いった。給料は、月末に女将さんが各料理屋から集金し、借金などを差し引いた金額を芸妓に渡していた。後に、芸妓が自分で各料理屋をまわり集金するようになったようである。

芸妓の生活は厳しく縛られてはおらず、たまきさんによると「好き放題やっていた」。氷見の芸妓は、漁師相手が多かったこともあり、おしとやかというよりは荒っぽい人が多かったそうだ。そのため田舎芸者と言われることもあった。好きな人の相手を別の芸妓がしているとやきもちを妬いてもめたり、好きな人の前でわざとほかの人と仲良くしたりすることもあった。客が目の前にも芸妓同士喧嘩をしたこともあったそうだ。

また、公休日はなかったが、そのかわり芸妓は休みたいときに休むことができた。

この時の芸妓の中には、結婚して芸妓をやめる人も多くいた。また、芸妓をやめて自分で店を出す人もいたそうだ。

最後に、矢方さんにお聞きした 10 時間花代について、記述する。10 時間花代には 2 つの考え方がある。1 つは、新花（芸妓になって初めての座敷対応）のご祝儀。2 つは、臍眞にしている芸妓の延長花代（22:00～6:00）であり、夕方から座敷で遊興後、芸妓を貸し切って朝まで一緒に過ごすことである。料金は、正確な数字はわからないが、1 時間約 220 円であったそうだ。矢方さんによると、吉原、島原、新地の遊郭の流れで、地方でも行われていたのではないかということである。氷見の免許地では、昭和 40 年代初め頃まで続いていたそうだ。

6-3.昭和 27 年頃から昭和 48 年頃のまるまげ祭りの話

たまきさんによると、置屋に芸妓を出してほしいと依頼が来て、芸妓たちはまるまげ祭りに参加していた。依頼をしていた団体については、資料が残っていないため正確にはわからないが、祭りを開催していた団体だと考えられる。ただ、開催していた団体についても正確なことはわからない。大野さんは観光協会⁸⁰や千手寺が関わっていたと推測する。

たまきさんがまるまげ祭りに参加した当初は、着物は自前であった。髪はかつらの人もいれば自髪を結う人もいた。髪が足りないときはびんつけ油⁸¹をつけるのだが、びんつけ油は普通のシャンプーでは取ることができず、洗濯石鹸でないと取れなかったそうである。自髪を結う場合は朝 6 時から準備をしなければならなかった。着物を着ると寝転ぶこともできないため、準備が終わってから巡行が始まるまでの時間が一番大変だったと、たまきさんは語っておられた。また、みほさんによると、まるまげ祭りで使う番傘は、毎年買っていたそうだ。

たまきさんによると実際の丸髷は結う位置がもう少し低く、髪飾りもついていない質素なものである。現在まるまげ祭りで使われるかつらは、実際よりもまるまげの結った位置が高く、飾りもついたより華やかなものになっている。

⁸⁰ 現在と違い、行政の機関ではなく任意団体。

⁸¹ 結った日本髪を固めるために使う固練りの油。

7.まるまげ祭りの歴史

まるまげ祭りの由来については、江戸時代を起源とする、という記述が多くある。多くの新聞は、まるまげ祭りの起源を江戸時代と紹介している。例えば平成6年の北日本新聞には「江戸時代、幸せな結婚を願った芸者衆が年に一度、人妻のシンボルである丸まげを結び千手寺に祈願したのが始まりといわれる。」と記述がある（「丸まげにも国際色」,北日本新聞,平成6年4月18日付）。しかし先述した通り、遊郭が千手寺の観音様を信仰する北六町に移ったのは明治19年（1886）である。そのため、少なくとも芸妓が千手寺に参拝するという形ができたのは明治19年（1886）以降でないといふと辻褃が合わない、というのが大野さんと松岡さんの見解である。

ここからは主に千手寺住職の松岡さんに伺ったお話をもとに記述する。

千手寺への参拝が「祭り」の形になるずっと前から、芸妓たちは千手寺に参拝していた。その頃は丸髷に結うことはせず、仕事の合間に個々にお参りに行き、それぞれ様々なことを願っていた。なかには、縁を切りたい客との縁切りも願われた。はじめはこっそりと参拝を行っていたが、普通の人よりも良い着物を身に着けていたため、なかなかそうはいかなかったようである。そのうち置屋の女将さんに許しを受けて、複数人で行ったり、お客と参拝したりするようになった。公休日は何をしても自由だったため、御最上にしてくれる客と遊び、一緒に千手寺に参ることもあった。着物を買って貰った客に着物姿を見せたいという気持ちもあったはずだと、松岡さんは推測する。

芸妓の公休日が4月17日になったのは、戦前である。身請け⁸²に限らず健康や繁盛など、観音様のご縁日にお参りをすればより大きな効果があるのではないかと、17日が公休日となった。これによって芸妓たちは堂々とお参りに行けるようになった。

芸妓による千手寺への参拝が、「祭り」の形になったのは、昭和34年（1959）4月10日である。この年、「復活！第一回まるまげ祭り」が開催された。松岡さんによると、「復活」とあるが、これまで「祭り」として行われていたわけではない。観音大祭の一部として芸妓の巡行を行う現在のまるまげ祭りの形が出来上がったのは、この時である。当時の新聞によると、昭和34年（1959）のまるまげ祭りは、丸マゲ祭り保存会⁸³と北日本新聞社の共催であった。能や狂言、おわら踊り、のど自慢、俳句大会なども開催された（「お練りコースなどが決る 氷見の復活丸マゲまつり」,北日本新聞,昭和34年4月7日付）。この年は当時の皇太子御成婚の年であり、この結婚にあやかりたいという気運が高まっていた。松岡さんに

⁸² 芸者・遊女などの身のしろ金をはらって、その商売から身を引かすこと。（『角川国語辞典』より）

⁸³ 詳細は不明だが、大野さんによると丸マゲ祭り保存会の中心となっていたのは氷見芸妓組合であった。氷見芸妓組合については、こちらも詳細は不明だが芸者衆を斡旋する組織ではないかということである。

よると、これが人々の気持ちに火をつけ、「祭り」開催に至ったそうだ⁸⁴。前述したように芸妓たちは様々なことを願っていたが、「祭り」として行われるにあたって、結婚して幸せになりたいという願いだけがクローズアップされるようになった。松岡さんのお話では、既婚女性の象徴である丸髷を結うようになったのもこのときからである。

ただ、丸髷に結うようになった頃について、「特別寄稿・奇祭まるまげ祭」には異なる記述がある。これによると、遊郭があった本川町のお宮愛宕神社の祭日と千手寺の観音大祭の日が5月17日（旧暦）で重なることから、5月17日（旧暦）が公休日になった。いつのことかは書かれていないが、本川町と記していることから、本川町が入船町として独立する大正12年（1923）以前のことだと推測される。その公休日に、芸妓たちは丸髷に結って、三三五五に愛宕神社に参詣し、ついでに千手寺に参詣した。その後、昭和34年に一斉に参詣が行われるようになった。要するに、この記述によれば、芸妓たちが千手寺参拝時に丸髷に結うようになったのは昭和34年より前のことである。

愛宕神社と芸妓の関係について松岡さんに伺ったところ、芸妓と愛宕神社の関係は薄く、芸妓が愛宕神社に参詣したとは考えにくいとのことであった。

松岡さんによると、昭和40年（1965）から45年（1970）の間は、まるまげ祭りは4月ではなく5月に行われていた。理由は、気候的にやりやすく、また芸妓にとって5月は4月ほど忙しくないためである。4月は漁が終わり一段落ついた漁師たちが遊ぶため、芸妓の仕事が一番忙しくなる時である。芸妓が忙しくて参加できないとなると意味がないため、5月開催にしていた。しかし、やはりごんごん祭り⁸⁵とまったく別々に開催するのは大変なため、同じ時にしようという意見が多く出た。その結果、4月開催に戻った。

以下は、当時の新聞記事からまとめる。

北日本新聞によると昭和52年（1977）は「丸まげ撮影コンテスト」が開かれ、アマチュアカメラマンが腕を競った。この年は、芸妓の巡行について記載がない。（「力自慢」が腕きそう」,北日本新聞,昭和52年4月18日付）また、昭和53年（1978）の新聞記事には、一昨年までは芸妓の巡行があったが、53年は芸妓の巡行がなく15人程度が千手寺の階段を上り参拝したのみであったと記載されている。（「芸者衆の町練り中止」,北日本新聞,昭和53年4月18日付）

以上から、昭和52年は芸妓の巡行は行われず、撮影コンテストのみが開催されたと考えられる。

昭和58年（1983）のまるまげ祭りについては、新聞にまるまげ祭りに関する記事がない。さらに、翌59年（1984）の新聞記事にまるまげ祭りが復活したという記述があることから、

⁸⁴ 「復活！第一回まるまげ祭り」が開催された昭和34年4月10日は、当時の皇太子殿下の御成婚当日であった。

⁸⁵ ごんごん祭りは4月17日・18日に開催されるため、まるまげ祭りが4月17日開催であれば祭礼の日が重なる。

昭和 58 年は芸妓の巡行がなかったと考えられる。「芸者衆があでやかに」,北日本新聞,昭和 59 年 4 月 18 日付)

元芸妓のたまきさん(後述)によると、一般公募の前にコンパニオン⁸⁶が 3 人参加した年が 1 度だけあった。これについては正確な年がわからないとのことである。

昭和 60 年(1985)は、本物の芸妓に代わって、ミスひみまつりの女性 3 人が参加した(「あでやかさ 桜と競う 丸まげ ミスひみまつりも出演」,北日本新聞,昭和 60 年 4 月 18 日付)。

一般公募が始まった年について、観光協会のホームページにおけるまるまげ祭りの説明では、昭和 62 年(1987)と記載されている。しかし昭和 61 年(1986)の新聞記事に、一般公募の 5 人が参加したという記述がある(「思い出にあで姿 一般女性 5 人が“代役”」,北日本新聞,昭和 61 年 4 月 18 日付)。どちらが正しいとは断定できない。昭和 61 年の一般公募は観光協会によるものでなかった可能性も考えられる。どちらにしても、今日まで続くまるまげ祭り参加者の一般公募を始めたのは、当時任意団体であった氷見市観光協会である。まるまげ祭りの復活の背景には、町の住民の、町が祭りでにぎやかになるようにという願いもあったようだ。

以上から、まるまげ祭りの完全な中止は昭和 58 年(1983)だけであったようである。一般公募が始まった当初参加者は、18 歳から 25 歳までの年齢制限があった。

以下、当時の新聞記事からまとめる。

公募開始直後から平成 2 年までは、参加者は 5 人であった。昭和 63 年(1988)の新聞記事によると「五人が、桜花の柄模様にムラサキ地のそろいの和服姿で、あでやかな丸まげをゆって参加した。」(「芸者姿もあでやかに」,北日本新聞,昭和 63 年 4 月 18 日付)。

平成 3 年(1991)は「市内の企業の女性に参加を呼び掛け、手に持つ蛇の目傘に、企業名を入れて PR 出来ることにし」ており、参加者は 12 人に増えている(「“幸せ”が練り歩く」,読売新聞,平成 3 年 4 月 18 日付)。それから平成 7 年(1995)までは参加者は 20 人前後である。この 20 人には中国の技術研修生や市国際交流員、企業から参加した人なども含まれ、一般公募のみで 20 人集めることは難しかったようだ。

平成 8 年(1996)は応募者が急増し、30 人が参加した。そこで平成 9 年(1997)は公募する人数を 40 人に増やした。参加者は 43 人で、公募開始後最多となった(「まるまげ嬢“春らんまん”」,北陸中日新聞,平成 9 年 4 月 18 日付)。この参加者急増の背景には、宣伝の効果がある。ビューティ・サロン比美の中尾さんによると、平成 8 年頃「青春の思い出作りにどうですか」という謳い文句で、ラジオ、テレビ、新聞で宣伝を行った。その結果、一気に参加者が集まった。平成 9 年に北陸中日新聞が行ったインタビューによると、最も多くの応募理由は「青春の思い出作り」であり、宣伝がまるまげ祭りへの注目度を高めたと言える。

平成 9 年以降は毎年 40 人前後が参加している。また、平成 14 年(2002)から参加者の

⁸⁶ 宴席で接待を行う人。

年齢制限がなくなった。平成 23 年（2011）には、それまでで最多の 60 人が参加している。日曜開催となった平成 28 年（2016）は 96 人が応募しており（「良縁願い あでやかに」,朝日新聞,平成 28 年 4 月 18 日付）、土日は応募が殺到している様子が窺える。

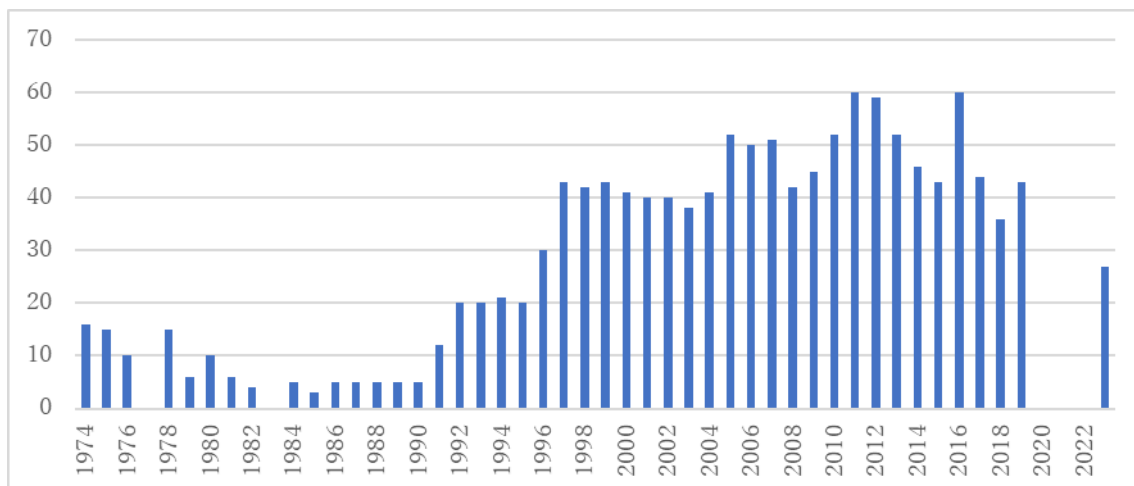


図 6 昭和 49 年（1974）から令和 5 年（2023）までの参加者数¹の推移（当時の新聞記事より）

また一時期、まるまげ祭りの後に誉一山荘⁸⁷で食事会が行われていた。しかし、食事会は現在行われていない。元観光交流課職員の西島さん（後述）によると、重たい丸髷のかつらをかぶり着物でお腹を締めあげたまま食事をするのは大変だったため、無理に参加者を引き留める必要はないと判断され、なくなった。なくなった年は定かではないが、平成 20 年以前のことである。

8.まるまげ祭りの衣装の変遷

まるまげ祭りで着用されている着物について、ラポージェの白石小百合さん、櫻打麻祐さん、元芸妓のみほさんにお話を伺った。ラポージェは氷見市の仕立屋で、まるまげ祭りの着物制作に関わっている。

現在まるまげさんは、桃、紫、水色の桜模様の着物を着用している。着物がこの色と柄に統一されたのは昭和 42 年頃である。昭和 42 年（1967）頃、安部清という氷見市の名誉市民がまるまげ祭りのために着物を寄付した。それまで芸妓は各自着物を持参してまるまげ祭りに参加しており、色や柄はばらばらであった。

平成 3 年（1991）頃に、ラポージェがそれらの着物を仕立て変えた。着物は保管状態が良くなかばらばらであったのに加え、丈が短かった。そのため、着物をつぶして長さを補っ

⁸⁷ 氷見市の料理旅館。現在は閉業している。

た。仕立て変えは綺麗な着物から行われた。

平成8年(1996)は、まるまげさんの定員が20名だったにも関わらず30名の応募があった。そのため、着物を10着借り受けたという(「小雨の氷見しっとり」,北陸中日新聞,平成8年4月18日付)。着物の話を伺っている際、応募者が多くまるまげ祭りで使用している着物が足りず、10名が振袖を着て参加した年があったという話を聞いた。振袖の10名は巡行には参加できたものの、髪を丸髷に結っていなかったため、千手寺でのお参りや誉一山荘での食事会には参加させてもらえなかったという。髪を丸髷に結っていなかったことについては、その10名はそもそもまるまげさんとしての参加を認められていない状態であり、呉服屋の提案で参加が決まったと、伺った。そのため美容院で丸髷に結ってもらうことができなかったのだと考えられる。これがいつの話かは定かではないとのことだったが、新聞の内容から平成8年のことではないかと推測する。

平成8年に参加者が増えたため、ラポージェは依頼を受け、着物を20枚あまり制作した。新しく着物を制作する際、手入れが簡単な生地にしてはどうかという意見が出た。しかし大量に必要なものではなくまた繰り返し使うことができるため、正絹⁸⁸(しょうけん)のまま制作された。

その後参加者は更に増え、それに伴い着物も何度か制作した。現在着物の保管は美容院がしており、仕立ての依頼は観光協会が行っている。近年はラポージェには、4年に一度ほど、各色1枚というように少量ずつ制作依頼が来る。

9.芸妓の氏子入り

芸妓の氏子入りについて、千手寺松岡さんのお話からまとめる。

芸妓ははじめ、氏子入りのために千手寺へ参拝を行っていた。先述した通り芸妓は様々なことを願って千手寺へ参拝していたが、それは氏子入りのための参拝とはまた別であったようだ。

明治時代に遊郭が本川町に移ったことで、芸妓たちはまず、新しく居住する北六町のお宮である日宮神社で氏子入りをする必要があった。

松岡さんによると、神様は願い事を叶える力がないため、心願成就する時には、真言宗の現世利益を主とした観音様にお参りしなければ幸せになれないというのが古来のいわれであった。そのため芸妓



図7 日宮神社の位置

(「国土地理院」より作成)

⁸⁸ 何も混ざっていない100%絹の糸を使用して織られた生地のこと。

たちは日宮神社で氏子入りした後、総社⁸⁹的存在である千手寺に氏子入りし、信徒になった。

氏子とはその土地の神様である氏神様を信仰する人のことであり、氏子となることを氏子入りという。氏神様が祀られているのは神社であり、本来氏子入りというのは神社で行われるものである。しかし、寺である千手寺でも氏子入りという言い方をする。これは、千手寺が、神様と仏様を同一視する神仏習合の考えにより神社と融合しているためである。実際に、千手寺の境内には鳥居が存在する。

また、氏子入りは身元保証人がいなくてもできたそう。様々な事情を抱えた芸妓たちに配慮していたという。ただ、まとまっていく時には氏子総代⁹⁰が責任者であった。

10. まるまげ祭りに参加する人たちの思い

令和5年(2023)に開催されたまるまげ祭りに参加したまるまげさんに、インタビューを行った。参加者27名の内、16名にお話を聞くことができた。インタビュー内容は主にまるまげ祭りに参加することになった経緯となぜ参加を決めたのかの2点である。

参加のきっかけについては、自身や身内が氷見出身であるという方、友達に誘われて参加したという方が16名中7名であった。また、職場で参加しないかと勧められたという方もいた。県外から来た方、氷見市外から来た方ともに、氷見に縁のある人の参加が多い。その中でも Takt⁹¹を見て知った、氷見に来た時に掲載されていたイベント情報を見て知ったという氷見市外出身者もあり、氷見に関わりがない方も少数ではあるが参加していることがわかった。

ベトナム人の参加者は、Facebook でまるまげ祭りについて知り、日本の文化が好きなため参加を決めたそう。

まるまげ祭りにどのような思いで参加したのかという問いに対して、「今しか体験できないから」「丸髷に結って着物を着るといふ珍しい体験をしたいから」、と答える人が多かった。関東在住の女性は、実家が氷見にあり、祖母にこんな祭りがあるよと勧められた。今しか体験できないという思いに加え、参加したら祖母が喜んでくれるかなという思いで、参加を決めた。

地域おこし協力隊として氷見にやってきた方は、女の子が主役となる祭りは珍しいと語る。きっかけは友人に誘われたことであったが、滅多にない機会であり女の子っぽくて楽しそうだと思い、参加を決めた。また参加にあたって、結婚に対する特別な思いはあまりないと語った。

また今回は地域の金融機関から3名がまるまげ祭りに参加している。職場でまるまげ祭

⁸⁹ 特定の地域内の神社の祭神を一か所にまとめて祀った神社。

⁹⁰ 氏子の代表者。

⁹¹ 富山の情報誌

りに出ないかという声掛けがあったという。地域の金融機関に勤める方は、信用金庫は地域に根付いた会社であるため地域貢献をしたいという思いで参加したと語っていた。

まるまげ祭りは結婚して妻になりたいと願う芸妓の由来があるため、参加にあたって結婚したいという思いはあるのかどうかも合わせてお聞きした。しかし結婚したいという思いで参加したという方はおらず、いずれはしたいが結婚を願って参加したわけではないと答える方が多かった。「まるまげ祭り」と「結婚」は切り離されて考えられているようであった。また既に結婚の予定がある方も数名おり、参加理由を「独身最後」と語っていた。

以上から参加者は、今しかできない珍しい体験をしたいという思いを抱いて参加する人、「結婚」という形にこだわらず「幸せ」を願って参加する人の、大きく2つに分けられると考える。また、「珍しい」というのも参加の重要な決め手になっているようである。

11.まるまげ祭りの見学者

まるまげ祭りを見学する方は、巡行についていく人、巡行が通ると家や店から顔を出す人など様々であった。今回は特に巡行と一緒に歩いていた見学者6名にインタビューを行った。インタビューを行った方のほとんどが、まるまげさんやお稚児さんの身内や知り合いであった。

知り合いが参加するため見に来たという氷見市出身の方は、氷見市出身ではあるが初めて来たと言った。氷見市出身の女性は、まるまげ祭りによって商店街がいつもよりにぎやかになって良いと笑顔で語った。

巡行とともに歩く見学者の中には、保育園児の姿もあった。平日ということもあり学生の姿はなく、更に20代や30代など若い人の姿もあまり見られなかった。

12.まるまげ祭りの運営業務

まるまげ祭りの運営は、氷見市が氷見市観光協会に委託する形で行っている⁹²。観光協会が担っているのは主に参加者（まるまげさん）に関する運営である。参加者の受付や案内を行っている。また、担当美容院に何人ずつ振り分けるかの決定やかつら合わせなど、美容院との擦り合わせも、観光協会の仕事である。

⁹² まるまげ祭りは、観光協会が、氷見市からの委託料と自己資金により開催している。自己資金は、不足する場合のみ出す。平成28年度までは、氷見市がまるまげ祭り・ゴンゴン祭り両方の開催に対して158万円の支援していた。内訳は、まるまげ祭りに148万円、ゴンゴン祭りに10万円、観光案内（事務所経費）に50万円であった。平成29年からは支援金を50万円増額しており、内訳はまるまげ祭りに195万円、ゴンゴン祭りに13万円となっている。

13.まるまげ祭りの宣伝

まるまげ祭りの宣伝を担当しているのは、主に氷見市観光協会（以下観光協会）である。観光協会や観光交流課は、まるまげ祭りを大々的に宣伝しないよう配慮している。なぜならまるまげ祭りは観音大祭ありきの祭りであり、観音大祭は地元の人たちの祭りであるからだ。よって「宣伝」とは、まるまげ祭り自体の宣伝ではなく、あくまで参加者募集のための宣伝である。

広告は主に、北日本新聞、富山新聞、北陸中日新聞や、Takt に掲載する。今年は Instagram や Facebook の Web 広告も利用したそうだが、しかしクリック数はあまり伸びなかった。観光協会の奥村さん（後述）は、やはり以前からまるまげ祭りを知っていた人や元々興味があった人の参加が多いと話す。

参加者は、休日開催の場合は定員の 60 名を超えた応募があるが、平日開催の年は基本定員に満たない。そのため観光協会は、氷見市の主要企業に参加を呼び掛けている。また ALT⁹³、企業に技術研修に来ている外国人にも参加しないかと声をかけている。

しかし観光交流課の鶴谷さん（後述）によると、まるまげ祭りは結婚して幸せになるという考えが根本にあるため、結婚しなくても良いという考えも多くある現代では、参加を呼び掛けることは容易ではないという。

また、氷見市の姉妹都市である静岡県島田市へも、情報提供を行っている。

過去のまるまげ祭りの宣伝について、平成 8 年から 10 年間観光交流課の職員と観光協会の事務局員をしておられた西島秀元さんに話を伺った。西島さんが観光協会の職員だった際に、一度だけ県外参加者枠を設けたことがあるという。県外から来る参加者は前泊するため、経済効果を狙って設けた枠であった。しかしなぜ一度のみとなったのか、平成何年のことなのかは定かではない。

14.まるまげ祭りと氷見の花街文化のこれから

まるまげ祭りに携わる方々にまるまげ祭りに対する思いを伺った。

氷見市観光協会職員でまるまげ祭りを担当している奥村寿江さんは、観光協会は、まるまげさんとして参加した女性が気持ちよく帰れるようにサポートしていると話す。「参加者には、良い縁がありますようにという思いで参加してほしい。楽しんで参加することが一番だ。」と奥村さん。まるまげさんの中には、「独身最後だから」「今度結婚するので」と言う人もいる。相手と幸せになってほしいと願っているという。

氷見市観光交流課の鶴谷宗弘さんは「近年は結婚だけが幸せな人生ではない世の中だが、少なくとも結婚を希望して参加された女性の思い出に残るイベントとなるよう心掛けてい

⁹³ 外国語指導助手。学校で英語の授業のサポートをする外国人教師のこと。

る。」と語る。時々、参加された方から結婚報告のハガキが届くこともあるそうだ。そんな時は、やった甲斐があったと思うと語ってくださった。

みやざわ美容院の宮澤さんは、ご縁に恵まれますようにという思いを込めてしている。」と話してくださった。

「伝統は簡単には守れないということを伝えたい。伝統を広めて残すことが氷見に生まれた使命であり、日本髪体験を出来る良い機会を作りたい。」と語るのはビューティ・サロンの中尾さんだ。さらにまるまげ祭りについて、アマチュアの方が写真を撮ってくれて、いつもと違う自分になれる場であると言い、「氷見は食の町だけではない。まるまげ祭りは珍しい祭りであり、無形文化財に匹敵する。」と語る姿からは、まるまげ祭りに対する熱い思いが伝わってきた。

続いて、今後まるまげ祭りをどのように継承していくのか、氷見の遊郭という文化をどのように扱っていくのかについて伺った。

氷見市及び氷見市観光協会は、共通して、まるまげ祭りはあくまで観音大祭に付随したものであると述べる。まるまげ祭りは観音大祭ありきの祭りであり、地域の方々の協力あって成り立っている祭りである。イベント化しすぎず、本来の北六町内の祭りという形が崩れないように行うことが重要だと観光協会の奥村さんは語る。

また、氷見市と観光協会は、観光客が増えて祭りの規模が拡大した際に生じる問題についても指摘した。観光客が増えればそれだけ多くの駐車場が必要になる。また、巡行は車道を歩くため、観光客が増えれば増えるほど交通の規制も大掛かりになり、警備の数を増やす必要性も出てくる。

まるまげ祭りは過去に、氷見の奇祭としてメディアで取り上げられたことがあった。しかし、そのように、まるまげさんの部分だけがクローズアップされることを快く思わない地元の方もいるという。

こうした理由から、氷見市観光交流課の鶴谷さんは、今の規模で続けていければ良いと考えており、今後氷見の祭りとして大きくアピールしていく予定はないようだ。また奥村さんは、祭りをPRする分には良いが、芸妓や遊郭といった文化を商業化していくには話し合いが必要だと語った。

「4月17日だけでなく、いつでもだれでもまるまげさんの姿になれるようにしたい。」そう語るのは、平和交通の山田さんだ。そのために山田さんは人力車を使用したツアーを企画している。ツアーは、街巡りと無盡蔵でのスイーツタイムに加えて着物を着て千手寺に参拝できるコースと、街巡りとスイーツタイムのみで千手寺参拝はできないカジュアルコースがある。このツアーは、はじめはいつでもまるまげさんの恰好ができるようにとの思いからまるまげ祭りの着物で行う予定だったのだが、観光協会との意見の相違により、別の着物で行うことになった。

元氷見市職員の矢方さんは、氷見の遊郭の様子を再現したいと話す。100メートルほど、外観だけでも「免許地」の様子を再現し、遊郭の街並みを再現したいという思いがあるとい

う。また、無盡蔵にて、当時の料理を出して芸妓による接待の様子を再現できたら良いと言
い、これらによって「当時の様子を五感で感じられるようにしたい」と語る。

行政が「芸妓」や「遊郭」よりも「良縁を願う」という部分を前面に押し出しており、芸
妓文化をまるまげ祭りに留めておくという立場であるのに対して、こちらは、「芸妓」や「遊
郭」を前面に出し、芸妓文化を通年の観光資源としていきたいという考え方であると言える
だろう。前者には、受け入れやすさがある。後者のような「遊郭」をクローズアップした押
し出し方では、参加者は抵抗を抱いてしまうという意見もあった。また、時や場所を限定せ
ずにまるまげさんを体験することに対する、芸妓のコスプレ化を恐れる声もある。

まるまげ祭りとは切り離れたうえで、氷見の遊郭の文化を観光面で押し出すことは、地域
活性化への一つのアプローチとして検討されても良いように思う。ただ、「遊郭」という決
して明るいとは言えない文化が根本にある以上、慎重に行わなくてはならないし、地域住民
との意見の擦り合わせも重要になるだろう。

千手寺住職の松岡さんは、これからのまるまげ祭りについて、1人の幸せがみんなの幸せ
につながり広まっていくという祭りの趣旨が続いていけば良いと語る。現在まるまげさん
たちが祭りで歩いている幸せロードは、昔から芸妓がまるまげ嬢として歩いていた道であ
る。松岡さんは、この道を歩くことで、通っていったまるまげさんが幸せになっていった、
その重み、気運を受けることができ、更にその機会はどんな人でも平等にあると話す。いつ
でも、だれでも、幸せロードを通して千手寺に参拝に来てほしいと語った。

以上から、現在は、まるまげ祭りを廃れさせることなくどのように存続していくか、遊郭
や芸妓の文化を観光としてどのように押し出していくか、試行錯誤している段階にあると
言える。

15. 考察

本章では、まるまげ祭りの変遷、氷見の花街文化について紹介してきた。これまで様々な
方にお聞きしてきたことから、まるまげ祭りのあり方について考察する。

第8節で、まるまげさんのまるまげ祭りに対する思いは「幸せになれば良い」「珍しい
体験をしたい」の大きく2つにわけられると述べた。行政の打ち出す「良縁を願う祭り」と
いうイメージに反して、「良縁」や「結婚」を意識した参加者が少ないことが印象的である。
しかし松岡さんのお話のように、もともと芸妓たちは様々なことを願っていたのが、昭和34
年に「祭り」という形にするに伴って幸せな結婚をしたいという願いだけがクローズアップ
されるようになったのであれば、今また結婚に限らず様々な幸せが願われている状況は、決
して本質から外れてはいないとも考えられる。

そもそも平成9年(1997)に応募人数が急増した背景には、「青春の思い出作りにどうで
すか」という謳い文句による宣伝があった。この宣伝自体、「良縁」という部分を取り上げ
てはおらず、まるまげ祭りのイベントとしての側面を加速させたのではないか。

祭りにおけるまるまげさんに関連した部分が、少なからず観光化を意識して作られたものである以上、「良縁を願い参加すること」だけが正しいと断定することは難しい。実際に昭和34年以来まるまげ祭りに参加してきた芸妓たちにとっても、まるまげ祭りは願掛けよりも仕事という意味合いが強かったようである。しかし、その背景にある、夜な夜な千手寺に参拝した芸妓たちの幸せを願う思いは、作られたものではなく本当に存在した思いであろう。この部分を理解して祭りに参加することが、重要であり必要なことだと考える。

また、一般公募開始後しばらく参加者が集まらなかった理由を、田舎の人はシャイだから知り合いに見られることを嫌がっていたためだと考え、現在の参加者増加の背景には人前に出ることを厭わず社会的になったという若者の性質の変化があるのではないかと推測する意見があった。これについては、若者の性質の変化というよりは、参加する人のまるまげ祭りに対する認識の変化があると考えられる。やはり同じ内容の祭りであったとしても、「地元の祭りに参加する」と「珍しい恰好をして幸せを願う祭りに参加する」とでは、後者の方がイベント要素を感じるし参加しやすい。この認識の変化のきっかけは平成8年頃の「青春の思い出作り」としての宣伝にあると思われる。参加者に「青春の思い出作り」のために参加するという選択肢が与えられたこと、ラジオやテレビといったメディアで宣伝されたことが、地元の祭りに参加することへの敷居を低くしたと考える。その後もまるまげ祭りは参加人数が増えており、特に県外からの参加者が増えた。地元の祭りではなくイベントとしての側面がどうしても大きくなっているといえるだろう。

また、参加者増加の要因には、芸妓に対する考え方の変化もあると考えられる。一般女性の芸妓を軽んじる考え方が徐々に薄れ、芸妓に対する抵抗感が昔よりもなくなったことにより、芸妓の恰好で祭りに参加することへの抵抗感もなくなったのではないかと推測する。

第8節で述べたように、独身女性しか参加できないというのは時代に即していないという意見もあった。祭りや伝統行事は時代に即した形に変わっていくものだという事は、重々承知している。しかし、どんな女性でも参加できる祭りになってしまうと、それはもう本当にただのコスプレ祭りになってしまいかねない。普段はできない珍しい恰好をできる祭りである以上、珍しい体験をしたいという思いで参加する人がいることは、ごく自然なことである。しかし参加者の思いがどうであれ、今まるまげ祭りがコスプレ祭りではなく元芸妓の祭りとして形をとどめているのは、芸妓たちが既婚女性の象徴である丸髷を結い早く結婚したいと願ったことに由来する、「良縁を願う」という趣旨があるからだと考える。既婚女性も参加可能にした場合、既婚女性の象徴である丸髷のかつらをかぶる意味も、良縁を願うというもともとの祭りの趣旨も、破綻してしまいかねない。

しかし、まるまげ祭りに興味を持つ既婚女性がいなくても限らない。前節で紹介したツアーは、独身女性に限らず着物を着て丸髷に結って千手寺で参拝し幸せを願いたいという思いを持つ人々のために、とても有意義なものとなるだろう。

松岡さんの言葉の端々から、芸妓を尊重する気持ち、参加するまるまげさんの幸せを願う気持ちが伝わってきた。また、観光協会の方をはじめとしたまるまげ祭りに携わる方々はみ

な、口をそろえて参加する人に幸せになってほしいとおっしゃっている。幸せを願うまるまげ祭りは、人々のあたたかい思いによって成り立っている祭りなのだと感じた。

今回参加者にインタビューした結果、結婚したい、良縁に恵まれたいという思いよりも、幸せになりたい、珍しい体験をしたいという思いで参加する方が多かった。しかし、結婚報告のハガキが届くというお話から、結婚を理由に参加していなくても、まるまげ祭りは良縁を願う祭りとして、参加した人たちの中に記憶されているといえるのではないか。

松岡さんは、いつでもだれでも千手寺に参拝に来てほしいと語る。良縁に限らず幸せを願いたいのであれば、いつでもだれでも千手寺に参拝することができるのだ。

おわりに

調査をする前、まるまげ祭りは江戸時代からずっと続いている伝統的な祭りだと認識していた。しかし調査していくうちに、芸妓が丸髷を結って千手寺参拝に行くようになった時期については諸説あり、断定的に書かれているまるまげ祭りの由来すらも、実は確実なものではないことを知った。

当時の記録がないまるまげ祭りをテーマとしたこの調査は、様々な方々にお話を聞いてこそ成り立つ調査であった。矛盾と葛藤したことも多々あった。しかし同時に、たくさんの方々の記憶や体験を頼りに、広く知られていない歴史を紐解いていく面白さも感じた。伝統は変化していくものである。幸せを願うまるまげ祭りが、関わる人みんなにとって良い形でこれからも続いていくことを、私は願っている。

謝辞

今回の調査にあたって、多くの方々にお世話になりました。お忙しいにも関わらず、度重なる訪問にも快く応じていただいた千手寺の松岡義浩様、氷見市観光協会の奥村寿江様、そのほか調査に応じていただいたすべての方々に、この場を借りて心からお礼申し上げます。

参考文献

氷見市史編修委員会編『氷見市史』、氷見市役所、1963年。

氷見市立博物館友の会「五輯之部 呂ノ巻」『憲令要略 下巻』、氷見市立博物館友の会、1987年。

富山県『富山県史 史料編IV 近代上』、富山県、1978年。

氷見百年史編修委員会編『氷見百年史』、氷見市役所、1972年。

橋本芳雄「12. 特別寄稿・奇祭まるまげ祭」『仕切自治会々報 第三号 特集見直そう氷見』木原甚吾代表、1974年。

「わたしたちの氷見市」編集委員会『わたしたちの氷見市十二訂』、氷見市教育総合センター、2013年。

氷見市史編さん委員会編「図 19 氷見町絵図 文化 13 年 陸田家文書 (部分)』『氷見市史 8 資料編六絵図・地図』、氷見市、2004 年。

北日本新聞「お練りコースなどが決る 氷見の復活丸マゲまつり」1959 年 4 月 7 日付。

北日本新聞「丸まげにも国際色」1994 年 4 月 18 日付。

北日本新聞「“力自慢”が腕きそう」1977 年 4 月 18 日付。

北日本新聞「芸者衆の町練り中止」1978 年 4 月 18 日付。

北日本新聞「芸者衆があでやかに」1984 年 4 月 18 日付。

北日本新聞「あでやかさ 桜と競う 丸まげ ミスひみまつりも出演」1985 年 4 月 18 日付。

北日本新聞「思い出にあで姿 一般女性 5 人が“代役”」1986 年 4 月 18 日付。

北日本新聞「芸者姿もあでやかに」1988 年 4 月 18 日付。

読売新聞「“幸せ”が練り歩く」1991 年 4 月 18 日付。

北陸中日新聞「まるまげ嬢“春らんまん”」1997 年 4 月 18 日付。

朝日新聞「良縁願い あでやかに」2016 年 4 月 18 日付。

参考にしたウェブサイト

一般社団法人氷見市観光協会「祇園祭り」、きときとひみどっとこむ

<<https://www.kitokitohimi.com/site/taiken/gion.html>> (最終閲覧日 2023 年 12 月 19 日)

一般社団法人氷見市観光協会「ごんごん祭り」、きときとひみどっとこむ

<<https://www.kitokitohimi.com/site/taiken/463.html>> (最終閲覧日 2023 年 12 月 19 日)

一般社団法人氷見市観光協会「唐島祭」、きときとひみどっとこむ

<<https://www.kitokitohimi.com/site/taiken/karashima.html>> (最終閲覧日 2023 年 12 月 19 日)

一般社団法人氷見市観光協会「まるまげ祭り」、きときとひみどっとこむ

<<https://www.kitokitohimi.com/site/taiken/464.html>> (最終閲覧日 2023 年 12 月 19 日)

第8章 藤箕製作技術を支える人々とその繋がり —論田・熊無地区を事例に—

高村 将斗

はじめに

本章では、氷見市論田（ろんでん）・熊無（くまなし）地区で製作されている「藤箕（ふじみ）」について記述する。私は国道に興味があり、氷見市内を通っている国道415号はどこまで続いているのか気になり、Google マップで辿っていた。その時に偶然「熊無」という地名を見つけ、不思議な地名だと気になって注意深くマップを見てみると、その中に、「藤箕製作伝承の館」を見つけた。それが、私が藤箕の存在を知ったきっかけである。聞くと、「伝承の館」という建物はあるものの、藤箕を作ることができる人がほとんどいないのだという。藤箕は製作している方にとってどんな存在であるのか興味を持ったため、それをテーマに調査をすることにした。

調査では、「藤箕製作伝承の館」や「お休み処（どころ）くまなし」（いずれも熊無の国道415号線沿い）で聞き取り調査を行った。また、全工程を見学することは叶わなかったが、藤箕製作の工程の一部を見学したり体験したりした。くわえて、氷見市立博物館や羽咋市歴史民俗資料館で文献や資料を探し、論田・熊無地区の藤箕製作の歴史についての調査をした。

記述の順序は次の通りである。まず、第1節では論田・熊無地区の概要についてまとめる。第2節では資料を基に藤箕製作の歴史や藤箕の作り方について記述する。第3節では藤箕製作に関わる方たちや地域住民から伺った話を記述する。第4節では、藤箕製作技術の保存に向けた活動などについて記述する。

1. 論田・熊無の概要

熊無は隣接する論田と共に「論田・熊無地区」と総称されることが多い。本調査では氷見



図1 論田・熊無 周辺地図（国土地理院地図より作成）

市熊無を中心に調査を進めたが、ここでは論田とともに熊無について紹介する。

論田・熊無地区は、富山県と石川県の境に位置する氷見市西部の地域である（図 1）。氷見市街と羽咋市街まではどちらも車で 20 分以内の距離に位置する。『富山県の地名』によると、論田（旧論田村）は「地滑りの頻発する地区で、地滑りのため田地の境が不明となり相論となったための村名」とされている。一方で熊無（旧熊無村）は「地滑りの頻発する地区で、地滑りのため田地の境界である隈がなくなったための村名」とされている。

この地区に暮らす人々のかつての生業は農業であった。農閑期に副業として藤箕作りが行われていた。『ろんくま集落の教科書』によると、仏教文化も盛んであり、中世には天台系山岳修験信仰の霊山・聖地として、この地域が崇められていたという。

2020 年現在、論田・熊無の人口は合計して 549 人であり、総世帯数は 206 世帯、その約 3 割が高齢者世帯である。空き家が増加し続けており、人口減少と高齢化に悩まされている。

日用品の買い物は、氷見市や羽咋市のスーパーに行く人が多い。車を持たないお年寄りの方たちは、移動スーパーを利用している。また、熊無バスと呼ばれるコミュニティバスが、上庄谷（かみしょうだに）協議会（氷見市上庄谷地域を中心に活動する NPO 法人）によって運営されており、それを利用する住民もいる。写真 1 は論田の景観である。



写真 1 論田の景観（筆者撮影）

「ろんくま移住促進委員会」⁹⁴の公式ホームページによると、この地域は論田と熊無から「ろんくま」と呼ばれている。そのきっかけは富山

県の中山間地農業再生支援事業⁹⁵の採択を受けたことで相模女子大学や東京農業大学の学

⁹⁴ 論田・熊無地区が連携して、暮らしやすい地域づくり、地域の活性化に取り組んでいる論田・熊無地区の住民で 2021 年 6 月に組織された団体。地域の特産品である草もちや藤箕の継承などの取り組みを行っている。

⁹⁵ 地域住民自らが集落の未来を考える風土をつくることを目的とした事業。論田・熊無地域は 2019 年に採択された。「地域の方が何をしたいのか」また「話し合いの場を設けて、自分たちでどうしたいか」ということを引き出す仕組みが作られている。富山県内の主な

生との交流が行われていたことである。かつて「ろんくま」と呼ばれていたが、次第に呼ばれなくなっていた。相模女子大学の学生が住民とともに農作業を通じて、地域の魅力を探る取り組みをしているなかで自然発生的に復活した言葉が「ろんくま」である。2023年の夏にも「ろんくま農業インターンシップ」が開催され、相模女子大学と東京農業大学の学生と交流が行われ、稲刈りや草刈り、方言講習などが行われた。

2021年の6月に、論田・熊無地区は富山県の移住者受入モデル地域⁹⁶に選ばれた。地区の良い所も悪い所もありのままを紹介する集落の教科書『ろんくま集落の教科書』（ろんくま移住促進委員会ホームページにて閲覧可能）を作成したり、「くまなしくまタロー」と「ろんくまちゃん」2人のクマの妖精の兄妹のマスコットキャラクター（図2）を作ったりする



図2 くまなしくまタロー（左）ろんくまちゃん（右）
（ろんくま移住促進委員会ホームページより）

ことで地域をPRしている。集落の教科書は自治会の中で組織された実行委員会のメンバーを中心に手分けして作成された。論田・熊無地区の歴史や人口、生活や慣習など様々なことが書かれている。くまなしくまタローは藤箕を背負い、ろんくまちゃんは肩から藤箕をかけており、藤箕のPRにも繋がっている。

4地域（新川、富山、高岡、砺波）の管内でモデル的に各1地域を選定している。

⁹⁶ 移住者を受け入れようとする意欲ある地域を富山県が「移住者受入モデル地域」として選定している。朝日町笹川地域、高岡市金屋町、南砺市城端地域、南砺市利賀地域、氷見市速川地域、魚津市片貝地域、射水市内川地域、論田・熊無地域の計8地域が選定されている。（富山県ホームページ参照 <https://www.pref.toyama.jp/>）

2. 藤箕とは

本節では、図録『氷見の手仕事』（氷見市立博物館、2011年）、「北陸地方の箕作りとその流通・販売」（榎美香、2015年）、学習会テキスト『国重要無形民俗文化財に指定された「論田・熊無の藤箕製作技術」について』に基づき論田・熊無地区の藤箕作りについて記述する。

2-1. 藤箕の用途と種類について

藤箕は主にヤマザクラ、ヤマウルシ、ヤダケ、フジを材料にした箕である。一番の用途として、稲粃から殻をはずした後に、粃殻やゴミだけを飛ばして玄米を選り分けることが挙げられる。他にも、雑穀や豆の風選や、しなやかさを利用して漏斗として、農作物を運んだり

表1 藤箕の種類や用途

名称	用途	大きさ、形状など
水車箕	北海道で稲作の運搬や袋詰めに使われる。	先がすぼまっていて深い
大箕	主に呉西で使用される。大門素麺が得意先。素麺のたねを乗せて引っ張ったりする。	大きさは1斗8升ほど
中箕	富山県全般で使われる。稲作作業の運搬や、袋詰めに使われる。	大きさは8升から1斗ほど
小箕	女性や年寄りが中箕の代わりに使用する。	大きさは5升ほど
長箕	主に呉東で使われる。農家が簸る（もみ殻ふるい、くずを除きとる）のに使われる。	先が広くて浅い
関西箕	縁起物として使われる。開いた片口から福を呼び込むとして恵比寿大黒の面などを飾り付け	縁起物らしく丸っぽくなっている
福箕	民芸品として商品化されたもの	比較的小さく、大黒の面や恵比寿が入れられる

「北陸地方の箕作りとその流通・販売」より作成

干したりする際の容器としてなど、農業の様々な場面で使用される。作り方については2-3にて記述する。藤箕には水車箕・大箕・中箕・小箕・長箕・関西箕・福箕の7種類があり、使用される地域や用途によって作り分けられている。水車箕、大箕、中箕、小箕、長箕の5つは農業箕、関西箕と福箕は民芸箕と呼ばれる。農業用として藤箕が使用されることもある一方で、民芸箕のように熊手と一緒に飾るなどして縁起物として使用されることもある。それぞれの藤箕の使用用途や大きさ等の特徴は表1にてまとめた。

2-2.藤箕製作の歴史

2-2-1.藤箕製作のルーツ

「北陸地方の箕作りとその流通・販売」によると、論田・熊無地区の藤箕製作の歴史は約600年前に遡るといふ。当時は天台宗が盛んであり、修行に来る僧が多く、この僧たちが箕を作って食糧と換えたのが始まりとされている。最初は竹で箕を作っていたが、藤皮をまじえて作ったところ竹だけで作るよりも丈夫になり、それが論田・熊無の村人に広まった。時の経過と共に幾多の改良が加えられて、現在のような箕になった。

論田に隣接する石川県羽咋市菅池（すがいけ）でも箕作りが行われている。1183年の倶利伽羅合戦に敗れて土着した平家の落人によって伝えられたとされており、ここでは論田・熊無とは別の由来が伝承されている。

2-2-2.産出枚数の変遷

近世には加賀藩からの保護を受けており、論田・熊無で作られた藤箕は加賀・越中・能登に広く出回った。明治後期からは北海道や新潟にも出回り、当時の生産量は年間4~5万枚であった。その後も昭和にかけて生産量は伸び続け、論田・熊無は全国でも最大規模の箕の産地であった。

しかし、農業の機械化や安価なプラスチック製の箕が流通、担い手不足など、様々な要因により生産量が減少した。図4に論田・熊無の藤箕の生産量の変遷を示した。最盛期の1960



図3 藤箕の産出枚数の変遷

『氷見の手仕事』、JA 氷見市双光支所のデータより作成

年には12万枚以上の藤箕を産出していたが、以降産出量が激減していることがわかる。

1975年頃からは関西箕・福箕の飾り箕の生産が増加し、それが藤箕作りの主流となって藤箕製作の命脈を保っていたが、2020年以降はコロナウイルスの打撃を受けてしまい、飾り箕の産出量も減少してしまったという。

2-2-3.藤箕販売の変遷

現在わかっている限りで、氷見から一定数の箕が産出されていたのは17世紀末頃からである。加賀藩は天保3年(1682)頃から田地の少ない山方、浦方における現銀による年貢収納を換金して納める方策を進めていた。特に統治の行き届いていなかった越中は放任統治であり、形を問わずに年貢を納められるように、商品作物や特産品の販売などを奨励した。加賀藩による実情調査では、箕の産地として論田の名が挙げられていた。

明治以降、国から出された北海道への国民移住政策によって、富山県から多くの人が北海道へと移住した。移住者や開墾者に向けて、氷見の荒物問屋は道内各地で商いを行った。論田・熊無の藤箕も組合や農協を通じて氷見や高岡の業者に卸され、そこから北海道へと出荷された。

昭和30年代後半以降は兵庫県宝塚市の問屋が主な取引先となった。農家用の実用的な箕が売れなくなっていた頃に、地元で箕を作れる人が少なくなってきたという事で、宝塚市の問屋が論田を訪ねてきた。それ以来、注文に応じて民芸用の箕を作るようになったことで、一定の需要を保つことができた。

現在では農業箕は北海道今金町(いまかねちょう)のJA今金町、民芸箕は兵庫県西宮市の西宮神社が主な販売先となっている。しかし本年(2023年)は西宮神社からの発注がなく(恐らく安価な代替品の登場による)、今後の取引先としては雲行きが怪しい状況である。



写真2 ヤダケの採集
(筆者撮影)

2023年10月現在での販売数は大箕3枚、中箕11枚、小箕1枚、水車箕40枚ののべ55枚である。

2-3.藤箕の作り方

藤箕製作は材料採集、材料加工、製作の3つの工程に分けられる。以下ではそれぞれの工程について記述する。藤箕は主に、藤箕製作技術伝承の館で製作される。

2-3-1.材料採集について

藤箕の材料採集は氷見市内に限らず、滑川市や朝日町など富山県内各地や、石川県羽咋市や七尾市でおこなわれる。

材料の採集時期に関して、「八専(はっせん)」と呼ばれる時期がある。八専は六十干支(ろくじっかんし)におけ

る壬子（みずのえね）から癸亥（みずのとのおい）の期間を指しており、この期間（12日間）とその前後1週間は木を切ってはいけない。この時期に採ると、木に虫がついて傷んでしまうとされている。本年（2023年）の八専は10月21日から11月1日の12日間であった。

材料採集はトイソー切りから始まる。トイソーは農業箕の手に巻くフジの皮のことである。トイソーは7月の半ば頃に採りに行き、1～2日間天日干しにする。この時期に採るのは水分が多くはぎやすいからである。

八専を過ぎるとフジの採集が始まる。夏に採ると水分が多く腐りやすいため、蔓に水分がなくなる10～11月頃に採集する。材料として最適なのはまっすぐに伸びて高い所で巻き付いているフジである。そのため、高い所までよじ登ってフジを採集する。取れたフジはトラックで運ぶ。トラックがなかった時代は材料を担いだり、自転車で運んだりした。フジの採集日は天候に左右され、採集地も不確定であったため、見学は叶わなかった。フジは他の植物に巻き付いてしまうため、厄介な植物とされている。フジを採ってくれることは山の所有者にとってのメリットであり、フジを採ると接待されることもあった。蔓を真っ直ぐにするのが難しいため、栽培はしないそうだ。

ヤダケの採集はフジを切り終わる、11月頃におこなわれる。2年以上の竹を切る。上下の太さがそろっている方が使いやすいため、出来るだけ長いヤダケを切り集める。ヤダケの採集は見学することができたので、写真3に示した。

ヤマザクラは8月の終わり～9月の初め頃に採集される（写真4）。ヤマウルシの採集時



写真3 ヤダケ（筆者撮影） 写真4 ヤマザクラ（筆者撮影） 写真5 ニセアカシア（筆者撮影）

期に関しては、調査することができなかった。現在氷見市でヤマウルシを採ることができないため、その代用としてニセアカシアを栽培しているそうだ（写真5）。

材料採集のために富山県、石川県内をめぐり、かつては滋賀県や山口県などの遠方にまで出かけることがあったり、木によじ登って採集したりと、藤箕製作の中で最も大変な工程が材料採集である。

2-3-2.材料の加工について

まず、トイソーの加工について記述する。指の太さ程度のフジの両端を鎌で切る。そこからフジの皮と中身を分離させる。採れた皮だけを持ち帰り、30分程度煮沸する。これはトイソーに虫が付かないようにするためである。煮沸したトイソーは機械で潰し、天日干しにする。機械が導入される前は手作業で潰していたという。

藤箕に使用されるヤダケの長さは規格で決まっており、その規格に合わせて切りそろえる。節から出る竹の皮を、鉈を使って取り除いてからヤダケを割り、20日間程度乾燥させる。乾燥させたヤダケは機械で皮と身を分ける。この作業も機械が導入されるまでは鉈だけで行われていた。

採れたフジは機械で叩く。万遍なく叩いたあとは、それを完全に扁平になるまで機械で延ばしていく。いずれの作業もトイソーやヤダケと同じように手作業で行われていた時代があった。



写真6 使用される道具
(羽咋市歴史民俗資料館にて筆者撮影)

2-3-3.藤箕の製作

ここでは藤箕の作り方について記述する。製作している様子を見学することはできなかったため、本節の冒頭で紹介した資料を基に記述する。以下では大箕の作り方に関して記述するが、藤箕の種類により若干大きさや作り方は異なる。製作で使用される道具は写真6を参照する。

2-3-3-1.編み込み作業

まず、オサダケと呼ばれる竹を自分の前に縦に置く。オサダケには寸法が書き入れられており、定規として使用される。次にそれとは垂直に長さを切り揃えられたヤダケを1本ずつ、オサダケとその左右に水平に置かれたミミダケの上下に交互に並べる(写真7)。この作業を決められた寸法になるまで繰り返す。

ヤダケを並べ終わると、編み込みの工程に入る。自身の向きを90°変え、並べられたヤダケが縦向きになるように座る。フジの中の柔らかい繊維をひも状に剥ぎ取り、それを編み込んで箕太刀(みたち)で奥まで叩きしめる。

次に、はばフジ(フジの皮)とよせフジ(フジの身)を約3cmに剥がし、少しずつ重ねて編み込む。続いて、薄くへいだヤダケの身を編み込む。このヤダケの身は形を維持する

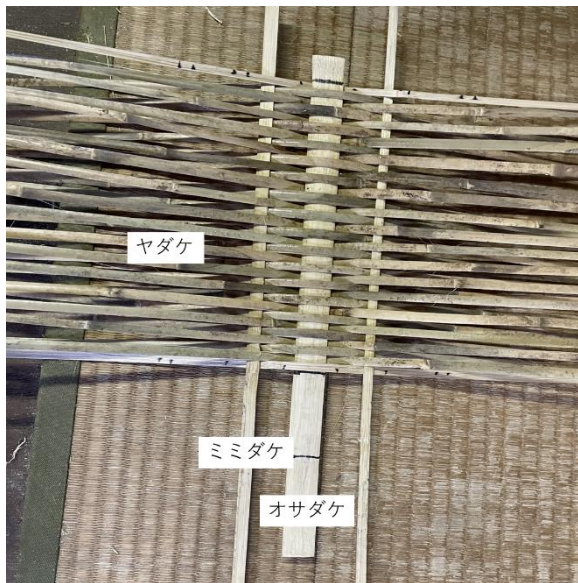


写真7 並べられたヤダケ (筆者撮)

写真8 編み込まれたフジ (筆者撮影)

役割がある。藤箕の口部になる箇所は、破損防止のためにヤマザクラの皮を入れる。この一連の編み込み作業を終えると、上下のヤダケを入れ替え、箕太刀で叩きしめる。編み込まれたフジは写真8のようになる。

これらの工程を2巾繰り返して3巾作る。4巾目の口部にはヤマザクラの皮は入れずに肩元の、後に折り曲げられる箇所に入れる。また、4巾目周辺のヤダケは折り曲げのために三角形になるように折り曲げる。端まで編んだら、反対側も同様に編み込む。この出来上がった藤箕の底部をオモハバと呼ぶ。これを合計9巾作る。

続いて、裏返しにし、フジやヤマザクラの皮を引き締め、余分な部分を切り取る。オモハバの両側にフジを4巾ずつ織り込み、この部分は藤箕の肩の部分になり、カタハバと呼ばれる。両端にはみ出したヤダケのうち、上側のヤダケは全て、下側のヤダケは1本おきに鉋で切り取る。

ここで出来上がった組み上げる前の状態のものは平箕(ひらみ)と呼ばれる。平箕は乾燥したら、重ねて積んでおく。

2-3-3-2.組み上げ作業

平箕が完成すると、組み上げる工程に取り掛かる。2本のヤマウルシの枝をU字にたわめて、平箕を挟み、肩部分を立ち上げる。縁と平箕の固定には、お湯につけて柔らかくしたトイソーを用いる。最初に箕の中心部分から固定する。箕針と呼ばれる長さ20cmほどの針を用いて穴を開けてトイソーを通して肩の部分を固定する。続いて、編み込みの最後の工程で切り残したヤダケを縁側に折り込み、縁のヤマウルシと共にトイソーで巻き、固定する。トイソーを縁に巻いていき、藤箕の持ち手が仕上がると、縁の不要な部分を切り落とし、藤箕(大箕)が完成する。完成した大箕は写真9である。また、作り方は若干異なるが、民芸



写真9 大箕
(JA 氷見市双光支所にて筆者撮影)



写真10 民芸箕
(JA 氷見市双光支所にて筆者撮影)

箕も写真10に示した。

3. 藤箕製作に関わる人々の語り

藤箕製作に関わる人々のなかでも、とりわけ藤箕製作伝承の館を中心に活動する方々を対象に聞き取り調査を行った。本節では、ひとりひとりが藤箕製作を始めたきっかけや製作に対するモチベーションなどについて記述する。

3.1. 坂口忠範さん（70代男性）の語り

坂口忠範（さかぐちただのり）さんは現在の藤箕製作において中心となっている人物であり、藤箕について語る上では、欠かせない存在である。普段は畑仕事や、お休み処くまなしで飼育しているヤギのお世話などをしながら、藤箕の製作も行っている。藤箕を習う方たちからは「親方」と呼ばれて親しまれている。私に対しても、「餅食うか？」と論田もちをくださったり、サツマイモを蒸かして出してくださったりと、聞き取り調査に何う度にもてなしてくださる、非常に心の温かい方である。

坂口さんは、地域の方に紹介して頂いた。スマホの地図アプリで藤箕製作伝承の館を見つけて、2022年11月に訪ねたところ、坂口さんは不在であった。そこで近くにある「お休み処くまなし」で藤箕について聞き取りをしていたところ、坂口さんと知り合いだという方に電話を繋いでいただき、会うことができた。

坂口さんは昔からずっと藤箕を作り続けてきたわけではない。幼少期は親が作っていたのを間近で見ていて、見よう見まねで作ることもあった。当時、ほとんどの熊無の子どもたちは、親が藤箕を作るのを見ていたので、だいたいの作り方はわかっていたという。

本格的に藤箕を作るようになったのは、中学を卒業した年からである。その年から習い始めて、22歳頃まで藤箕を作っていた。習い始めたとはいっても、当時は親でも丁寧に教えてくれるわけではなく、「見て習え」というスタイルであった。なお、他の方から（70代男性）「藤箕の作り方を習うことができるのは長男だけ」と聞いたことがあったので、その点

について坂口さんにも聞いてみると、そんなこともないという答えであった。誰が習うのかは各家庭によって違っていたのかもしれない。

坂口さんは22歳くらいのときに、就職がきっかけで一旦藤箕の製作を辞めている。そこから氷見市内の企業で定年退職するまで働き続けた。藤箕製作を再開するきっかけとなったのは、藤箕製作技術が国重要無形民俗文化財に指定されるのに先立って「論田・熊無藤箕づくり保存会」が発足したことである（この詳細は第4節にて記述する）。藤箕を作ることができるからという理由で保存会に入って欲しいと言われ、そこから藤箕製作を再開した。

聞き取り調査を進める中で、「坂口さんは藤箕作りが嫌いだ」と聞くことがあった。本人に聞いてみると確かに「嫌いだ」という風におしゃっていた。例えば材料の採集であれば、いわば肉体労働である。そういった大変さからくる「嫌い」という感情なのだという。しかし、今は藤箕の作り方を教えることができるのは坂口さんだけである。文化財にも指定されているいま、「嫌い」の背後には大きな責任感や使命感があるように感じた。

また、嫌いと言う背景には、藤箕に対する愛情も感じた。坂口さんと昼食を共にしたときのことである。二人でお店に入ると、お店の方から「お孫さんけ？」と言われた。その方は坂口さんが藤箕を作っていることを知っており、「お孫さんだったら作り方教えられるのにな。」と話を続けた。それに対して坂口さんは「若いもんが興味を持ってくれるだけで嬉しい。」と答えていた。この嬉しいという言葉は本当に嫌いであれば出てこない、愛があるからこそ出てきた言葉なのだろうと思う。

現在、藤箕の作り方を教えることができるのは坂口さんただ一人である。3-2～3-4でも紹介するが、藤箕の作り方を習いに来た人の中で最初に作り方を習得したのは柄澤美香さん（40代女性）である。その後、美谷恭子さん（50代女性）、吉野樹里さん（40代女性）さん、重田真佑さん（40代男性）の3名が習い始めた。藤箕の作り方を習いに来た時、教える側の立場としてどんな心情であったか伺った。

月に3～4回ほど保存会が主催となり、伝承の館で藤箕製作の体験会が開催されており、毎回10人ほど体験をしに来る。多くの人は一度きりの体験が目的であり、体験会の後から習いに来る人はほとんどいない。体験会を通じて、藤箕の存在を知ってもらいたいという気持ちで坂口さんには強いという。

そのような状況なので、柄澤さんが習いに来た時も、「若い女の人が習いに来ても2～3日続けばいい方だろうな」という気持ちであったという。しかし、柄澤さんはずっと通い続け、今まで3年以上続けられたという。坂口さんはそのことを、特に「嬉しい」という言葉で語ることはなかったが、当時のことを嬉しそうに語ってくれた。柄澤さんという前例があったために、その後の3人が習いに来た時は、続けてくれると思ったという。藤箕作りはもともと男性の仕事であったが、女性の柄澤さんが習っていたことで、他の人達も習いやすかったのではないかという。

フィールドワークの最中、稲刈りと脱穀の体験をさせて頂いたことがあった。藤箕作りとは関係はないが、せっかくの機会なのでやってみようと思い、参加してみた。はじめは機械

ではなく鎌で稲刈りをしたが、「機械使ってみるか？」と坂口さんに言われて体験した。すると、坂口さんは軽々と操作するのに、私にとってはレバーやハンドルが重たくて操作が非常に難しかった。普段からそういった作業をしているのとしていないのではこんなにも違うのかということを実感した。

機械の扱いの難しさを実感したが、坂口さんは稲の刈り取りを手袋もせずに素手で行っていた。脱穀の時もそうであった。手袋をつけていても痛いのに、なぜ素手でやるのか伺うと、「素手での感覚に慣れているから」だという。素手でやるからこそ、素材の大きさやちょっとした違いを感じることができる。これは藤箕作りについても言えて、素手の方がよりよいものができるという。しかし、現在の藤箕製作は手袋を付けての作業が主流になってきた。そのため、手袋を付けていても作れるように少しずつ改良がされているのだそうだ。

3-2.柄澤美香さん（40代女性）の語り

柄澤美香(からさわみか)さんは坂口さんの元で藤箕製作技術を習い、最初に「藤箕製作技術習得認定書」（この詳細は第4節にて記述する）を交付された方だ。現在は富山市婦中町に在住しており、子育てをしながら家庭菜園などを行っている。

柄澤さんが藤箕製作技術を習い始めたのは2020年の1月だ。藤箕製作について取り上げられていた新聞記事を見かけて、藤箕のことを知ったという。自然素材のかごを作りたいと思っていたが、調べても長野県などの遠方しか選択肢がなく、子育てもしているため、移住して習いに行くのは難しいと感じていた。そんな時に藤箕についての新聞記事を見つけ、「氷見なら習いに行ける」と思ったのがきっかけである。

習い始めるため、藤箕製作についてインターネットで調べても連絡先は出てこなかったが、JA 氷見市双光（そうこう）支所に連絡したところ、坂口さんを紹介してもらえた。そこから坂口さんの指導の下、柄澤さんの藤箕作りがスタートした。

初日はひたすら見学だけだったという。そのため、昔のスタイルによくある「背中を見て習え」という教え方なのではないかと不安を感じたが、それは初日だけでその後は教えてもらえるようになった。

当時は毎週火曜日と木曜日以外の週5日で熊無まで通い、藤箕の作り方を教わっていた。坂口さんがご高齢のため、「今習っておかないと習えなくなってしまう」という思いがあり、週5日という高い頻度で熊無に足を運んでいた。柄澤さんが藤箕の作り方を習い始めたのは「自然素材のかごを作りたい」という思いがきっかけであったが、週に5回も通うとなると他にも何かモチベーションのようなものがあるのかもしれない。

藤箕の作り方を習うにあたって、柄澤さんは謝礼(受講料)を払うつもりで習っていたが、受け取ってもらえず、無償での指導であったという。また、藤箕製作伝承の館の光熱費やそこに置いてある機械の維持費なども全て坂口さんが管理している。保存会からの支援もあり、全額を坂口さんが負担しているわけではないが、そういった坂口さんの寛大さが柄澤さんにとってのモチベーションに繋がっているのだらうなと感じた。

柄澤さんは熊無の人たちの温かさについても語った。地域の人たちは、藤箕作りを習いに来た柄澤さんのことを嫌な目で見ることはなく、むしろ歓迎してくれた。お休み処くまなしで「藤箕の作り方を習っている」と言うと「よく習いに来たね、がんばってね」と声をかけられるなど、地域住民の温かさが藤箕作りを習い続ける力になったという。

坂口さんの元で藤箕作りを習い続け、2022年の3月に藤箕製作技術習得認定書を交付された柄澤さんであるが、一人で藤箕を作れと言われても、それはとてもできないと言う。フジを潰したり、ヤダケの皮をむいたりなど、今は機械のおかげでできている作業も、昔のように全部手作業でやることはできないし、坂口さんのサポートがあるからこそ藤箕を作ることができるという。一人前に藤箕を作れるようになることが今の目標だそうだ。

また、現在藤箕製作技術習得認定書を交付されている3名（美谷さん、吉野さん、重田さん）が習いに来た時は「続けてくれたらいいな」という思いがあった。藤箕作りは基本的にずっと座りながら作業するため、その体勢は腰に負担がかかり、大変だ。材料採集はそれよりも大変である。柄澤さんが習い始めた後も、何人か習いに来たが、ほとんどの人がすぐに辞めてしまった。だから、「続けて欲しい」という思いが強いのだろう。

実際に藤箕を作ってみたからこそ、もっと藤箕製作を広めたい、続けて欲しいという強い思いが生まれるのだろうと柄澤さんとのお話から感じた。

3-3.美谷恭子さん（50代女性）の語り

美谷恭子（みたにきょうこ）さんは小矢部市在住の方である。出身地は大阪府であり、結婚を機に富山県へ引っ越してこられた。普段は自然農（農薬や機械を使わない農業）をしている。

美谷さんが藤箕のことを知ったのは藤箕製作伝承の館の前を通りかかったときのことである。「藤箕製作伝承の館」と大きく書いてあり、それが目に留まったという。はじめは藤箕のことを知っただけで、まだ作っている人がいるとは思わなかったという。

藤箕製作伝承の館のすぐ近くに「まんがい家」というタイ料理やマレーシア料理を提供する店がある。夫婦で経営している飲食店で、私も何度か訪れたことがある。料理はとても美味しく、メニューも定期的に変わるので何度行っても飽きないのがこの店の魅力である。また、店主の奥さんは気さくな方で、大阪府出身のため、持ち前の関西弁で非常に話しやすい方だ。

美谷さんが藤箕作りを始めたのは、このまんがい家に行ったときからである。店の方から、藤箕を作っている人がまだいるという情報を聞き、非常に驚いたという。その驚きから、2021年の3月末から坂口さんの元で藤箕作りを習い始めた。2023年の3月に、柄澤さんと同じく、藤箕製作技術習得認定書が美谷さんに交付された。

藤箕を編んでいるとき、無心になれるのが藤箕作りの魅力だと、美谷さんは語っていた。また、出来上がった時の達成感や、自然素材だからこそ感じられる安心感のようなものがモチベーションに繋がっているという。

美谷さんが自然素材に魅力を感じている点は、柄澤さんと共通している。実際に編んでいるときに感じられる竹や藤の香りや、手に持ったときに感じられる素材の触感などが藤箕作りに魅了される要因なのだろう。

3-4.吉野樹里さん（40代女性）の語り

吉野樹里（よしのじゅり）さんは以前富山市に住んでいたが、現在は移住して氷見市岩瀬（いわがせ）（氷見市の西部）に在住している方である。リハビリ関係の仕事をしなが、藤箕作りに携わっている。

仕事ばかりでは嫌だなと思っていた。そこで自分が何をしたいか考えたときに、「自分の手で作ったお米と納豆を食べたい」と思ったという。2020年の4月に氷見市主催の自然栽培教室に通い始め、同年5月には氷見で畑を貸してもらえることになった。最初のうちは富山市から通っていたが、片道1時間かかるので通うのが大変であったため、「引っ越しちゃえ」と思い、2021年8月に岩瀬に移住をした。吉野さんが岩瀬に住むとなったとき、そこに移住する若者がいるとは思われておらず、市役所ではざわついたという。

吉野さんは自然栽培をしている中で、地域の方から藤箕を作れる人が坂口さん1人だけであることを知った。美谷さんと一緒にまんがい家に行ったときに、そこで吉野さんもすぐ近く（藤箕製作伝承の館）で藤箕作りがされていることを知った。藤箕作りを絶やすわけにはいかないと思いつつも、習いに行くか悩んでいたところ、美谷さんが先に申し込みをした。その後を追うように吉野さんも2021年の4月に申し込み、藤箕製作について習い始めた。リハビリの仕事は週3日であるため、仕事のない月、木、土曜日を利用して藤箕製作を習っていた。最初の4カ月程は週3日で習っていて終日休みの日は日曜日のみであったが、徐々に技術を習得できるようになるのが楽しく、大変な感じはなかったという。ある程度できるようになってからは週2日に減らし、2023年11月現在では週1～2日で修行している。吉野さんも美谷さんと同様に2023年の3月に、藤箕製作技術習得認定書が交付された。

吉野さんにとっての藤箕作りのモチベーションは藤箕を「知ってもらいたい」という気持ちである。氷見に住んでいる人であっても、特に若者は藤箕を知らない人が多い。販売するのももちろん大事であるが、そもそも藤箕の存在を知らないで購入されない。知名度が上がることで、販売数の増加に繋げることができる。体験会やそれについての新聞記事などを通じて藤箕のことを知ってもらえることが吉野さんにとっての力になっている。

3-5.重田真佑さん（40代男性）の語り

重田真佑（しげたしんすけ）さんは、山梨県出身で氷見市熊無に在住されている方だ。熊無に来る前は中国に16年間住んでいた。現在は地域おこし協力隊員として国重要無形民俗文化財である藤箕の伝承という任務で2021年の8月から活動されている。

まず、地域おこし協力隊について説明する。地域おこし協力隊は総務省の管轄のもと、過疎地域での地域ブランドや地場産業の地域おこし支援をしながら、その地域への定住・定着

を図る取り組みである。任期はおおむね1年から3年であり、重田さんの任期は2021年8月から2024年7月までの3年間である。総務省のホームページによると、2022年度現在、全国で約6000人の隊員が活動している。

重田さんは伝統工芸に興味があり、藤箕のことを知ったときに600年続く蓄積された技術に感動し、失われていいのかと感じた。中国に住んでいたからこそ、日本を客観視することができ、日本に残された伝統的技術の良さに気が付いたのだという。中国に住むという経験がなければ、現在のように地域おこし協力隊員になってはいなかったそう。

重田さんは藤箕の魅力を「非言語情報」という言葉を使いながら語った。藤を編み込んでいるときは何も考えずに没頭することができ、気が付いたら長時間経過している。竹と藤に向かっているだけで癒され、重田さんにとってはメディケーション効果があるのだという。このような言語ではなく、身体で直接感じることで得られる情報が重田さんにとって大きな魅力なのだろう。ご自宅に伺ったとき、部屋の中には楽器が置いてあった。重田さんは音楽が大好きで、おすすめのコンドを紹介していただいたこともあった。音楽も非言語情報であり、藤箕作りに没頭することは、音楽に没頭するのと同じような感覚なのかもしれない。

2021年の8月から藤箕製作技術を習い、2023年3月には美谷さんと吉野さんとともに、重田さんにも藤箕製作技術習得認定書が交付された。地域おこし協力隊の任期の終了後、何をするかはまだ決めていないが、藤箕製作は続けたいと語っていた。

また、熊無はいい人ばかりだというお話もされていた。外から移住してきた自分に嫌な目を向ける人はいないし、熊無の人は温かいという。藤箕作りを続けているのは、人の温かさがあるからこそである。特に坂口さんは重田さんにとって、今後も絶対に関係を切りたくない大切な人なのだという。

4.藤箕製作の今

第2節でも述べたように、藤箕の生産量は減少しているのが現状である。本節では、藤箕製作技術を絶やさないための活動について記述する。

4-1.国重要無形民俗文化財と、保存会の発足

藤箕が国重要無形民俗文化財に指定されたことに関して調査をするため、氷見市立博物館に伺った。博物館館長の小谷超（おだにすすむ）さんから伺った話を基に記述する。藤箕の文化財指定は小谷さんが中心となって進められた。

藤箕が文化財に指定されることになったきっかけは、2004年の文化財保護法の改正である。改正されたことにより、「民俗技術」が保護の対象となった。かつては全国で盛んに製作されていた箕も、時代の流れとともに需要が低下し、他の民俗技術以上に存亡の危機であると認識されていた。藤箕は文化財に指定される前から製作工程のDVDや図録を送っていたことで、文化庁にとって藤箕製作は気になる存在であった。

博物館が送付していた DVD や図録は文化庁で興味深く見ていただいております、2012 年 6 月に担当調査官が藤箕づくりを視察するために氷見に訪問した。同年 12 月 14 日には文化審議会に諮問され、2013 年 3 月 12 日に国重要無形民俗文化財に指定された。

文化財指定にあたって、保存会である「論田・熊無藤箕づくり技術保存会」が平成 24 年 9 月 6 日に発足した。藤箕の生産者で組織された「双光藤箕生産組合」の組合員や、かつて生産したことのある地域住民によって保存会が組織された。現在の保存会会長（3 代目）は坂口忠範さんである。坂口さんが会長になったのは 5 から 6 年前（2017 年から 2018 年頃）だという。

4-2. 藤箕製作技術習得認定書の交付

藤箕の製作技術を習得すると、保存会から「藤箕製作技術習得認定書」が交付される。第 3 節でも紹介したように、2023 年 11 月現在で認定書が交付されているのは、柄澤美香さん、美谷恭子さん、吉野樹里さん、重田真佑さんの 4 名である。柄澤さんが藤箕の製作技術を習得したことをきっかけに認定書交付の制度が始まった。

認定書は藤箕の作り方だけでなく、材料の採集や加工の仕方も習ってから交付される。認定書の交付には一定の基準が設けられているわけではない。その基準は坂口さんの裁量であり、坂口さんがいいと思えば、認定書が交付される。

また、認定書が交付された方々は必ずしも一人で藤箕を作ることができるとは限らない。坂口さんによると、認定書は、藤箕の材料の採集と加工、作り方を一通り習ったことを証明する、いわば卒業証書のようなものであるそうだ。そのため、今認定書を交付されている方々も、坂口さんの手助けがあってようやく藤箕を作ることができる。藤箕を一人で作れるようになるには何年もかかると言われる。

4-3. 藤箕製作技術の伝承

藤箕製作技術の伝承に向けて、まずは少しでも多くの人に藤箕のことを知って貰うために藤箕製作伝承の館では体験会が開催されている。藤箕を作ることは難しいため、同じ材料を用いて花瓶敷を作る体験会となっている。月に 2 回程開催されており、近隣の小学校で教育の一環として開催されることもある。先着 5 名と人数には限りがあるが、無料で参加することができる。

私も花瓶敷の製作を体験させていただいたことがある。大きさは 30 cm 四方程度であり、さほど大きいサイズではないが、製作するのに 3 時間程度かかった。藤箕を作るとなると、より大きく、作り方も複雑になり、より多くの時間が必要になる。座りながらの作業も腰が痛くなるため、如何に藤箕製作が大変なものなのかを実感した。

体験での材料は全て加工済みで、あらかじめ用意されたものを使用した。材料の採集が最も大変だという話を聞くと、藤箕は単なる農業用、民芸用の道具ではなく、製作者の思いが沢山込められた工芸品なのだろう。

5.まとめと考察

最後にここまでの文献調査や聞き取り調査をまとめ、それを踏まえながら藤箕に関わる人々の藤箕に対する思いを考察する。

論田・熊無で農作物の運搬や選別など農業用に使用されていた藤箕は、かつて大量に生産されていた。最盛期の1960年には年間約13万枚生産されていたほどである。しかし、1970年頃からプラスチック製の箕の登場による需要の低下や後継者不足などにより、生産量が大きく減少した。けれども減少した今でも、藤箕製作は命脈を保ち続けている。それは民芸箕の登場という農業以外における需要があったことや、国の重要無形民俗文化財に指定されたこと、保存会によって体験会が開催されていることなどのおかげである。民芸箕（関西箕）が作られたことにより、縁起物として藤箕が使用されたり、重要無形民俗文化財に指定されたことで論田・熊無藤箕づくり技術保存会が発足したりした。また、坂口さんをはじめ、地域の人たちや藤箕製作に関わる方々の「絶やしたくない」という思いがあることも藤箕製作が今に至るまで続けられている要因のひとつだろう。

藤箕製作に使われるヤダケ、ヤマザクラ、ニセアカシアは栽培されているが、フジは蔓が真っ直ぐに伸びるように育てるのが難しいため栽培されていない。どこで採るのかも決まっておらず、山の中を散策しながら、時には木によじ登って採ることもあるため、材料の採集が全工程の中で最も大変な作業である。

材料の加工について、現在フジを潰す作業やヤダケの皮をむく作業などは機械で行われているが、機械が導入される前は全て手作業であった。機械化された今でも手作業での作業もあるため、材料の加工も決して楽な作業ではない。

そして、組み立ての作業は完全に手作業である。自然素材だからこそ、材料の大きさに若干の違いがあるため、必ずしも「本当に良い物」つまりすべてにおいて完璧な物ができるとは限らない。藤箕を作る技術に関しても一人前になるには何年もかかる。手先の感覚が重要となる藤箕の組み立てはいわば「職人技」である。

聞き取り調査からは、藤箕製作をしている人々には共通して「藤箕のことを知って貰いたい」という思いがあることがわかった。作れる人が少ないからこそその責任感や藤箕を広めたいという思いが藤箕作りに対するモチベーションに繋がっている。また、プラスチック製品とは違う、自然素材であることによさを感じているという考えや、編み込み作業に没頭できることのよさなども語られていた。

また、これまで藤箕製作技術習得認定書が交付された人たちは出身が氷見市ではないという共通点も見つけた。氷見で当たり前のように使用されていた藤箕は現在、氷見以外の人たちから支えられている。販売先も、北海道の今金町をはじめとする県外地域が中心である。氷見市内だけでなく、富山県内や日本国内など幅広く藤箕をPRしていくことが今後も藤箕製作が続けられるためのきっかけになると考える。

現在、藤箕製作技術習得認定書を交付された人たちのうち、4名中3名が女性である。藤箕製作技術の担い手として女性が多いのは、専業主婦であったり、仕事をしていても勤務時間が短かったりと、「習いに行きたい」となったときに、比較的時間が確保しやすかったからではないかと考えられる。藤箕の製作工程の中でも材料採集は体力を要する作業であり、男性のする仕事であったため、若い男性が習いに来ることは非常に喜ばしいことである。しかし、多くの男性は正規雇用でフルタイムでの勤務であるため、藤箕の作り方を習う時間を確保することは難しい。仕事と藤箕製作を両立することは難しいため、男性が担い手として藤箕製作技術を習得するのも難しいように感じた。

論田・熊無地区は富山県の移住者受入モデル地域に選定されており、移住促進に向けた取り組みが行われている。この取り組みのおかげで藤箕製作は地域をPRするための重要な存在となっている。藤箕を通じて論田・熊無地区のことを知ってもらうことができる。

農業が主な生業であった頃は生活必需品であった藤箕は生活様式の変化にともない、需要が低下してしまい、縁起物として民芸用に使われることが多くなった。その民芸用の箕も需要が低下しているのが現状である。藤箕は時代の経過とともに身近で当たり前の存在から、絶やしてはならない地域を代表する特別な存在となった。

おわりに

初めて藤箕を見たときは「ドジョウ掬いに使うやつだ」と思い、そもそも箕が農業用に使われる道具だとは知らなかった。フジにも紫色の綺麗な花を咲かせる植物というイメージしかなく、藤箕を見たとき、フジのどこが使われているのか全く想像ができなかった。

調べていくと藤箕は農業に欠かせない道具であったことがわかり、自分にとっては未知の物であっても当時の人々にとっては身近な存在であったことにギャップを感じた。しかし、現在は需要の低下や後継者不足に伴い、生産量が減少していることがわかった。少しでも多くの人に藤箕を知って貰いたいという願いの下、藤箕製作技術は継承されている。

聞き取り調査を重ねていくと、藤箕製作に関わる方々は、熊無の人々の温かさに支えられていることがわかった。私自身も、お話を伺いに行く度におもてなしをしていただき、優しさに支えられながら調査を進めていくことができた。毎週月曜日に藤箕製作伝承の館に集まって作業をしているが（毎週全員集まるわけではない）、集まるときはいつもお菓子や果物の差し入れを皆で持ち寄っていた。調査をしに来た私のことを歓迎してくださり、調査に対して、嫌な顔をされることは一切なく、快く調査に協力していただけることが私にとっての支えとなっていた。

謝辞

今回の研究にあたり、調査にご協力いただいたすべての方に心よりお礼申し上げます。度重なる訪問にも関わらず、快くインタビューに応じていただいた、坂口忠範様、柄澤美香様、

美谷恭子様、吉野樹里様、重田真佑様には、重ねてお礼申し上げます。皆様からのご協力のおかげでこの報告書を執筆することができました。本当にありがとうございました。

参考文献

有限会社 平凡地方資料センター編『日本歴史地名大系第 16 巻富山県の地名』、株式会社平凡社、1994 年。

榎美香『民具研究』152 号「北陸地方の箕作りとその流通・販売」、日本民具学会、2015 年。

氷見市立博物館『氷見の手仕事』、氷見市立博物館、2011 年。

氷見市教育委員会教育総務課 主査 小谷超「国重要無形民俗文化財に指定された「論田・熊無の藤箕製作技術」について」『歴史・民俗・文化 氷見春秋』67 号、2013 年

ろんくま移住促進委員会『ろんくま集落の教科書』、ろんくま移住促進委員会、2023 年。

参考にしたウェブサイト

ろんくま移住促進委員会「ろんくまもよう」

<<https://ronkuma.com/>>（最終閲覧日 2023 年 12 月 17 日）

富山県「富山県公式ウェブサイト」

<<https://www.pref.toyama.jp/>>（最終閲覧日 2023 年 12 月 17 日）

総務省「地域力の創造・地方の再生|地域おこし協力隊」

<https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html>（最終閲覧日 2023 年 12 月 17 日）

氷見市の皆様、 調査にご協力いただきありがとうございました！



(2024年1月30日人文棟屋上にて撮影)

地域社会の文化人類学的調査 33
食と伝統が息づくまちー氷見の人々が紡ぐものー

発行日：2024年3月14日

編集：藤本武・野澤豊一

発行：富山大学人文学部文化人類学研究室

〒930-8555 富山市五福 3190

Tel. : 076-445-6185

E-mail : anthro@hmt.u-toyama.ac.jp

印刷：エース・プリントデザイン

〒930-0003 富山市桜町 1-3-8